二十四輩順拜圖會　山城　近江　一

[redacted]

彌陀如来従如来生して報應化種々
の身を示現し給ふといへと崇こそ我安
養浄土の教主大慈大悲弥陀覚王五
濁の凡夫を我家に吾宗祖
親鸞聖人と化現し給ふ其ゆへ
聖徳皇子も敬禮大慈阿弥陀佛と唱へて吾
聖人をおかしたまひさされば
聖人廣大無窮の大慈悲を垂て末世
極重悪人五障三従の女人を引導し
長時永劫乃暗我のやみまた三界六道の迷

いを經れ直に無量光明乃淨刹に生
を得せしめ給ふも寔に佛智方便乃
證に露よして愚に思ひ計るべき事に
はあらず因縁よしもれし者へひとたび越の
國に左遷よして五とせの春秋をおくらせ
給ひしに建暦元のとし末のゆし
赦免ありて都に歸りたまふに遠近の人來年
の化導にましませば都と遠き鄙の邦より
皆ゝ人乃心もおろかにして善因に縁る事
惡業に引れて未來地獄に墮墜せんことを悲

しび給ひ事この衆生を済度せさせんとて
開乃東まで經廻まし〳〵愚智蒙昧の凡夫
女人を化益ひさせ給ひし遂に二十餘年
の御苦行を皆是末世の衆生を救はん為に
こそあれ浅猿しきわれら愚乃輩まで極楽
世界に生を得せしめ永く苦ミをのがれ
しめたまひし大慈悲
聖人の御心なる遺へ法流まへを汲男女老幼
誰かこれを拝み奉らで孰か是を感嘆せざ
らんをしいハ

聖人の蹟を示し給ふ霊場及ひ御弟
子二十四輩乃寺院を巡拝して尤
祖師乃廣恩報ればだとのあき乱歓び奉ら
んやゝ遠き國ハあまたの界を越て詣ふ
て廻るぞ一つのかゞりなきまでど是や大海中
のこ滴らやおふくでき去りし年の春
書肆某笑道が菴にまうで
聖人乃御舊跡二十四輩の来由城露
つし記せるものし請て此頃五号を唯称乃
稱名をとなふるよびしさちせるの餘滴に鳥の

あるハ我もとめ筆に拙きハすゞ画をもて弘
めんと志す然れども此書を見るほどの人ハ古
祖師の廣德を甚しまゐり信心の余り其
旧跡に我巡拝せる心やうに覩る文なりしハ語
詞花言葉のたくミすべきにハあらじと玄鋒
の需ニ應じて穢きを顧りぬ人ゝ年の古刹
並て再ひ閲すれば都六條の
本山をはじめとして國ゝの寺院御舊跡を細に
圖繪し二十四輩順拝圖會と表題せる
其ハ一つのこととまりて目覚る心地のしぬ書

つゝし置る詞葉のさまなんまやれ程し
久しく野しけれど
聖人の御行状におきる尊く尤有難く
そゞろに涙にむせびあるやもし残巻の首に
かゝはせ書侍る時して享和三とせのとし
亥の春閏月下旬

釋　了貞自序

凡例

一此書に載る所ハ高祖聖人御經廻の御舊跡二十四輩の寺院をあらハし其餘國々に於ても眞宗の寺院數千區ありて或ハ高位或ハ高僧或ハ由緒ある貴院或ハ謂ある大地等多しといへども聖人御旧跡に非る寺院ハ除きて此に記せず

一聖人由緒ある舊跡に於てハ大地小地を論ぜず悉く是を記し其外古院の廢したる或ハ他宗の寺院又ハ神社及び在家野山丘塚に至るまで聖人の縁ある古蹟に於てハ詳に正し記して漏さゞるなし

一御舊跡二十四輩の寺院に各々根本あり別院ありて古来より其地を失ハずして相續せるあり又兵乱火災等に

係りて他國他郡に遷さるなり或ハ二ヶ院三ヶ寺と別れ
本末分明ならざるもあり是其寺院乃縁起を記て
中に就て其傳來を顕別に

一此書に載る寺院住職乃位階高下を記さゞ其所
謂ハ當時位階の低きも後年昇進して高位に至
るなし只院家職ハ一宗乃僧官なれバ皆是を寺
号の下に記せり又東西の
御本山に屬せる寺院も同じく寺号の下に東流
西流と記してこれを別つ

一六老僧七箇乃靈寺あり是又其寺院乃下に委記を

一御舊跡二十四輩乃寺院順拜の次第によりて行程を
記といへども其順路一ならざれバ越後か信濃を巡

ありて出羽を經て奥州に巡るあり皆其所に着て是を辨説し且參詣の順路あり下向に拜する舊跡あり一國の内といへども往返両度拜禮する所ありし此編國を分て寺院を記し故に國中の御旧跡に於ては往返両度共に係せて縁起を記し里数と寺号と其順路の所へ再出し為巡拜の便とせり山城國に於ても山科の旧地は帰路に係されば里数を記さずかくのごとし

一先に遺德法輪集　御旧跡二十四輩記　大谷遺跡録あり又二十四輩順拜記　參詣記　御旧跡圖彙等皆其靈場の傳記にして巡拜の便とする書なりといへども殊に長きものは繁に縷く前に見えしが後に欠けり今先書の載る所を皆集し國字俗文猶加るに圖畫をいれてせるは靈場數

婦女の祝安からんがためなり

一編中御舊跡およびかゝる名所風景を記して圖画をも併せのせたり是予が著述する所にかゝりて只兒童婦女の觀るに真ならんためよく書肆の利を射る計なるべしあるいはながら是をとりて此書を廣むるの端ことはなりが是まひとつの方便なるべしと其儘に本に寿く

河州　專教寺隠釋了貞識

二十四輩順拝圖會巻之壹

目録

山城之部

近江之部

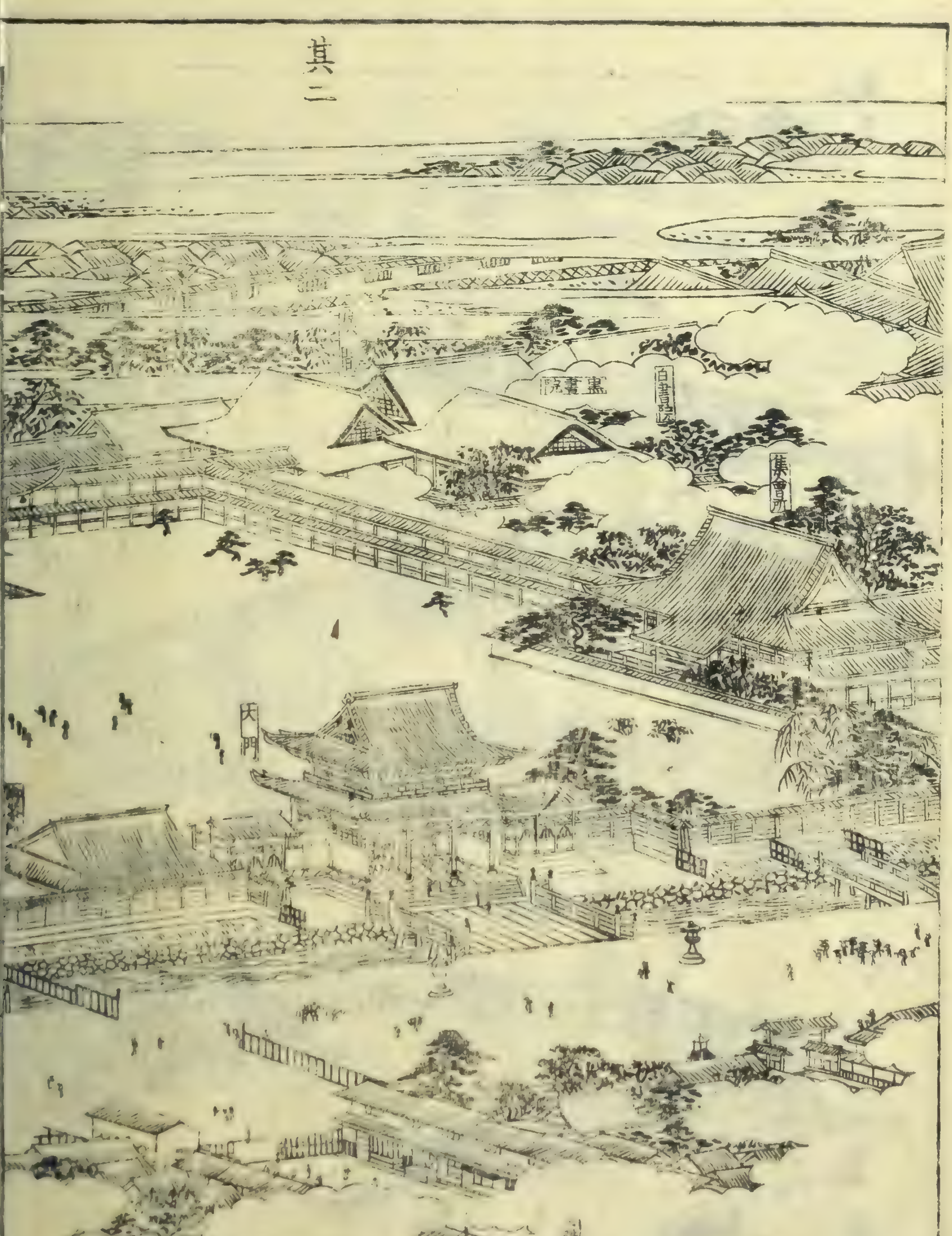
題　宗祖聖蹟圖首

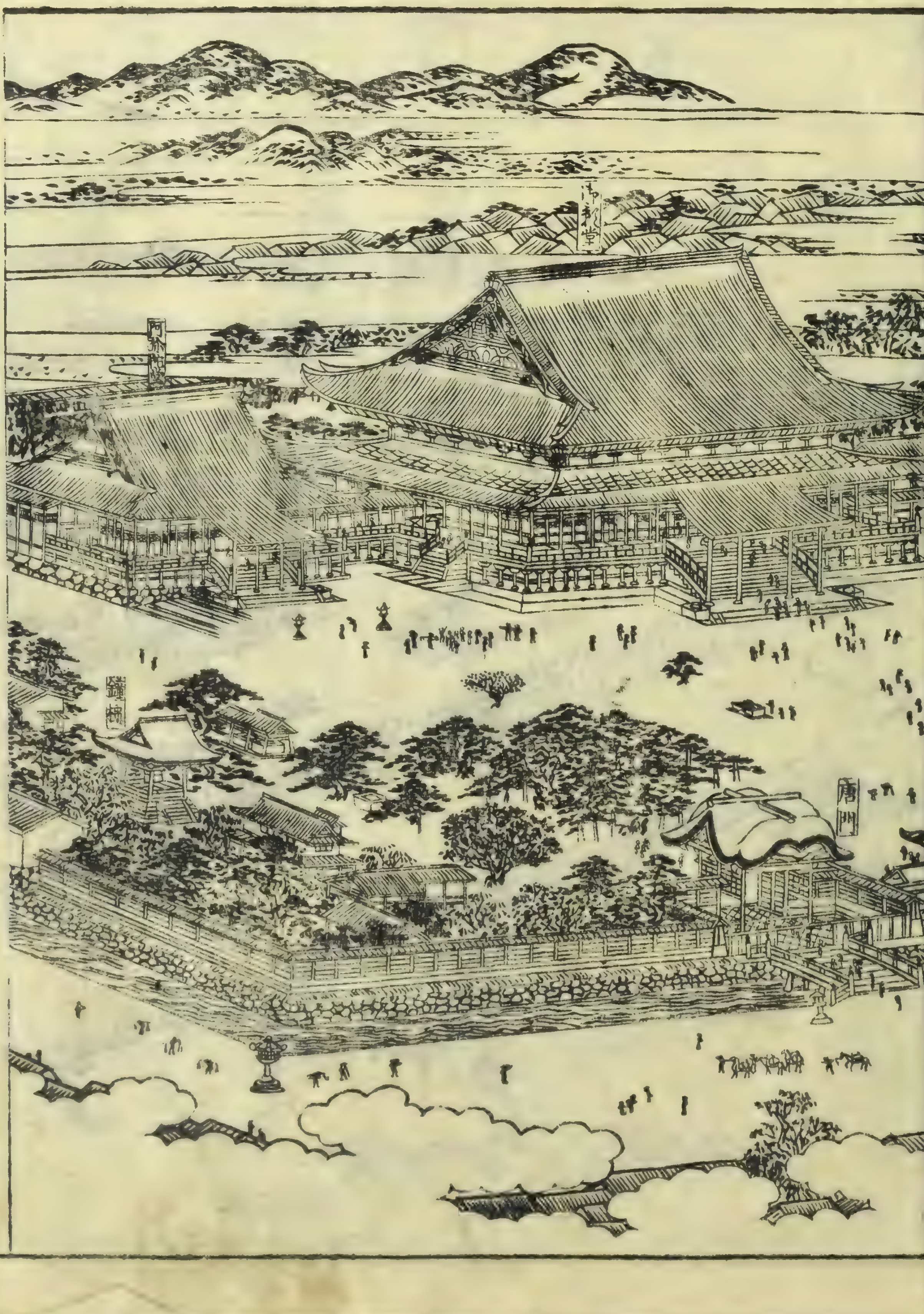
有之畫師能寫我　祖山及其他聖蹟二十餘所罄無不盡焉於是観之者忽驚恢廓之廣而莊嚴亦愜素聞無人不言嗚呼殊勝哉所謂千聞不如一見者豈不由圖之功乎乃人〻観之則亦庶乎起信念恩之一助云爾

享和癸亥春二月　玉泉洞水撰

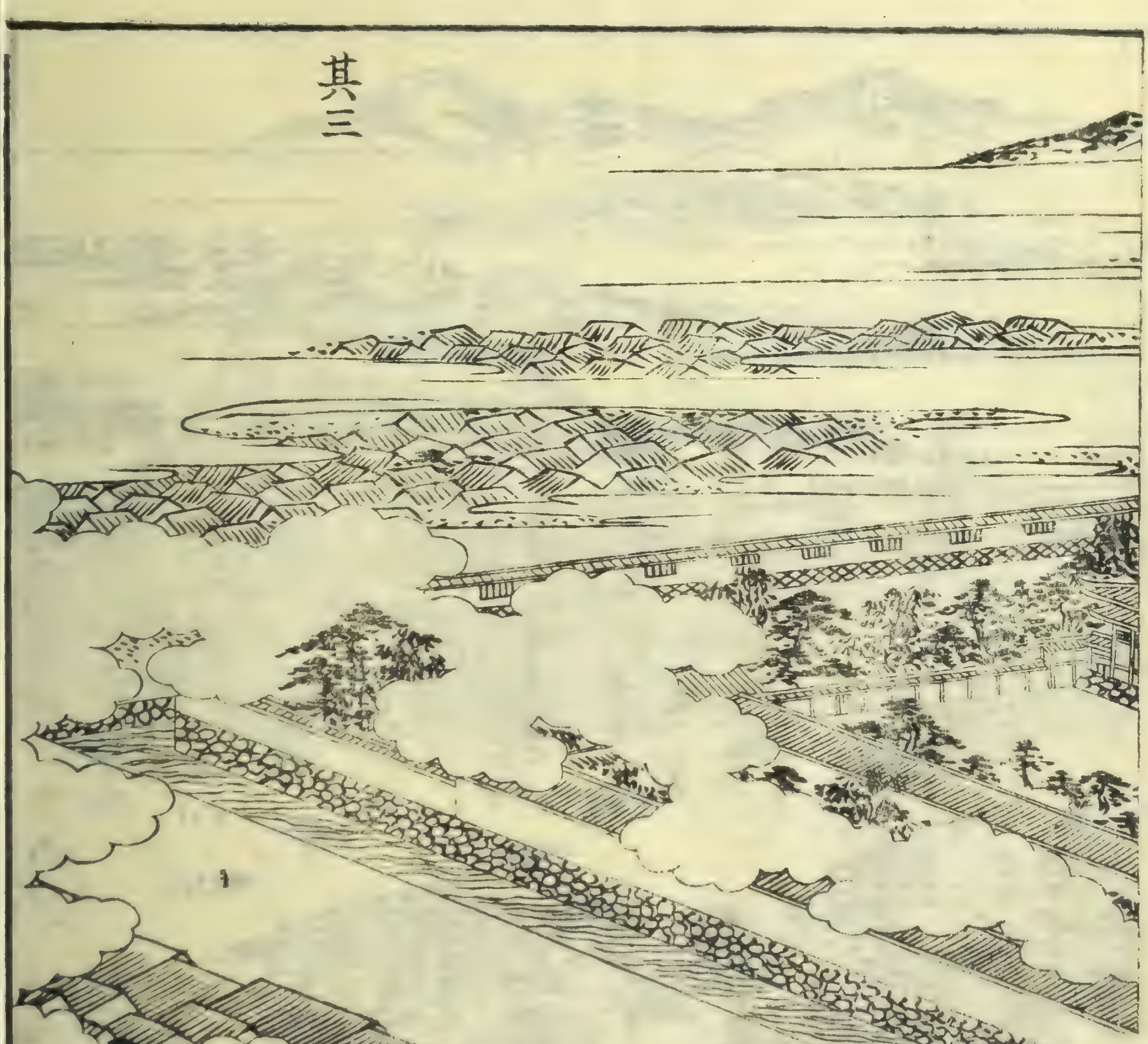

東六條
本願寺御門跡
大坂番や
上珠数や町


臺所
玄関


其二
黒書院
白書院
集會所
大門

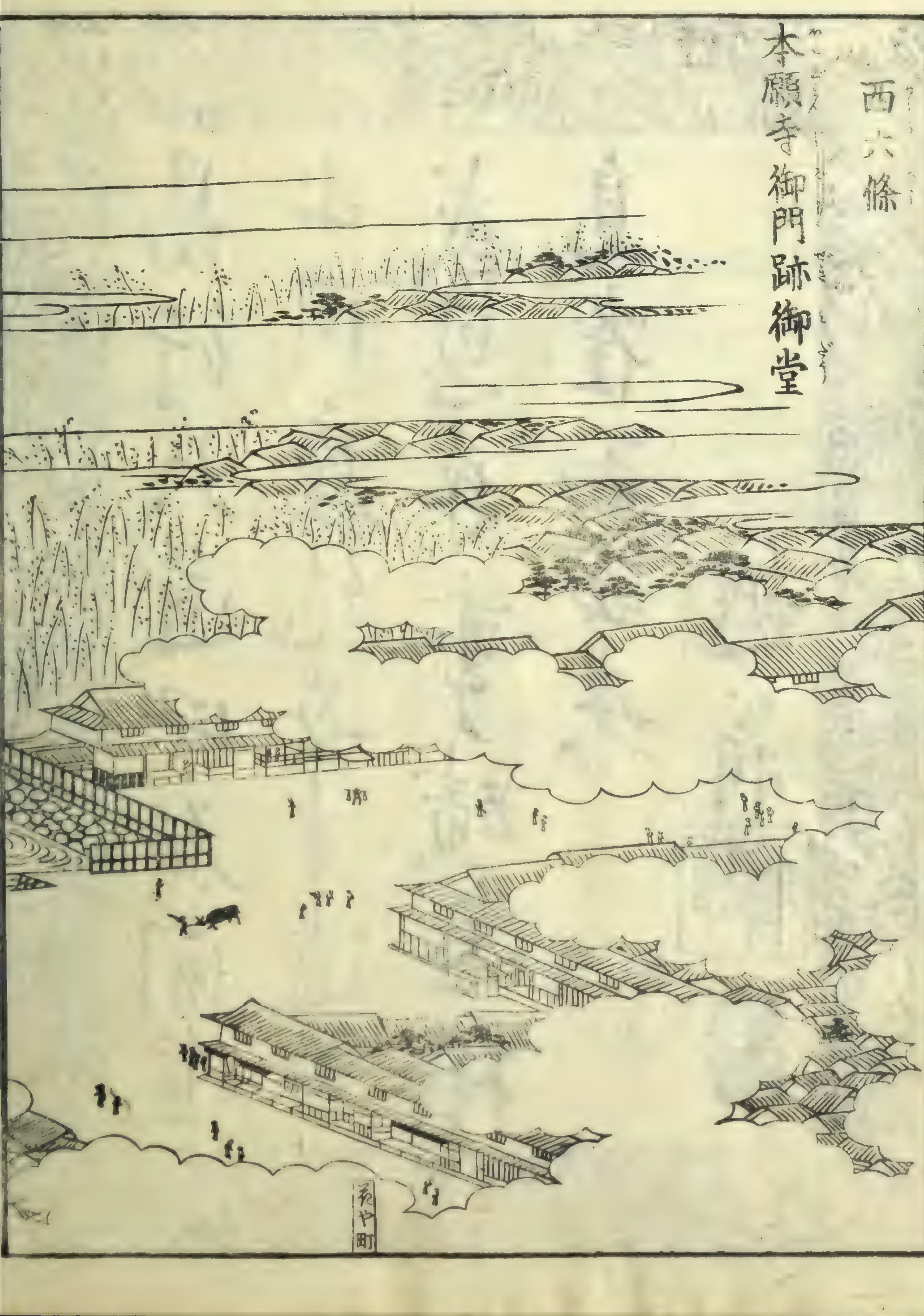

御影堂
鐘樓
唐門

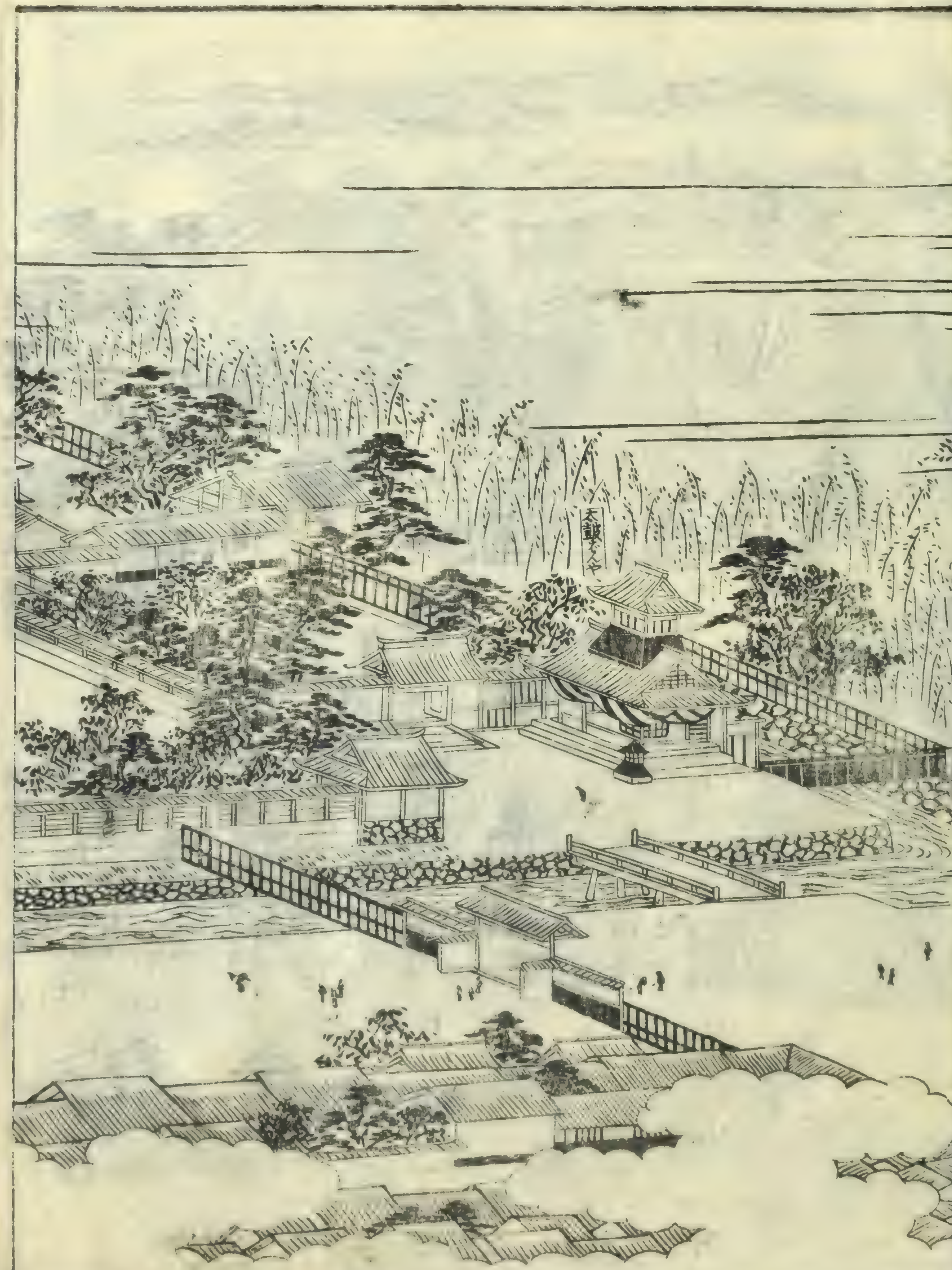
其三

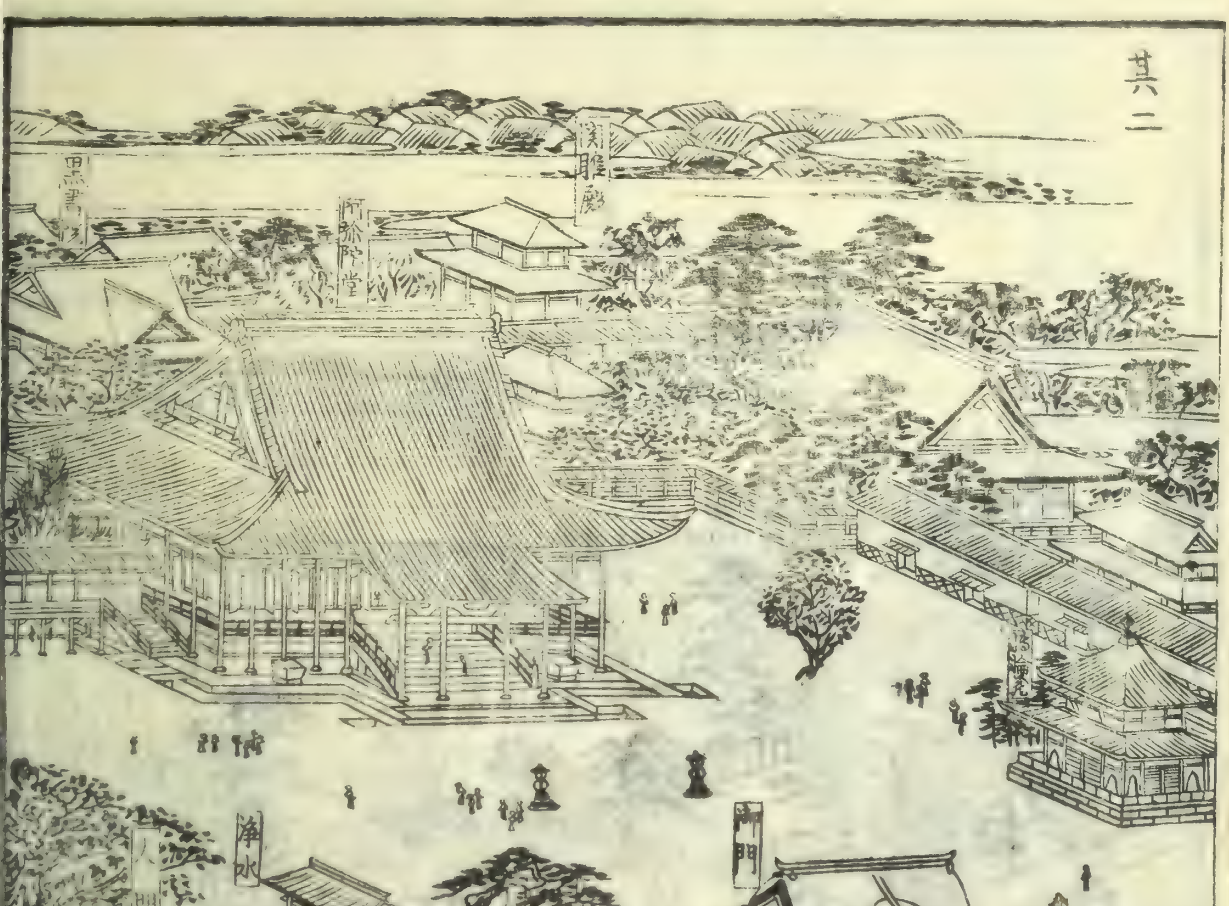


易行大道以廣開進
止同塵絶世才遺第
感恩尋事蹟忘機
鳥雀面西来

越翁

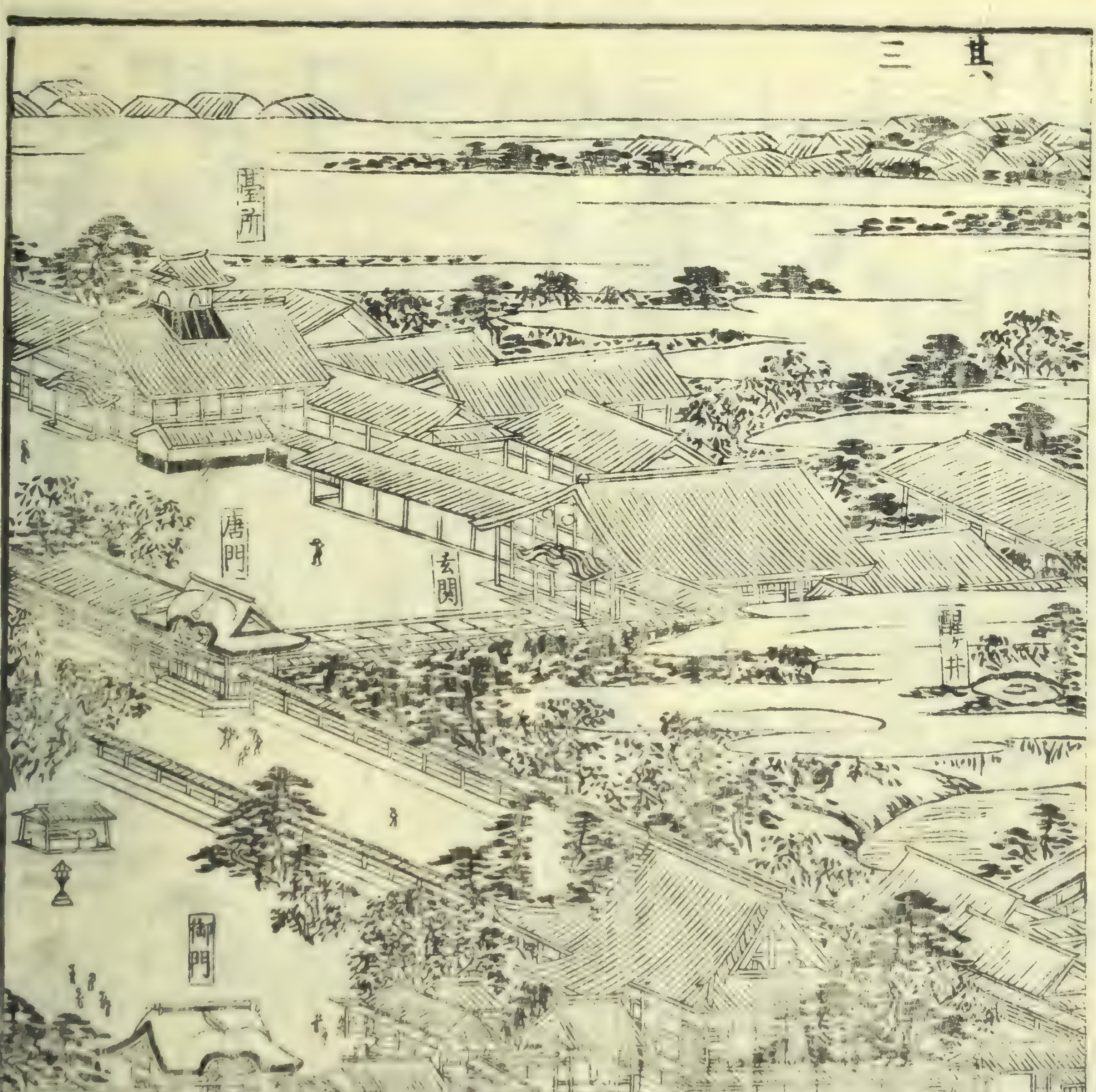

西六條
本願寺御門跡御堂
花や町


太鼓だんや

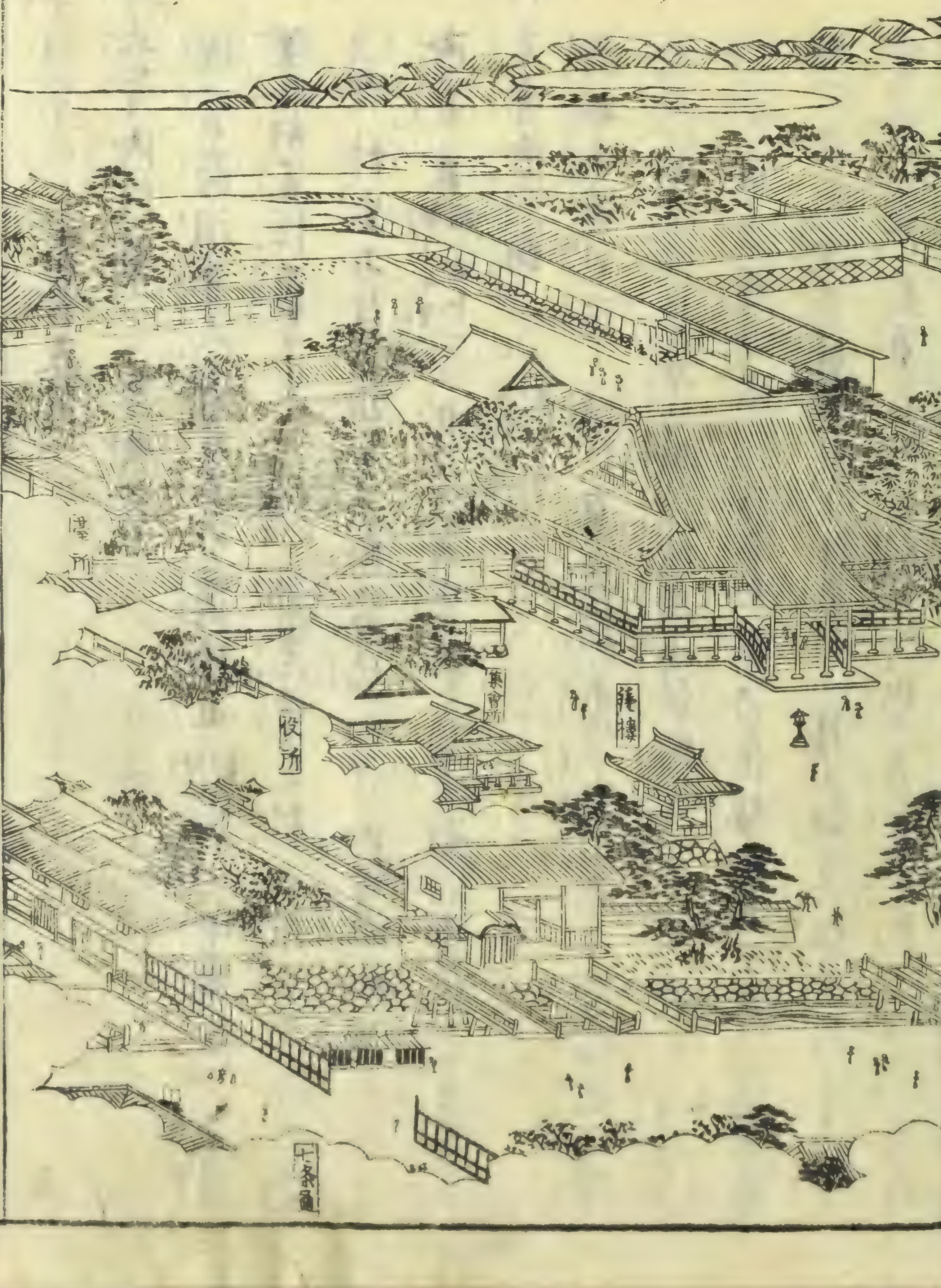


其二
阿弥陀堂
浄水
御門
御茶所
寺中


物見
大中居
虎之間
朝拝殿
小中居
長局


其三
臺所
唐門
玄関
醒ヶ井
御門

興正寺御門跡御堂



二十四輩順拜圖會巻之一

興正寺御門跡　西六條にあり

從昔高祖聖人御建立乃霊場也　從古山科に在りし　中興　文明元年　華恩院大納言經豪上人　又蓮教上人と号し　佛光寺を剝く別立し給ふ所之

○御什寶には高祖聖人御壽像　御自作　御簑　聖人御離後鳥羽院御直衣　勅して聖人へ賜ふ所なり　其外霊寶勅書等數品御傳來る略之

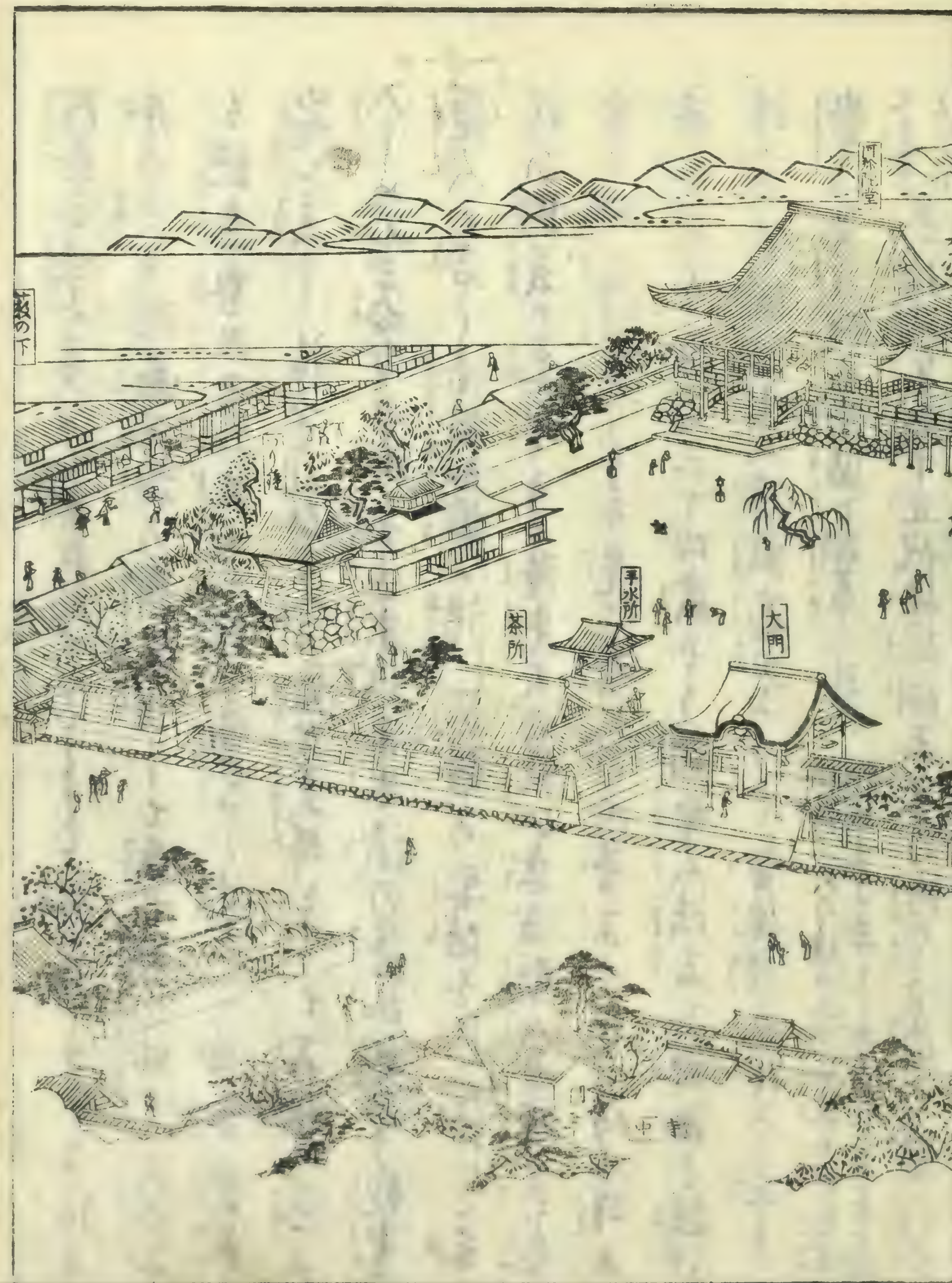
佛光寺御門跡　五條坊門高倉にあり

澁谷山華恩院と稱し真宗相承の一本山なり御縁起に曰聖人勅免御帰洛の砌山城國山科郷に一宇を御建立ありて　建暦二年聖人四十歳　興正寺と号し一宗根本の道場と定め給ふ其後當寺を御直弟真佛上人に附屬し給ふ此真佛上人と申せし鸞聖人御直弟の中に別て博學多才にまします内外の

諸典に暗からぬ聖人御相傳の安心のきはめるに押しましける
御俗姓は柏原天皇の末葉鎮守府将軍平國香の後胤下
野の國司大内家の息男なり後に真佛上人第二代の法脈
を相承し給ふといへども野州専修寺寺務の儀を聖人より
仰附られたる故に興正寺を源海上人に附屬して関東に下
り給ふ源海上人も同じく聖人の直弟なり此源海上人と
申すは藤原姓大織冠の末裔日野家の庶流にして武州荒
木の住人安藤駿河守隆光とて文武に誉ある武士なりしが
隆光二人の男子あり兄を月壽と名づけ弟を花壽と呼び
寵愛限りなかりしに有為無常のならひさま老少不定の娑
婆のならひはかなく兄の月壽も七才花壽は五才にして病ける
なく同日に露の命は消うせける隆光天に叫び地に咽び泣に



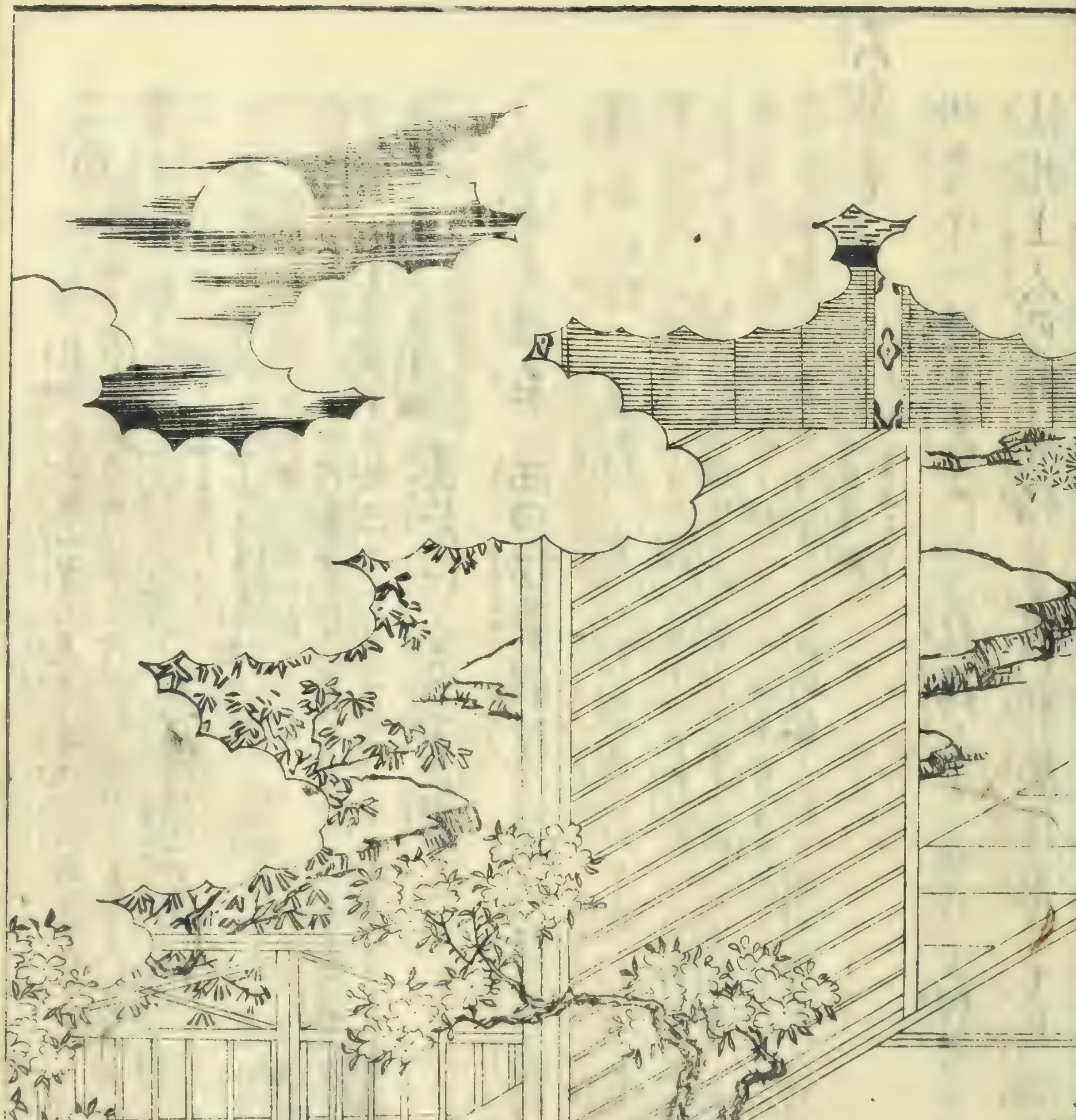
佛光寺御門跡
御堂


阿弥陀堂
坂の下
手水所
茶所
大門

殺害き嗚呼ふかく若くして死せたりやとまで歎き居たりしがある
夜の夢に端厳正相の僧来現して告て曰く汝が二人の子
は観音勢至の二大士之仮に愛子と生れて無常変易
の理を示し給ふこれひとへに汝等夫婦をして菩提の道に
入しめんが為なり今幸に末代不思議の善知識あり親鸞
聖人と名く汝彼知識に謁し出離の要路を問ふべしと告
給ひ則夢は覚たりける隆光大に歓び急ぎ聖人の禅室に趨
奉り聞法随喜し為に竟に聖人の御弟子となり給ふ時に
康元元年隆光三十四歳なり則聖人法名を源海と授け
給ひければ源海上人博識高才にして智徳勝れ給ふが故り
当山第三代の法脈を相続し給ふ（源海上人の伝は三州如来寺の縁其外諸書に委しく載られば其名を揚て畧すあるに）
其後人皇九十五代後醍醐天皇の御宇に当て当山第

七世了源上人の時當山御本尊阿弥陀如来金光を放ちて
禁宮の内をてらし玉体を照し給ふ主上後醍醐天皇奇
異の思ひをなし給ひ叡感の餘り詔をくだし改め勅して佛光
寺と寺号を給ひ專修念佛の根本たるべき綸旨を賜る則
此尊像は聖人六角堂御参籠の時感得し給ふ所の尊像也
當又別に宸翰を染られ祖師聖人の御傳抄を書写し佛
光寺へ寄附し給ふ祖師聖人傳来の宝物には
○根堂本尊阿弥陀如来 此尊像金光を放つて禁宮を照らし給ふ佛縁光の記を ○御影堂 開山聖人御創作の尊像を安置せり ○嗣法桐葉の名号 賜書に曰く右一幅は宝号にして本光のとおりあかす事存しし黒谷法然上人面受直傳長月親鸞聖人し給ふ則高祖聖人の御筆にして當山別當職を嗣ぬるの此名号桐葉に續の証としたまふとうやかるがゆへに嗣法桐葉の名号と名づくとぞ ○附法桐葉御袈裟 法然上人より親鸞聖人へ御附属の御袈裟なり傳に云此袈裟を親鸞の御袈裟として云御袈裟國縁に法然上人の御真筆をもつて此安阿弥法衣後師某授与法衣今授與着せ年号月日御自名を書したまふ ○法然上人御自作御





本像（ほんぞう）此尊像は法然上人開山聖人左遷遠流の時両聖人ともに御容貌を明鏡にうつし御互に御自身乃御姿を御彫刻ありしを互にかはし給ふ御像なり開山聖人の御影は本像は黒谷に納り法然上人の寿像は（一）御傳繪二巻 後醍醐天皇乃御宸翰之 一宗當山本尊也右乃眼に安置なり 無二の霊宝物なり画は土佐筆

右二巻の題は漂紙箱書安永元年青綺門院（一） 九字名号 後水尾院 十字名号御寿附御箱の表書有栖川織仁親王御筆 乃御宸翰（一）後西院 右九字十字の御宸筆両名号は當寺の什宝嗣法相承の名号并に後醍醐天御宸翰（一） 皇御宸筆の綸旨等天子より給へしが両帝ともに叡感ありて宸翰を下し給ふ名号并に小野宰相定矩卿乃御添書あり 其外什宝数多略之

○寺中六院家○西の坊長性院○南乃坊大善院○東の坊昌蔵院○中の坊久遠院○奥の坊教恩院○新坊光園院

昔は坊舎凡十八院ありしが當山第十四世經誉上人の御舎兄經豪上人文明年中に坊舎凡十二坊及び諸国の末寺数多寺を従へて興正寺の寺号を用ひて別立し給ふ故に今は六院家のみ残り止つて根本寺に忠勤をなすと云々中古天正十四年本寺の旧地世勢の時霊堂院室を今此地に移し殿堂造営ありせ給ひ規模壮麗にして厳之

大泉寺（だいせんじ）

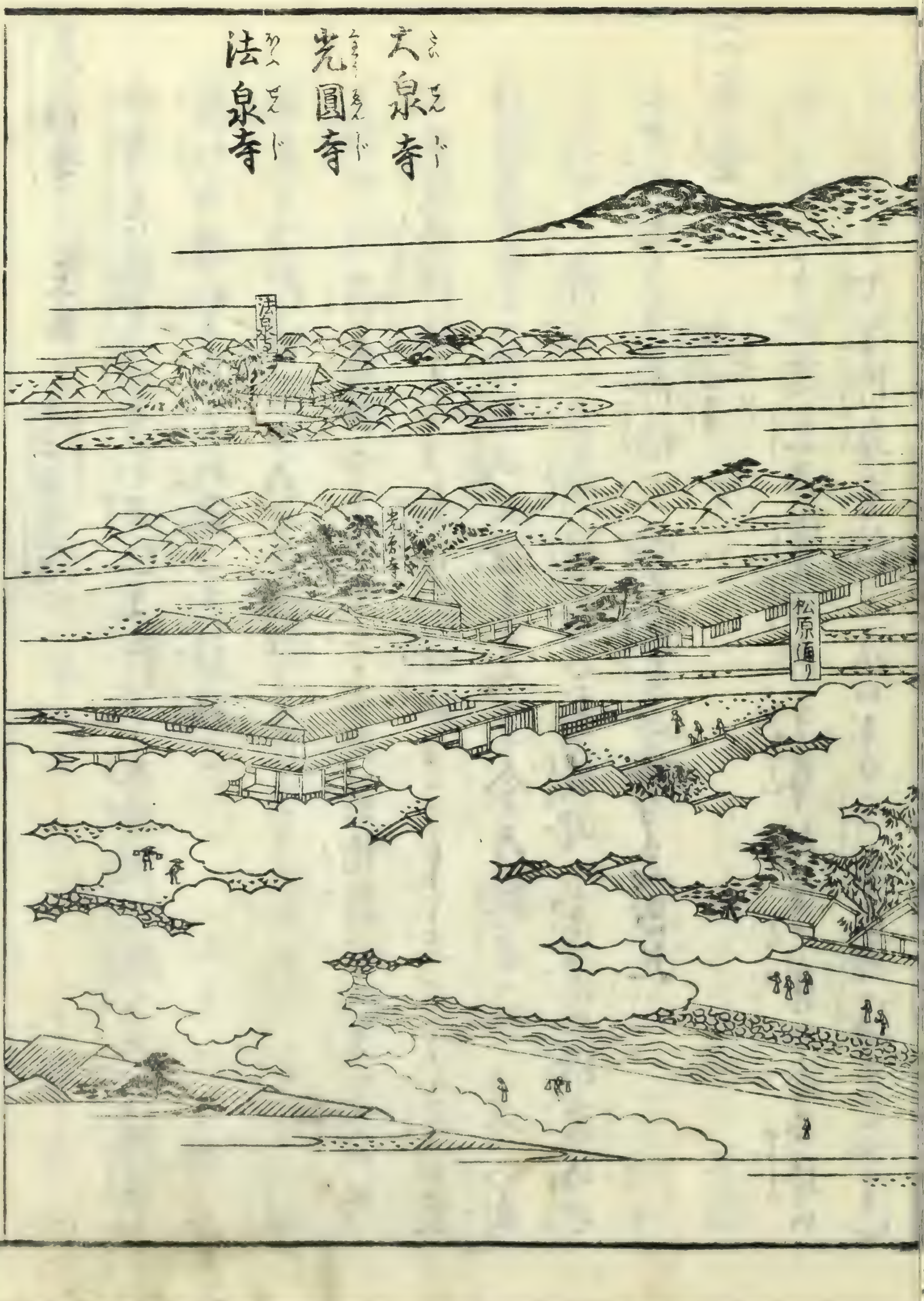
西洞院万寿寺通 月見町南にあり

此寺今は浄土宗にして花降山と名づく往古九條関白兼実公法然上人の御教化をうけ剃髪染衣して月輪の禅定関白と

法号し隠居し給ふ御別殿の舊跡なり昔ハ花降の御所と
いひ又花園の御殿と名付けしとかや其謂を問ふに親鸞聖人
月輪殿下の養君として此御殿に入せ給ひ殿下と共に本願念
佛を勤行ましましたるに時として五色の花空よらんまんとして
降り下り世人これを見て奇もの思しこぞりて花降の御所と
称したるとかや扨又法然上人もしばしば此殿に入せ給ひたる
が或時庭前なる泉水に渡したる石橋の上に立せらるゝ処
たるに御後に満月のごとき輪光かゞやかれたる禅定殿下目の
下にこれを拝し給ふ此いはれによりて寺内の泉水を月見
の池橋を月見の橋と号し此町をも月見町と号るといへり
又月見の松。珠数掛の梅。御腰かけ石とてあり殿下の姫君
玉日君のいはれハ委しく六角堂の下に記せと



天泉寺
万寿寺通


大泉寺
光圓寺
法泉寺
法泉寺
光圓寺
松原通り

光圓寺 東流

松原通西洞院にあり

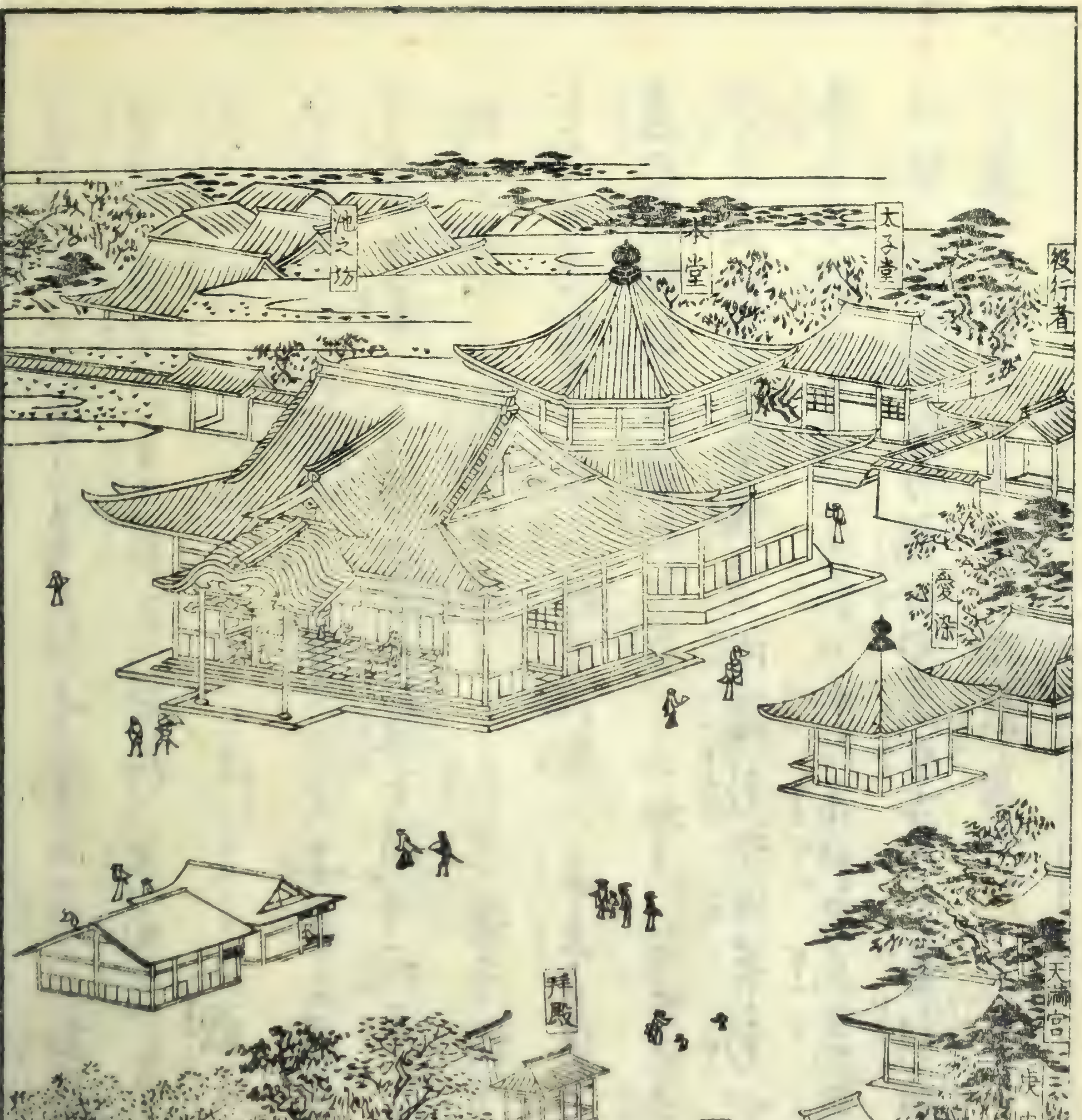
此寺花園光圓寺と号しまさしく九條関白殿下の御別荘也建仁の頃鸞聖人此殿に御移住ましく又御年六十余歳関東より御帰洛の乃ち居住し給ひたる西洞院花園御坊と称せし其旧地なる事明なり御傳繪抄下の巻第五段に云五條西洞院王り是一ツの勝地なりとてしばらく居をしめ給ふとあるときは則以て證とすべし今乃松原通といふはいにしへの五條通也常陸国平太郎熊野へ参詣の時夜を明し参りたる御坊も此光圓寺の地なるべき也

六角堂

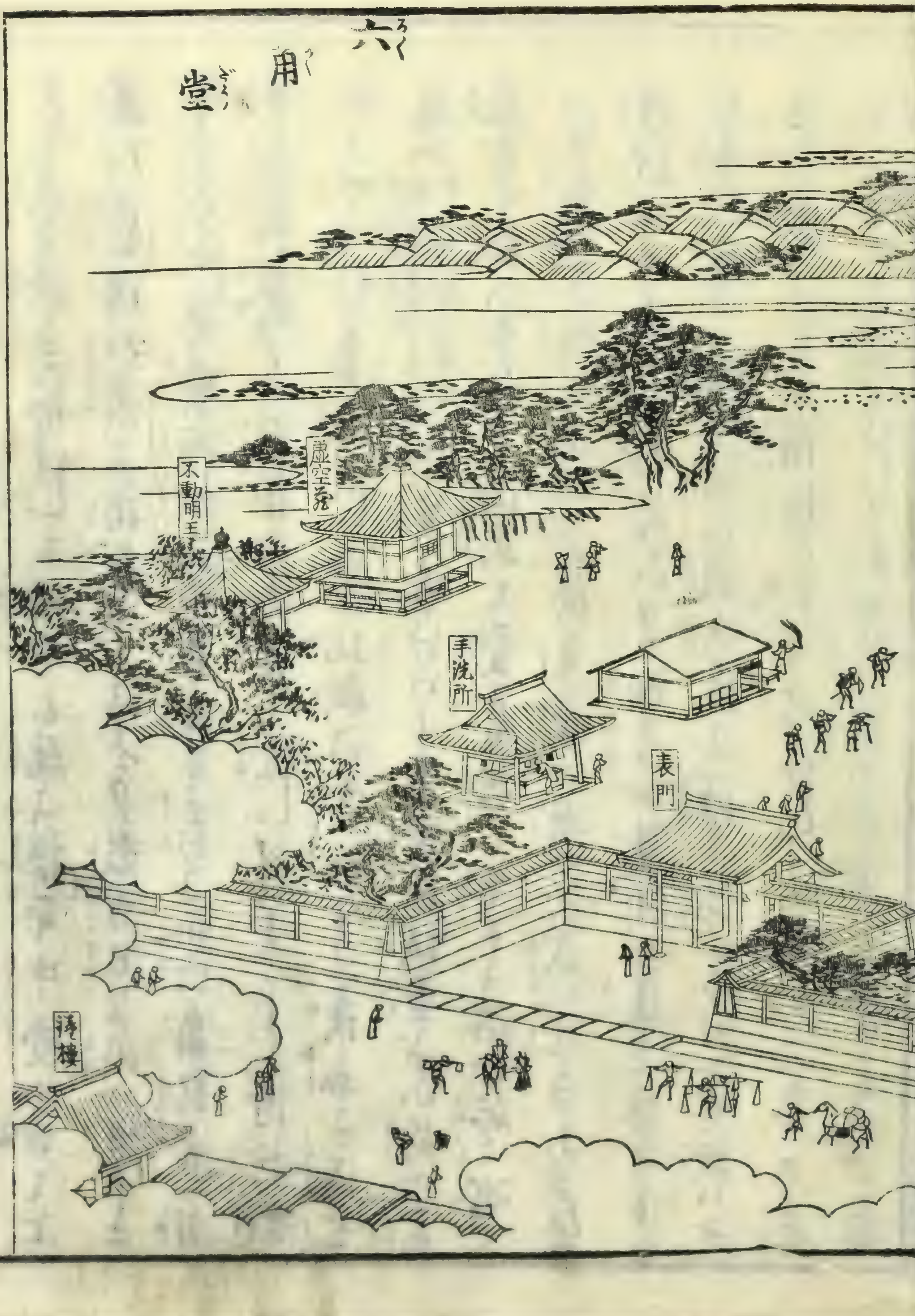
頂法寺と号す

聖徳太子御建立乃霊場なり本尊救世大悲の御正体は聖徳皇七生御身を放ち給はざる正身の御姿にて在し

なるゆゑ世にいきてありぬれば今宵に畢ぬ抑親鸞聖人この
霊場へ百日乃参籠ありし世給へ其由縁を弘給ひ奉れり
然是一朝一夕の所行にそれましまさば遂に聖人乃大悲
御身に余り五濁乃凡慮をもつて安楽に導き給はんがため
御身を苦しめ給ふ今其流を汲乃門葉は身より仰を
暫も眼より血涙を流して其恩徳を報じ其教を信
ずべきものなり聖人始め比叡乃山上にましまして難行聖
道の御修行に身心を苦しめ給ひしなるが哀愍大悲乃御
心にてにありまして嗚呼此難行や此苦行や我がふまよひ
安き小路あるにいかでいかんや末代の凡夫此難行を勤る
に堪んや願くは濁世の衆生をして易行の大道に導き
苦界を済度せしめなば我身はたとへ毒中に苦を受る



役行者
太子堂
本堂
池之坊
愛染
天満宮
庚申
拝殿
小門



六角堂
虚空蔵
不動明王
手洗所
表門
鐘樓

とも更に厭ずなつかしきものをと既に根本中堂へ歩みを
運び薬師如来に祈誓し給ふ事数百日に及ばせられ
しがをとして薬師如来の霊告を蒙り此六角精舎へ百
日参籠を成し有縁の御法を示し給へとて御祈願
あらせられたるが名にし負ふ比叡の高根より夜毎に通せ
給ふ（叡山大乗院より六角堂まで行程三里十八丁）実にやけはしき雲母坂並ぶ足の立
難くて通ひがたかりける山まも登るに苦しく悩む事繁く
たる山坂を風雨をいとはず昼夜を撰はず歩み運きあるひは
まろびながらも運び給ひたる加く加茂川の流れ浩くとし
てある折は時としては洪水に堤に溢れ渉かれとも厭はせ
給はず参りなく満通ひ参らせ給ひしが建仁元年の春
聖人二十九歳なりとして救世菩薩の告命に依て吉水の禅

坊に来り法然上人に値遇して易行の大道に趣き弥陀諸仏の本願を弘め凡夫女人を引導し給ふこそありがたけれ其後かさねて救世菩薩聖人に告命し給ふ事の侍しける建仁三年癸亥四月五日の夜寅時菩薩顔容端厳の聖僧の貌を示現して白衲の袈裟を着し広大の白蓮華に端坐して善信に告て曰く

行者宿報設女犯　我成玉女身被犯
一生之間能荘厳　臨終引導生極楽

是これ我誓願なりと告給ふ此文来由しくは御伝抄にあり又浄土鎮西流の記録浄土三国仏祖伝系と六角堂の記録に明なり寔に抑ひろく鸞聖人在家無智の凡夫又障垢穢の女人をも御引導あるべき一宗を開んとは会得し給ひぬ又善信と申は御名は此時観世音菩薩の与へ給ふ御名

なりとかやされば此観世音菩薩玉女の身を現し聖人
乃妻室となり給ひて凡夫女人を導き救んと誓願なし
せ給ふ不可思議の方便なり則告命ニ玉女身と宣ふも
正しく月輪禅定の姫宮玉日乃前にてましまる○鎮西
流浄土三国仏祖伝○当流実録及古之裏の御因縁秘伝
抄其外自他の記録を考るに親鸞聖人救世菩薩の誓約
にまかせ妻家往生の智識となり給ふ事実正にいちじろく
しく證となるのみならず実に観自在菩薩随類応同の
利益物をもしまして関白殿下の姫君と生まし親鸞聖人と夫
妻の縁を成し凡夫往生の大道を教化ならしめ給ふ之去後に
鸞聖人いまだ法然上人の会下に在しける折から月輪
禅定兼実公の禅坊に来り給ひ法然上人へ申したまはく

大師上人の御教化に順ひ弥陀の本願を信じ念佛をまう
ハ在家出家の撰ミなく教ゑ往生の了解我等にわかひて疑の
疑ひをはらし給ひしなれ大師上人のごとく持戒精進の出家にてそ
念佛して往生を志し給ハん無戒在家の輩ハ念佛をまうしても
往生ハ不定なりんとはやぶさ疑ひやんべき門衆も多かるべき
か希くハ御弟子の中にて末代在家往生の善知識となり
給ふべき御僧一人我に賜まハるべし我娘玉日と配偶して
末代の在家に俗を往生させらくいふ也と余義なくも申し
給ひけるに大師法然上人大に歓び給ひ禅定殿下の仰せご
と実に我日比の念願に叶へり委細さふらふまじ善信御
坊今禅定の仰にしたがひて彼所に参り給へと仰られ
其時聖人にも唯御涙にくれさせ給ひけるが良ありて申給ハく

抑我九才にして慈鎮和尚の門葉となりしより此方偏に
王家の交を放ち専ら佛道を修せんと思ふより外なし
今又大師乃禪坊に来りて見るに只一筋に念佛して彌陀
乃淨土を願ふのみなりけるぞ殿下ハ御所に入て此身を後
に為してんやいかにとならば数百人の御弟子の中にて善信獨
撰み出されし仰とうけ給りけるにや偏に此方を免した
まはりしと思ふことや許させ給ひ墨染の御袖を綴らせ
給ひければ大師聖人に宣ふやうハ善信御坊乃仰ことハり
に覺へ候へ共さながら今御坊我念佛門に入給ふる私の悦樂に
ありしハ六角堂救世菩薩の御引導也既に彼觀世音菩
薩に御約諾のありしを内心に包みて他人に語らずして深
く隠し給へども源空ハ其事ともを晴によく知り給ひたり

救世菩薩の告命かくりしに違へさせ給へるかくりしによく彼土
にしは菩薩の示し給ひけるの御文を白地に唱へ
給ふ親鸞聖人歎息して宣ひく今は何をか包みさふらふべ
き其の告命蒙りさふらふは遠くの昔いまだ心に秘し
て曾て他人に語らざりしを大師上人時に是を志るしめ
しふらへはなんぞ仰を背きはべれたとへ是れ五欲の毒中に
入りて無量の業に苦しむとも在家不智の男女を救はんがため
なれば聊もいとはむ心さふらはずさらば殿下の命にまかせ師の
仰に随ひ奉るべしとて直に関白殿下の御殿に入給ひ
玉日の姫君と同居して夫妻の姿を示し末代在家往生の大
善知識とはなりたまひける
ここに述る事実は師の巻伝
とへて諸伝記に委しく見えず
◎親鸞聖人此親高の告命御心に秘して他人に語り給はハ

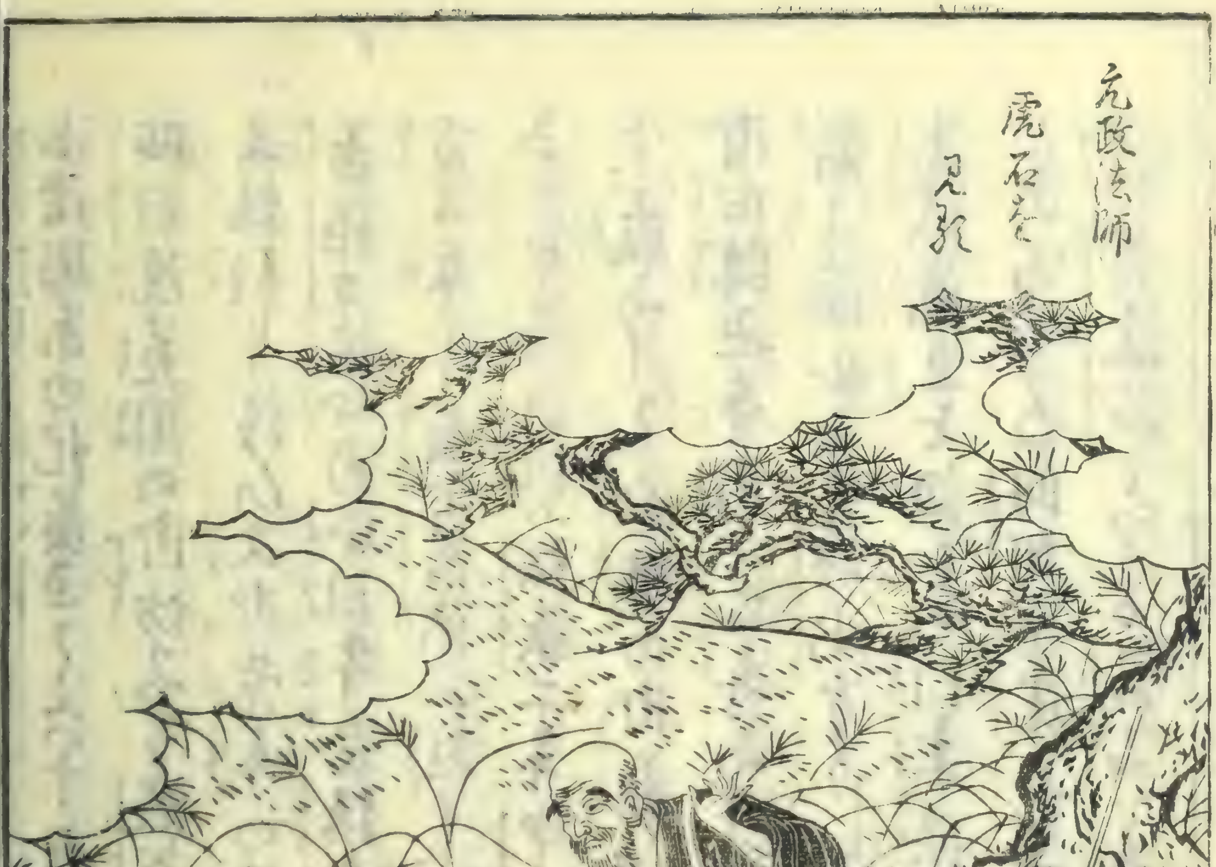
ざるに法然上人獨備みて是を知り給ふ事何ぞ凡愚の斗知るべけんや法然上人ハ正に勢至菩薩の化現親鸞聖人ハ明らかに弥陀佛の変作王日姫君ハ則観音薩埵の應化なれバ三尊一所に出現して平等利益の化を施し給ふ実に隨喜應門の大慈悲喜の涙に咽んでゐるひとかたならぬもの也さるをや尚又此事実我宗門獨の不議其趣ハ他家の記録にもいちじるしかれバ是を絶ふ不謂義と云鎮西流の記録六角堂の記其外自他の諸傳に分明也擬此ハもの濫觴を洛陽寺町日本廬山寺に傳来ハ

法泉寺　東流

柳馬場通押小路下ル虎石町にあり

当寺ハ祖師聖人御入寂の古跡之往古聖人の御舎弟尋有僧都の御里坊にして昔ハ善法院と称せしが聖人流に

小陰関東の化益ゑて六十歳の比花洛よ帰り給ひ
西洞院花園の御坊又ハ渋谷の御寺岡崎の御坊抔
よ移り給ひ又御老年の後此御坊よも入せおはしまし
益他力信心乃正因専念称名の正業を教化して化を十
方よ示し益を末代み施し給ひるゝ既よ化縁の尽つ
きさせ給ひ比れ弘長二年中冬下旬第八日午時滅九
十歳よして念佛の御声絶て浄土よ帰ら仕給ふの
御旧跡也寺内よ古井あり是れ聖人朝夕きせ給ひん
料よ湧出る浄水なりしと誠よ化益を蒙る乃輩
末代流ゑを汲むの門葉悲涙投地して尊重もべき
もの乃なるべき此町を虎石町と号るに謂あり聖人在
世の昔虎石といへる名石を庭の築山よ居て朝夕是


元政法師
虎石を
見る

を愛し給ふ事生るものを愛し給ふがごとし然るに聖人既に御入滅ましくける時此石いかにしけん汗を流し生るがごとく声を発して泣悲む御門弟の僧達是を見き奇異のおもひをなしけり然ば非情の木石までも聖人入寂の御別離を悲むらんといづれも感をもよほせ給ふかくて年久しく此寺に傳来せしに太閤秀吉公其名石なると聞召深く望ありてこれを乞に伏見の城にうつして愛し給ふ後年伏見の城御取拂ひの砌諸人皆是を知らずして其侭城跡の山に残りありけるに深草の宝塔寺といへる日蓮宗の僧霜月二十八日此傍を通りけるに叢の中に此石声を出し泣に似たり此僧不思議のおもひに思ひに形虎に似て名石なるを知り我寺に持帰り愛し

て弄びものとせり然るに此僧武蔵の國にて此石親鸞聖人の御寺へ参りて此由を言上して大きに驚き我寺に留置給ひしとかく直に東本願寺へ献ぜられけり今東大谷の御廟の内に納め置給ふ名石是なりとぞ実に石は非情のものなりといへど聖人愁哀の御心に感じて悲喜の泪を発し是又不思議のことといひつべきもの也此謂によりて門て虎石町と号るとぞ又此寺往古は巍々たる霊場なりしがましゝかども中古兵乱の災にかゝりて廃退して小坊となれり

○桂御坊 洛西桂の里寺内村といふ七条通より一里西丹波街道にあり

此御坊は往古本願寺第三代覚如上人建立し給ふ霊場なり寺号は久遠寺と号く依て里の名も久遠寺村といふとぞ西本願寺の御別院にして覚如上人の御墓所あり

月輪寺 愛宕山の表道 清滝の上の山にあり

此寺ハ往古空也上人の開き給ふ古院なり實に山なるゆゑに人屋を放れ里遠く雑談の声ときこえず寂静として散心を拂ひ閑然として佛道を営むによき地なるによりてかしこくも九條関白兼實公此院に入て入道し遁世の御身となり閑居し給ふ所なりとぞ又大師法然上人も此院に来て静に念佛し給ひ親鸞聖人も度々来入ありて厳下に共に稱名念佛の正業を修し給ひしとかや又此巌に師弟三師の影像をのこし御自作にして此院に安置せり又禅定自植給ひける時雨の櫻といふ名樹今に存在ス尚此山中岩間より出現したる丸鏡あり月輪寺と号るゆゑハ此謂をいひ傳へたり

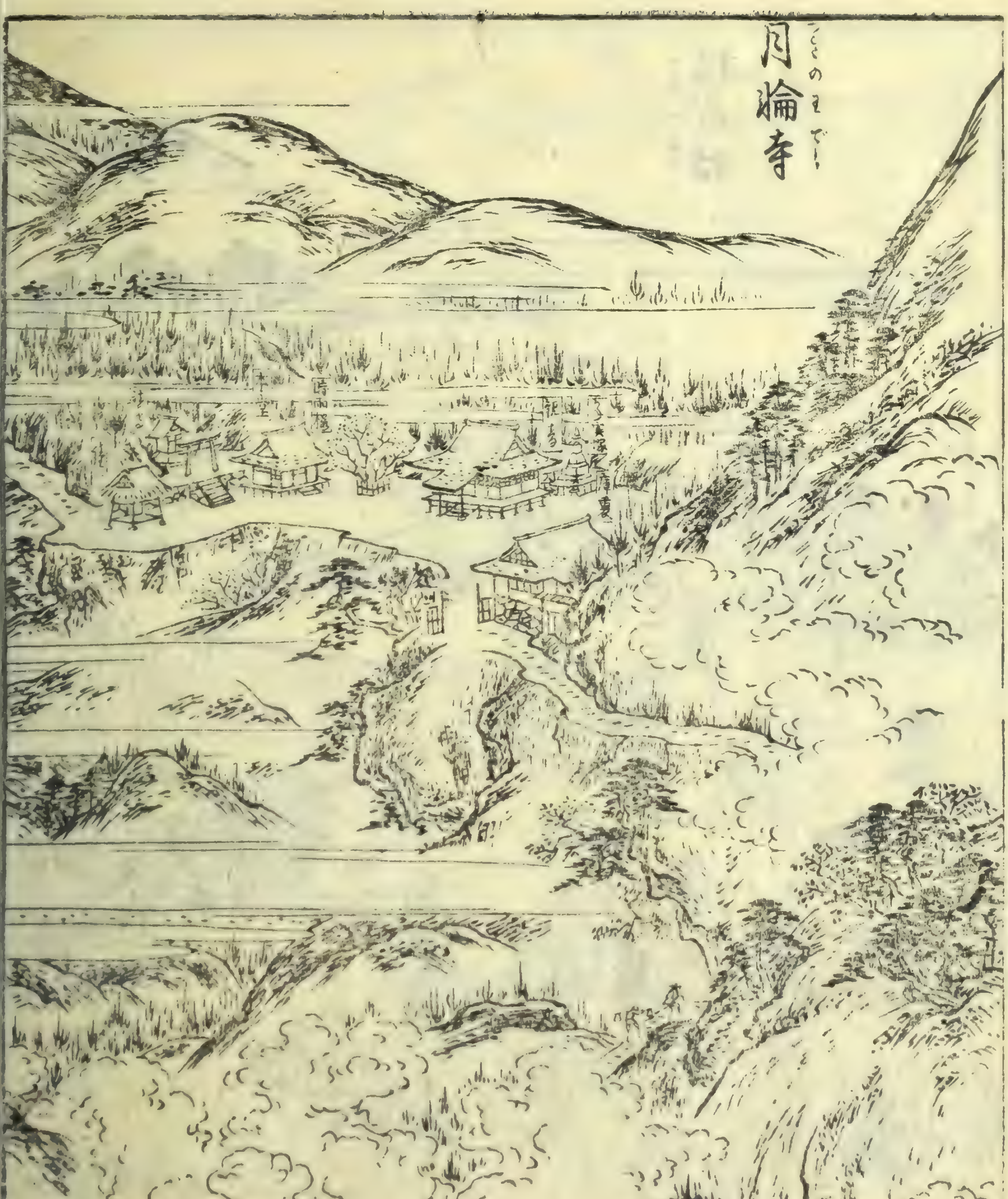
西大谷

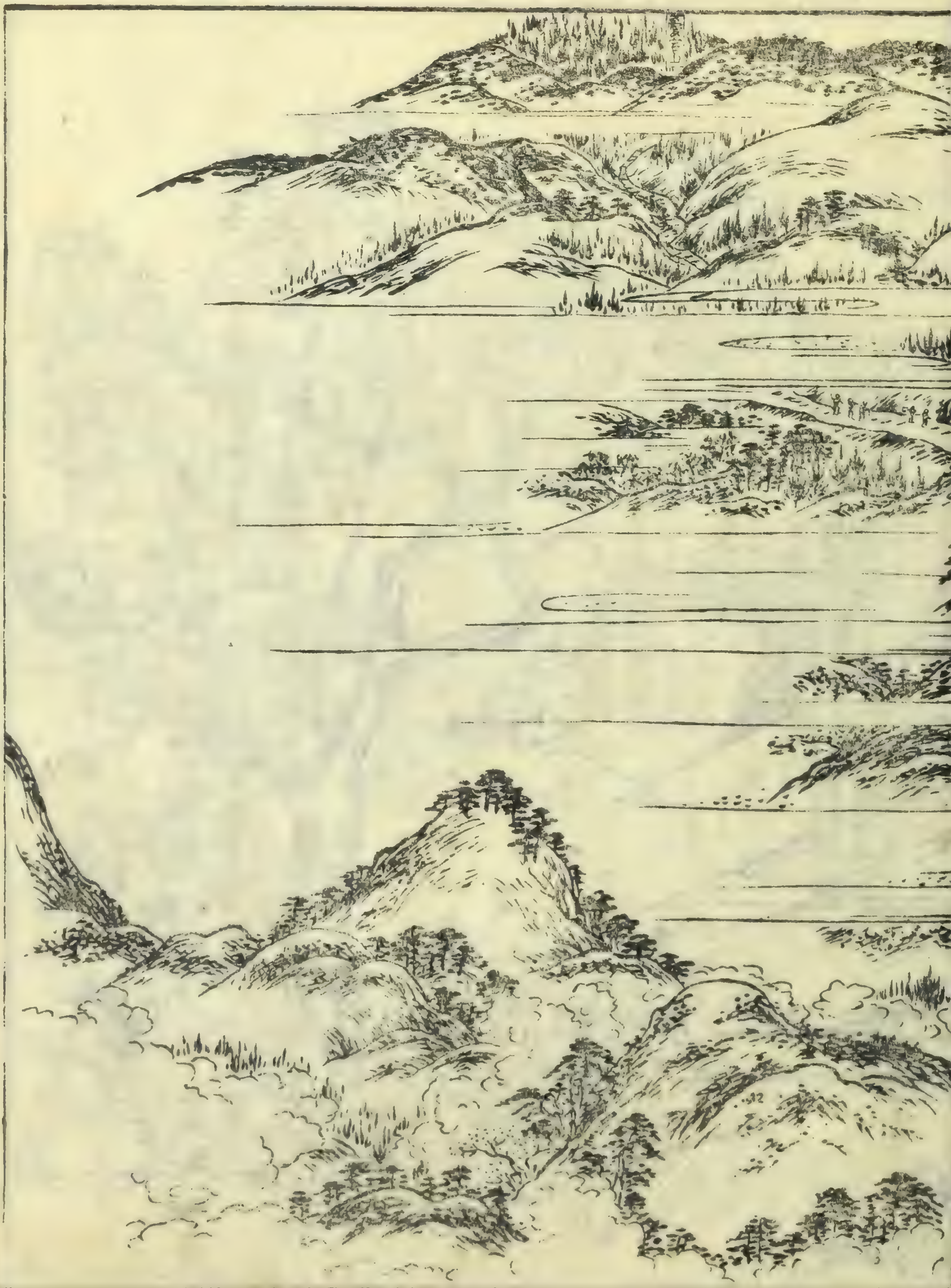
龍谷山と稱ス



かつら川
桂ら里


桂御坊
本堂
墓所
つり鐘
太鼓堂

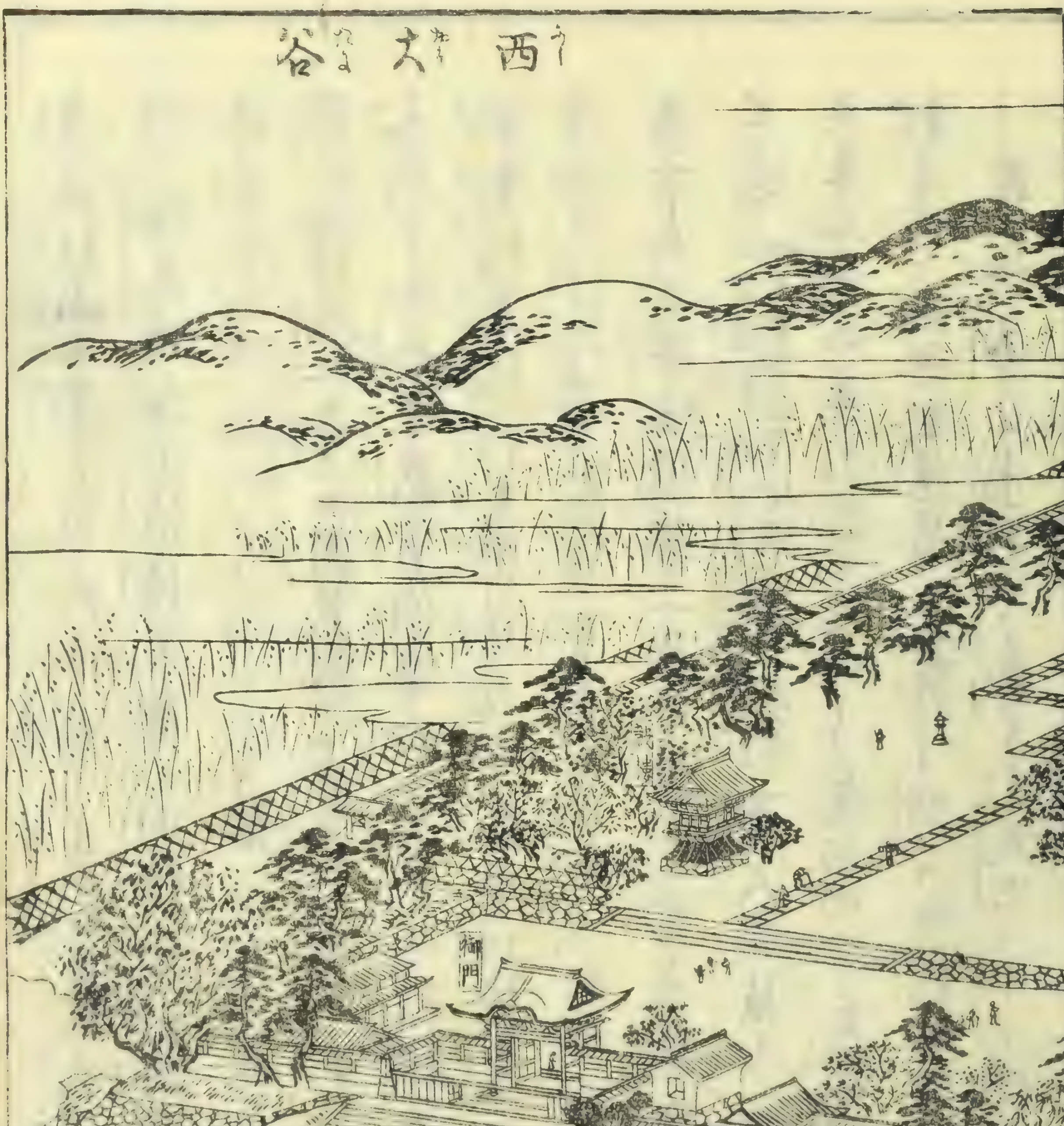

月輪寺
本堂
時雨櫻








阿弥陀堂
玄関


西大谷（にしおほたに）
御門

宗祖親鸞聖人の御本廟なり弘長二年壬戌霜月二十八日柳馬場押小路法泉寺の旧地善法院において聖人浄土に還帰ましく同廿九日洛陽東山西の麓鳥辺野の南の傍延仁寺に御遺骸を葬奉るより第三日に至りて御舎弟尋有僧都御息男印信僧都并に御弟子顕智坊専海坊等御遺骨を拾ひ同き十二月上旬に郡地の北の傍大谷小路にありて石碑を造立し給ふ其のち文永九月二十五日印信僧都一丈五尺十三重の廟塔を建られしとかや（此御縁起ハ報恩寺専修寺及び如意寺等の御縁起に委く見えたり）聖人滅後十一年を過て文永九年壬申の年大谷御廟より猶西の方吉水の北の傍なる新に地を開き彼遺骨を掘渡し此に佛閣を建て影像を安置し給ふ此年に当りてハ人王八十九代亀山帝よりす

本願寺と勅号ありて代々御祈願所たるべきの倫旨を賜ハり
則帝御宸輪の勅額を掲げ給ふ扨開山聖人より第二代の
御住職を御霊孫如信上人へ附属ありて血脈相承し給ひける
が如信上人関東御化益ましましけれバ再び聖人の御息女覚信
禅尼此御本廟を看坊し給ひ覚信尼公の御息覚恵上人
唯善上人の御兄弟御留守職として御堂の南小子坊舎を立
居住して守護ありしせしより是を南殿小殿と申すなれ候
て覚如上人第三代の住職を持し給ふ而てしより後御代々
御相続ありし世給ふ抑宮也覚如上人ハ覚恵上人の御息男
あれバ是ぞ親聖人の血脈なり夫より以来他姓なく血脈相
承して一宗を務め給ふされバ濁世の今に及ぶとへ此真宗
の法ハ末代に蔓延して西に繁り東に栄へましまする御仰ぐ


本廟
居所
茶所
手水
御納所


東大谷

ゐしかるべし　上来ニ粗記せり所謂先師の諸記ニ委しく　これを備ふる故ニ今ここニ略して演ぶるのミ

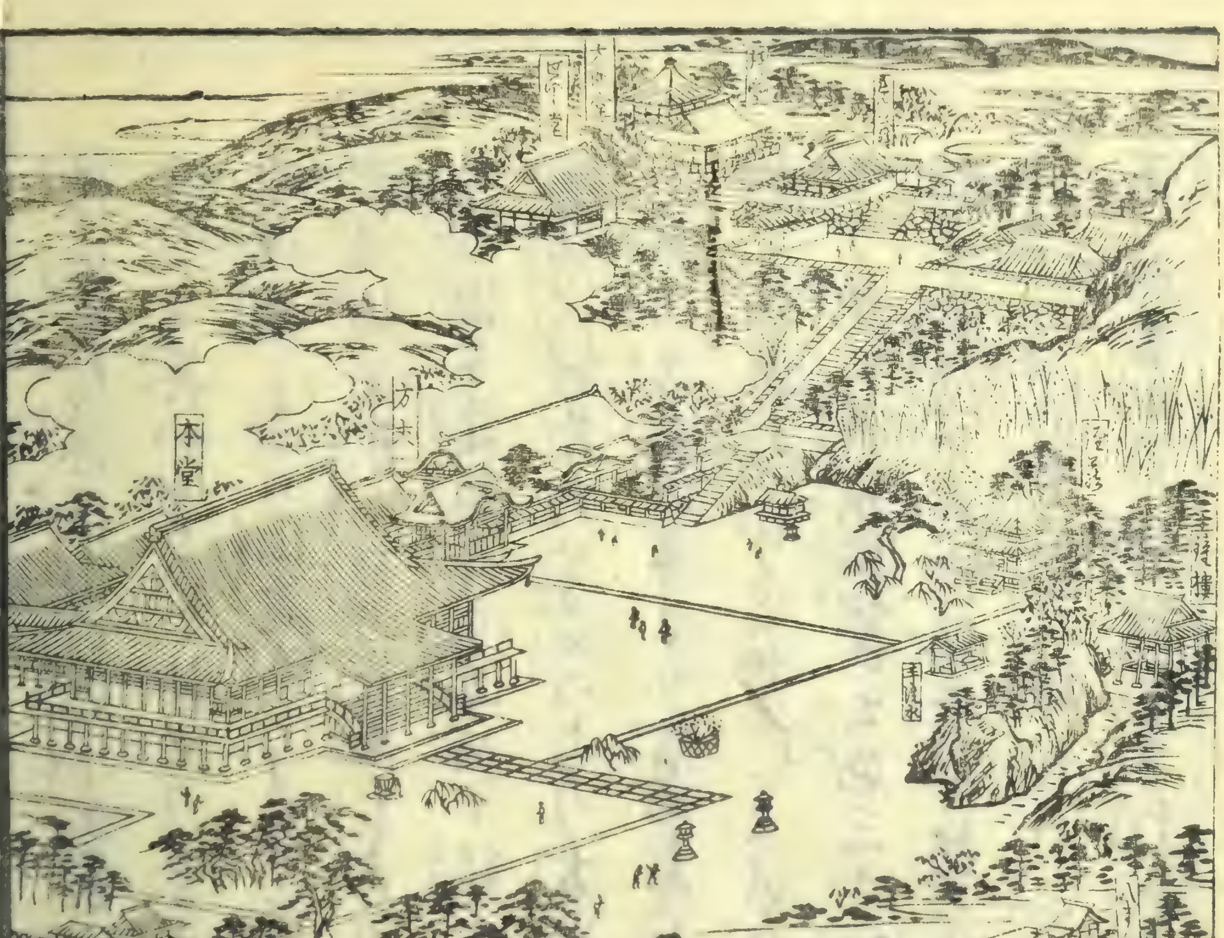
東大谷

大谷根本の地なる祖聖人の御墓所也山の中腹ニ石碑を築又古樹山腹ニ連りて在世の往古を觀じ青苔岩壁ニ蒸て歴代の春秋を惟寂静なる尊廟感ニ堪難くして自落涙せしむ則聖人御在世の御附御寵愛あらせ給ふ霊石を此石室ニ納め給ふ所なりとぞ大谷本願寺勅許御相承の来由ハ前ニ記せしが如し

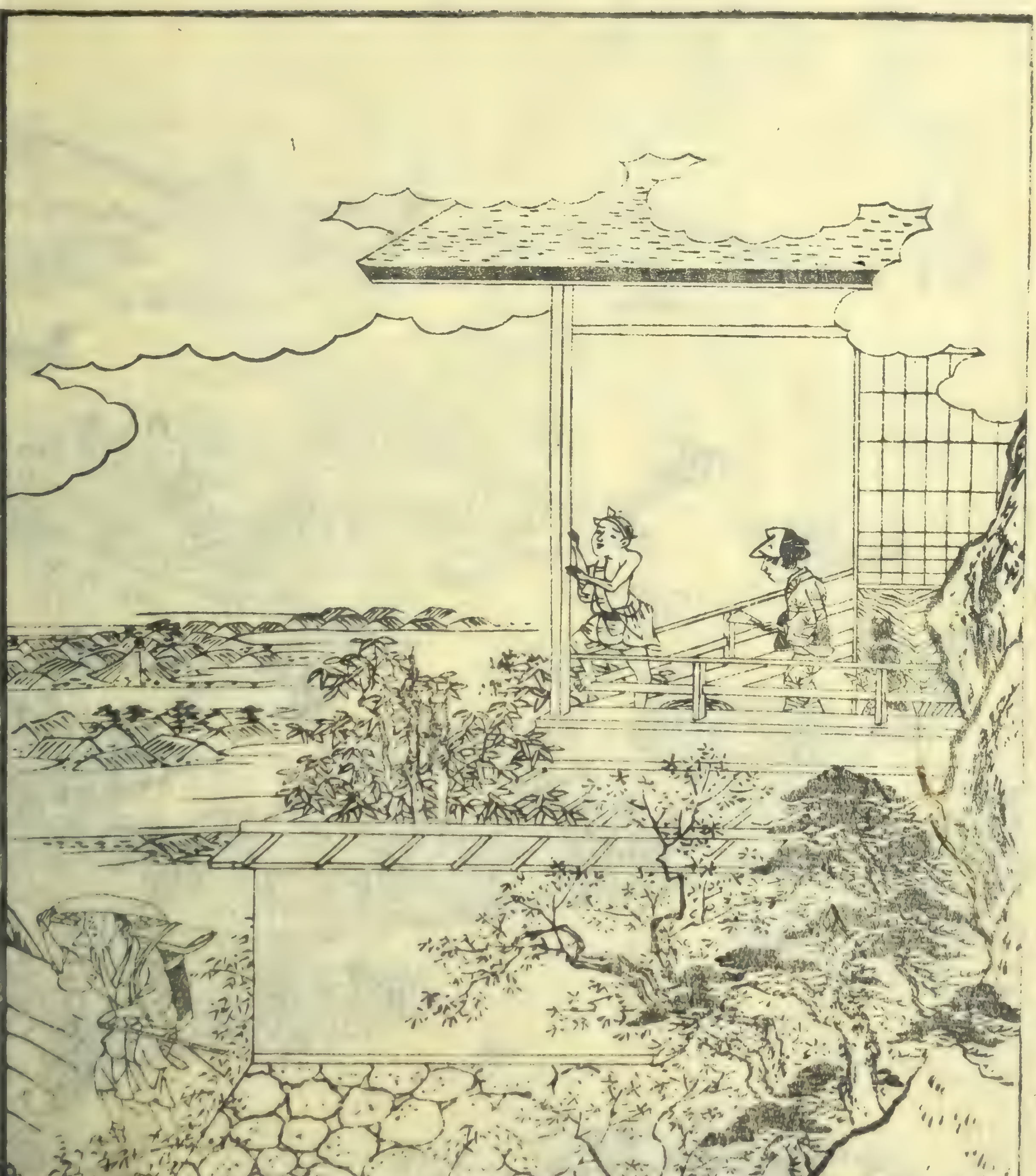
吉水御舊跡

法然上人吉水の御坊とハ今の智恩院の本堂也とかや吉水といへる名ハ円山安養寺の中擅勢至堂の下に涌出る泉也とかや去ニよりて此傍を吉水と名つけたるよし云

続いて智恩院山門の下南の方に吉水といふ名水の井あり
て今に其かたちを残せりともいへり何も法然上人吉水
の禅坊にハ此辺りなるべし宗祖親鸞聖人最初の御墓所
御伝ふに東山西の麓吉水の北の辺りに遺骨を拾収し
て仏閣を建影像を安じ置しと云所今の智恩院の寺中
墓所門の外凡生石の上の方崇泰院の敷地これ其旧地也
とぞいへり文永九年より遥の年を歴て蓮如聖人の御代に当
りて御叡山さかんに押よしまれを嫉む族ありて此大谷を破却
せり依て其後此地の土砂三升ほど方を掘えて当時大谷の地に
移し廟堂を建御遺骨を納め給ふ今の西大谷是之（祖師聖人を葬る延仁寺の古跡なりとぞ）
鸞聖人雖初の山を出て浄土真門に入たまふ
所は此吉水の禅坊なり故に信不退行不退の御座を分て


本堂
方丈
手洗水


智恩院
吉水御舊跡




丸山安養寺
吉水
吉水

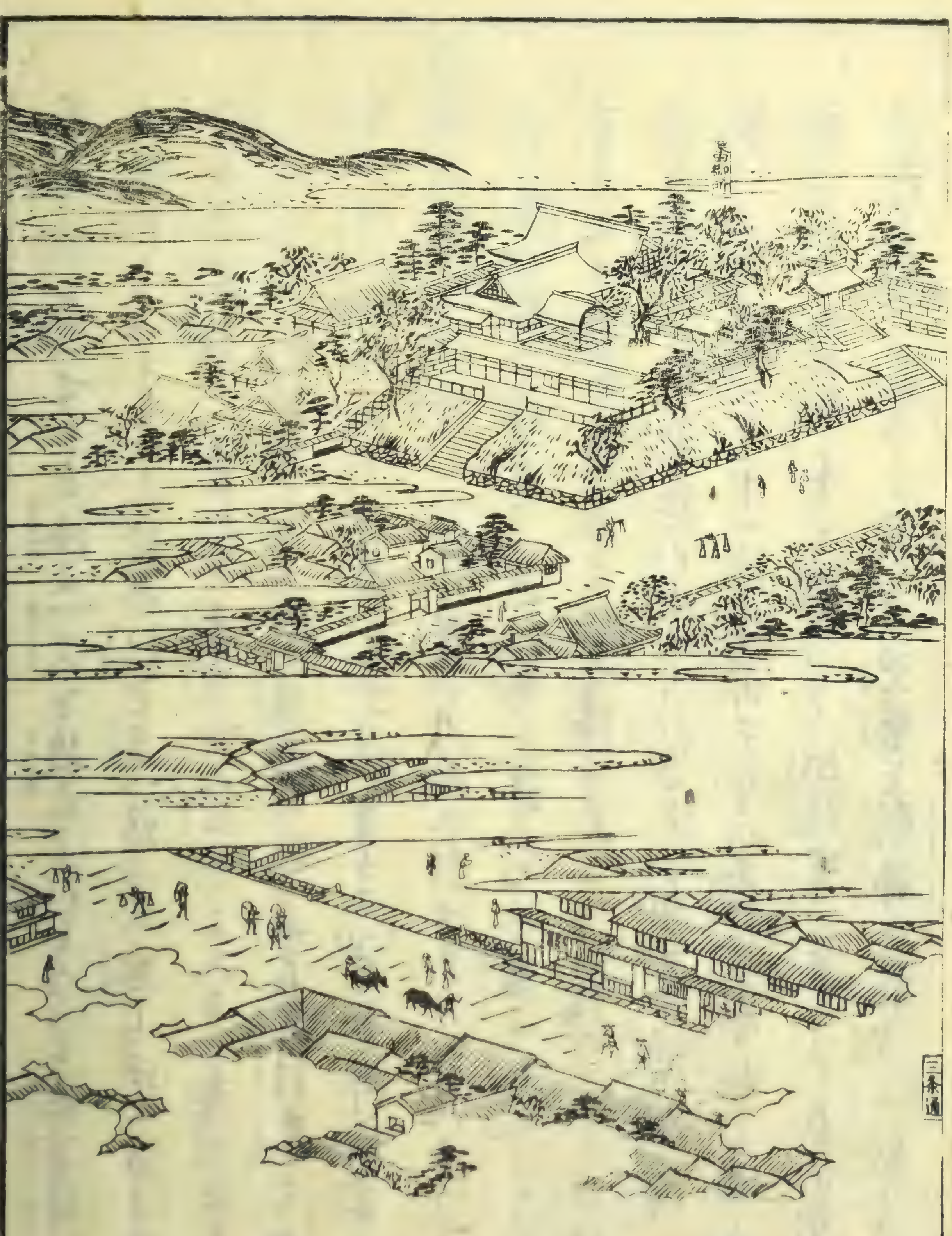
安心の正意を紀し及び信心一異の諍論を済て他力の真実をあきらめ真影を書写し選擇を允写して法脈を相承し給ふ大師乃門徒三百八十余人の中にて鸞聖人独一宗の正脈を傳へ日々に此禅坊に来りて本願の密意を述し給はじまりし處なれば何となく此邊りこそ御在世の往古慕しく思ひおこさるゝ境地なり

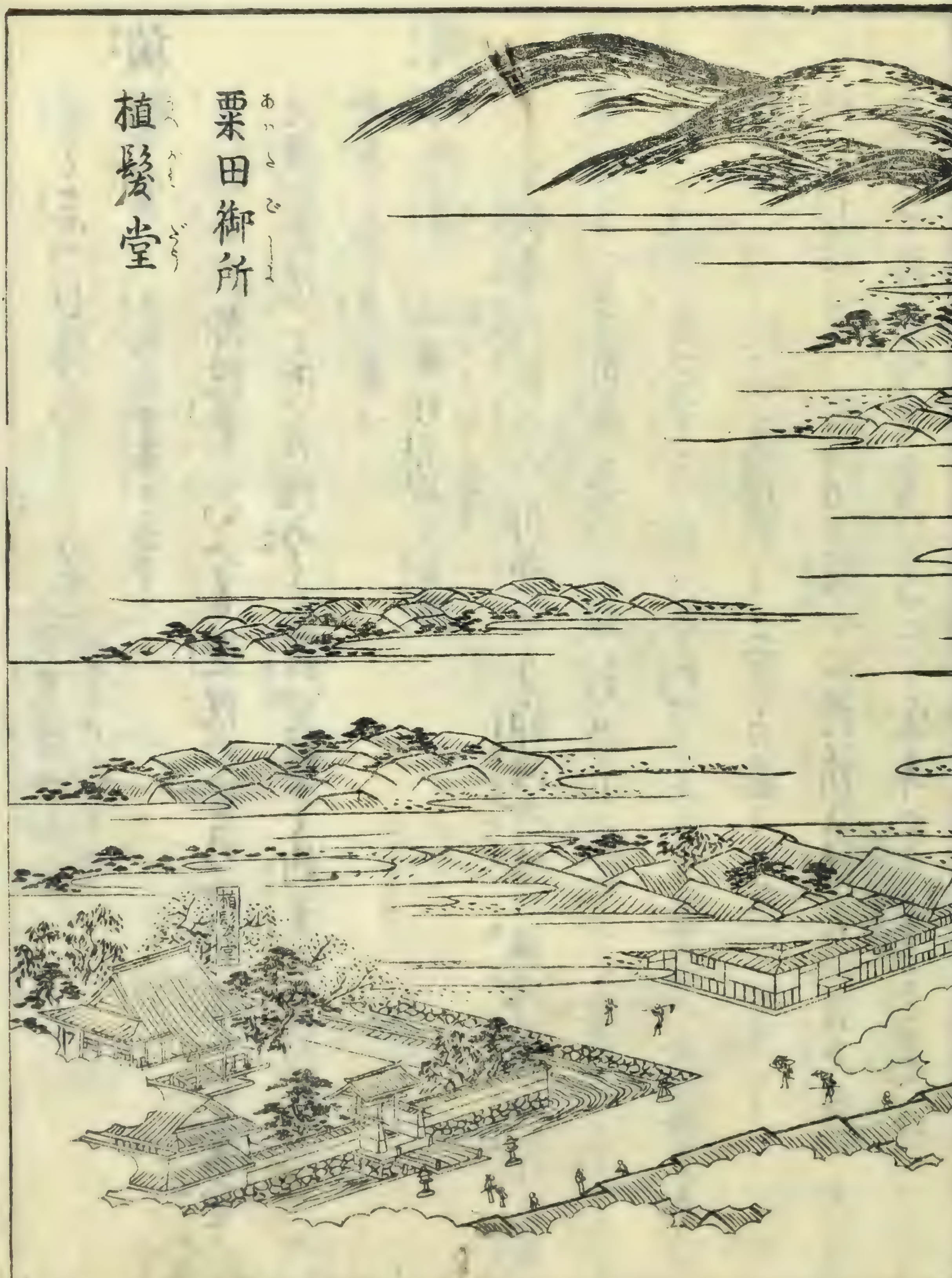
粟田御所

青蓮院御門跡と稱し

此御所は往古高祖聖人の御師範慈鎮和尚の御院室なり抑高祖聖人は人王八十代高倉院の御宇承安三年癸巳の年御誕生ましく御父は藤原乃有範皇太后宮大進有範御母は源氏乃武将八幡太郎義家の嫡子對馬守義親の姫君にして吉光御前とやまうす吉光御前は観世音

菩薩枕に立せられ汝に一子を授んこれよりのち西方浄土
乃能化なりとて又枝乃松をあたへ給ふと夢忽ち西の方より
金色の光明さし来りて吉光女乃口中に入ると看たまひ
それよりして御身たゞならずして御懐胎にならせられ月充て御
男子御出生ありければ松若と名つけ奉る二歳にて御初言う
南無阿彌陀佛と唱へ尼冢の御附二月十五日に詣らる去
まて佛の形を作らせられ禮拜し給ふなど殊に凡人ならず聖
せざりけり此事實否く巳巻傳に見えへうりかたのごとくしるし雑
き御性得なりしは興法の因うちにきざし利生の縁外に催し
給ひて既に人王八十一代安徳天皇の御宇養和元年辛
丑三月十五日御年九歳にして此院室に来りて慈鎮和尚
の御弟子となりたまひて兒髪を剃拂ひ範宴少納言乃


三条通


粟田御所
植髪堂
植髪堂

君と名づけ給ひしとかや

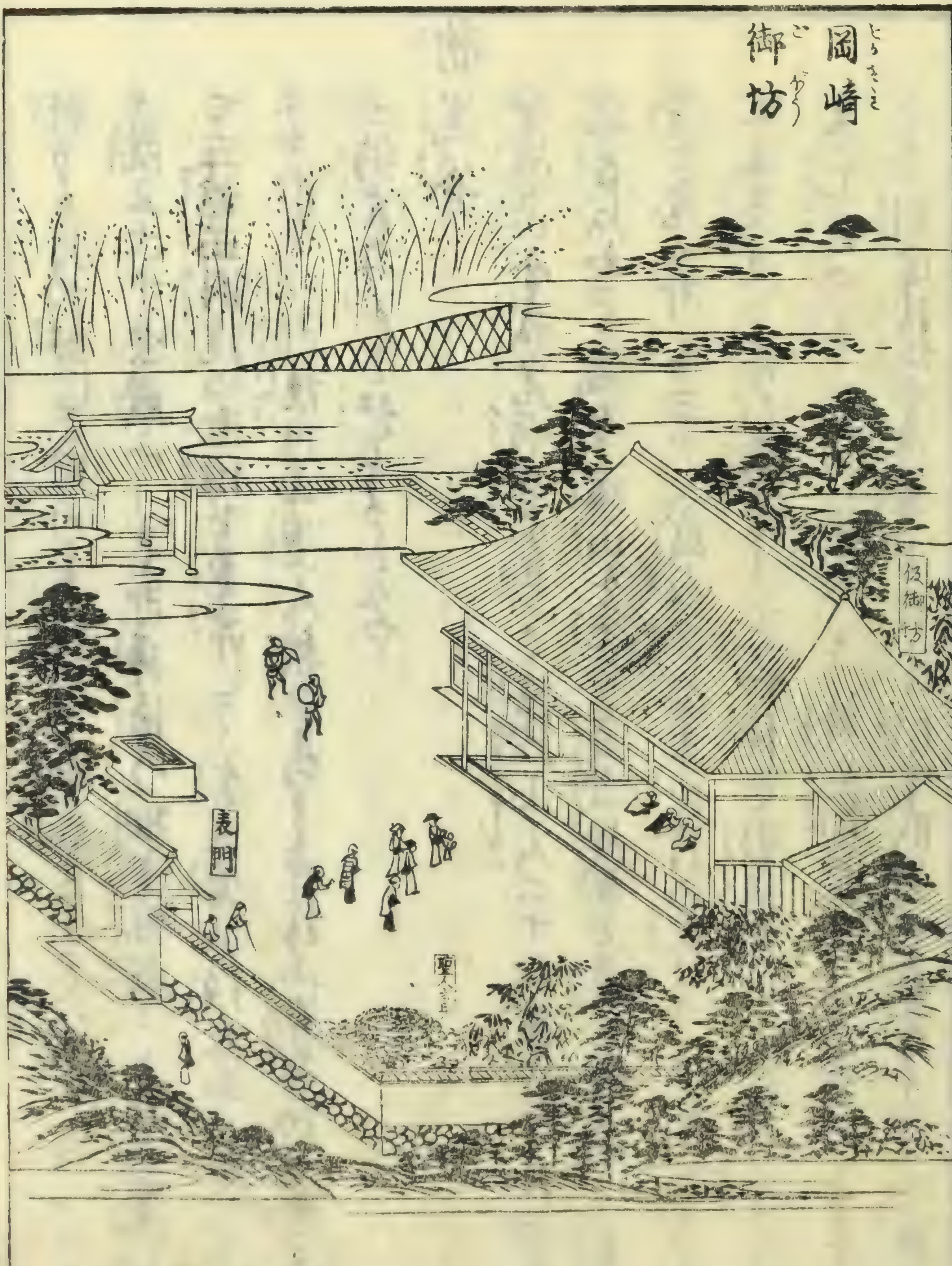
植智坊の阿闍梨性範御髪を剃るゆへ

植髪堂　三條通粟田口にあり

花頂山阿弥陀堂といふ青蓮院の宮乃御別院也親鸞聖人九歳の御姿を御自作にして其御髪を御首に植たまひし故御本尊となし安置せり

岡崎御坊　洛陽東山黒谷乃南隣岡ざき村にあり

東本願寺御抱持乃御堂なり抑此御坊ハ祖師聖人二十九歳建仁元年辛酉暦春の頃難行乃小路を出て易行の大道に趣き唯専念正業乃勤めのためにとて隠遁の御身となり閑居し給ふ本の道場なり二十九歳より三十五歳まで此御坊に住居ましましけるが南北の讒訴に依て終に左遷の御身となり給ふまよりこの方二十余年の間主なき暴屋のごとく



岡崎御坊
仮御坊
表門
聖人

軒もる月の影じて鴫の音信のゝ物哀をさそふ見へさせ給ひける

が既に六十余歳にして御帰洛の砌九條殿より御経営ある

て五條西洞院の御坊を兼帯して常に通ひ住居ありまし

なるとぞ御境内に聖人朝夕にみづくませ給ふ古井あり世に

少納言井戸と称するとぞや

新黒谷

紫雲山金戒光明寺と号す法然上人二十五歳にて比叡の

黒谷を出て諸寺諸山を巡り名匠知識を尋て諸宗の奥

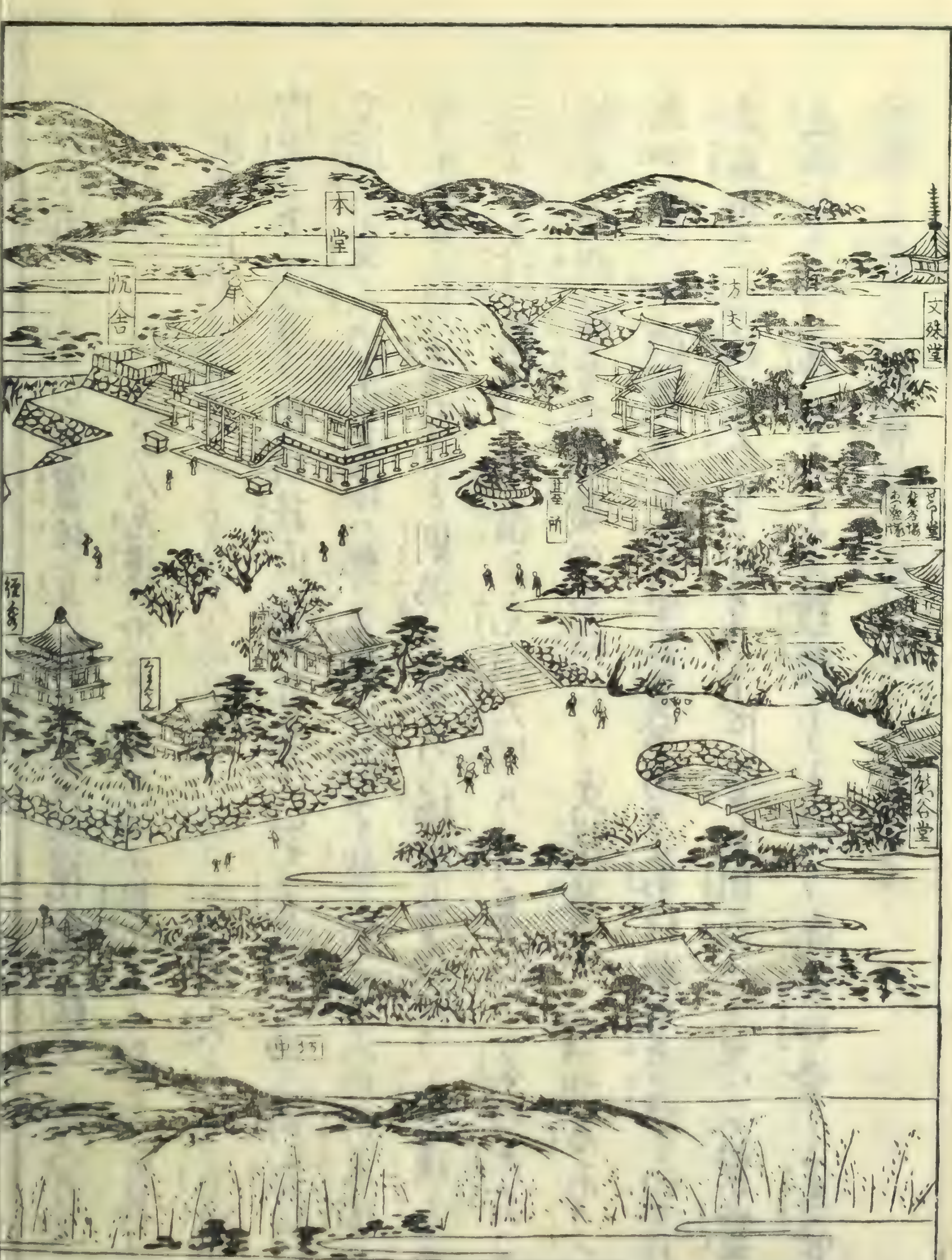
儀を窮め御年三十三歳承安元年正月の比より近衛坂にて

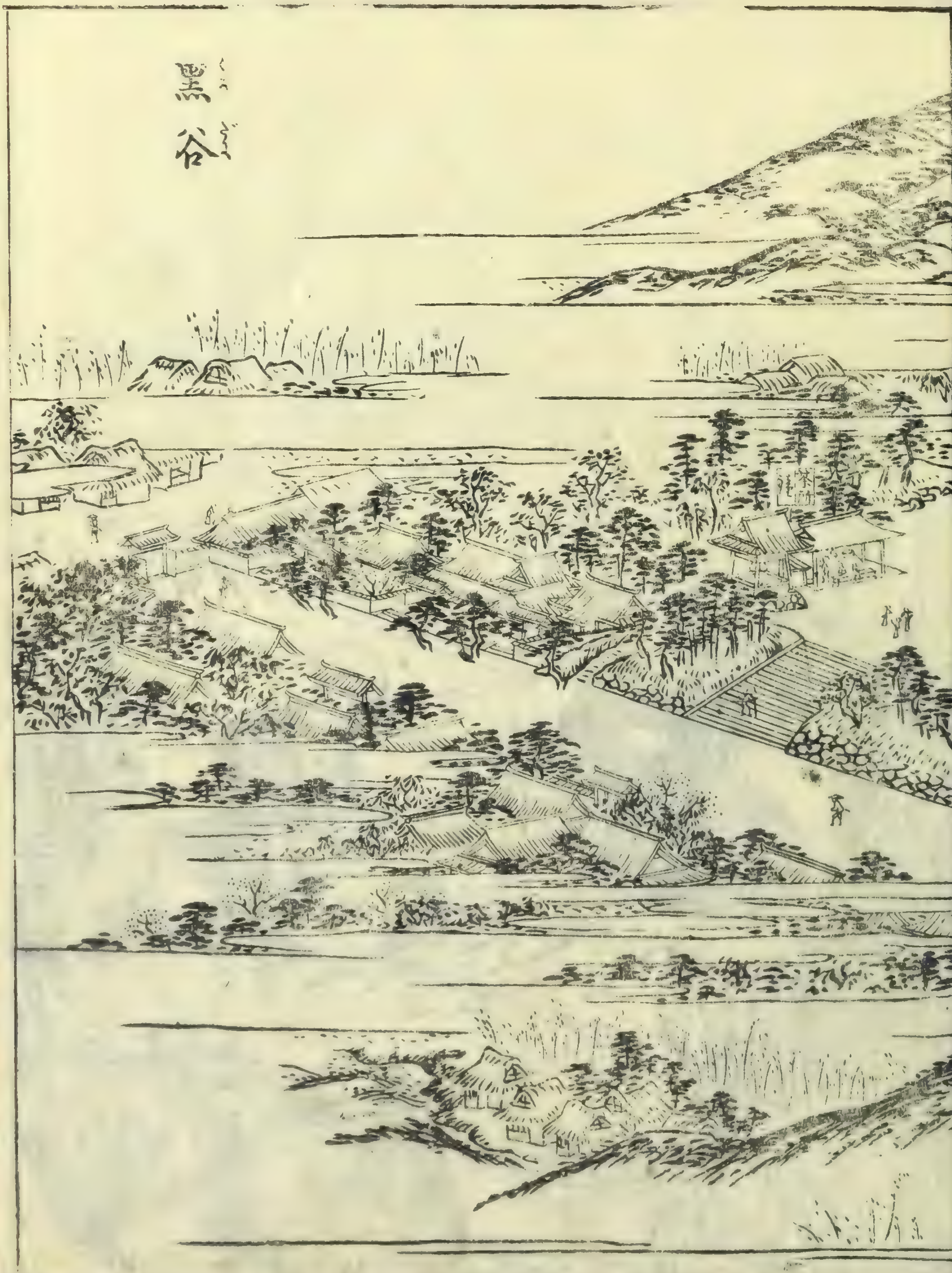
不及草庵を結び閑居して一切経を披見し給ひ安元元

年乙未の年正十三歳にして浄土門に入給ふ諸僧にいへ

より則近衛坂の庵室は今此金戒光明寺なりとぞや故に

由来凛然としてみるべき霊地也且此新黒谷阿弥陀堂に親鸞聖人の尊像を安置せりされば両上人左遷の御身となり西海北国と遠く別れさせ給ふ御時共に御別れを惜ませられ御容貌を明鏡に写し御互に御自身の御姿をきざみ彫刻遊ばし御記念として取かはし給ふ御歎はして法然聖人の御本像は仏光寺に納め親鸞聖人の御本像へ今黒谷に納め来せりと則仏光寺の縁記に見へたり山の頂上に三重の文殊塔あり中壇に元祖大師の御墓あり前の左右に熊谷蓮生坊並に敦盛の石塔あり文殊塔より北へ細道ありて真如堂へ行側に万日回向紫雲庵あり前に紫雲石といふあり名石なり法然上人こゝに休ませ給ひし此石より光を放ち紫雲立のぼり御庵室の上に靉靆しとなり尚真如堂と黒谷との界に昔の近衛坂の形ありて見ゆる


本堂
方丈
文殊堂
臺所
せいし堂
経蔵
熊谷堂

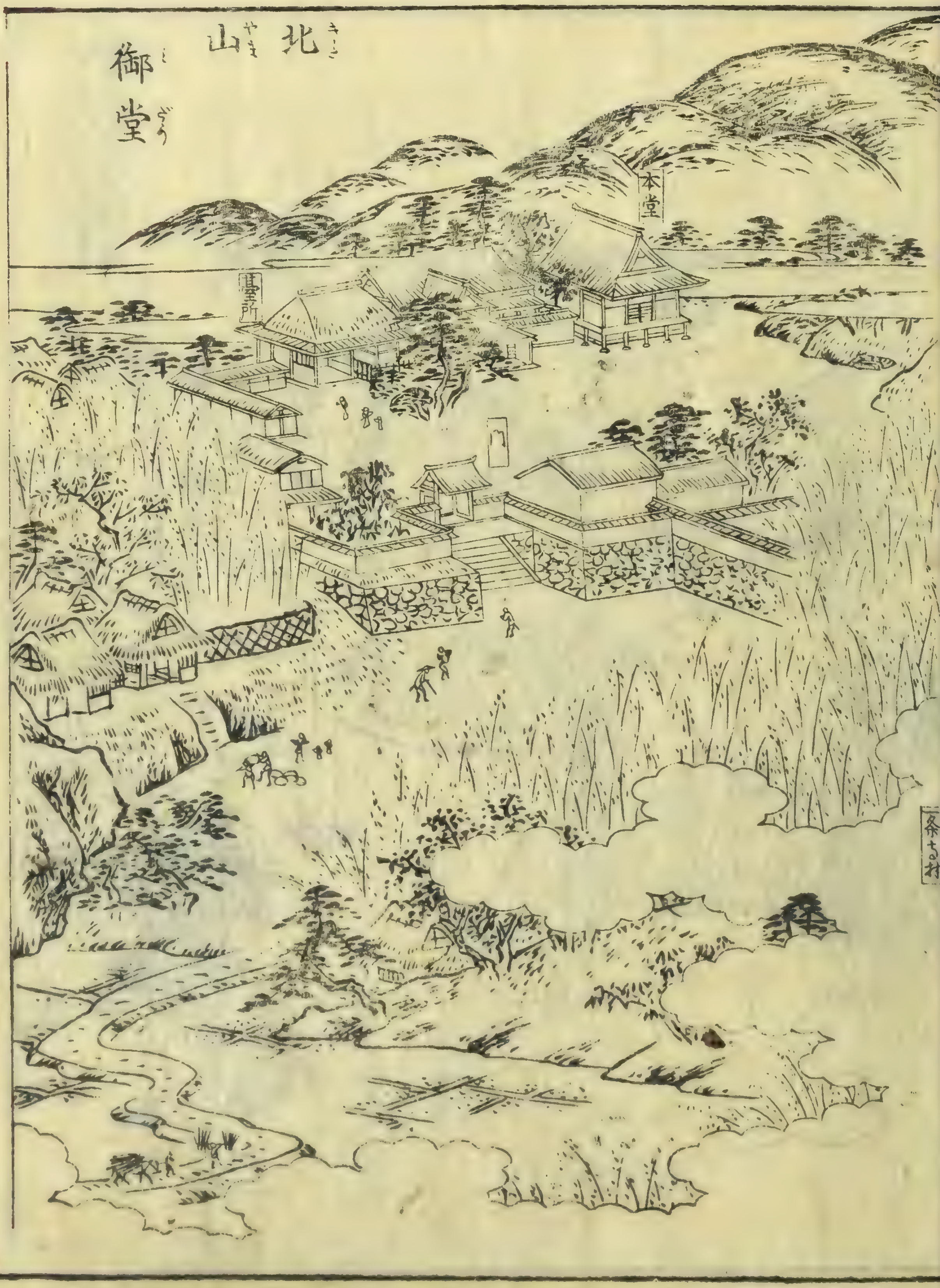

黒谷（くろだに）





きらら山御堂　一條寺村にあり

比叡山雲母坂の麓修学寺村につゞきたる村之西本願寺御抱所往古ハ舞楽寺と名づけしが今ハ信行寺と号くるや此寺其昔高祖親鸞聖人比叡山上より雲母坂を歴て洛陽六角精舎へ百日乃参籠し給ふ時毎度此寺に立よらせ給ひ堂の椽に御腰をかけられ休らハせ給ふ古跡之則堂乃左の高き切岸より細く流るゝ水あり聖人渇しき山坂を通ハせられし御息の切なんとおもふてに立寄御手にむすび飲せ給ひける故に此水を聖水と名つけ山号を聖水山と唱へける其側に石あり是をも聖徳太子乃欽向石と号く或時聖人此山水にて渇を止め給ハんとて立休らハせ給ハしけるに忽ち十五六歳斗りと見へたる童子此石の上に顕れ出ていふ聖人衆生哀愍のこゝろざし


北山御堂
本堂
墓所
門
一条ち村


聖水影向石

深く日々に苦悩させ玉ひしと推量はぞや今皆心ざしをとげ
まし給へかし頓て大願成就あるべし我は聖徳太子也とてその
儘消失給ひぬるとなん故に是を影向石といへり

赤山明神の鳥居前　西坂本にあり

此街は親鸞聖人御年二十九歳青蓮院より比叡山へ帰ら
せ給ふ時此所にて艶しき美女に値せ給ふに彼美女聖人へ
女人済渡の義を問答し天日乃玉を授け給ひ忽ち隠まし
失給ふこれ観世音菩薩にてましましけるとなん已巻傳に
見えたり

○赤山明神は素戔嗚尊の垂跡なり赤山は漢土にて泰山府君を祭
まつる山の名也慈覚大師入唐の時此神かたちをあらはし帰朝の時
其船に擁護ましまして日本に渡らせ給ふ御神也といへり

比叡山大乗院

雲母坂に十丁根本
中堂より十八丁余

南谷無動寺の坊舎又一条院とも号し慈鎮和尚兼帯の
遺跡にして親鸞聖人九歳の春の比慈鎮和尚の御弟子と
なり二十九歳の御年まで御住居ならせ給ひ南岳天台の
玄風を学んで弘く三観佛乗の理をはきはめとしるへ撰
厳横川の流を汲んで深く円教円融の義に達し二十年来
苦修練行ましましませし御旧跡之聖人二十九歳建久八丁
巳年少僧都に任じ聖光院御門跡の御寺務より根本
中堂へ数百度の参籠及び六角精舎へ百日の歩みをはこば
せ給ひしも此寺に拇をせし附の事之（委くハ六角堂乃下り記を）聖人二十六
歳御自作の御木像を此寺に安置せり参詣の諸人等足
まで拝し安からしめん為にとゝく堂の右廣縁に安置して常
に戸帳を開き拝せしめ給ふ又無動寺に聖人御真筆名

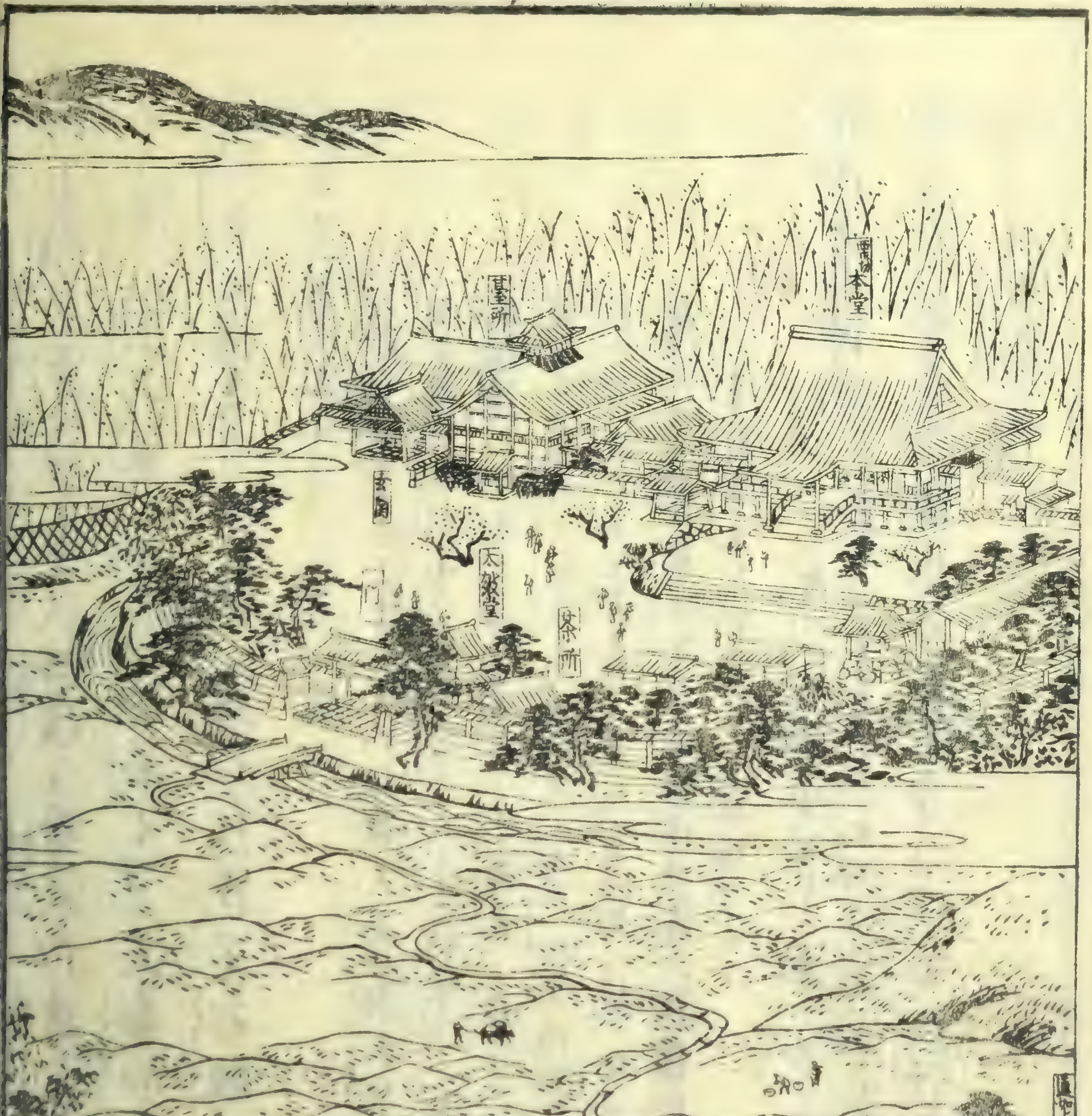
樒不離の本尊なるまで西塔に聖人御建立の經蔵の舊跡あり横川山乃奥に昔殺生石といふ大毒石ありて三塔順礼の行者を悩ませしに聖人此石を祈り砕き給ひしとて今に其舊跡あり

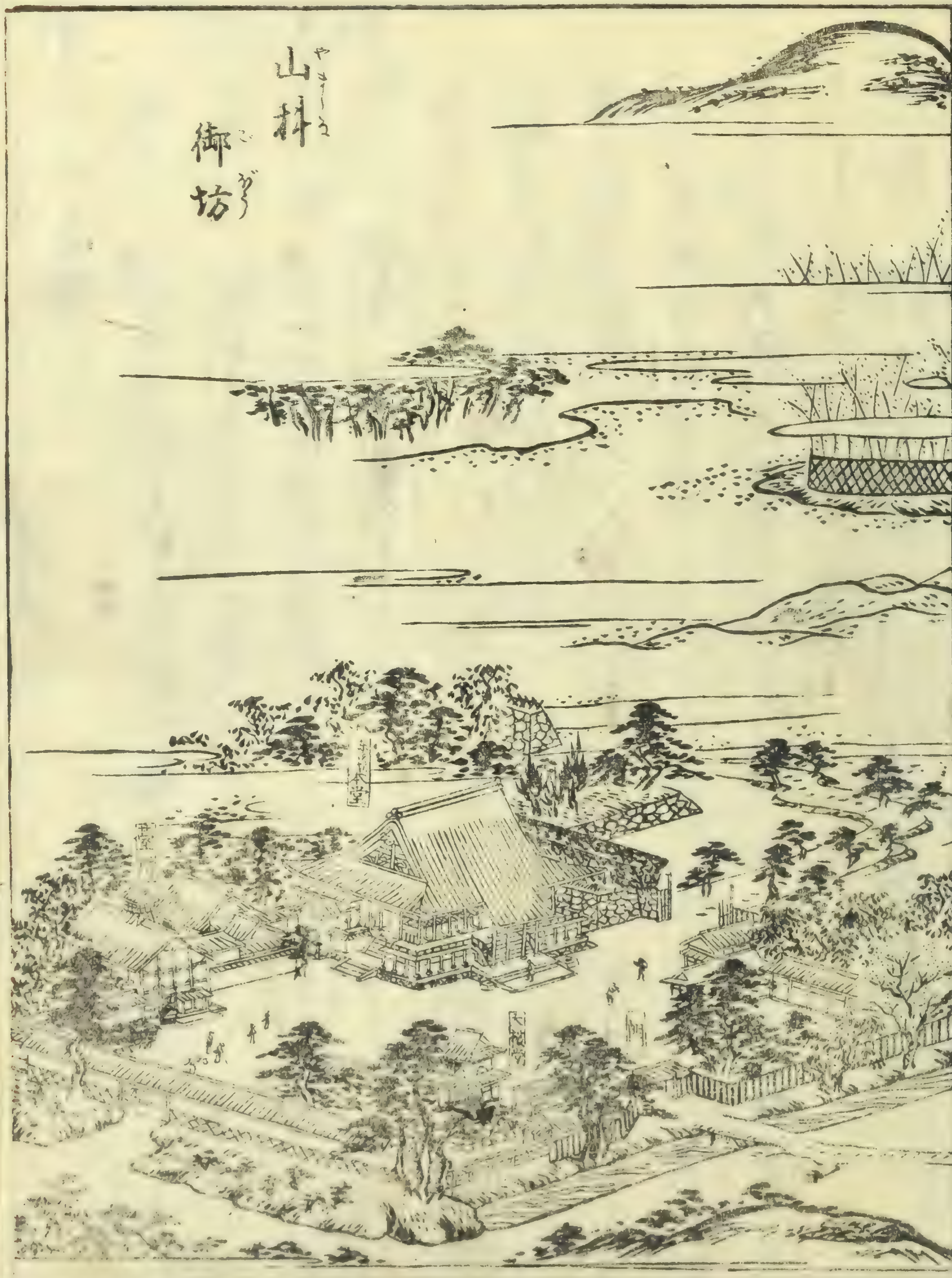
○比叡山延暦寺ハ人皇五十代桓武天皇の勅願所として延暦七年傳教大師の草創ありし霊山なり五十二代嵯峨天皇弘仁二年勅して戒壇院を御建立ありて寺号を延暦寺と號ス はじめの号ハ一乗止観院と申すなり根本中堂乃本尊ハ薬師如来傳教大師の御作西塔ハ釈迦牟尼如来を安置し横川ハ弥陀佛観世音菩薩守ハ山王日吉權現二十一社ハ東坂本に鎮座を請め給ふ柳崎山ハ王城の鬼門に護りして帝都平安を祈りまする霊場なり

山科御舊地

是より以下御旧跡拝の帰路なり奥に記すべきを山城の地なる故に爰に記を左里数ハ帰路の所に出せば爰に略す

往古本願寺御境内乃古跡なり此方東堤乃芝地南方に續きて三所あり


本堂
玄関
太鼓堂
門
茶所


山科(やましな)御坊(ごばう)

蓮師御廟跡

實相院古堂の西外にあり古松十株ばかり是也

西門坊　西本願寺御門跡御持山科野村にあり

東門坊　東本願寺御門跡御持同所にあり

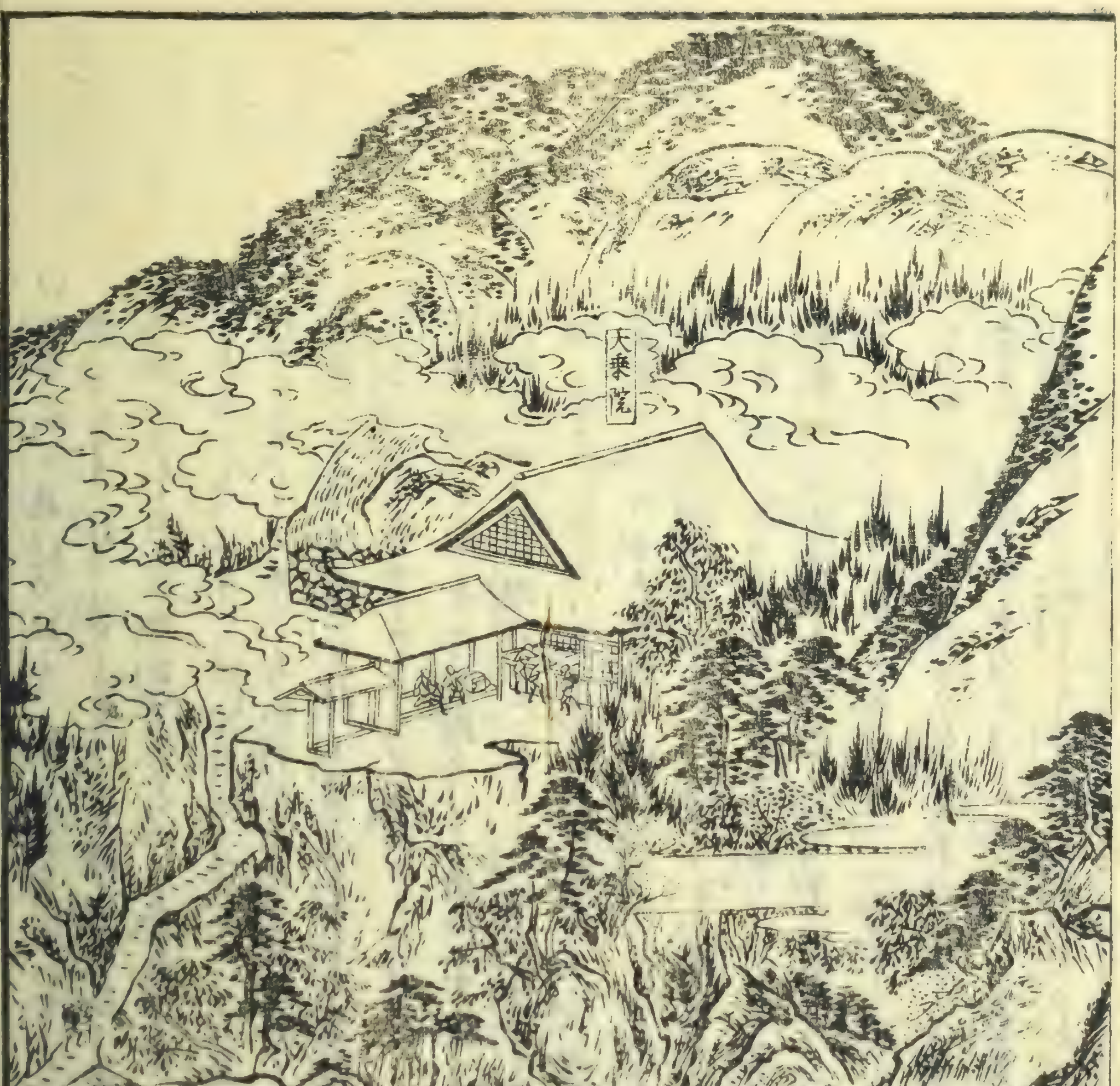
日蓮山永福寺　東流市田村にあり

當寺往昔は天台宗にして叡山西谷微妙院兼帯の所也然
大僧乃長實教觀法印延暦十八年建立後来義聞法印寺
務の時高祖聖人へ参入門して真宗の道場となし蓮如聖人も
一七日の御滯留ましませし所也又織田信長大坂の御本坊を攻て合
戦に及びし時當寺の住侶掘言能法師一命を抛て大坂へ御加勢
申上しとつたへり什宝器之

近江國　比叡山南谷大乘院より江州坂本へ出る道程二十五丁

○坂本山王権現の社あり例年四月中の申日山門の衆徒祭礼神輿を捧げ奉り船に移しまつらせ湖水を渡り唐崎に渡御なしまゐらする世俗これを山王の申祭りといへり衆徒をはじめ舞楽丁雑式にいたるまで威をふるふよそほひなしけれど還御のさいに至りては神の勢ひよりかど己がさまざまに罵りあひ打擲し乱れ押合ふてあひ馬より落ち木の根に伏まろびて狼狽せり拝礼も諸しきその道俗争ひのたちて甚しければ此祭礼延文年中にはじめて行はるといへり

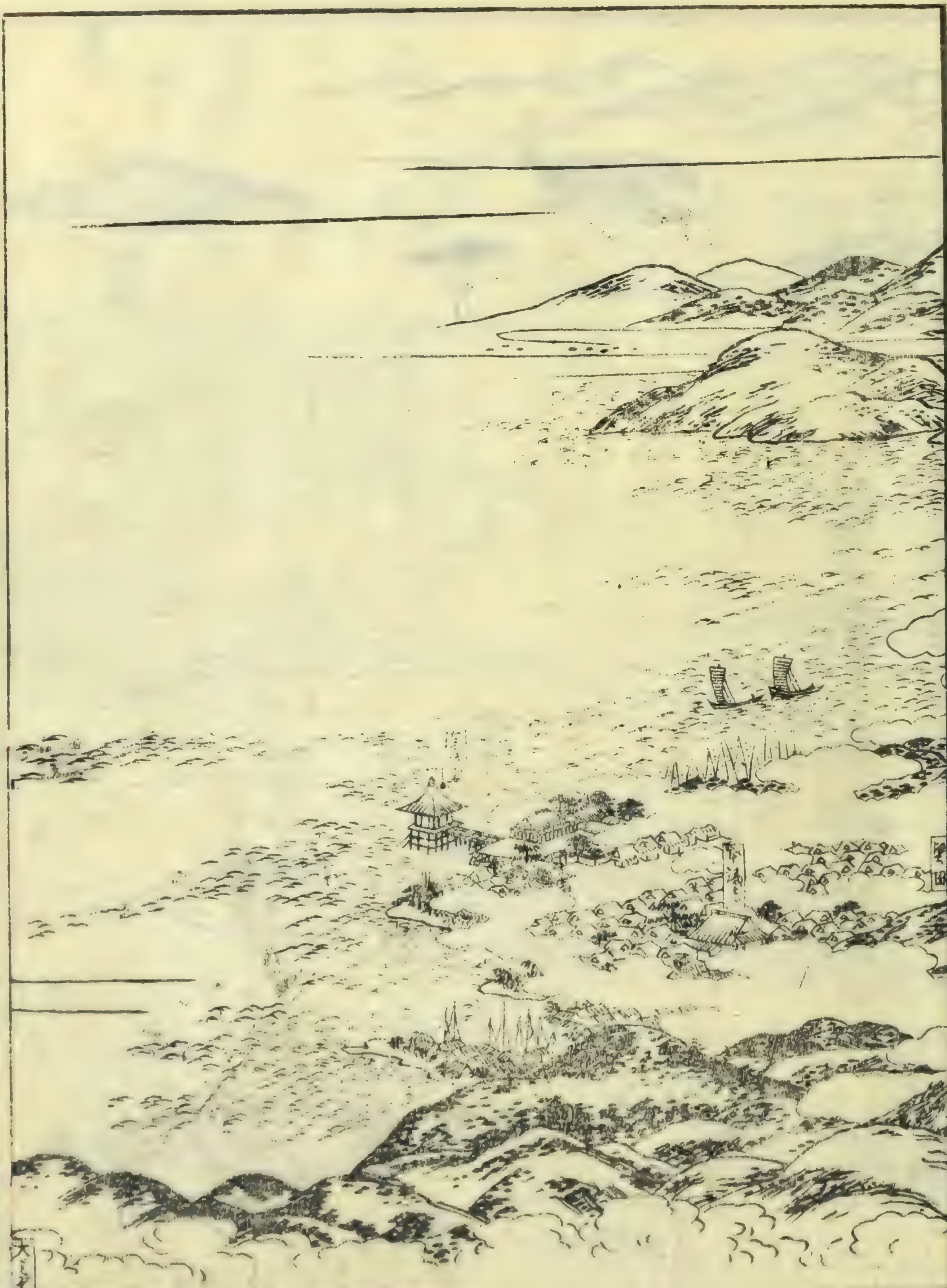
○琵琶湖は日本第一の大湖にして南北二十余里東西十余里其かたち琵琶に似たれば湖の名とせり其勝景絶ゑに挙げるや唐土の大湖西湖も此方に及べからず西面には比叡の峻嶺巍然と聳へ湖に王城鎮護の霊岳都の富士と称するもむべなり此山の無動寺より遠く望めば琵琶の大湖を只一円の中に看下し漫々たる湖水の景とのべつくさずかし志賀の里辛崎の松は直に眼下にあり右は三井の古寺大津の駅膳所の城郭瀬田石山の勝地あり粟田の浮御堂比良の高根白鬚の社竹生嶋をあるは小島に似て見わたせば近江の富士とよばれる三上山をはじめとしていにしへ巨蚣住て江海に寇なしけるを俵藤太秀郷卿射取のほまれば彼巨蚣をうたる一矢に射て其報謝として龍宮城に招き珍宝を得たり其中に釣鐘の鐘のめでたきを三井寺によせしとぞ

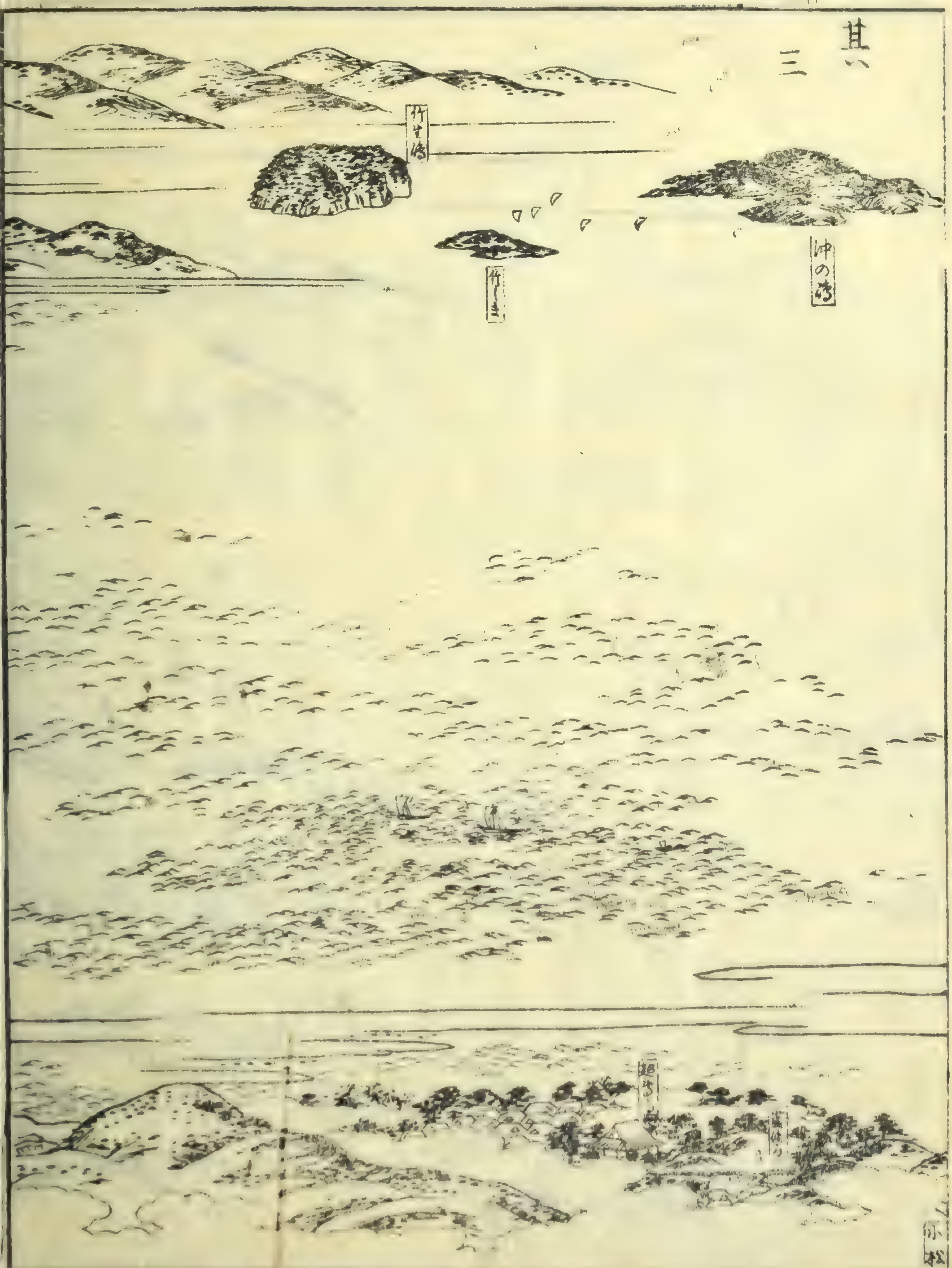

大乘院

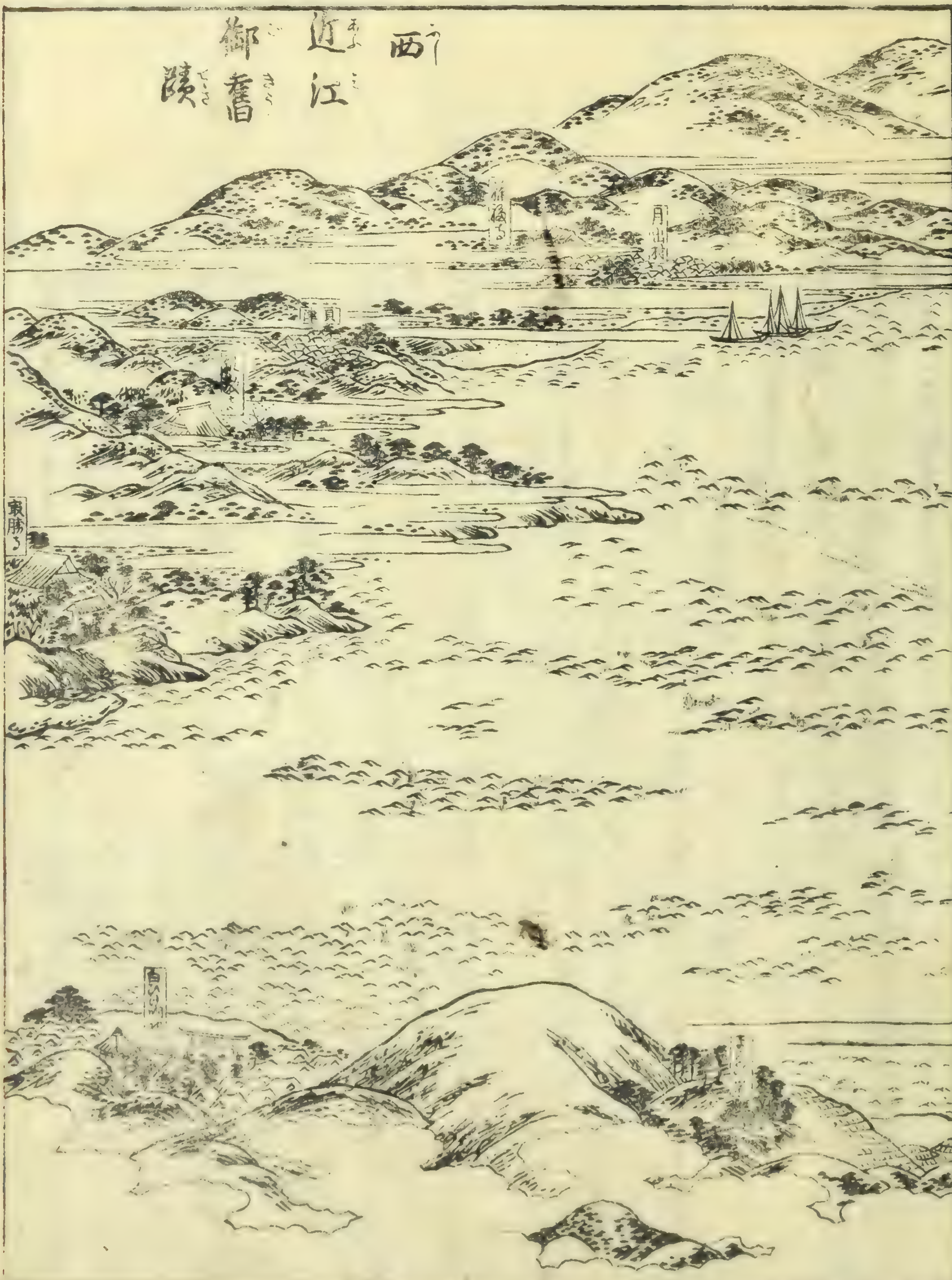


比叡山 南谷 無動寺


其二
湖水眺望




其八
三
竹生嶋
竹しま
沖の嶋
小松


西近江御舊蹟
月山村
貝津
最勝寺
白ひげ

三井の鐘竟ありと里俗のいひ傳へり八幡 彦根 長濱 又のところの
湖の東につゞきたり此邊にありては志津嶽余吾の海あり此所
は豊太閤いまだ羽柴筑前守たりし時柴田勝家と對陣ありし
古戰場なり柳瀬中河内を經て越前にいたる塩津海津は湖の北
北の際にして越前の界に隣る凡湖水の名所旧跡悉く數ふるに
いとまあらず比良の宮ゐ聖人の御旧跡二十五菩薩の巡路にはべる
古歌名所又は風景の勝地など書集むべくもあらず猶おそくは濱の
眞砂の數繁ければもれたるもの多かるべし見る人是を恨むなかれ
○志賀の里は比叡山の麓林湖水の際にあり辛崎の一ツ松は湖中八
景の一ツにして世人名木と稱美せり
「夜の雨に音をゆづりて夕風を余所に名立るからさきの松
○坂本より北の方衣川を渡りて湖の辺丁斗に堅田浦あり是又八景の
中に有り景色いふ方なし浮御堂は湖水の中に建て陸より
石橋を渡せり恵心僧都の作り給ふ千体仏を安置せり
「扨りひ寺堅田の池にせてゐのうれやたぐひの鷺のひとり寝
一堅田の浦に蓮如上人の旧跡夕陽山本福寺といへるあり山王祭礼の時
は小舩に乗じ湖中に出て神輿の御舩にしたがひ乗て読経をなし
奉る旧しき例なりしとぞ

木野入江は古き歌枕の所なり黒田浦木野村にあり
鷺啼く木野入江の浮渚に尾花波よるあきの夕ぐれ
比良の高根の白雪は暮雪とて八景の一つに備ふ志賀郡木物浦にあり
さゞ波や比良の山風さえければ釣する蜑の袖ぞ氷れる

念佛山超尊寺 西流 坂本より北の方二里 志賀郡木物浦にあり

北の坊宝幢院といふ常州下妻西本山光明寺より別れたる寺にて其後高祖聖人の真弟明空坊の流れといへり又常州完戸唯信坊の徒を捨て西流二十四輩の内第二十番といふ

当寺傳来の什物には○親鸞聖人御真筆十字名号○聖人丸上御繪像 御繪裏書は蓮如上人御筆 其外什宝多しといへども略之

○木物超尊寺より二里半北木戸村に琵琶山宝勝寺といふあり蓮如上人の舊地なり

○白鬚大明神の社は比良の山北の尾崎木戸といふ浜辺にあり祭神は猿田彦大神なり此傍より湖水一面の眺望竹生嶋多景嶋沖嶋見えたり



筑摩祭乃図



風色甚だのびやかし
○此十八神村といふ所の側に石佛あり行基菩薩の作なりといふ今
は二十五神を在せり

願教寺　東流 打越より七里小　院家 海津のうしろにあり

當寺ハ高祖聖人越後へ左遷の御附ゑより世給ひし再ひ其ハ附る
真言宗にてありしかど改宗して浄土真宗に帰せし返しといへり
寺内に七百年を経たる梅の古樹あり

朝日山稱福寺　西流　海津より三里半小湖あの濱邊浅井郡　月出村にあり則竹生嶋の北の方なり

當寺も二十四輩に屬し関東より乃引寺之といへり
此地ハ北方に村多く唯此一村のミありて閑静乃地なり東面ハ湖水ひろく
として伊吹志津嶽乃峯〻も遥に見ゆ西南ハ竹生嶋湖中に猶ゑ
し緑樹の蔭水底に浮び風景殊に称多紀勝地なり
竹生嶋ハ浅井郡の湖心にある嶋なるを水よりハ六十間四方九十六丁程山岩
奇石水晶寶珠を生し日本五奇異の一つにして殊に不思議の霊場なり

弁才天女を請祀ル或書に稲倉魂命を祭ると孝霊天皇乃五年
近江の地われけて湖水湛へ駿河の地穿て富士山涌出し景行天皇十年
忽ち湖中に竹生嶋涌出るといひ伝へ又改暦雑事記に云景行天
皇十五年淡海国湖中に竹生嶋出る聖武帝天平三年竹生嶋の神
現はるとあへ又竹生嶋まて法橋親毅の歌あり

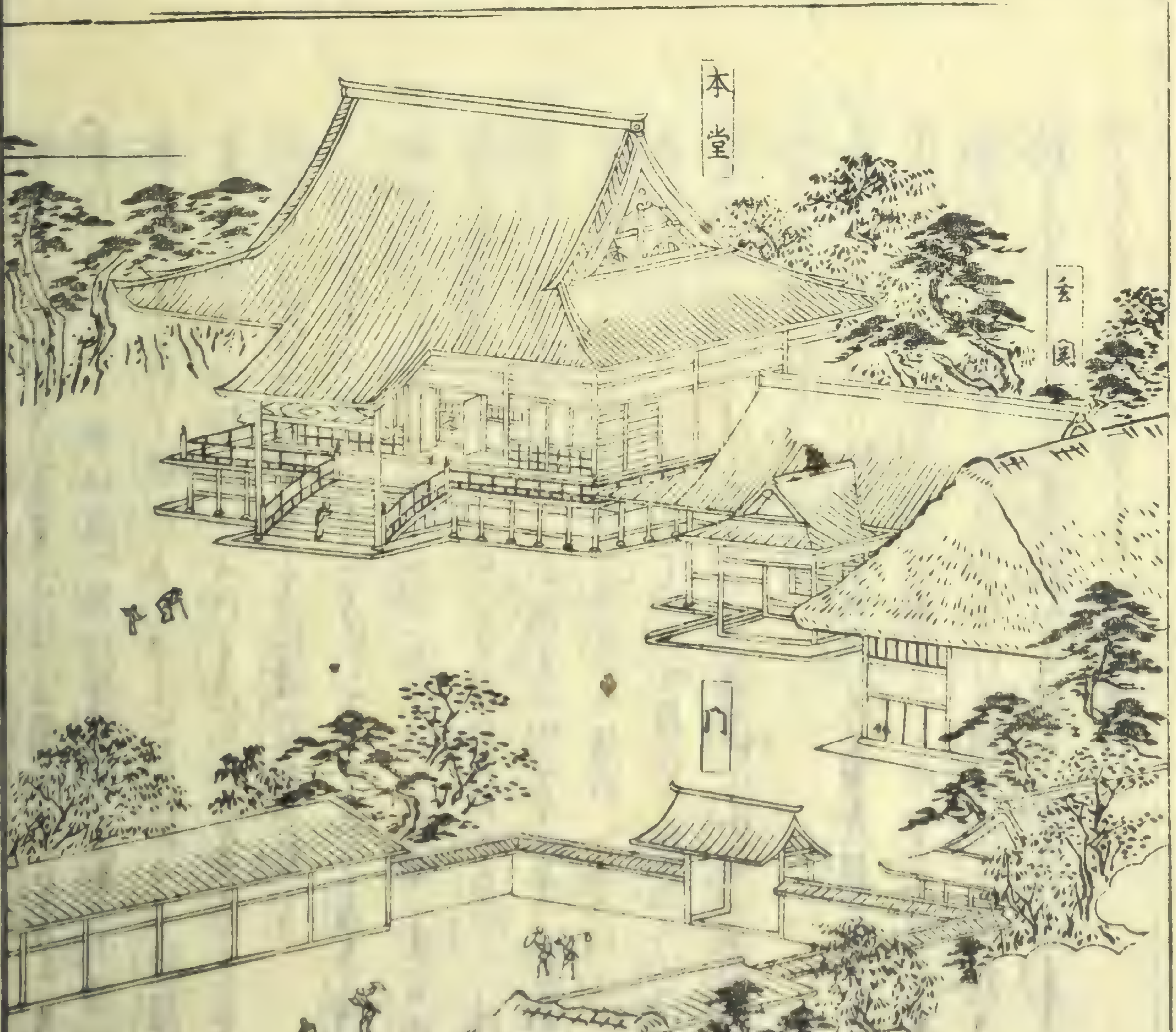
「あふミより秋の山辺をうつしてはにほへるさゞ広き錦とぞみる

○湖水の北際塩津の東に志津山嶽あり北の林麓は余吾湖より南の山に中川
瀬兵衛清秀の塚あり西の方には佐久間玄蕃允が陣所の跡あり

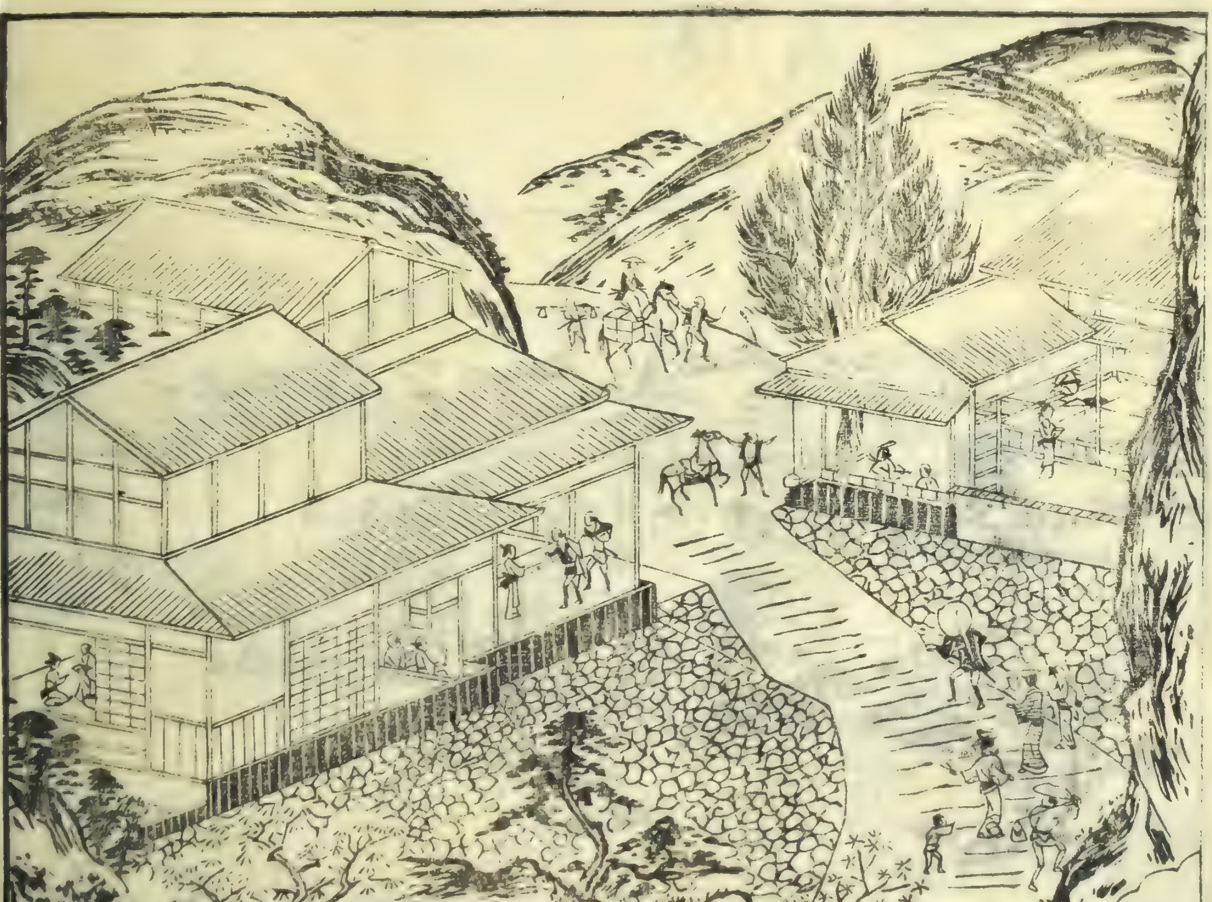
○木本の宿ハ志津山嶽の東麓北国の街道にあり地蔵堂ハ志津嶽の兵火
にかゝりしを豊臣秀頼再建し給ひし所之行程三里南の方湖辺に
長浜乃城あり則秀吉公の住せ給ひし旧城也此時より永禄元亀天
正の比戦場なりしとて古城の跡甚多し小谷山虎御前山観音寺山安土
山など何れも城跡古跡存せり

○筑摩明神の社ハ坂田郡長浜より南彦根より北の湊辺之祭礼例年
四月朔日なり此里の女その男にとさめらし数のかさまじくやまわりし
稀再び人に嫁せんとする人が此神に詣で幸まと祈りまゐらすとて其
祈る小巳があひする男の数ほど鍋を被て神に参る祭礼筑摩祭の鍋ハ
づきにえ古きすとぞ拾遺集に

宝満寺




鐘樓
手水




摺針峠は鳥居本
と番場の間にあり
峠に茶屋あり
此所より琵琶の
水湖一目に
見えて風景
言語に
尽しがた
し
いそ村

〽おくさまつくまの祭りもやせうん〳〵ゆきたる人の猫のかくれとうん

彦根ハむかしへ乃佐和山といひし地なり当時井伊家の御城下ありて繁花の地となれり彦根より東に隔りて多賀の宮前あり赤玉

神教丸此所の名物なり

○多賀の大社ハ彦根の東南犬上郡にあり伊弉諾命と祭ひまつる

○愛智川ハ高宮と武佐との間の宿也

〽愛智川に岩こえし押の音もあらくぞ流れ絶のひまなき世や

宝満寺　東派　浄家　愛智川にあり

是より以下宝満寺 西方寺 称讃寺 近松寺 等ハ御旧跡の御帰洛なれば奥に記をくべけれども近江の国中にかかる御旧跡あれば爰に出して縁起を述る即ち帰洛の示ふは寺号と縁起のみをしるす

本堂十一間四面本尊阿弥陀仏ハ安阿弥の作也当寺往昔ハ真言密乗の寺なりしが高祖聖人御帰洛の砌当寺に止宿ましまし法筵を開き給ひしより既に本宗と成し真宗に改め今に六百年来移将なき霊場なり

廣滑寺　西流　武佐の宿にあり

此寺ハ聖人御帰洛の時開闢し給ふ舊地といふ

西方寺　佛光門跡御坊也八幡にあり

二十四輩第七西念法師の遺跡なり本堂十二間に面高祖聖人真佛の影像を安置し霊宝数品是を略し

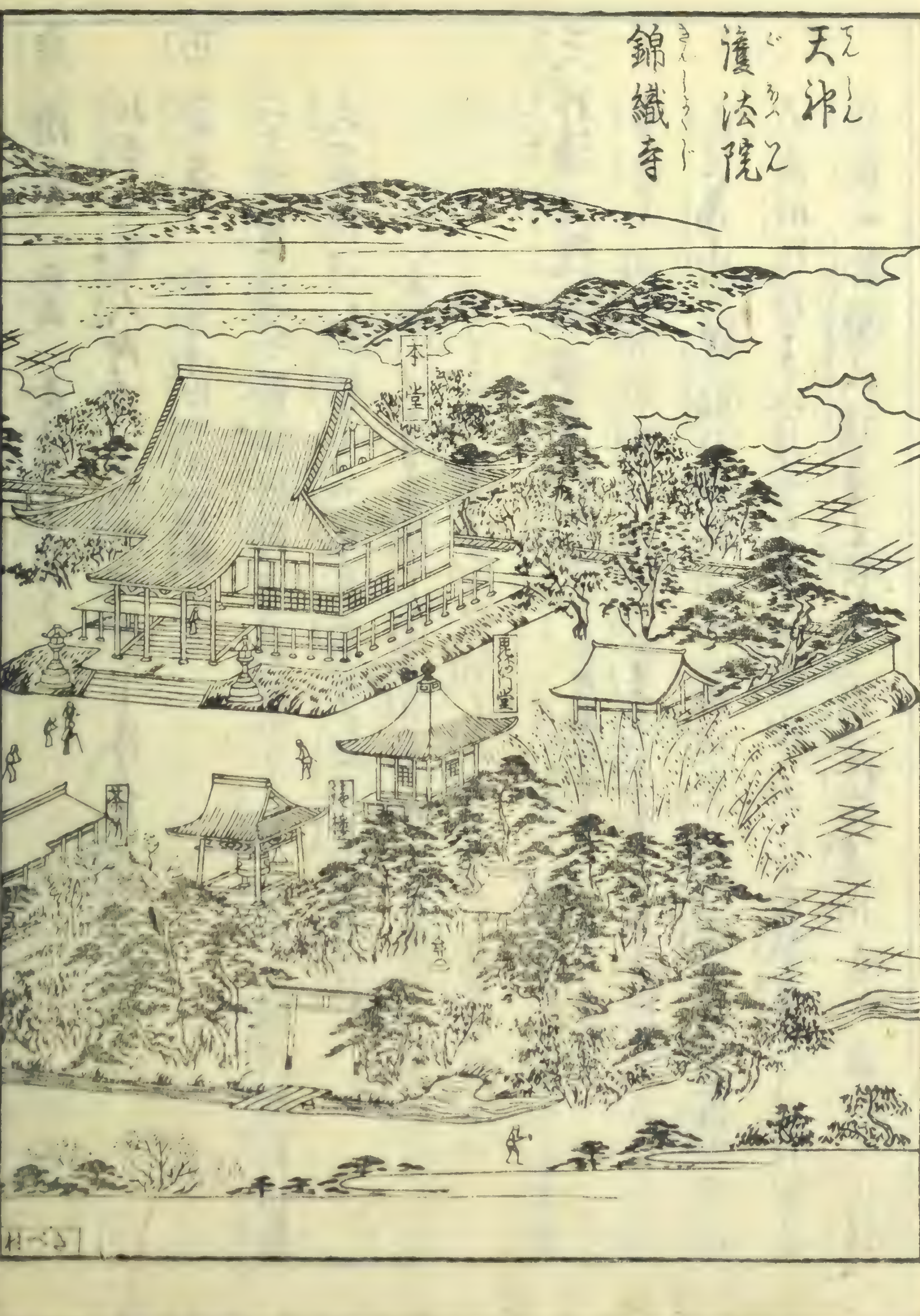
○武佐より一里半南鏡の宿あり名高の鏡山あり黒主の歌に

かゝみ山いさ立よりて見て行ん年経ぬる身ハ老やしぬると

天神護法院錦織寺　野洲郡木部にあり浄土真宗の一本山也寺格雲上達って別当の官僧正に任せらる所朱印地なり役寺坊舎六十区

本堂十間に方本尊阿弥陀如来天安年中より多聞天の像を安置し当山の濫觴ハ嘉禎元年高祖聖人御年六十三歳御帰洛の御時正月より八月まで此所にて御化益教導ならせたまふ霊跡也　抑聖人諸国を去て三州　尾州　濃州を化益して江州

天神(てんじん) 護法院(ごほうゐん) 錦織寺(きんしよくじ)




居間
玄関
表門

のは紫雲図に移り此郷に来らせ給ふにぞや日も暁陰に及びけるが家
に一宇の堂ありて多聞天王の像を安じ聖人昭然として諸尊
と共に此堂に寄宿し給ふ其夜の夢に及んで多聞天神聖
人に告給はく今聖人我等の中に安置せる如来の像を此堂に安じ
専修念仏の法を説給ふべし我すくこれを守らんとぞ宣へた
まふ然るに此郷の頭目石畠民部夜来明に家に来りて聖人を拝
し語りけるは霊夢にて毘沙天神吾に夢想ありし事をかたるに
聖人乃感じ給ふ御告と符合せり家に於ひて石畠民太は
聖人を信敬し力を盡して禅房を営ミ如来を安し聖人を
なるぶるの世尊のごとく此聖人又時を得て化益を播し給ふる
遠近に蓄し同年八月よりて聖人一先入洛し給ひけるが其
後御弟子性信坊善性坊等かはるがはる當坊に来りて教導に

けるに天神地祇も感じ給ふにや暦仁元年七月十六日の夜
天女天降て錦を織られ竪丈尺横三尺ありけり誠に妙色厳
然として言語に絶たる錦也貞永の帝聞召すに及て叡覧
に備へけるに天感に餘り竟に宸筆を下して天神護法錦
織寺の額を賜へり勅願所となし給ふ天安堂に安し奉る
多聞天の尊像は天台山傳敎大師の彫刻にして慈覺大師
に附屬し給ひ慈覺大師此一宇を造立して天像を安したて
まつりけり○本尊の如來は高祖聖人常陸國に御化導在
ませし時同國霞が浦の海中まるく大なる光物みえて照り
耀き里人猟師等甚懼て聖人に是を告奉る聖人彼所に至り
て看給ふに果して金光朗然たりけれは正しく靈佛なりとて
在ませんとて里人等を集め大網を入れ彼光物を引上させ





てん給へハ正に是妙色端厳なる阿弥陀佛乃尊像にてお
わしける聖人大に歓び尊重恭敬して御身を放し給ハず
常に笈の中に安置し於佛と崇め給ひしが多聞天の告命
によりて當堂の本尊と崇め給ふ所之霊瑞殊に多しと
いへども悉く記すに不遑當山第一の霊寳ハ
○高祖聖人満足の御影聖人五十六歳六軸の御本書御
制作畢て御歓悦満足乃余り御自画に寫し給ふ御影なれバ
御満足乃御影と稱し元禄七年五月五日當山の堂塔殘
らず回禄せり其時此二尊像も焼失し給ひぬと思ふ所に七日
を經て後二尊影光赫の中に安然として在ましてさしも烈き火乃
中なりしかど少しも傷られ給はざりければ尊くぞ拝ましける
○院内に老松あり笈懸松と号く往昔聖人爰に宿り給ひ

し時此松に袈裟をかけ給ふみより則松の名とせり○聖人御滅後御直弟御孫弟かまへく寺務し給ひ存覺上人も當院に住給ひ其御息綱嚴僧都寺務あつく中興たりせ給ふとかん聞へし靈寶數品置之

○本郷村より一里半ばかりに金が森といふ村あり蓮如上人の御弟子無二の信者とあへし道西入道の坊跡あり善徳寺國宗寺といふ

○金が森は守山の宿の西の方なり守山より一里半に草津の驛あり名物の姥が餅ばかり此所より道筋なり矢橋の渡し場へ出るなり

○矢橋より湖上一里の渡しにして大津に至る湖水八景の一ツ之又川に矢ばせ川といふ行家郷の旁り

長居せば心しておよあづさ弓矢橋の川の渡りのひとつ

◎矢ばせのあたりに瀬田の町瀬田の長橋あり長さ九十六間橋上より左の方をみれば紫式部が源氏五十四帖の巻くをつぎし石山寺見えくまみへたりその右がたは橋谷人居て東は宇治川へ出る小橋あり長さ二十六間右の方湖水を落て見渡し景色実に述がたし湖中沖の嶋見渡日本


金ヶ森
蓊龍寺
円宗寺
裏門
円宗寺



墓所
蓮如上人御塚
表門
手水
鐘樓

柱の板も苔むして斗まりにたりいく世經ぬらん瀬田の長ヒ

石山寺ハ聖武天皇天平勝宝六年勅して草創ましくなる霊地にして本尊ハ金乃観世音ハ良弁僧正の作なり左之山上山下の風景奇樹怪石蟠曲として誠に世外乃勝地なり

那さへもハや納らん石山のミよのつれ〳〵秋乃夜の月

瀬田の小橋より東へ三丁計松原の左の田の中に木曾殿の腹心今井兼平が塚あり

粟津原ハ此所にあり即木曾義仲戦死の古跡にして今も古家乃うちに其塚あり

粟津野ハ秋吹風にちりにけり出て残る露ハ蛍なりけり

打出の浜ハ大津につゞきたる浜辺之天正年中明智左馬介此所より馬にて湖水を渉りし所なり

大津の駅ハ志賀郡にあり古ハ紫香楽の湊なり数千の商家交易を成し往還の旅客絶る期なし此津松女ありて旅客の憂さをなぐさむ

湖中に猟する鮒を源五郎と称しむかし源五郎といふる猟師ありて彼が漁せし魚の格別に佳なるよりかくいひならはしたるとも又其の比をき鮒の味ひ美なるゆへ夏の比鮒といふるをよこなまりて源五郎鮒といふるよし也 都て湖中に得る産物多し 鯉魚 鰣 鯰 鰻

明治四十四年七月六日午

十三日
十四日 盆休み 十五

田口掬汀氏

壹番目



料の事なるへし

文祿四年豊臣秀吉書

伏見移徙爲祝儀、

召候、猶山中山城

五月六日

仝

爲音信銀子弐拾枚

九月十日

右二通は共に[illegible]田社内に

社に[illegible]めたるものありて記

夷[illegible]度々渡來、已
變異、愈深被惱
宸襟、依之益天下
宮 宗像社 香椎
仰下候、仍早々申
正月二日
侍從三位
道中、遠路之間
五月九月等、自
事、

鯉 似鯉 其外堅田浦の小糸鮒あるひハ鮒の背ぬき鯰 勢多納門のもろこ 瀬田蜆 是る悉く江湖の中の名産にして諸國邑を得て鮮美たり

江州より出る産物甚多し 就中ある湧の硯石 伊吹艾 長濱の縮緬など其名高し 國友鍛の鉄炮ハ甲賀より出し 草津の鞦 守山の鞦 水口の矢根 八幡の名産 菜種には當歸 独活 蟬蛻 蛇骨あり 荊妾ハ江州と高勝としある宮の縮布ハ天下に並びなく 燈心のたき 莚の大きさおほ袋のもふ抑ゝろうりとふものなし

延松寺御坊

大津八丁にあり 西御門跡御坊 延松院と号す

本堂十二間に面 往古三井寺の別所院より御本廟第八代蓮如上人山門の坊難に遂玉ひし時 三井寺の衆徒蓮師をかくまひ奉り此院に入御なさせまゐらせ終に此をを寄附せしもとることとぞ

二十四輩順拜圖會巻之一終

二十四輩順拝圖會

越前加賀

二

二十四輩順拜圖會卷之二

目録

○越前之部

加賀之部

以上

越前ノ國

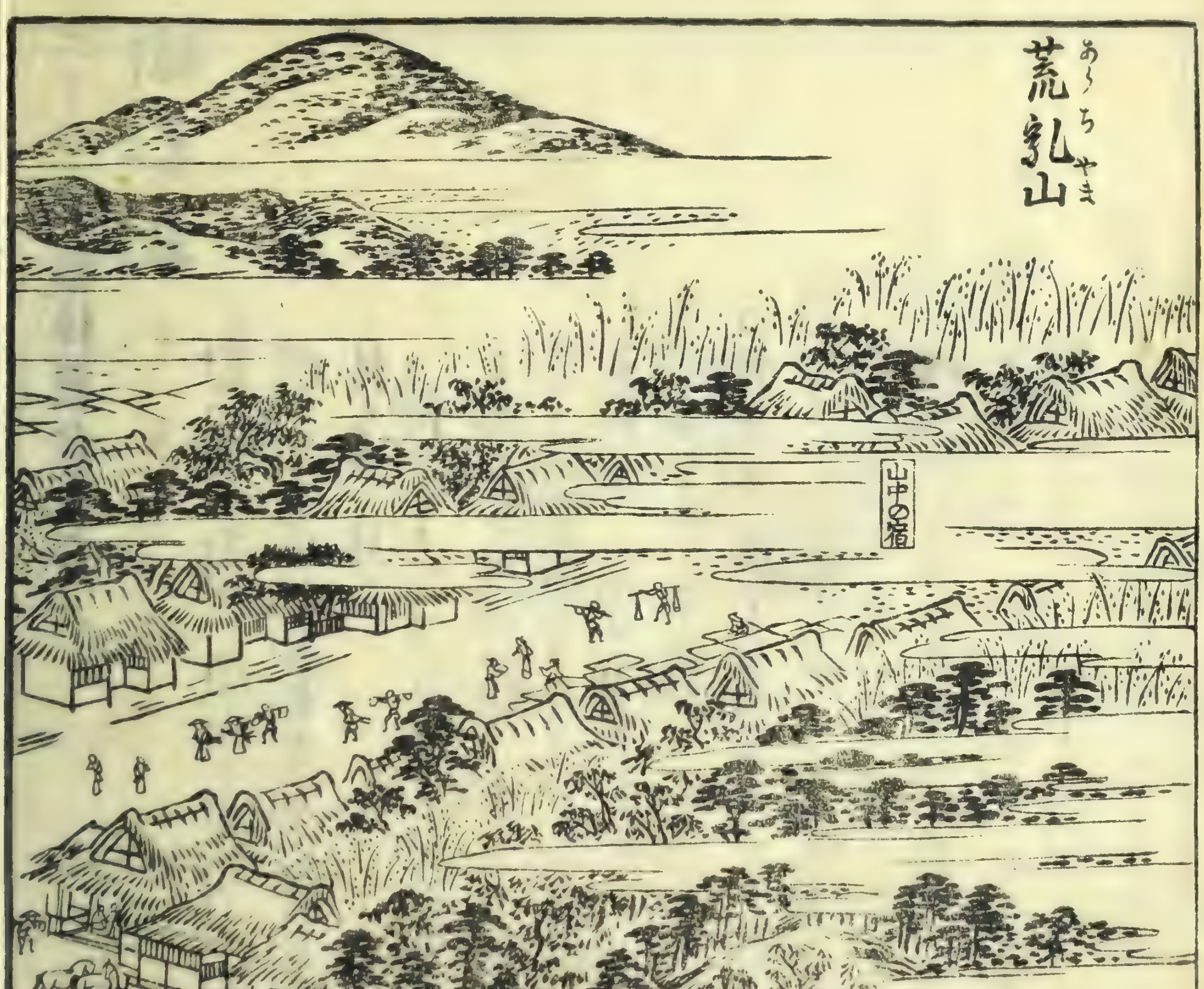
○荒乳山は近江と越前の境山中の宿にあり江州大物超專寺より行程十三里余往昔親鸞聖人越國に左遷玉ふ御時此山の嶮しきに行なやみ玉ひ

越路なるあらちの山に行つかれ足も血しほに染る斗そ

と詠じさせ玉ふ此御哥をうかゞふも其嶮難をおもひはかるべし今は都よりの往来繁く衢となりぬれば山を開き路を造り往来せるに容易し祖師の御在世は今を去る事六百余年田畠も海となり滄海も山と変じ今をもていにしへを論ずべからざるなれ

○敦賀郡 敦賀は荒乳山より行程五里にして越前第一の繁花之地にて数多の人家軒をつらね都の商賈入つどひ交易をなすゆへいにしへより此地には遊女ありていとも賑しき大湊也崇神天皇の御宇異国より額に角生ひたる都怒我阿羅斯等といふ者此地に着せしより地名と角鹿と名づくといへり則今の敦賀なり

○気比大明神の社は敦賀郡にありいにしへ仲哀天皇角鹿に御幸し玉ひし時行宮を建させられ笥飯の宮と号け玉ふ神功皇后十三年


荒乳山（あらちやま）
山中の宿


光徳寺



敦賀之湊
勝軍村
いろの濱


角原山



誉田なる此行宮に鎮し天皇を崇まりて笥飯の神と称ひ奉り
給ふとぞ万葉集の歌に
「けひの海よそふはたらし芦の葉の乱出て見ゆるあまの釣舩
○敦賀より六里に今庄の宿あり是より又三里隔にハもがたうげあり
あり昔蓮如上人加賀国越の折から爰に寓せられ逗給ひし旧跡なり
とぞ岩の室虚なる中に六字の名号あり則蓮師の御筆なりと云伝ふなり
此等正しき伝記にはあらねど里俗の妄説信ずるに足らねども因に
記して児女の観に備ふ○一向宗加越の国越にて文明年中 蓮如
上人北国を経廻し給ひ越前吉崎の地に一宇の道場を建立し給ひたる
に国々の門徒等是を御山と称し崇敬をつくす事夥しかりけるより
ぞ宗風都鄙に繁昌日を追ひ月を踰て弥増るに是より先応永年中に聖
人の御弟子真仏上人其弟子顕智上人の開基し給ふ高田専修寺
の門流加賀能登越前の間に甚多く北国に弘昌せり然るに蓮如上人
当国に下向ましますより本願寺の門葉頻りに宗風を激し地を争ひ
宗門の流れを汲むといへども所ならく本願寺流高田流と派義を
まうち両流の門徒等互に讒訴讒言乃訴論を為し兵を結び鉾楯
の中となり合戦数度に及びけるを当国守へ訴へ出て此の裁許を
蒙るべしとて両宗各しく加賀乃国主富樫政親に訴ふ政親いう






湯尾峠
ゆのとうげ
木の目峠
中河内



かゝる所に高田派に合体し本願寺派を讐敵となしぬ実に
本願寺の門徒大に怒り此上ハ富樫政親こそ我宗門の法敵
なれさらバほろぼしてせよとて郷民等忽一揆を企て加賀国ハ云に及バず
能登越中の門徒凡二万余り長享二年富樫政親が居城に押寄せ既
危く見えしが政親ハ命を捨て戦ひたる富樫が防ぐ多勢に郷民多く城に火を
かけ自害して亡びけり一揆等勝に乗じ能登国を攻て終に富山城
攻落さんと遂に進み破竹の勢ひにて城中とも切て忽城中に乱入せんと
其勢凡て六万余に及べく五国を殺害して雲霞のごとく押よせたり此時越
前の国主朝倉弾正左衛門尉貞景元来蓮如上人を尊敬し自身檀
那となりて吉崎の御堂を営建しなれバ一揆の企を聞大きに怒りけれバ一揆
等が付殺せんとて舎弟小太郎左衛門教景を大将として家臣赤波左
衛門織部民部丞上田中村吉川新間其外国中の軍勢を催し集め
都合一万八千余騎九頭龍河の川岸に陣を取欲渡さバ戦わんと手ぐすね
もとより引て待かけ居る所に一揆の大軍六万余り綿旗を作つて十角
の浚りへ押寄せしが先毎り雄の若者馬をひきくし川中へ折入懸る所
と一文字に渡し財明の奏正といへる大剛の荒法師其身威の鎧着て
旗の指物さし総々の馬を躍せ真先に進みたり朝倉が勇臣山崎長門
守是を見て事ものゝしき一揆原が乱勢かないでや手並を見せんとて

其のまゝ三尺ばかり此太刀の鎗引をとられ地にと喰ひて奥へいりぬ
正元より無双の手柄なれば大長刀とらひて討てかゝり中淵斗り
散花微塵に戦ひしがいかゞしたりけん景正が長刀鐔元より折て
ひるむ所を山崎折かけしを綿嘴の如くと一洗に突通し猶寄て
首を取りけり一揆の大軍たゝ切られ景正を討せ今日の戦ひ甚にして後
左ふ程てこそあれ裏崩れして逃出し朝倉貞景味方を下知していや
まさると先に馬を駈出せば進み勝しも押籠べき鯖波一本の面にもかぶ
村雲立ち大鼓を九頭竜川へ追落しお定ゑる名募ふるふつとまでなかりけむ
とぞ一揆のやうれば返し合ぬ甚も无く無勢にも及ばず加賀国へ迯しれり
初め動乱の起りけるは蓮如上人深く悪み給ひ越前と出でし出都の古
へより吉崎へ披いまゝしの御旧跡は此年戦の折からやもえん里隠のぞ
まで讃とりべき旧記もあらぬ

○湯尾峠は今廃と鯖波の間にあり孫嫡子の茶屋とて痘瘡の守と
きこえし家あり

出雲山毫攝寺　今立郡清水頭にあり城州渋谷後に本山の内一本山く

開祖は親鸞聖人にして創建開基は乗専大徳之乗専大徳は旧
丹波国にありて佛心宗を修し六人部の邑に住ひ給ひしが其


出雲山
毫攝寺
墓所
玄関


本堂
阿弥陀堂
寺内

名高く海内に響きけれども雅俗のさかいがふれずを諳知して
速に易行の大道に心ざし真宗に帰依し高祖聖人の法流を
汲み入給へり　乗専大徳はしめい清範法眼と号す　始め丹州六人部に毫攝寺を開きまふさ都
出雲路に移て再興ありて終に当国に基趾を開き給へとなんし
慕帰絵詞所撰の記によりこれをあるせり　一説に善鸞上人を法脈の開基とはいへり　未詳
○本堂九間に面本尊阿弥陀如来　聖徳皇の御作　○本堂十三間に面　高祖聖人御十一歳御自作の真像を安ず　当山霊宝数品ありこれを略す

出雲山陽願寺　西流御坊所　清水坂より一里余府中にあり

正闡房善鎮の開基にして本堂十三間に面聖人御自画の真
影を安ず○文明三年蓮如上人越前御下向の時毫攝寺の当
住正闡房善鎮蓮上人に帰依し広瀬村岩淵といふ所に一宇を
建立せり蓮師其寺を湯頼寺と号せしめ給ふ其後第二代善

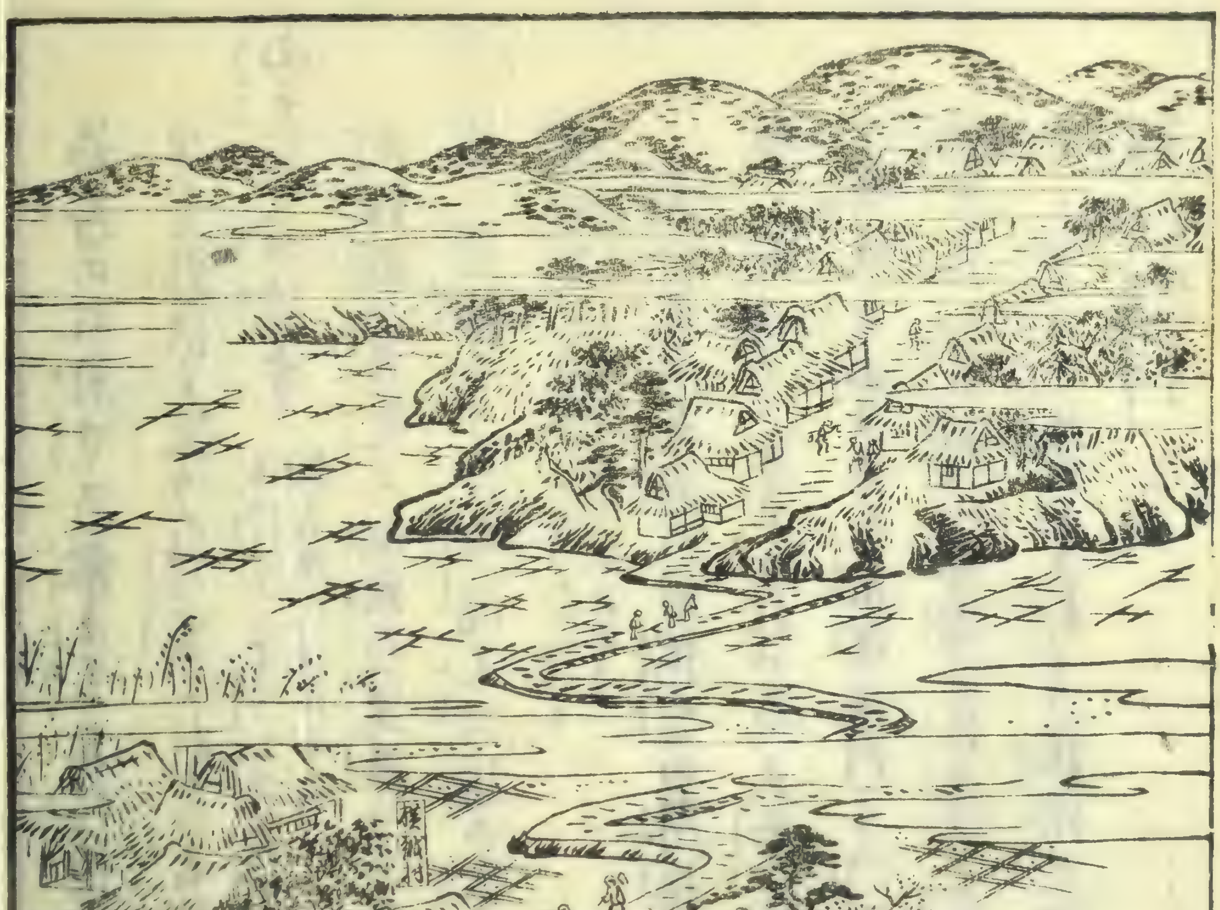
海彦の時府中乃城主青木紀伊守帰依ましまして今此地に堂宇を移したまへり什宝これを略す

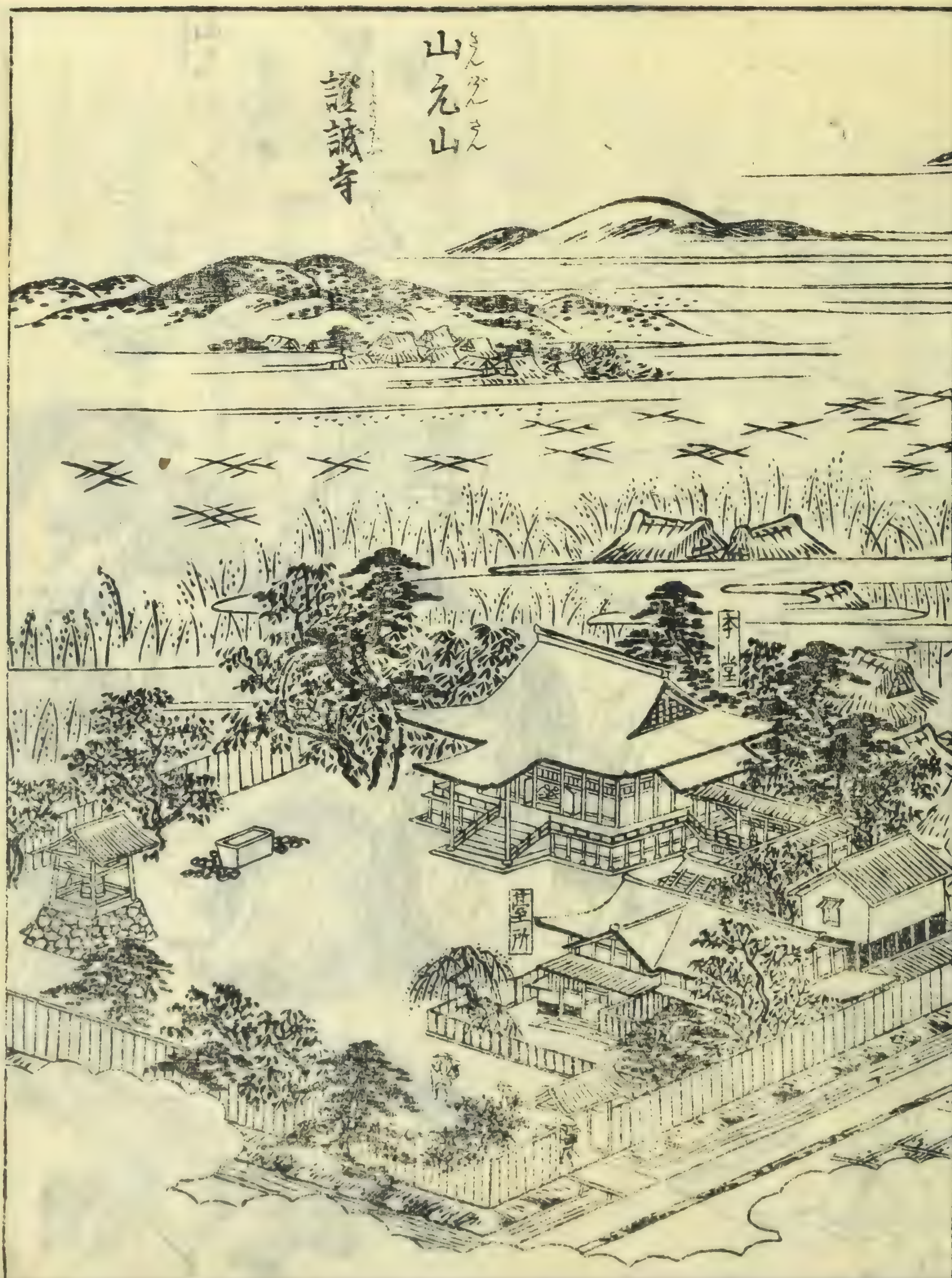
山元山證誠寺

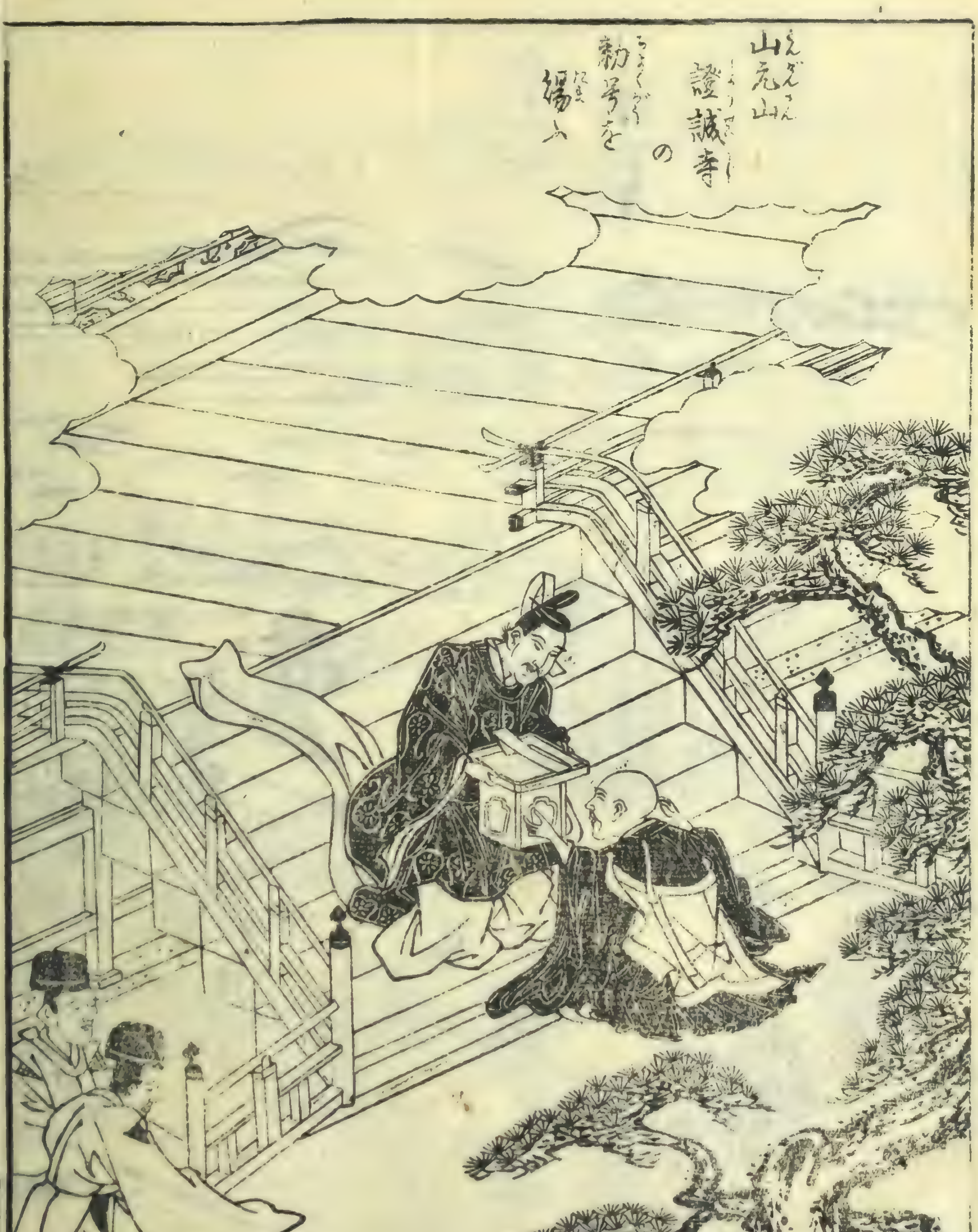
清水駅より一里今立郡横越にあり浄念院と号す
誠照派門徒は本山のうち一本山なり

開祖親鸞聖人開闢の遺跡なり本堂十三間に面す本尊無量寿仏は霊仏にして奇端不思議の尊像なり又高祖聖人御自刻の像を安す 光明本聖人の御筆 其外霊宝数品あり

開山聖人北遷の時越前の脾倍山元といふ所に一宇を建立し聖人を請じ奉りたれば聖人即ち茲に入らせ給ひ錫を駐めたまふが其後善鸞上人来院有りて門下を化益し従ひ続で奥州大網の浄如大徳此仏閣を再興し忝くも禁廷より山元山證誠寺と勅号を賜ひけれより相続で今に法脈相兼せり 継古入親鸞従唯授一人口決といふ伝法ありなりといひ伝へたり




山元山
證誠寺
本堂
書院所



山元山證誠寺の勅号を賜ふ

○世傳に曰る祖聖人越後へ御下向の時当國大町といふ所に如道といへる高徳の僧ありて聖人に謁し奉り聞法随喜して御弟子となり自門ひろく専修念佛を弘む其門葉三ヶ寺と別れて鯖江誠照寺中野専照寺横越證誠寺これ也是を三門徒と称し宗永の記に見えたり 右傳記の異説後学これを正せ

○右の方に愛宕山あり白鬼女川流れて右の方の山際を丸生といふ則丸生判官が居住せし所となり

上野山誠照寺

横越より十二丁 鯖江にあり 三門徒の内浄土真宗の一本山なり

寺務擁僧正 本堂九間四面 本尊閻浮檀金手引阿弥陀如来を安とす如覚上人の像あり 御影堂十二間四面 高祖聖人の真像を安ず 鐘楼三區 ○開祖ハ親鸞聖人創建開基ハ如覚上人也当山開闢ハ高祖聖人御在世の砌当地に波多野和泉守景綱といふ者あり聖人を深く信仰しけり則招請して聞法随喜浅からず終に御門徒となりぬ爰に於いて聖人の孫弟道性大徳を請し我女を娶


墓所
寺内
門
鯖江村


上の山
誠照寺
本堂
寺内


空然坊
車道場



住せしむ其生る息男如覚上人也高祖化益の勝地を失ふべし
て基趾を開き給ふ所之とぞ　當山乃傳に云　往昔當國上野の
領主秦右京亮景之元久二年正月七日乃夜霊夢を感じ上洛
ましまして親鸞聖人乃御弟子となり空玄と号しけるに聖人越後へ
左遷乃御時空玄入道兼て新殿を営み置て聖人を請し奉る
聖人爰に数日滞留して教化ありしが是より越後へ下向し給ひ
後空玄房此新殿を聖人乃輿車を止め給ひし所なれば車の道場と
号して是を守るに法流大に繁昌して國郡に充て聖人御帰洛の
後即聖人の御息女又男有房を招請して是を道性上人と號し
空玄房の息女を嫁娶して車の道場に住せしむ其息を松寿と
号けしが弘長二年の初冬上洛せしめ聖人の真弟となし法名
を如覚と号せり此如覚上人嘉元三年禁内にて後二條院より浄

土真宗遊門徒と勅号を賜ふ其後水尾院勅願所となし給ひ
上洼山證照寺と勅書を賜ふ當山境内寺役の御朱印あり住ハ
大僧正に任ぜらる上洛の毎に参内及ぶと云 ○誠照國足ケの本寺
とふれ。清水頭毫摂寺。横越證誠寺。鯖江證照寺。福井専照
寺これを四本山と号くいづれも親鸞聖人の法脈として真宗桐
派の霊跡なり

○鯖江と浅水の間に名号法寺あり高祖聖人御真筆の御影を安ず

高田山法雲寺　東派

鯖江より又里足羽郡大味浦にあり

法雲寺は高祖聖人の上足真弟専空大徳当国熊坂にて衆に
下向して教導し給ふの遺跡と志らるゝ小真佛上人の門弟三州
和田の円善大徳の弟子如道法師当国大町の東屋道場と云本
に在て教化なしたる彼熊坂の草庵を此東屋道場に移して大町

專修寺と号せり慶長元年又同の比覚如上人当国御下向のころ
如道法師覚如上人より教行信證乃傳授を請り益法化盛ん之
其後蓮如上人当国吉崎に御住在ましますの時專修寺兵火の為に
回禄せり其後又同国風尾に再建せしが是又退轉に及びぬ再三今
此大味浦に寺を建立して法雲寺と改号せしと云々

古き相傳聖人御自画傳法の御影と称するあり皆ハ什の宝

みてこれも聖人の御ぼり彫りたまふところなり

○如道法師の傳異説區々之聖人の真弟之ともいひ又三州和田の
圓善大徳の門弟なりともいひ併ハ東屋道場の寺鯖江誠照
寺の發端之とも傳說ハ何れか是なる事を知らし

箕手山法光寺 大味浦より二八里岩倉にあり

当寺ハ真宗桐巣乃一本山勢州一身田高田專修寺御門流の
末寺也佐々木三郎光實入道法善房造立の寺なりといへり

穎寿橘立真宗寺日系乃寺なりや○什宝には高祖聖人乃
御木像○上宮太子御木像○来迎如来 恵心僧都御筆

橘宗賢 岩倉より二里穎寿本田町にあり

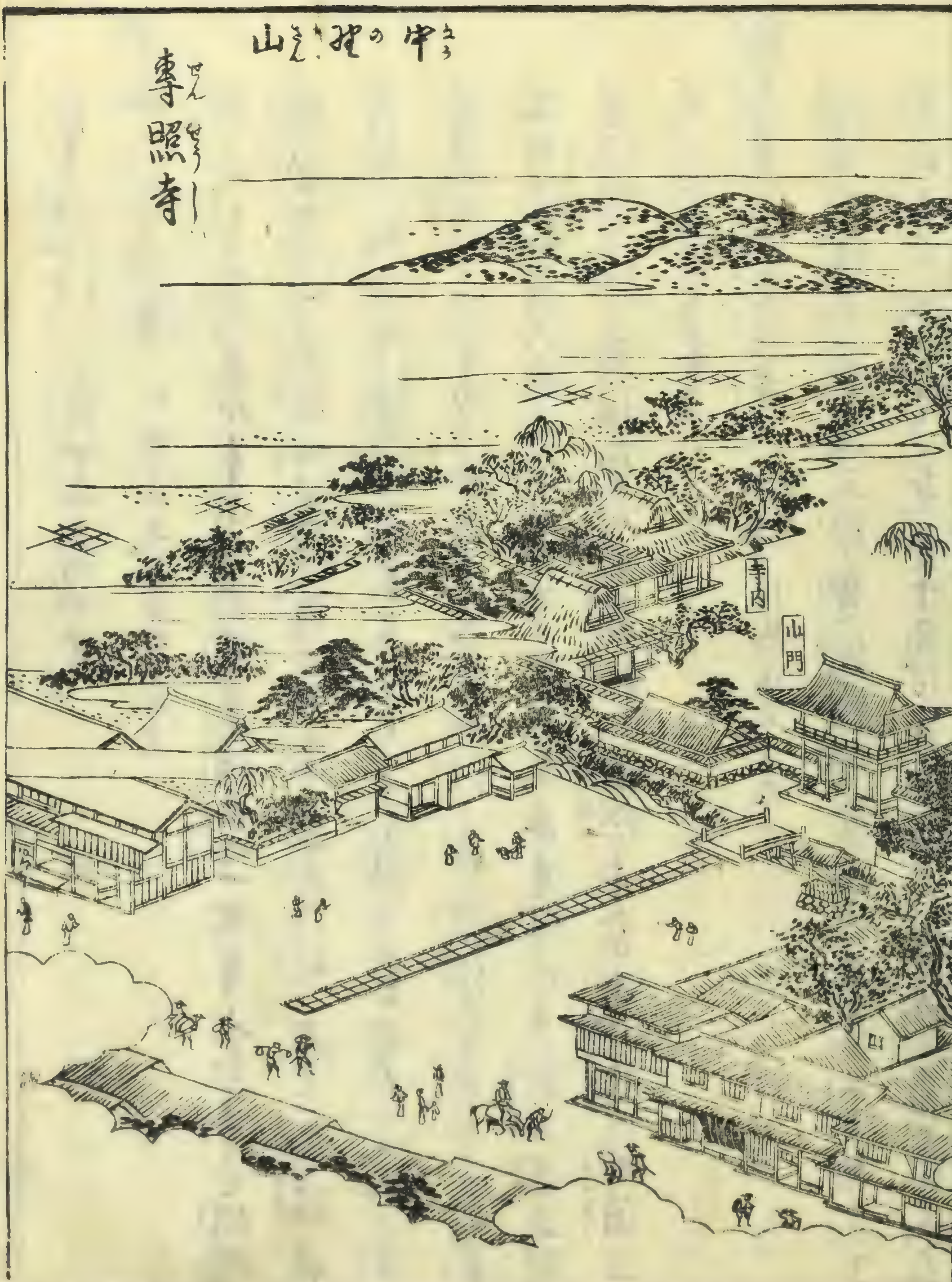
此御旧跡在家より起りしとなん其姓氏正しく先祖は聖武皇帝
の皇子橘諸兄公乃正統也故に禁廷より医薬の倫旨を賜ふ
となり嘉元元年三月親鸞聖人越後へ左遷せられさせたまふ
御时此家に寄宿在まして御教化ありけるゆゑ帰依渇仰の余り
御弟子となりて法名了音と賜り御真筆弥陀乃画像と
授与し給ふ其外法物三ツ種今猶伝来せりこれへる橘屋
三郎左衛門といひし凡俗乃家として六百余年退転なく相
続されけりとみ難し○宝物には弥陀仏の画像 聖人の御真筆光明の内に十八
願の化仏名蓮座あり如信上人覚如 ○十字名号 聖人の御真筆 ○記念名号六字
上人綽如上人名御判をそへたまふ



構宗賢が宅にて
聖人弥陀佛の
像を写し給ふ




本堂
阿弥陀堂
玄関
臺所


中の野山
専照寺
寺内
山門

名号　蓮如上人乃御筆　○實如上人の御書

中野山専照寺　同所福井本田町にあり

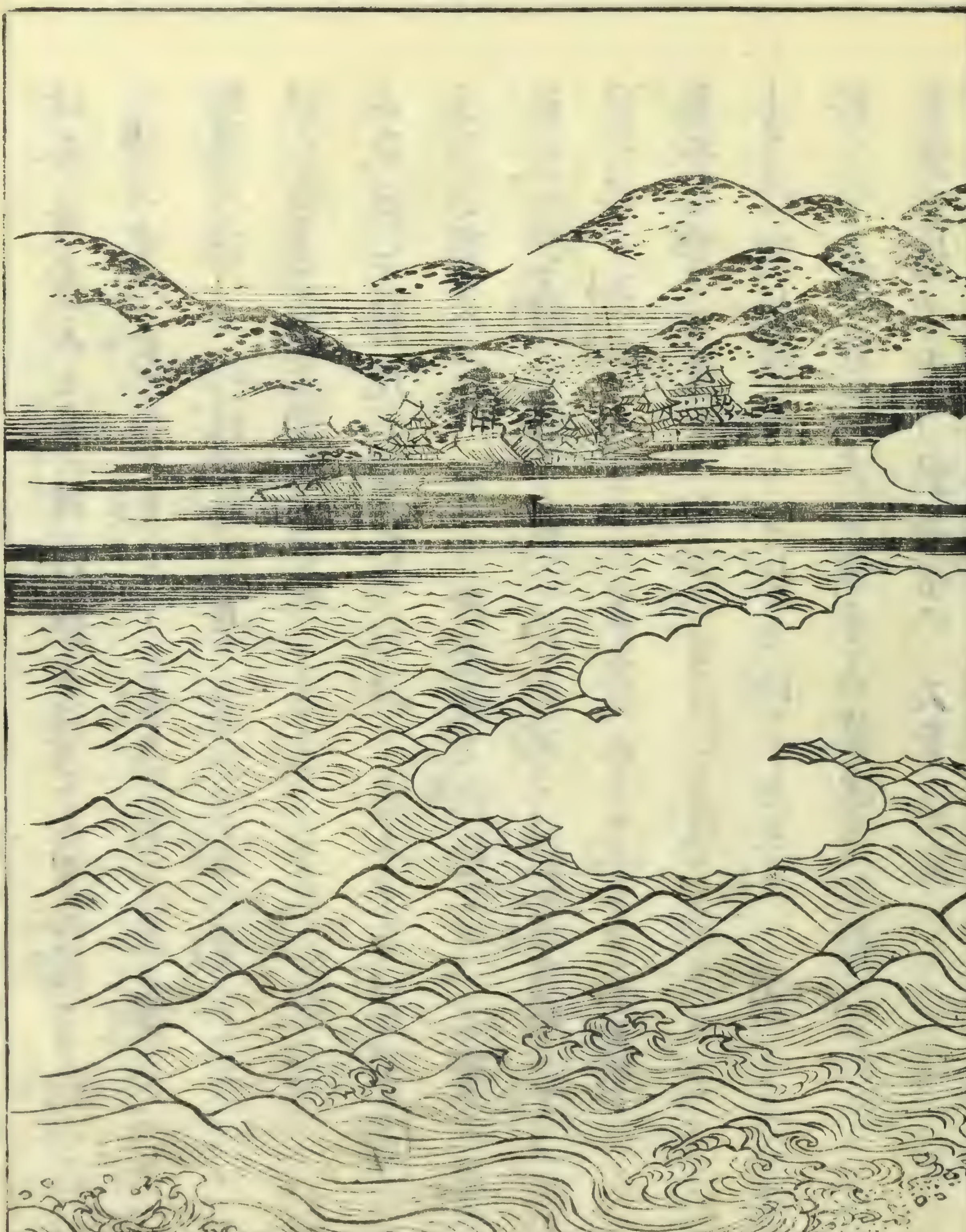
當寺ハ又號ぶ尼本山乃内真宗桐系の一本寺也本堂七間御影堂十二間本尊阿弥陀佛の尊像ハ春日乃作にして所謂如道大徳の開闢なし霊場也事ハ記をひく初めハ大町といふ所に草庵道場といへるあり如道上人爰に住して教化ありしより人皆大町乃如道大徳と稱せしとぞや彼草庵道場のちの既に事ハ記と○霊像ハ高祖聖人御真影○法然上人の御木像○如道上人乃木像等あり

橋立昌向山真宗寺　西派流家　同所福井にあり

當寺ハ往昔佐々木三郎盛綱祖師聖人乃御弟子となりて開闢ありし所なり本堂十間に面本尊阿弥陀如来ハ聖人乃

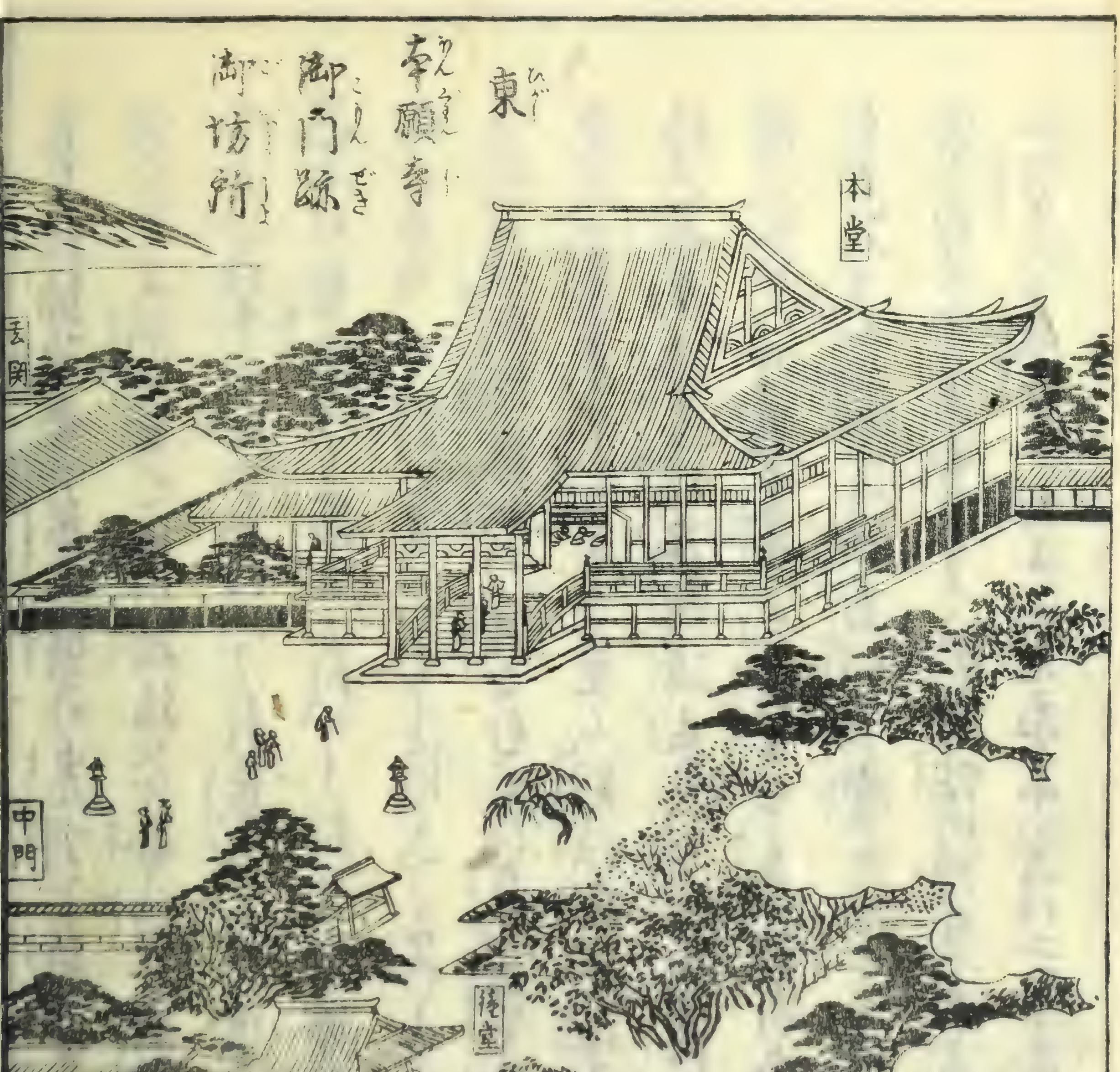
御真作○柳佐々木三郎盛綱ハ人王五十九代宇多天皇乃
後胤近江の源氏佐々木源三秀義の三男也勇猛強勢にして
万夫不當乃武士なりてありしが元暦文治の比武衛源頼朝卿乃幕
下に従ひ舎弟四郎高綱と倶に木曽を追討して平家を亡し武
名海内に響きて就中高綱が宇治の早瀬乃先陣に其名を
遠し盛綱ハ西海藤戸乃波上を先駈して英名を源平両陣の
中に輝し終に源氏一統の世となりし後盛綱今ハや衰老
のみとなりて若来のことを思ふに実に盛んなりし平家二十余
年乃栄花も只一睡の夢となり今又源氏世に時めきて栄と
極むといへども流るる川の淵瀬定めなきと思はれし此身も壮ん
なる時ハ鬼神をも欺き大山も擲くべき勢ひありしも衰老乃
今にいたりてハ眼を遠きに写し力を杖に借の外なし出息入息不

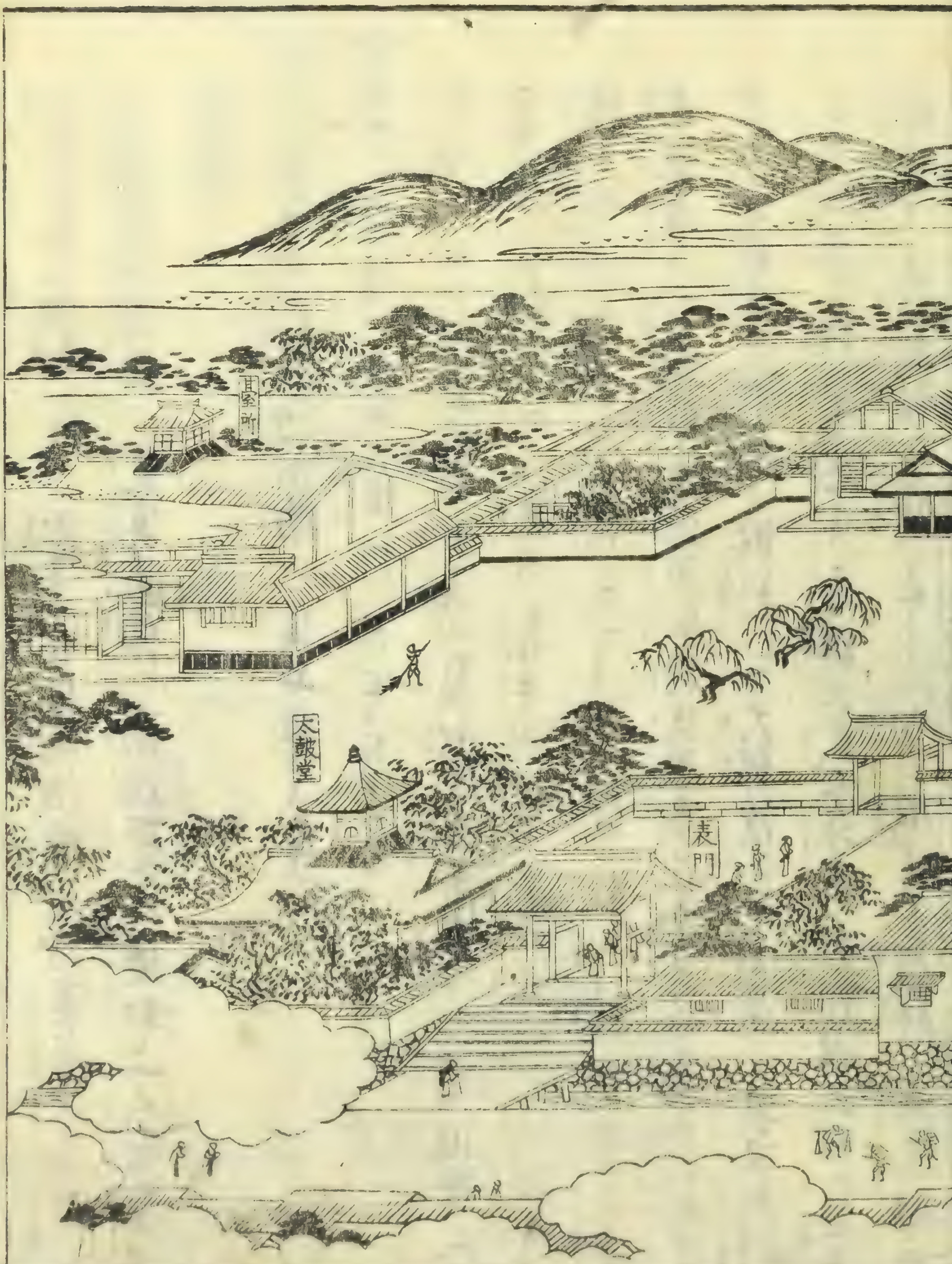




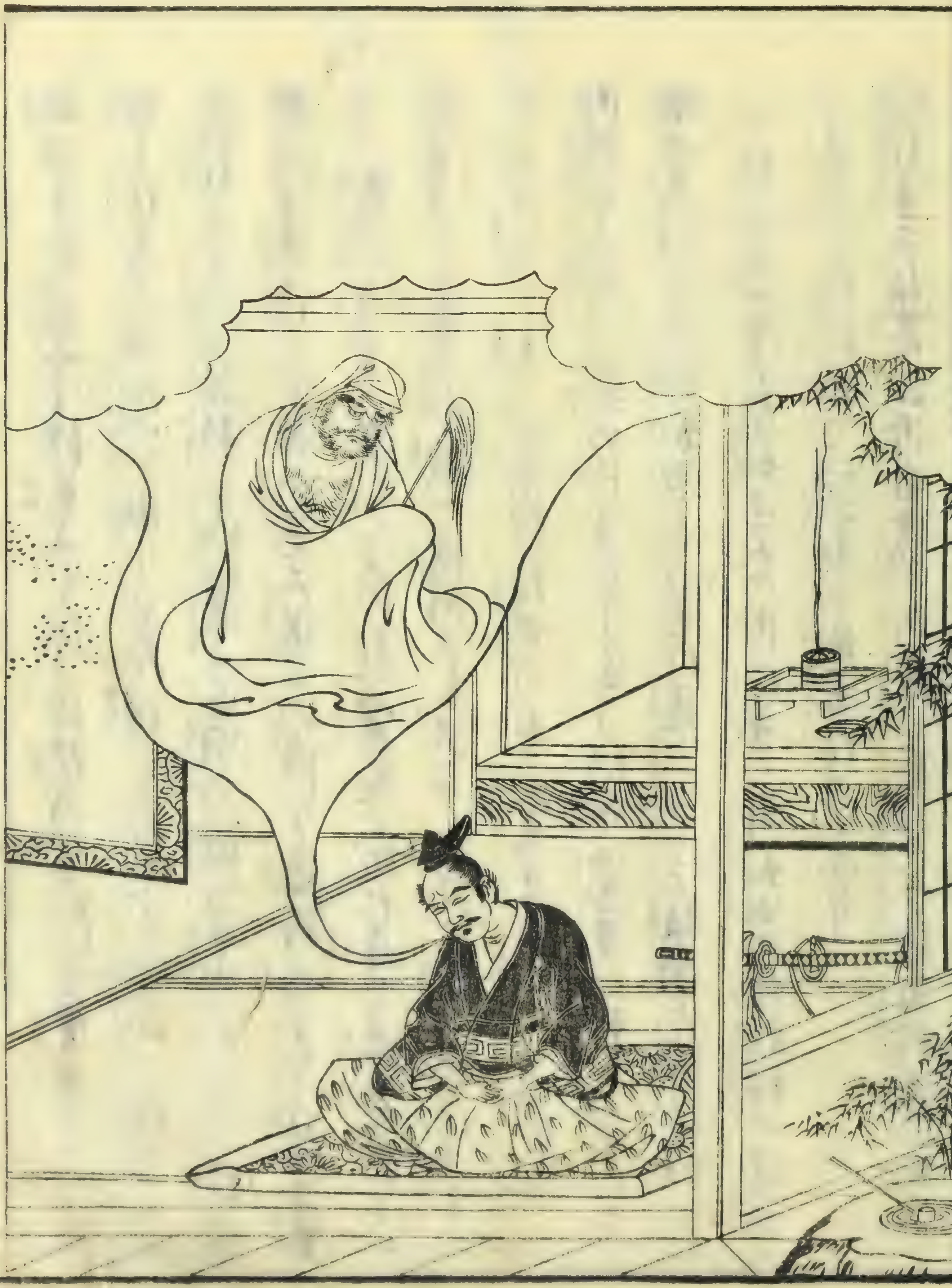
臨命終今にも命終ば地獄に堕せん事必定なり嗚呼いかゞし
て後の世の苦しみを免んやと昼夜悲しみ歎きければ善
知識のいへりけるハ聞法の縁を蒙り迷ひの夢を覚さんものとおもハゞ
けてみたるが鸞綱宿善の時にて至りなるうや親鸞聖人越後
に在まして弥陀の本願を弘通し給ふ事を云及び直に彼國
に趣き聖人に謁しまゐり御教化を願ひやせしが聖人鸞綱が
發起の心を感じ石路と歓び給ひ深く汝乱世の時に生まれされバ
いひけるうう若年の昔より衰老の今に至るまで多くの人を殺し
罪業を作る事際なし地獄必定にして逃るゝ期更になかりし然るを
どもも今阿弥陀仏の本願は汝ごとき五逆十悪の凡夫を救ませ
給ふんがための悲願なれバ我身の罪深きを顧ず只一心に仏の大
悲願を信じまゐらせバ我後世の一大事御助け候へと深く如来を頼

されバ弥陀佛ハ忽遍照の光明を放ち給ひ汝が身を彼光明の中に納めえて再び捨給ハじ命終の期に臨んでハやがて安楽浄土に迎へえ給ふべし廣大不思議の佛恩を報ぜんがためにハ餘念なく一心よりひたすら稱名念佛して死命を期とせよとゆめ〳〵懇にのべがたしとて呉〻と御教化おはし給ひけれバ盛綱忽欲疑の迷にむすび直に他力信心を決定して終に聖人の御弟子となりまつり聖人則法名を法善坊光実と授け給ふ其後法善坊当国橋立に一宇を建立して真宗寺と号高祖聖人御真書十字名号を与へ給ひ今に此名号を安置をとゝへり〇一説に法善坊光実ハ佐々木盛綱の玄孫にして佐々木三郎光実なり親智坊の門弟となり当国に化導し橋立に一宇を建立し遂に正元元年七月二日に寂したまへり門主一ろ


東本願寺
御門跡
御坊所
本堂
玄関
中門
経堂
寺内町


太鼓堂
表門

是なる事を知りぬ　霊宝には高祖聖人御真筆十字名号
上宮太子の尊像　光実画像　高祖聖人蓮如上人対座之
御影
東本願寺御門跡御坊所　福井城下にあり
和田本覚寺　西派院家　同所にあり
本堂十間四面聖人御自画の真影を安置せり　高祖聖人
の御直弟親性房開基の旧寺にして当聖人御讃の法然像を
代々相伝の霊宝数品伝来せり抑開基親性坊の俗姓ハ藤原
氏俵藤太秀郷の後胤鎮守府刺史波多野出雲守義重の嫡男
なり父義重ハ禅法を修行して大仏院如是と号し其子親性
もまた禅法を修して出家し座禅工夫を業としぬ親性武時叡心と
號す本来の弥陀を悟らんとして心を凝して座禅したるに頗る



眠きざしても堪かねけるが夢ともなく現のごとくして達磨大師忽
尓と現じて曰汝心を凝して座禅をこらすといへども佛心に勝るものなし然
れども却て妄念雑ねん起りて速に無明の眼をさまさんとおもはゞ親鸞
聖人に随従して易行の大道に入べしと告給ふと見て驚き覚
たり親性寿こゝに乃おもひを以し親鸞聖人の化導を慕ひまゐらせ
りしかるに聖人今越の後州に在りけるを慕て直に彼地に至て
聖人に謁し奉り世弥陀超世の悲願を聞て直入の至極飽まで
御教化に預り真の御弟子となりけり此本覚寺を起立しけるとぞ
始め當国吉田郡和田といふ所に建立ありけるが後に今の地に移住しと
一説に曰當寺は覚如上人の御門弟三州和田の信性坊の遠孫也
とかや信性坊は三州和田圓善坊乃息なり
○什宝には高祖御自畫の御影○聖徳皇御自作像○開基

親鸞上人像○十字名号（聖人御筆）○法然上人御影（蓮師御筆）○蓮如上人御影（御自作）○九条御袈裟（聖人御譲）○六高像（寂如上人御表装）○六字名号（蓮如上人御筆）○渡唐天神画像（御自筆）○吉崎の御書（御自筆）○蓮如上人御遺言御書○三界唯一心の掛地（寂如上人御筆）○玄奘の伝絵（玄圓の筆）○高麗

真影（蓮如上人御筆）

西本願寺御門跡御坊　同所

本堂十九間に面

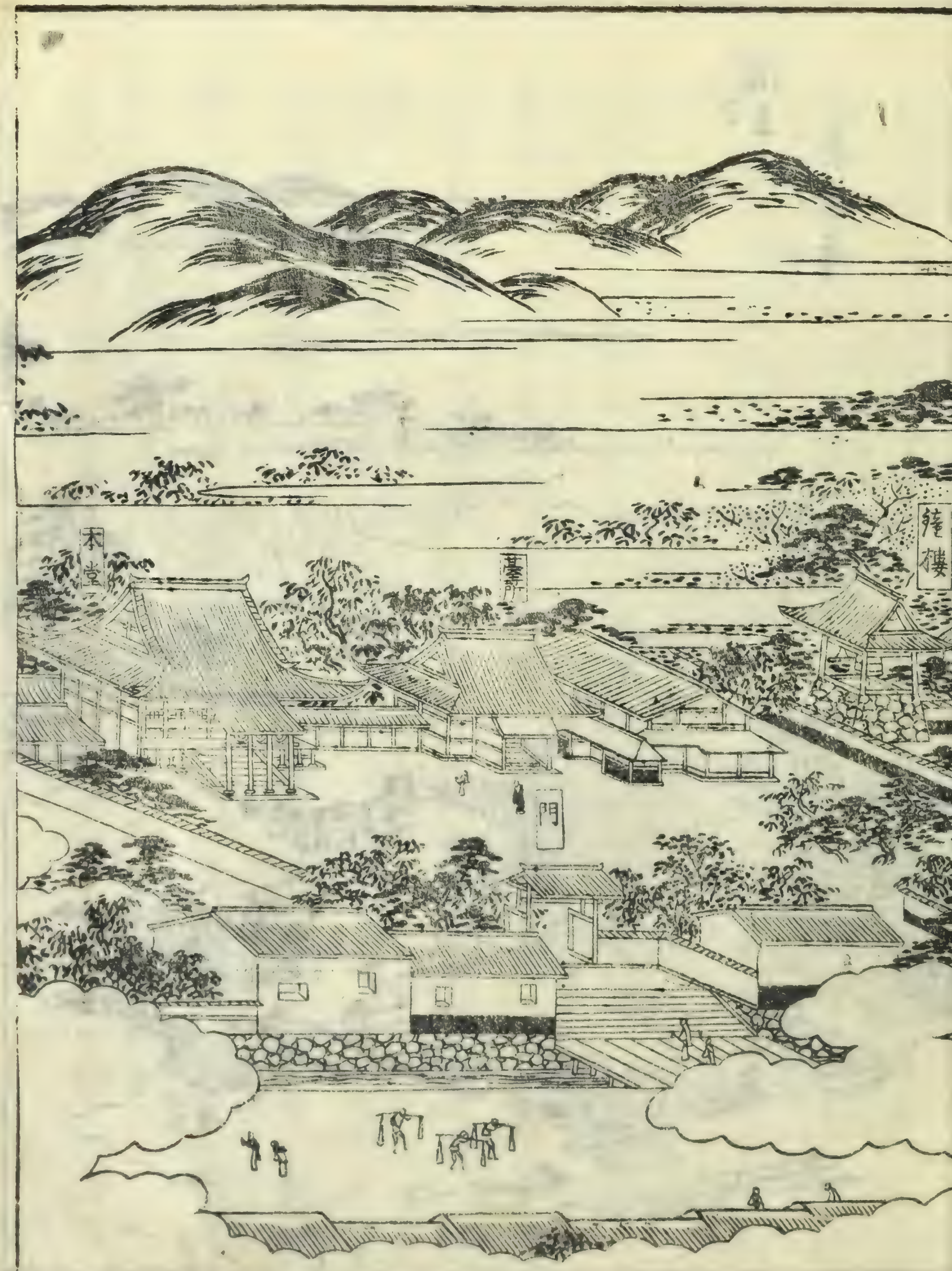
牛鼻山興宗寺（西流派家）　同所

本堂九間に面本尊ハ如来ハ弘法大師の御作なりとぞ覚如上人の門弟円海了如法師の造立なる寺也慕帰絵詞に覚如上人面受の門弟の列に了如とあり傍に円海真宗寺と記せり。こゝに了如ハ祖師の直弟と云しハ誤の了如法師の事を詳に紀さと


牛鼻山
興宗寺
本堂
寺内町


義貞塚
京終村
太鼓堂
表門


西本願寺御門跡御坊所
本堂



鐘樓
臺所
本堂
門



橋立（たちばな）
眞宗寺（しんしうじ）
本堂
門

宗祖聖人御年八十歳に及バせ給ふ砌に但馬国より京都在
番の武士あり小条時政の玄孫小条弥治郎宗之と号ス
在番の間聖人御教化を蒙り終に御弟子となり法名を綱
圓と號む年いまだ二十六歳にして若年なりといへども且心無二
の信者なり聖人滅後越前国に下向して弘法の基跡を開く
長命にして九十余歳を保川城に本願寺第三代覚如上人当国
に下り在国の中面謁しまゐれバ上人甚感悦ならせ給ひ綱
圓の法語祖師の直説を受つがしめ又如の一字を与へて綱
如と名つけさせ給ふとかや故に但馬の真宗寺と称ス〇親鸞
聖人蓮如上人連座二尊影を安置せり即蓮如上人の真筆
なり〇名号綱如法師の木像あり其外霊宝畧之
〇九十九橋ハ福井の町中にあり此橋中半までハ石にて作り正中より
向ふハ木の橋なり実に珍らしき橋のさま也此川附として流の瀬き

石橋の堅固なるも水勢にたへかねつゐに悉く流れ落たるを
と本まで残りたる洪水の時本の橋の先なりしが中ちて水の勢ひ弱む
が故に其儘残りし石の橋は崩るゝ事なく水落てのち修造するにも
容易からんなとぞ

○足羽明神の社は足羽郡にあり当社は人皇二十七代継体天皇
を祝ひ祭り奉れ

○福井の城下より一里東に大なる川あり急流矢を射るに似て橋を
架べき事ならざれば船をつらね浮て浮橋となせり故に川の名は九頭
龍川といへども里人は船橋川と唱へ地名ともし川のこなたは船橋と云り
此つなげる船すべて四十八艘ありといへり

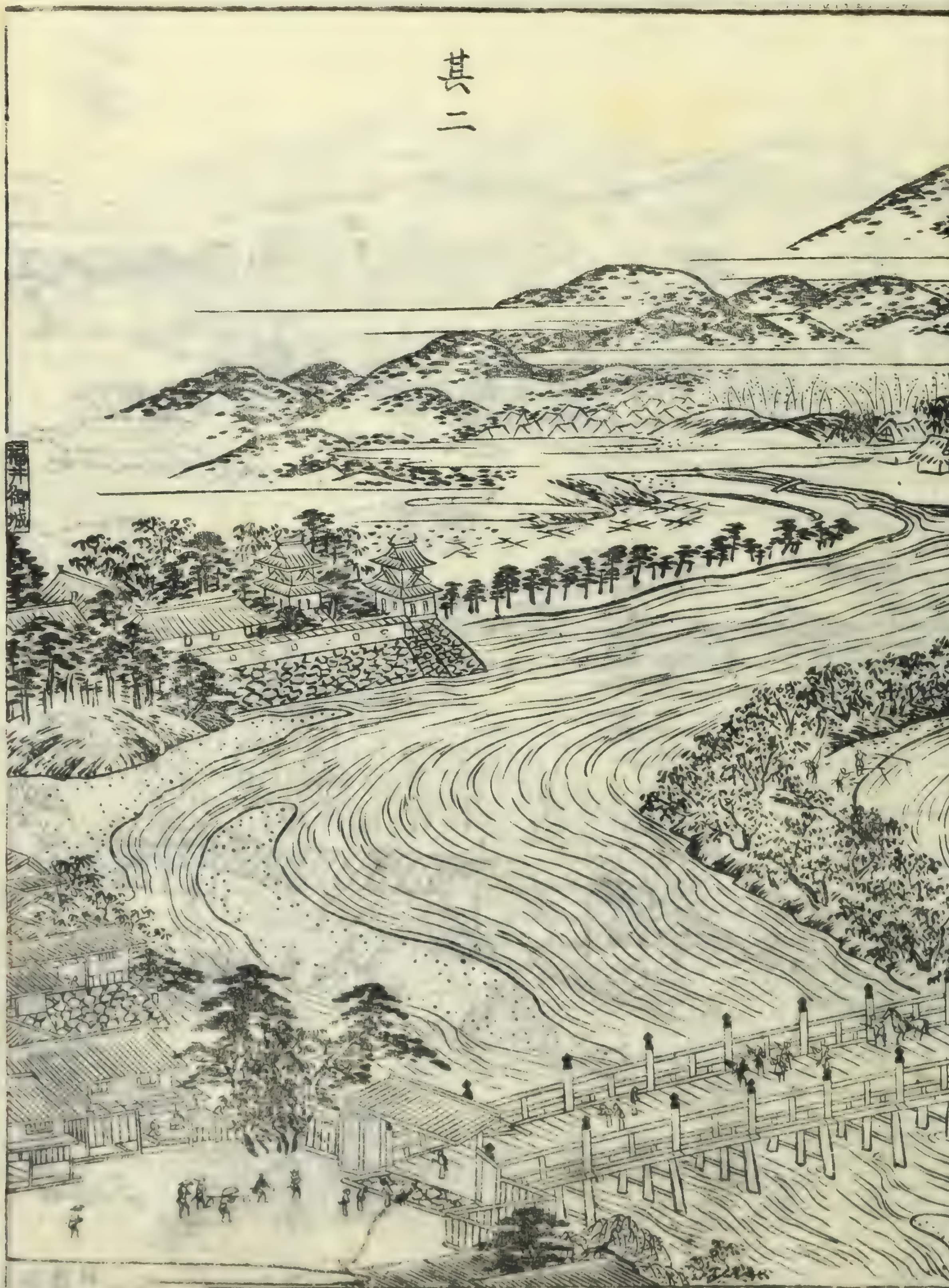
柘柱御旧跡

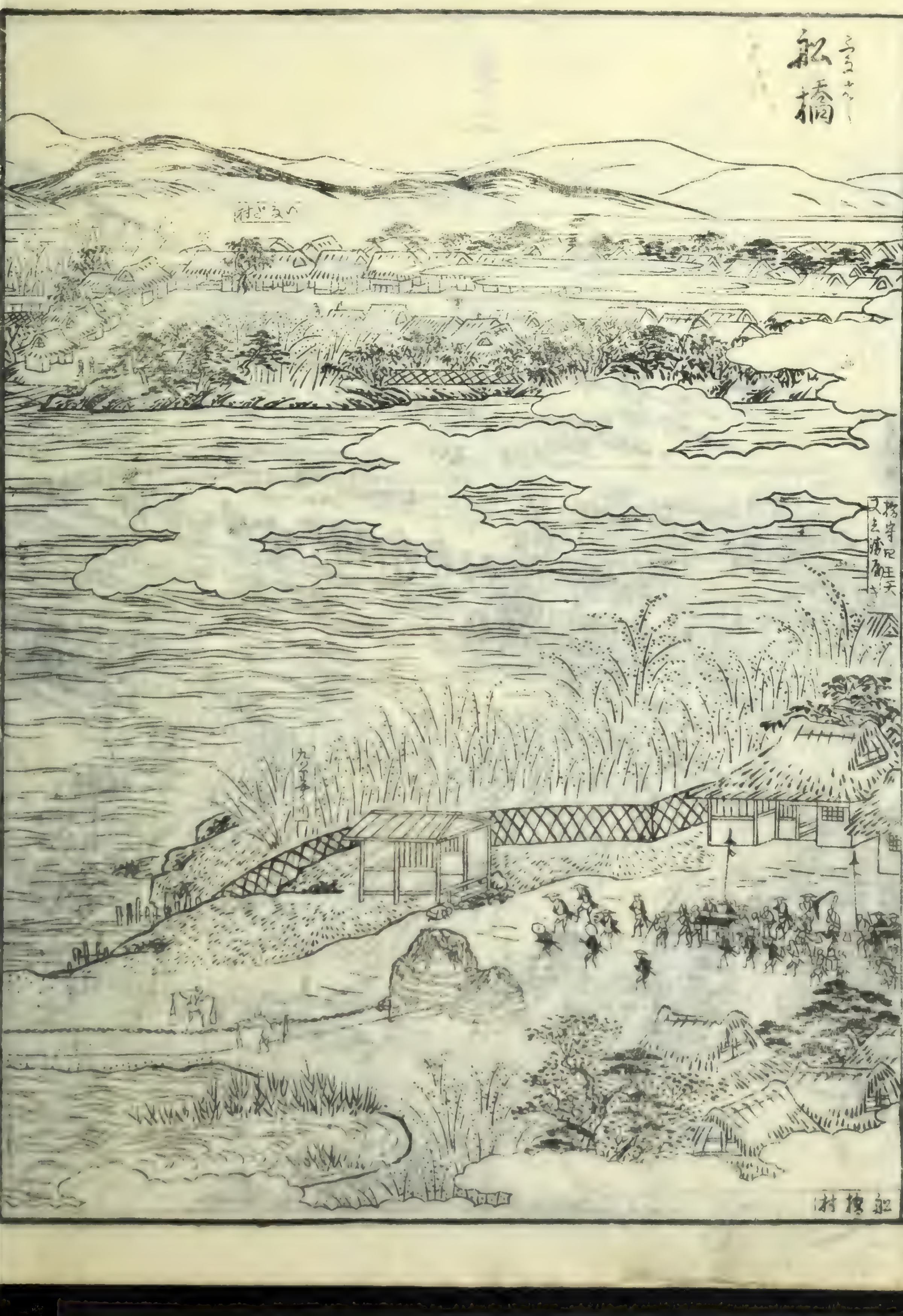
船橋より半里畑中にあり

宗祖親鸞聖人承元元年三月下旬越後へ遷され給ふ時此
里に後家長者といふ者あり聖人此家に一夜寄宿し給ひける
に御菓子に柘柱の楊枝を添へて出したる故聖人手に取りて庭前
にさし給ひ我法末世に壮んなるならば此柘柱根芽を生ぜよとの

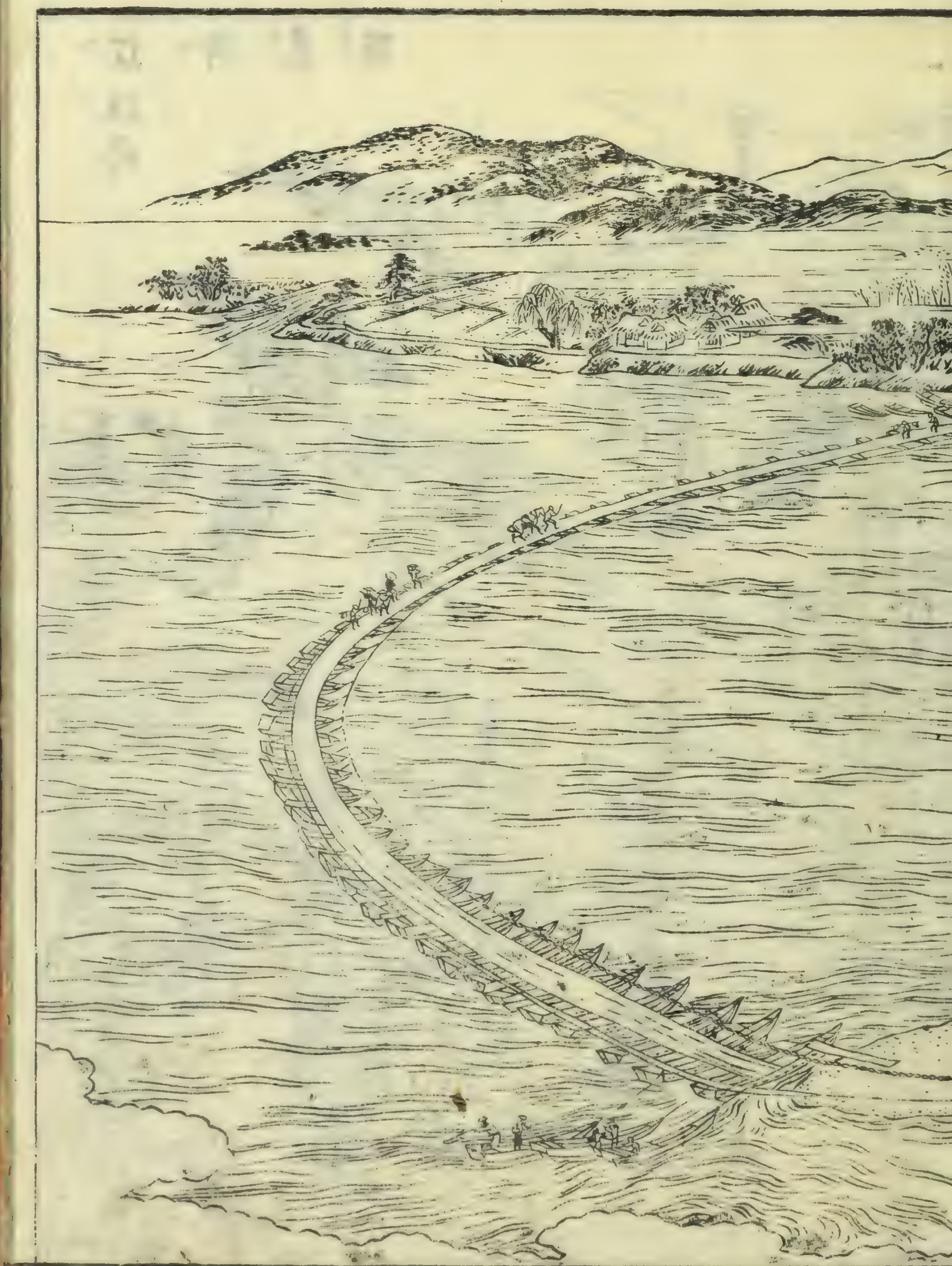

福井九十九橋
橋宗賢
城下町


九十九橋


其二
福井御城



舩橋
舩橋村




柘柾乃御舊蹟
つげのは
親鸞聖人黄楊御舊跡



給ひけるに忽ち一夜のうちに根を生じ葉彌茂く生ひ栄へけり
といひ傳へけり

細呂木鋸坂

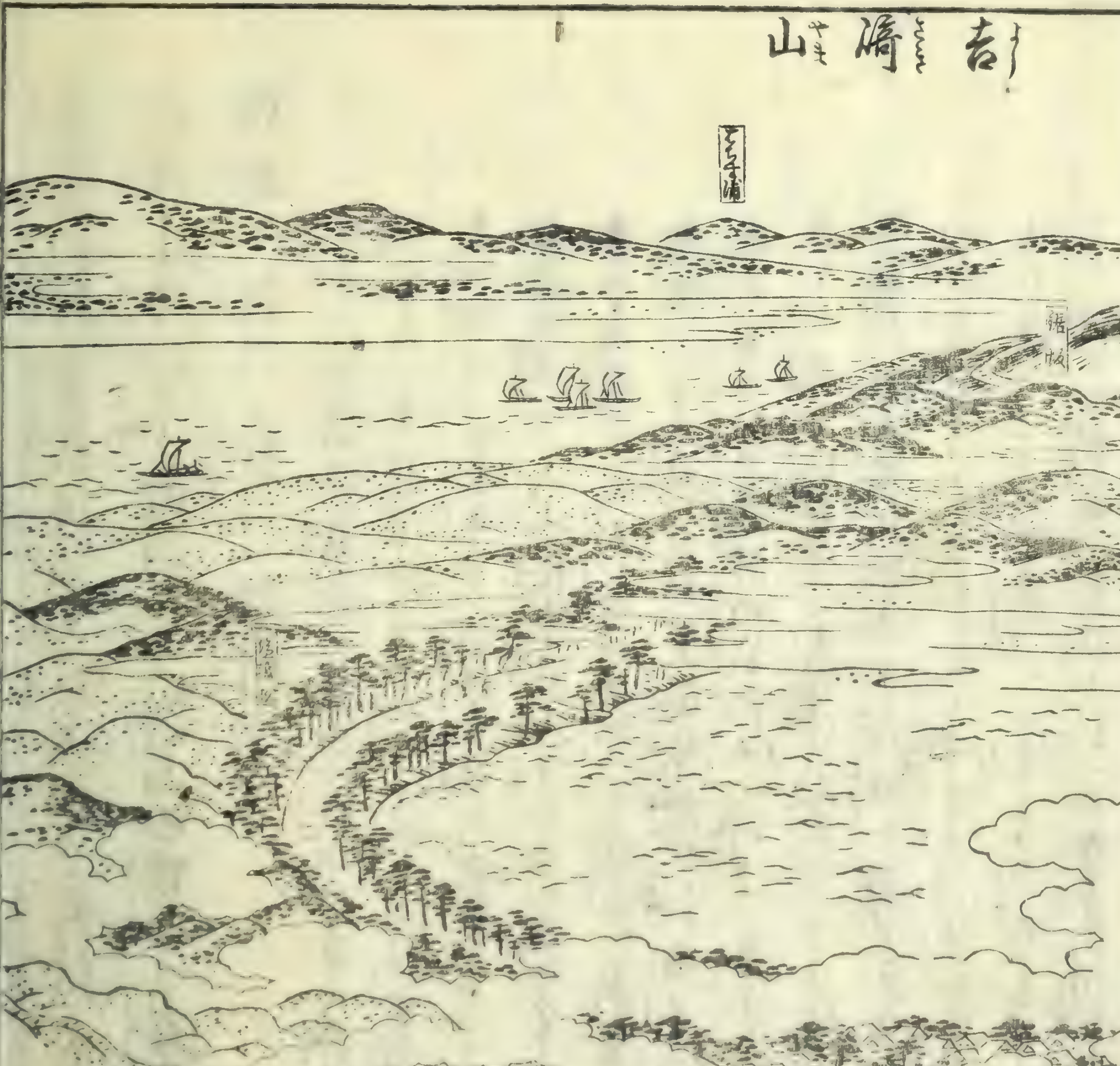
福井より細呂木まで十里此ところに蓮如上人の御舊跡川尻西光寺
あり東御門跡の院家なり

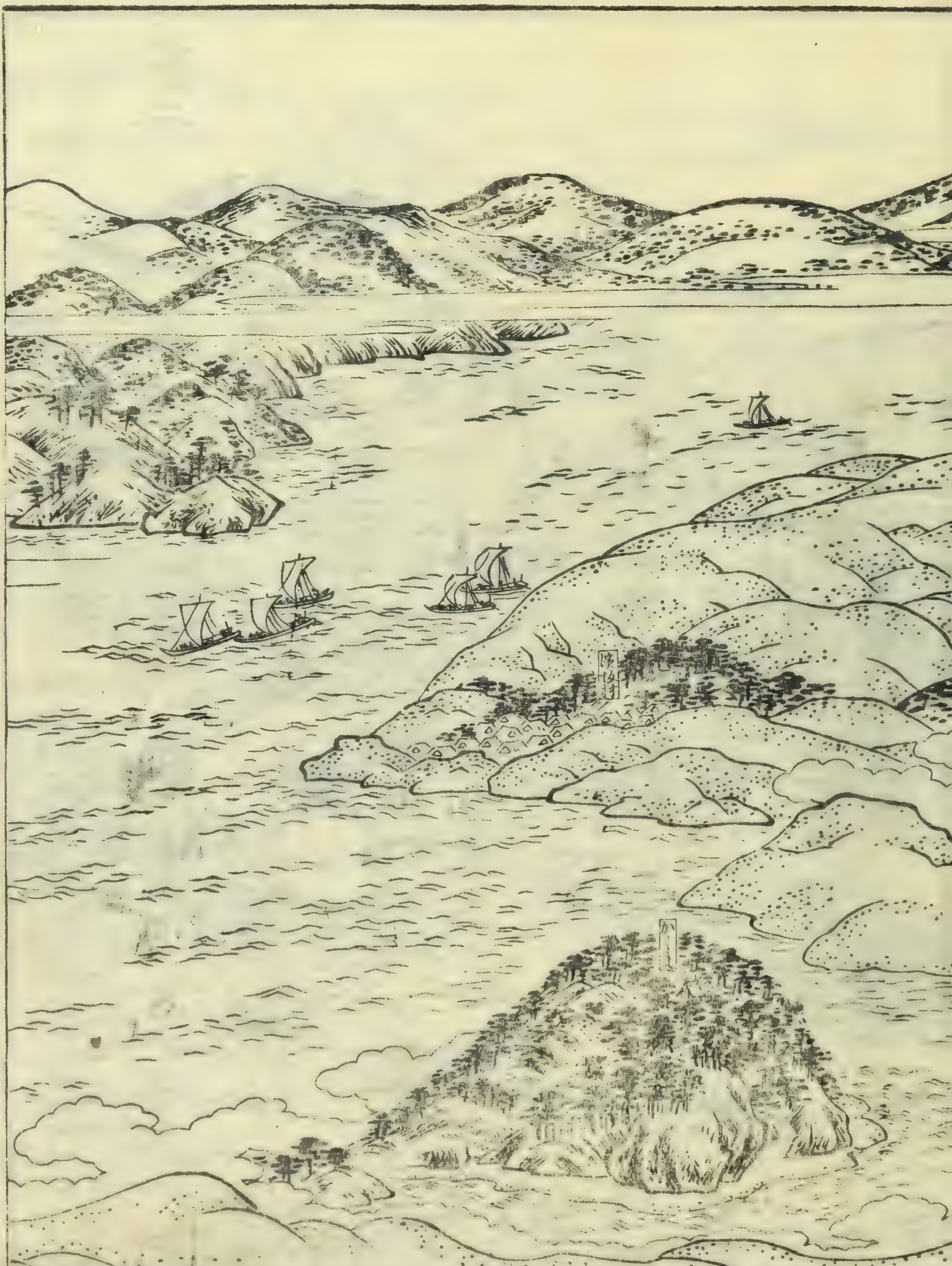
此所越前加賀乃境なり祖師左遷ましませ給ふ時越前の御門
徒衆此坂まで見送りまゐり此に別れまゐらするに聖人權者の
御身なりといへども人々に別れさせ給ふ事さぞかし御名残
おしくや思召けん
跡安く鋸坂に引別れ身の行方ハこゝろ細呂木
とぞ詠じ給ひける舊跡なり

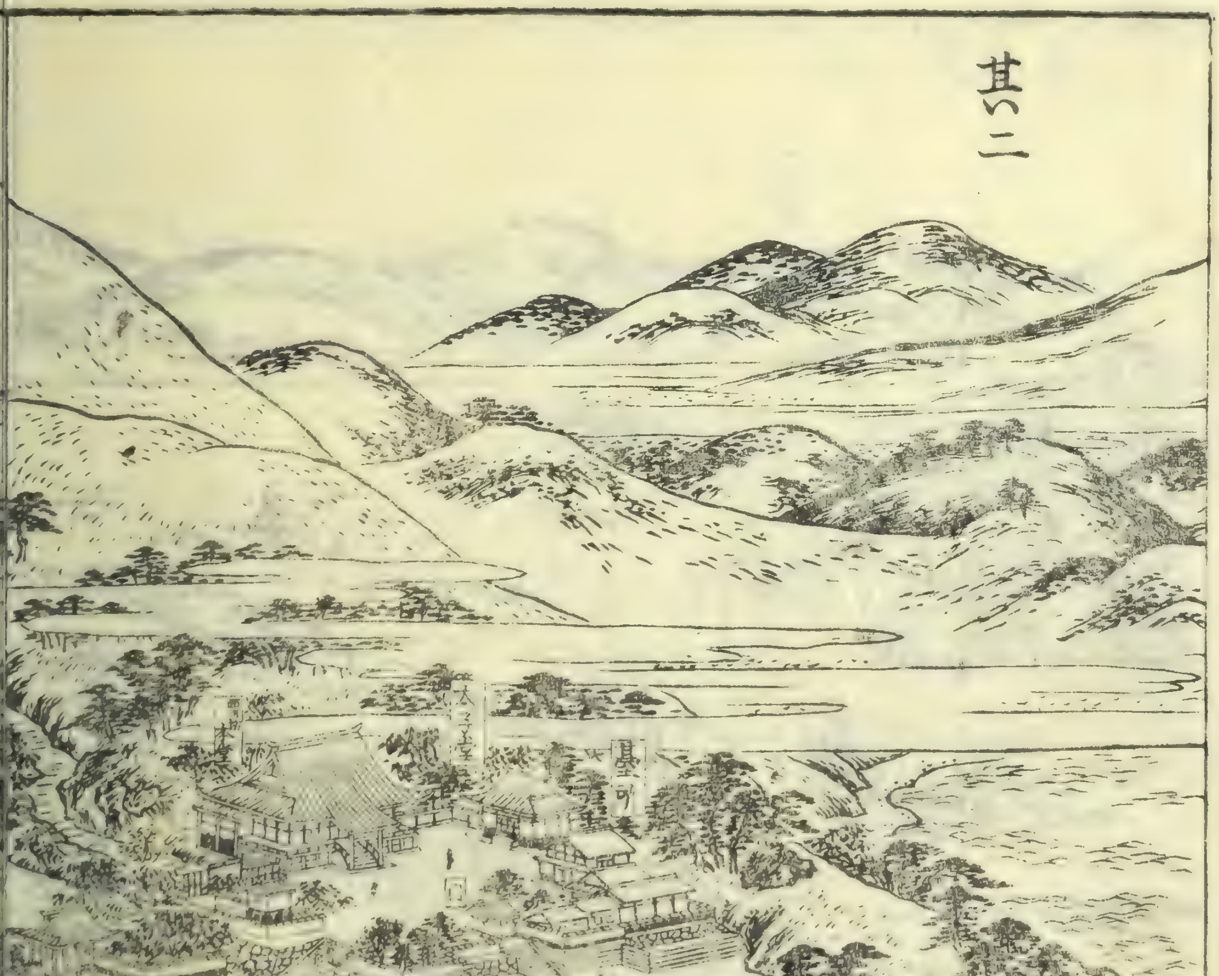
吉崎山

此山ハ本願寺御相承代八第信證院殿蓮如上人文明三年
卯月上旬當國に下向在して御教化ましませ給ふ時國主朝倉彈

正龍湊門尉貞景帰依ある故ありて大施主となり即蓮師乃
開闢し給ひたる御山なり則山の頂上に古の御堂跡ありて蓮
師自ら植給ふ松并に腰掛石あり
吉崎ハ街道乃駅路にはあらざれ共北の方の海辺なり細呂木より山
路を左へ行越前加賀の境にて加賀の塩屋越前三国の海嶋へさし出その
る堀切にして屈曲ある入海吉崎乃麓をめぐり海上には越の小島諏訪
鹿島の社もみえて風景絶えず筆も詞も及ぶべからざれば蓮如上人此地乃清
音にぞ称し給ひ一宇の御堂を造立し朝暮に化導ほしいまゝに
当国ハいふに及ばず加賀能登越中越後其外海山路迩と遠
近乃国々より蓮師の教化にあづからんと老幼男女貴賎も踏
きもあらず群て此吉崎に来詣じ小国乃ありさまひとへに白雲いと深く積つゝ
て谷を埋み路を塞ぎ家を風肌を剥がごときを更に厭ふ事なく吉崎
の群集殿しく寺内ハ更之寺中にも居余り宿雲に夜し風雨にお
も化益の為ときに我身をも忘れ昼夜の畏もなく群集しけるが宮丈
より小国七州の内にはなども絶へぬ繁栄此比ハ室町義政公驕奢に流


吉崎山




其二
本堂
太子堂
吉崎



白山
五本松
ひめ松

速し傾る政事に荒ミ給へバ上下乃土民悉く服ミ老臣等各勢ひを
争ひまくは既に終に山名細川等終に天下の擾乱を起しぬれど應
仁の乱といへり斯る物騒しき世の中なれバ佛をも尊む者なく法を
も信ずる輩は既に稀なるに蓮師の廣徳普くして愚昧の老若男婦
女に至るまで弥陀攝取の御誓ひの難きを信じ参らせ一心專修念佛の行
者となり即得往生の果を得るなり偏に上人乃ありがたき御教化によつて
なり誠に祖師聖人の再来中興開山と崇め奉るも實に故ある哉茲に
の國に二の勝といふ所に兵治といへる貧しき百姓あり妻とともに日ごと
月頃吉崎御坊へ歩を運び蓮如上人の御教化を歓びけるに一人の老母あ
慳貪邪見の性質にて兵治夫婦が稱名を怒び蓮師を謗り是を
を臆ましく怒り罵つて夫婦の者を責て日毎に沙汰何とくかくは忍ぶ
るやさりぬぶにこそしが貧しき身乃姻の立や立さるは心にかけれし
朝には後世を願ふとて家を出夕には法義を歓ぶとて間に費し一人の
母には飢死やさせつらん愛悟坊主の偽言にたらされたり稼ぐ事に
力を盡し世の貧苦を遁れる事を顧りみると兵治を

まづ一向宗の輩ハ帰依し奉る蓮如上人御勧化の御掟と
いはれなきも賤しきも其のまゝが家業大切に精力を盡し昨夜
まぐも家を富し子孫相續して永く法義を喜ぶを信者とは
いはれとかや他力信心の此身を徒に苟崩しうろんハ必の念佛の行
者とはあらじとつたなく教導し給ひぬされバ當流の信心と申すをハ
國に記き義に臥出勝して家業を先へ仕𦫿し其いとまふは法座に
連り称名をも鋭ぶなるれバさかしく家業の隙かとい勤く詣く
ま帰蓮如上人の御化導に預り奉らせてより忽りさく農桃の力と
盡し家業をも未来と勢めてひへバ以前よりも身上の勝手もよく心
を労されるりなされバ身も其のづから怠ひ已し今於人の身とい食
さいはひは病なく治次の歩行もなるし之給りし家内のこと門まく
無量の悪疑を作り給ひんより作りまうりとも名号にあつりとも若知
識の法座に連りみて難き勧化を聴聞し給ひて佛種善因の謂を聞
き隙り多く極楽へ往生を遂給ふべしとま帰諸ともに涙を流しかきく
どれとかめ奉りまれど元や縁なき衆生ハ陪し離しとや弥悪癖の悪



蓮如上人
吉崎御坊にて
勧化し給ふ



念慕を今は謀計をなして夫婦が信心をさまたげんと密に心を巧みけり頃は文明九年三月廿日のことなりしとかや与惣治不用ありて此日より出て家にのこりし妻は暮頃よりいつもの如く吉崎へ参りける老婆是を看て今宵こそ嫁婦一人行けれバ帰る途に待うけいて驚かして吉崎参りを懲さんものと神変の頃より我家を立出産生神の社に納めし鬼女の面を奪取て頭に押当半白の髪を上よりふり乱し白帷子引被るそのさまこそ我身ながらも恐しけれ極心ならぬ女なれ我此有さまみて嫁婦の帰るべき途頃に出て汝蓮如坊が偽りに惑され雑行雑修をすて神仏を蔑るは親乃心にそむくをなして白山権現の命と崇り只今是まで出るぞ邪僻を改め御山参りを止め老母の心に従はずんば夫婦ともに摑て殺さんと罵らば気弱きものゝいかでか是を怖ざらんや因に物を見隠しとて今やおそしと待居たる廿日の月の東の空にさし登りける亥の剋ぞかし与惣治が妻は唯独り弥陀乃御名号唱へつゝ我家をさして帰る途に待うけゝる事なれハ藪の中より母はそろ/\と歩みより踊り出んとせしがかゞ衣の裾の荊に引かゝり少し間どる手間に嫁婦

は悲しと見えけりもせじ一さんに走り去らう詞に老婆は心怯り功しかりの後
うすまなしかるこそ本意なしと繊荊をさんぐに踏きたるの夜こそ心の
まゝに踏りさんとて憎し面を放さんとすれども大力離さじこれいかにとく
悩猿ぎ諸手に力をまりせて引きもさうに動くべくもなく今はもや耳鼻
もひしくと肉につきて生きつきたる鬼女とはなりぬ浅ましと身もだへ
をする程に手足もくくと身は枯木の生へたるごとく一足も行かず体わだかまり
まだかきれしく立居かれ詮方なくぞこゝへ幾夜か家婦は知らずの心し
夫霧かくまで落り踏き宿に帰りされど老婆のこゝへ踏かざるはいかにと行
給ひしやと立て看居て見まもるかぎらぬに無念と立ちけり妻の物がたり
に聞きいうかはせんと案じゝけりしが是は何とてもまたと申しまた婦
逢ふて参るものを今宵は唯一人女の身の夜ふけて帰り来らん
と心元なくと思ひ給ひ迎ひにとそ出給ひしをまことは走りて怒りて
迎ひけりしはのあらん先まちちに継で婦人を見ればとして夫婦
が憐急ぎ来りしに彼行藪の所に立居るものありと無沼なりけ
て婦人はそれかとかざるかとふに我こそ婦なるぞとさめくと泣す



嫁おどし
谷乃由来



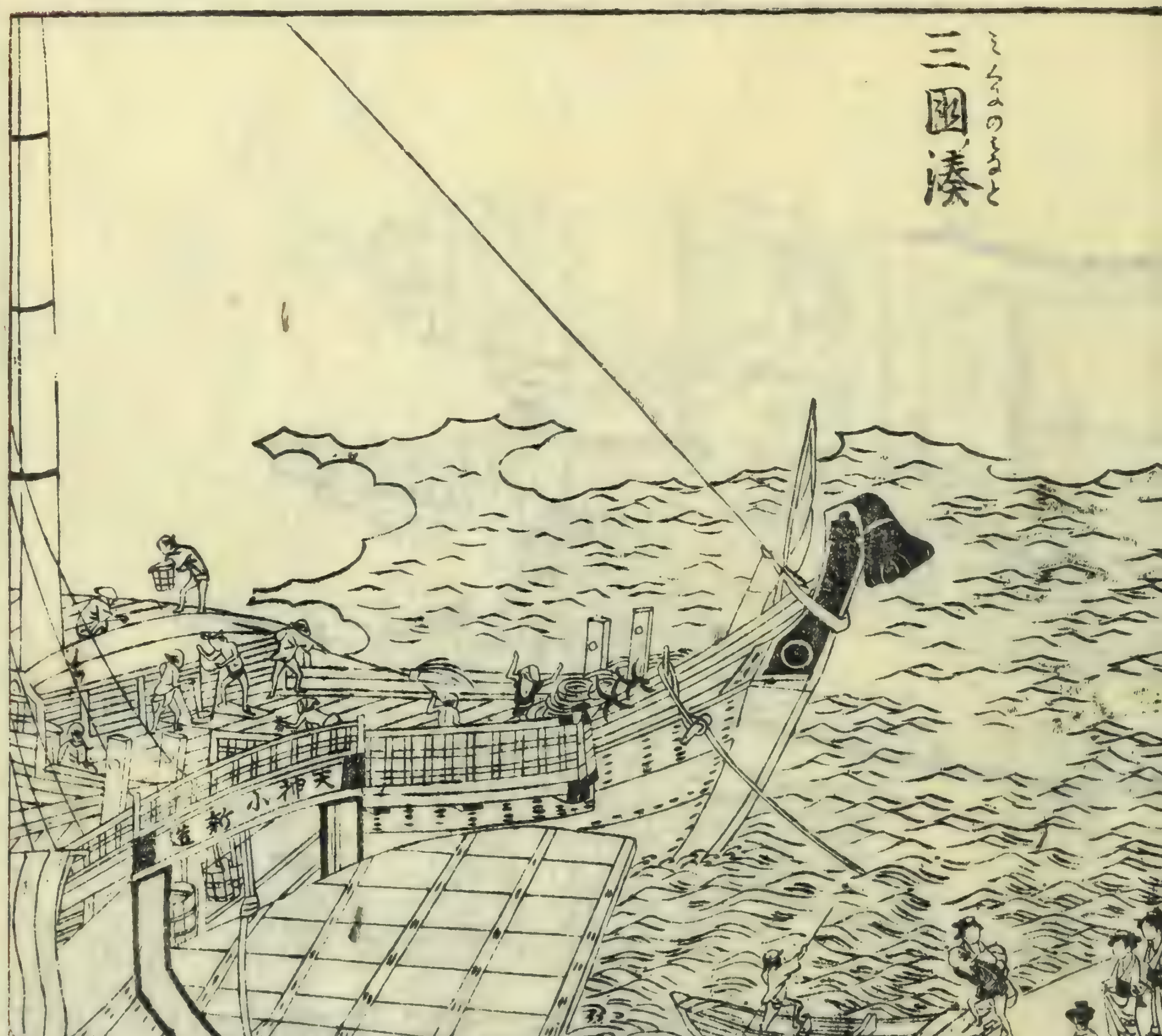
たる故業りよりもよくこれば心しく姿は老婆なれども頭に角生ひ恐
敷目付見出し斯る後の髪肩にかかりまがふべくもあらぬ鬼女なり
されどこれ浅ましく何として斯る悪念に捕はれ此病苦に只独まよひた
まふとしもろくとして暮らしければ老婆を渡ととどめられて翁かしきいは
極なからぬ是れ蓮如上人の御罰にて生ながらの鬼女となりけるや
我いかなる前世の宿業にや仏縁薄く浅ま婦が此剛の信心深く
往生讃嘆の称名のいまはしくいとふにもして此信心を謗さんとかくる浅
ましき姿に立出家嫁の名をうりを押ぞふるし懲さんと待居たるに恐
しや自業自得の理りにて被きし面のひしと付から動せども
更に離れざれば悪業の源に我なれば只此事に捨置て邪見の者
の見ん懲しめにせよやとき雨やさめと涙なれば是嫁の次第はゐのしさは
云ん方なく根深ましの御身の果にて候ふぞや此世さへかくし捕る
鬼女となり来世を何とし給ふらんと大地に伏ひしきに血の涙をたる
ばして歎きけるが嫁無治姑に向ひて申せし様にはたとへ継悪業
も懺悔すれば滅するとや宿縁当時吉崎の御坊に在す蓮如上人こそ

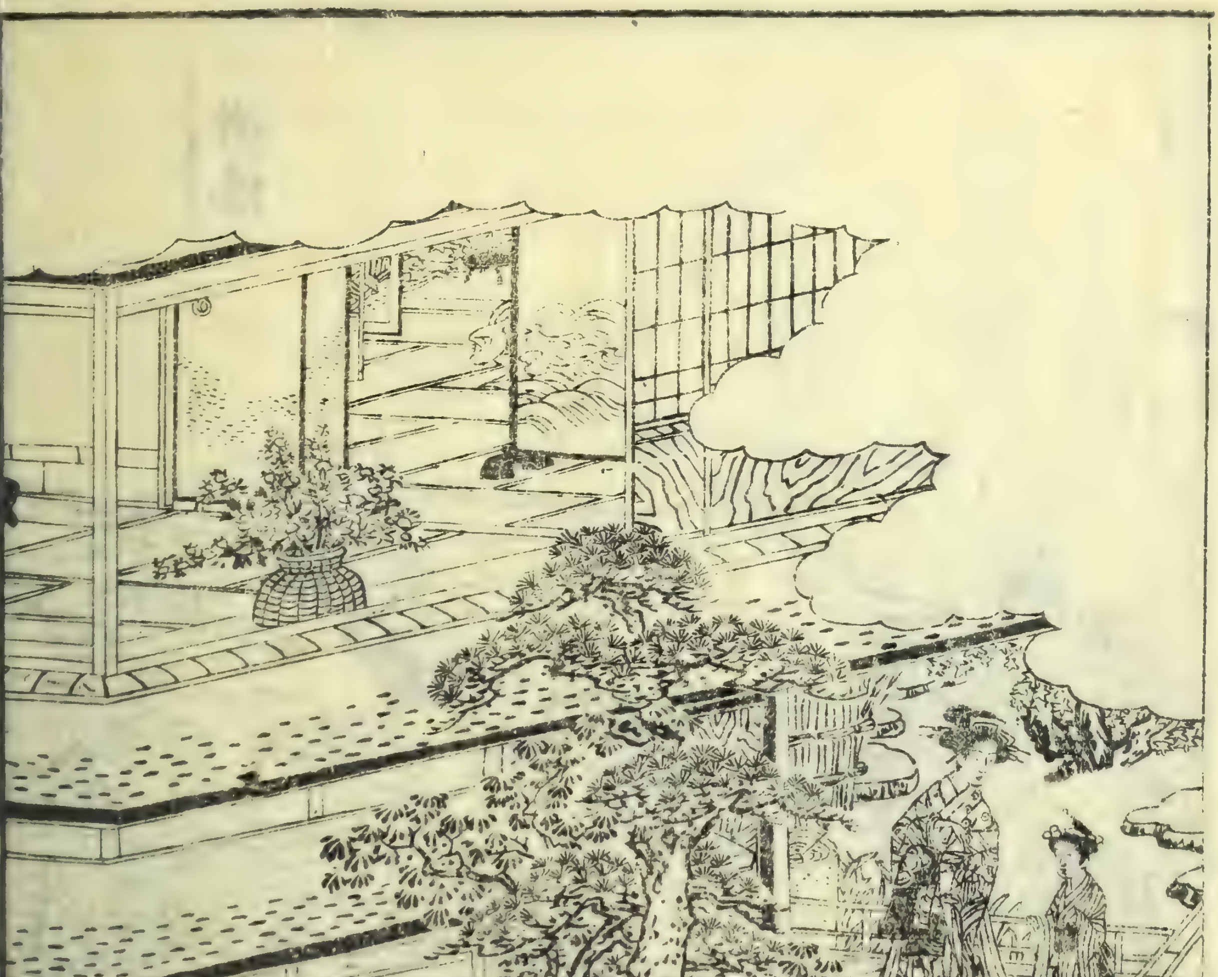
祖師再来の善知識なれば是より御山へ参詣し上人の勧化をも
聴聞し給ひ此世ハたとへ鬼ともなれ蛇身ともなれ未来成佛こそ此上の
肝要なれとかきくどきて勧め玉へばさしも慳貪邪見なりし悪女なれど
かゝる例なき罪業の深きことを顧て忽ち一念発起して先非を悔ミ後生
を願ふ心となりしが両手を合せ宗祖聖人御影の蓮如上人許させ給へ南
無阿弥陀佛ゝゝと高声に念佛しけるが不思議なるかな鬼女の面破羅
々と地に落ちてしどろなる手足も動き始めて旧の老母とはなりぬ於る
不思議を見るよりは誰か信心の発起せざらんやいかなる雅や幼稚なるも老
母の鬼と化したるも廣大無辺大慈大悲の御力に依りて佛とも法とも乗
へぬ浅ましき我々を摂取して捨給はぬ如来の御誓の尊とさよこれ此上ハ
佛恩報謝の念佛こそいよゝ後世のたのみなりと親子夫婦三人法
をも鎖ざす限りなく直に吉崎へ参りつゝ蓮如上人に謁しまゐらせ
のはしを御物語り申上御教化を親ひまつるに上人不斜歓びたまひ
さましく勧化ありて世に附る老母の中なる御詞のごとく我が子世を
教ゑき懐き貌に秘て上人の御勧化御法遊の端をも踏ど只家々のこ

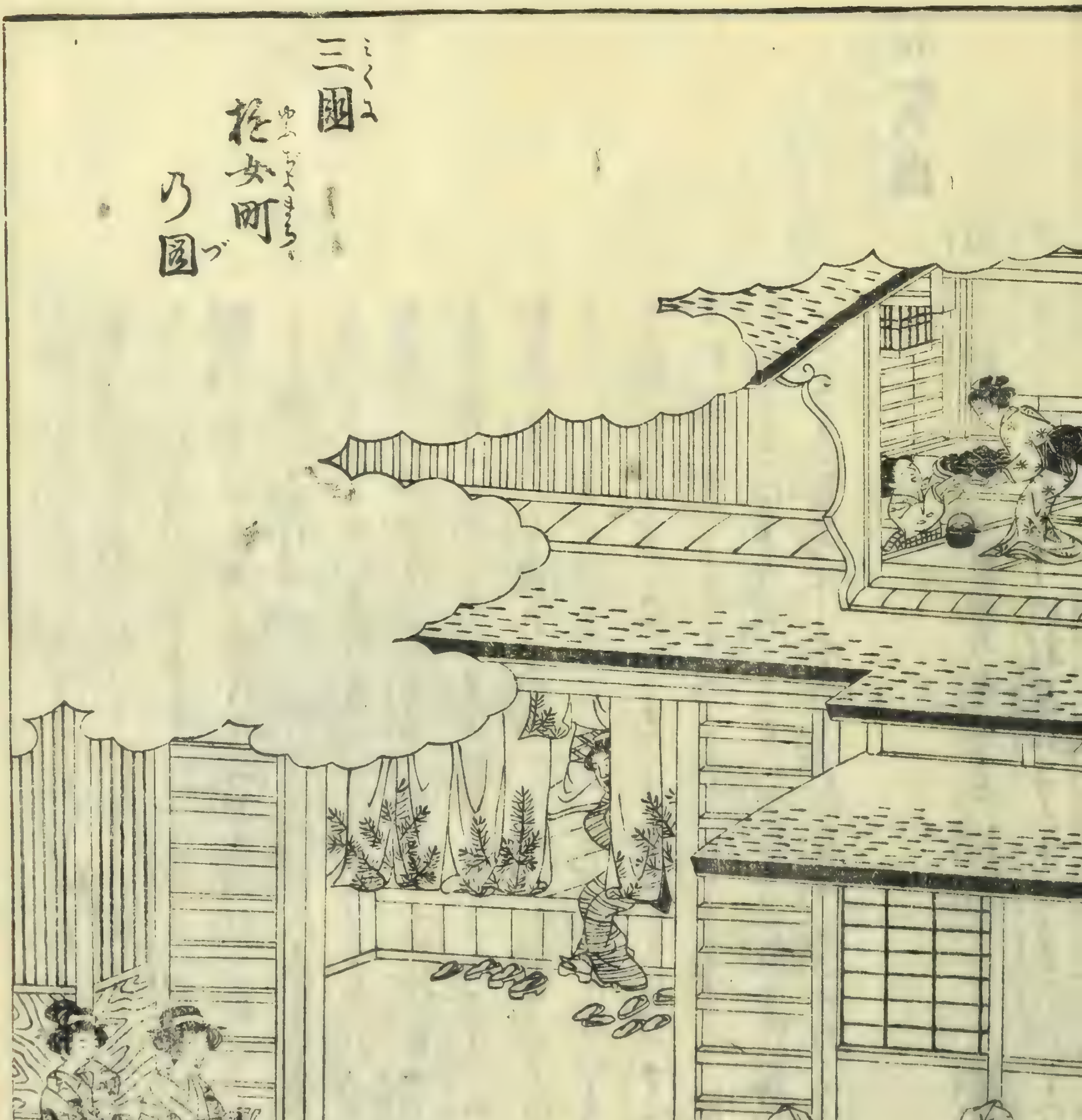

西光寺
さいくわうじ
本堂
川尻

ありて人乃貌の見婿を嫉しく今宗風繁昌し上人の化益に依て参り
集る諸國の男女幾千萬とは知られねども我に勝れる悪女もなかりしに
だ宗議を喜び御化益を聴聞せらるゝ名のみにて己がむくうち殺勢を合に
りんきするものゝうらみんすどもはもつへね悪念の起りあられ御坊へ参詣せば
人の絶よかしと思ひゐしより嫉き心より生ながら鬼女となりたる悪人
にてさふらへ共悪業の我にてありても如来の御慈悲上人の御化導に
まて未来乃苦患をまぬがれ後生は極楽に生をとぐべき御法のはて
御示し給はれかしと深くかんじて懺悔しけれバ上人おほきにも殊勝のよ
まに思召此世の貌醜き五障三従の悪女なりとも一念発起し助け給へ
と一度如来を頼み奉れバ濁れる泥の中より蓮花のいさぎよく咲
出るごとく未来ハ極楽浄土に往生せんこと更に疑ひあるべからずとて
御文一章を撰述し給ひ彼老婢にあたへ給ひぬ則吉崎の御文第五帖乃
中に極楽へ参りて成仏となるべきなりと仰せ給へし嫁を憎
足ましまし御文言は今に現然たり是より彼竹藪のかげにしげりを
嫁おどし谷と号け老婢が被むりし鬼女の面も其所に残るとかや




三國湊（みくにのみなと）




三國
遊女町
乃図

○三国は坂井郡の川口にありて商賈の家居を軒を並とつて繁昌を
並べ諸国の商船繁しく入津し此海岸に艘を繋ぎ碇をおろし日和
をまつは旅客の遊宴を事とし殊に小国第一の大湊なり三国の傾
城町は古き名所にて今も出村と町地並町など多くの遊君花のお
よく装ひ糸竹の調も都めきて旅人の憂を忘るゝによし此里
に勝谷寺といへるあり寺門に大きなる糸桜ありて弥生の頃
当国の領主加賀の太守金沢よりの遊客妓女を携へ来りて
花を賞じ宴をなし宴に臨みて興ある物がたりあり此川の流にかかれ
加賀の客人金銀の扇あまたに或は詩歌あるひは俳諧の発句など
うつくしく書て桜糸ざくらに結び付己が知る妓婦もまた訓
き遊君も是をよろこびとぞ遊女の中より短冊に書
て新造の女郎にしてこれを梢に付させしより其名に風つたふ花にあふぎの
不絶る此殊なる眞ざまされてより都までも顕れし其のこと面白く遊
かゝり此殊なるせし女郎は出村の廓ときせ川といへる遊君へとぞ

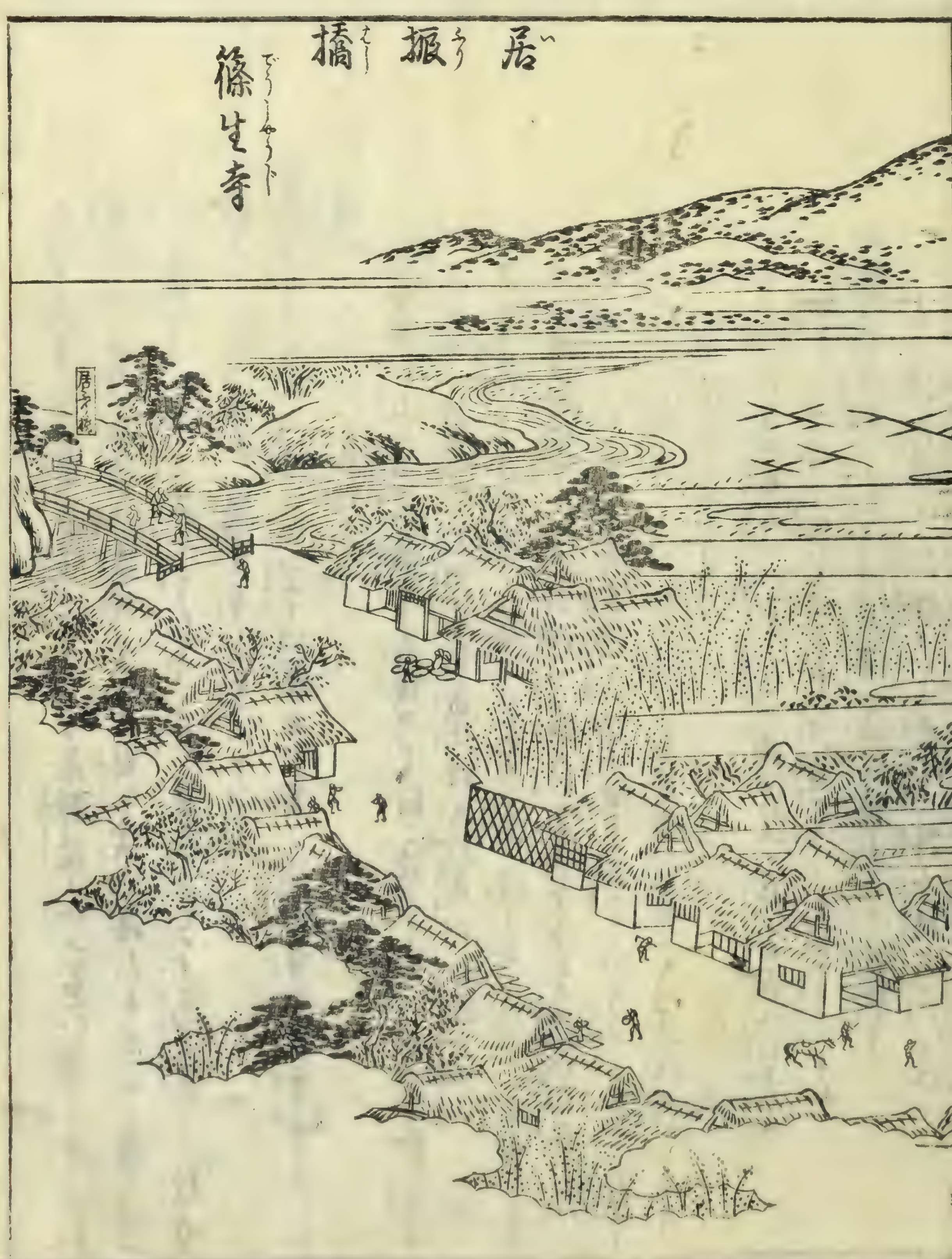
加賀国

○越前福井より加賀の大聖寺を経て十一里大聖寺より一里ばかり
西山田村といふ所あり此村蓮如上人御息男勝誓大徳の御末孫武兵衛



蓮如上人に笹粽を供る


本堂



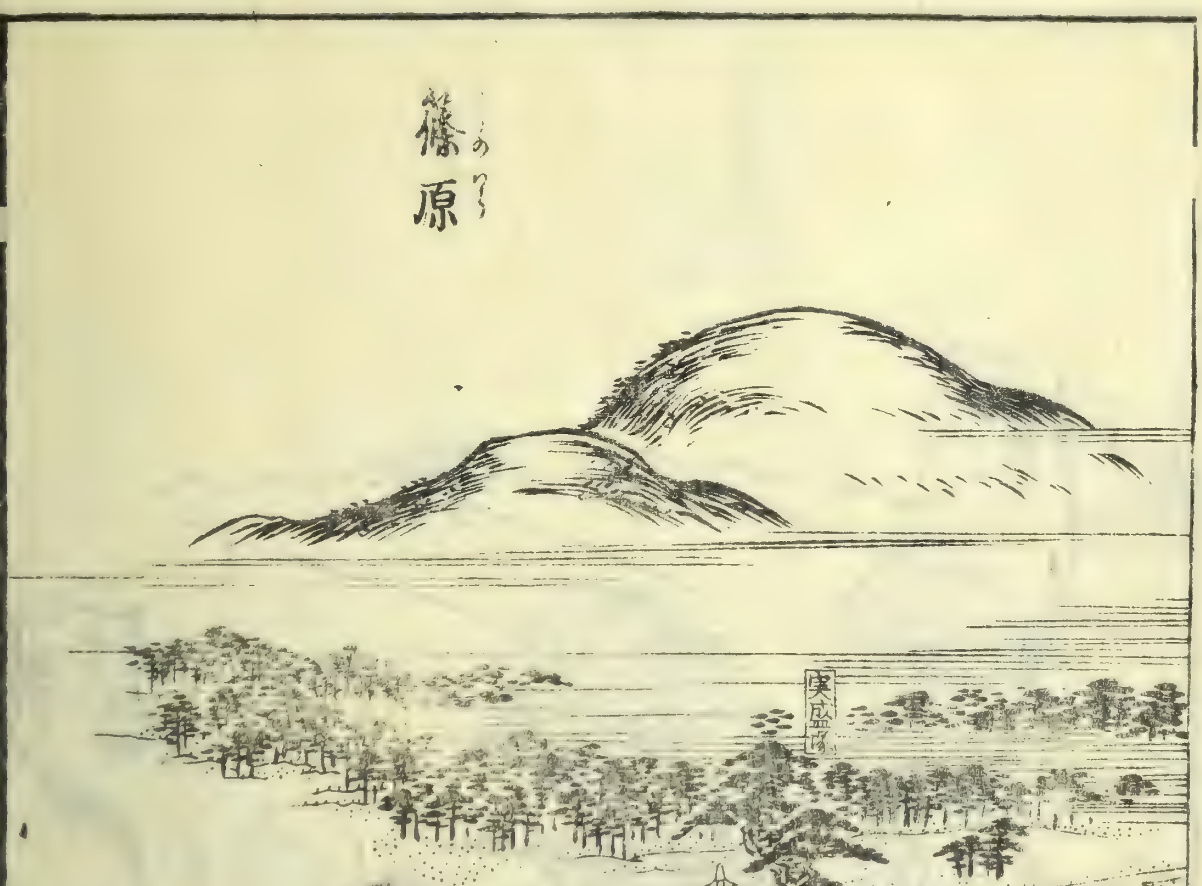
居振橋
篠生寺

といへる民家あり家より又一里ばかり居振橋といふ所に篠生寺といふ
蓮如上人の御旧跡あり蓮師家まで粽を食し給ひ包みたる篠を地に
さし給ひしに忽ち根を生じ今に其篠ありて葉先に巻たる粽の
痕ありといへり故に篠生寺と号けるとかや
○大聖寺より三里ばかりして山中の湯あり家に西照寺といふ寺あり是も
蓮如上人の御旧跡なり
○加賀國白山は越前越中飛騨の四ヶ國に跨る高山也二十四嶺巡る
山はあまたありといへども越前國義久村九頭竜川船橋の渡よりへいせんじ道に
見ゆる常に白雪深く積り富士の雪の消る日はなしとし白山の雪
まことに高き事はしといへり山頂に千蛇が池とて大なる池あり緑水山岸を浸し
其深さをしるべからず故に一名緑が池ともいへり此あたりに青き花咲
百合のごとく艶花ともいはしけり紫紺伊吹冊葉又菊擬姫とまう
白山権現と崇め奉る
○越前と加賀の國界の入江を蓮の浦といふて歌名所也古哥に
〽罪ふかき身は細ろふやと吉崎の蓮のうらは行てふらん
○加賀國立花の宿より北の浦と竹の浦といへり古歌に
〽吉崎の竹のうら風吹そへて素藤に拂ふ秋の一ふし


白山遠望


齋藤別當
實盛




篠原
実盛塚

但馬興宗寺　東流

本尊阿弥陀如来ハ慈覚大師乃御作也越前福井興宗寺と　越前福井より十一里半加賀江沼郡月津の里にあり

同系の寺なりといへり

○月津の里より一里半西の方海辺に篠原といへる所あり斎藤別当実盛が鬢髪を墨に染討死せし古戦場なり道の傍に実盛の塚あり俊成卿の哥に

世乃中ハ涙ふりしげき篠原や旗はしなきハ妹ゆふさゝ西

鳳凰山本覚寺　東流院家　月津より二里能美郡小松にあり

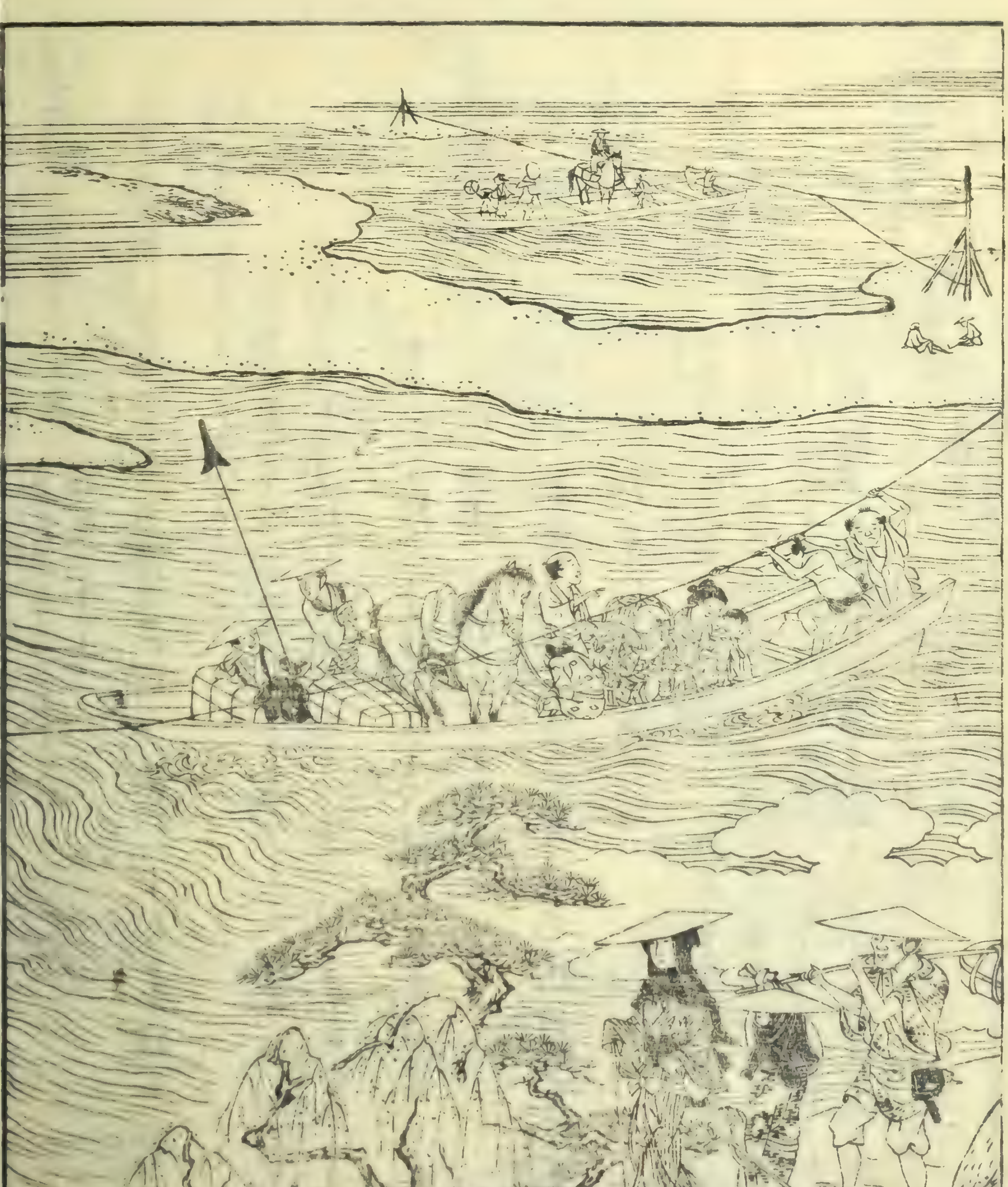
本堂九間四面高祖聖人蓮如上人連座の御影を安置せり○越

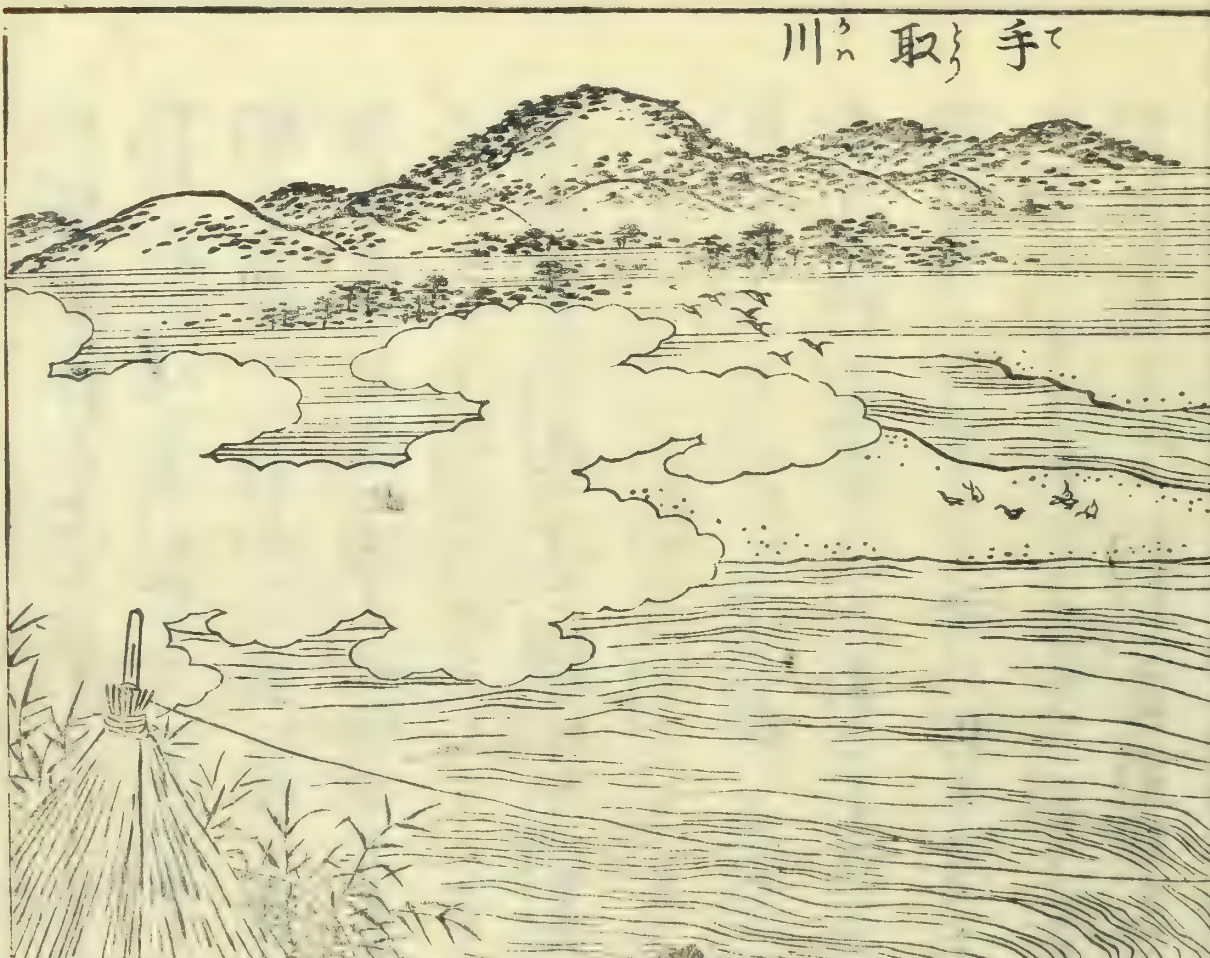
前福井本覚寺と同系の寺なり

○同系に養泉寺といふあり是ハ蓮如上人乃御弟子了珍の寺跡なり

○小松と湊の間に手取川といふ大川あり川幅凡一里ばかり水の流れ矢を射るごとく船流されて渡る事かなはず此故に川の両岸に綱を引渡し渡し守櫓楫をもちひず此綱を手操りて向ふの方へ渡るなり

坂本山本誓寺　東流院家　小松より三里半石川郡松任にあり

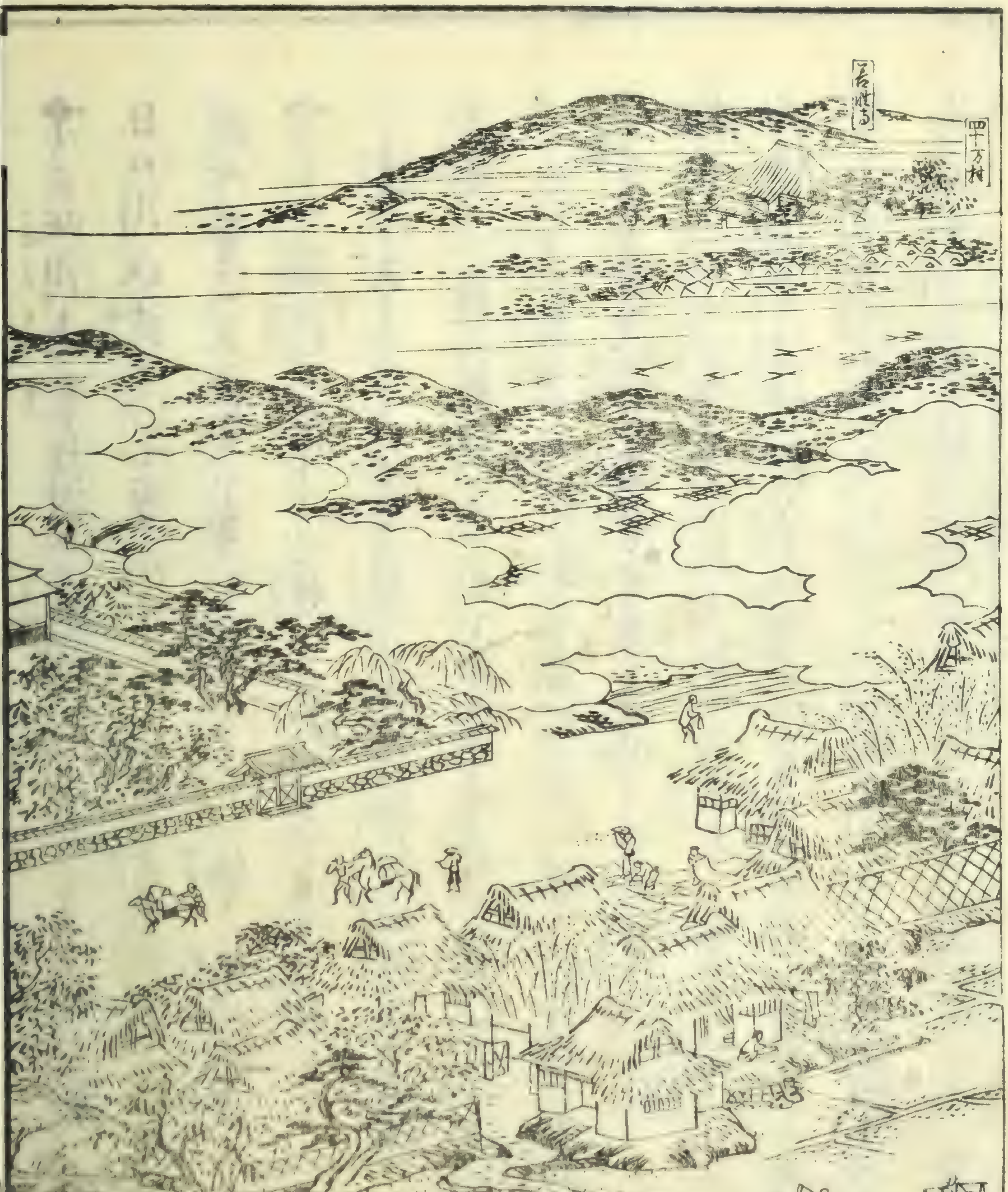




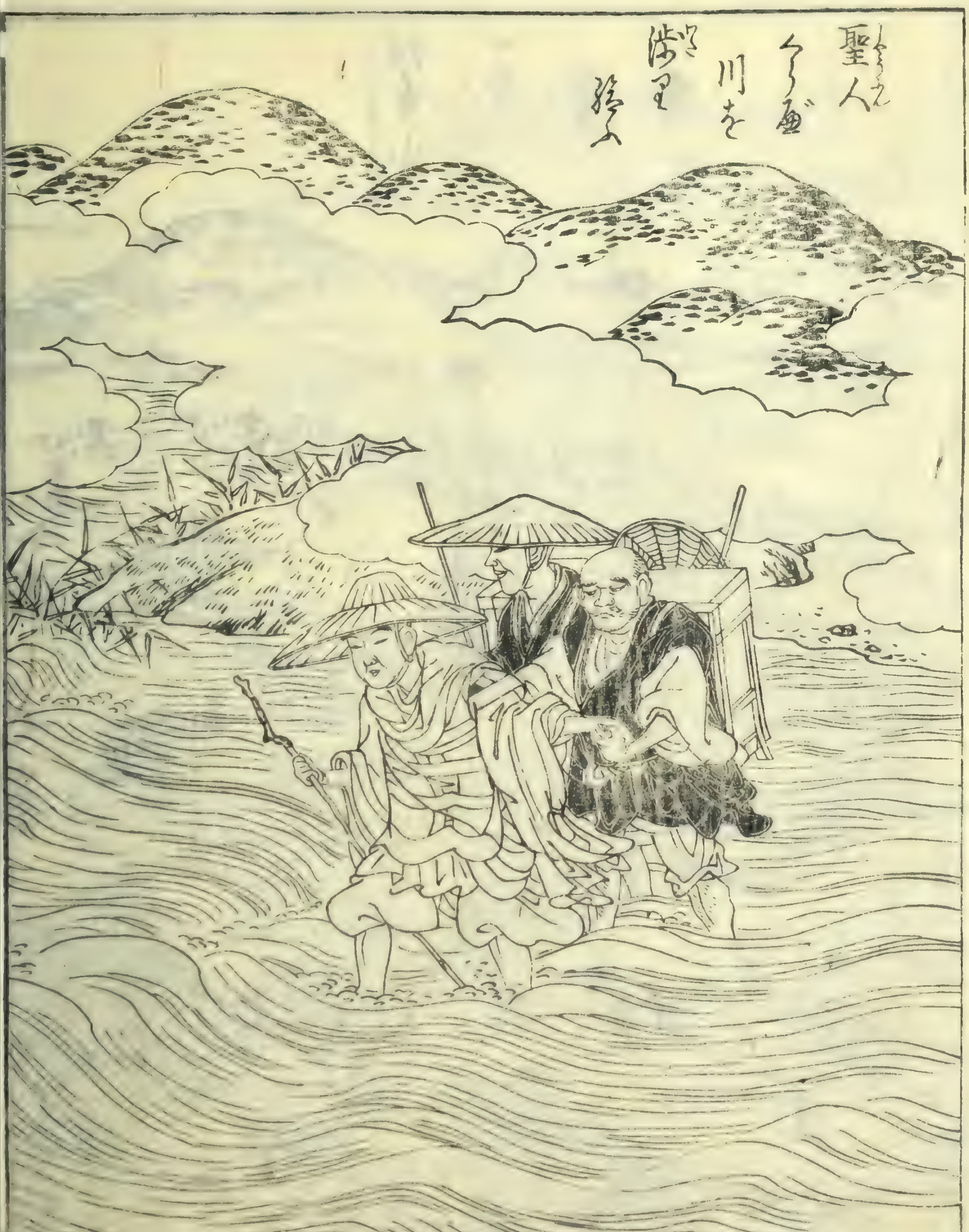
手取川

本誓寺は往古天台圓宗乃精舎なりしが高祖聖人に皈依し
て本宗を改め浄土真宗の霊場となり今東本願寺御門
跡の院家となり本堂九間四面本尊は傳教大師の御作なり
抑當寺の濫觴を尋ぬるに往古天台宗乃碩徳圓政上人開闢
志給ひてより以来代々天台宗の寺にてありけるが嘉元元年の春
高祖聖人越後へ御下向の時寺務圓貞法師夢に會釈の菩薩
寺に入せ給ふと見てこれ正しく權化なるべしと思ふ折節聖人越
後へ下向し給ふよしを傳へ聞て其高徳を慕ひける處乃
夢想は親鸞聖人の御事なるべしと悟り倉部川ほとりまで
出向へ待ちけるに果して聖人川を渡り来らせ給ふ圓貞法師聖人
に謁し奉り我寺に請じ来らせ度よしを乞ひければ聖人其
宗旨を易給ふに圓貞法師天台宗なりけるを善に极謹てや以

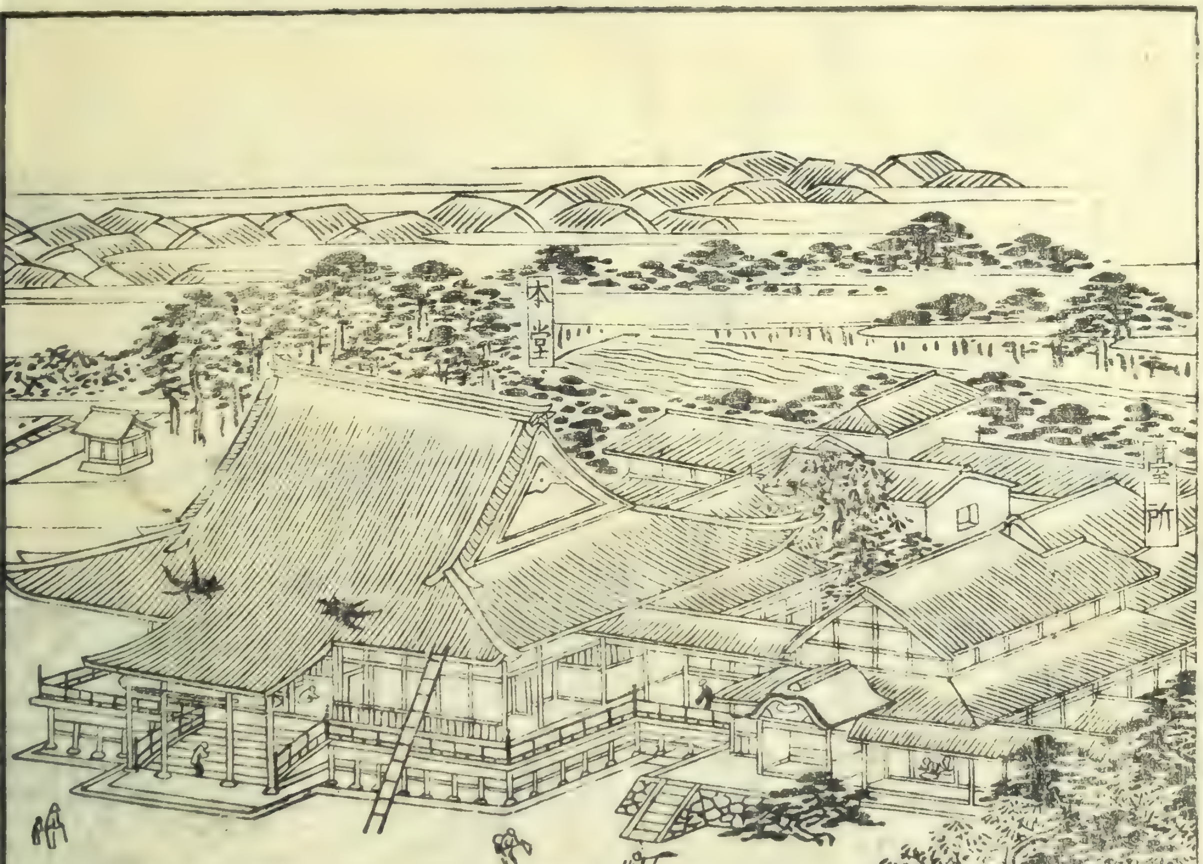
其れ此川の高き時は遥川下へまはりてこそ越がたきに今
日は川水浅くして聖人やすく渉り来らせ給ひければこそ
我今聖人に値ふ事を得たりこれ偏に法縁の浅からざるか
やとて感涙を落して歓びければ聖人聞し召
法の為まゐりしが遠き競川穢土は松径近渉しつるぞ
と詠じ給ひ難行易行とくらべ見る時は難行なる川ともなる
がごとし易行道は渡し船に乗て速く誠るが如し是に横超の直道
と号く弥陀仏は安楽世界に在して衆生を待給ふとや
彼土に到て心を安んじぬるものなりと御教化ありせらるゝ
是れば圓貞法師随喜の涙にむせび聖人を我寺に屈請し
まつり聞法随喜して本宗を廃し御弟子となり真宗に皈して
今に数百歳相続せり○霊宝には聖人御真筆六字名号


善性寺
四十万村


坂本山本誓寺
本堂
玄関
鐘楼


聖人
川を
渉り給ふ




墓所
本堂
太鼓楼
寺内


金澤
東流御坊
鐘堂
門
茶所


本堂
玄関
太鼓樓
臺所


金澤
西流御坊
寺中
鐘樓
門
寺内町


専光寺
本堂
門

○同御真筆光明本○二歳太子の像 聖人御作 ○御繪傳二幅 土佐光信筆
覺如上人御裏書○太子傳五幅 金岡の筆 ○いろは歌懸物 蓮如上人御筆
○従覚開基圓政上人の木像
○松任より一里半行て(?)十万村の善照寺といふあり蓮如上人の御舊跡なり
金澤東派御坊 松任より二里半
本堂二十三間四方
同 西派御坊
本堂十五間四方
専光寺 東派院家 金沢城下にあり
開基は信念上人本堂十三間四面本尊は弥陀佛太鳥佛師の作也
○九字十字の名号は聖人御真筆を傳来ス
○光教寺 西派 同所江沼郡山田にあり


松扉山
幸泉寺
蓮如塔
本堂
梅の木


白山
宝寿
二又村

当寺又光闡坊と号く蓮如上人の御連枝蓮誓法印の開基なり

○松廉山本誓寺 東派 院家 金沢より三里二丈村にあり

当寺は蓮如上人開闢し給ふ霊場にして本堂九間に面の即蓮如上人自ら彫らせ給ふ座あり又広庭に梅の古木あり是れ蓮如上人の挿木給ふ所なり

二十四輩順拝圖會巻之二終

二十四輩順拜圖會

越中
越後

三

目録

巨多之濵　國分寺　大塲村御田跡
光源寺　本誓寺　浄興寺
川獺名号　常敬寺　性宗寺
東流御坊
以上

越中國

加賀の金沢より越中今石動まで七里半両國の境を猿馬場といふ礪波山倶利伽羅峠の嶮岨なり此所は往昔寿永二年木曽義仲此國に義兵を揚げ都をさして討登る小平家十余万の大軍を鏖にせし古跡なり右の方を源氏が峯と唱へて即義仲の陣所の跡あり道の側に八幡宮あり義仲手書大夫坊覚明に命じて願書を書しめ当社に納め平家追討を祈られし事を木曽の願書とて今に傳来せりといへり

廓龍山善徳寺

東派御坊 本寺なり 加賀の國二俣の宿より越中福光を経て行程八里城端にあり此所より越中へ入るには倶利伽羅峠と越へて二里難所にして茱礀のごとき谷間を通行して大難所の泥路なり

当寺は本願寺第八世蓮如上人文明三年越前吉崎に御在住の砌草創ありける阿弥陀如来 恵心の作 十字名号 開山聖人御真筆 聖人御親筆の七高僧御影 蓮如上人御真筆 其余宗霊宝数品これを略す 当地の北に谷ありて出水に様なり名付て念仏谷といふ又西に流れ出るに毎夜瑞光を現じ名づけて焼明ヶ淵といふ 天正の始め織田信長本願寺と矛楯の砌附近の住職照蓮院石山籠城に比類なき働きあり其功浅

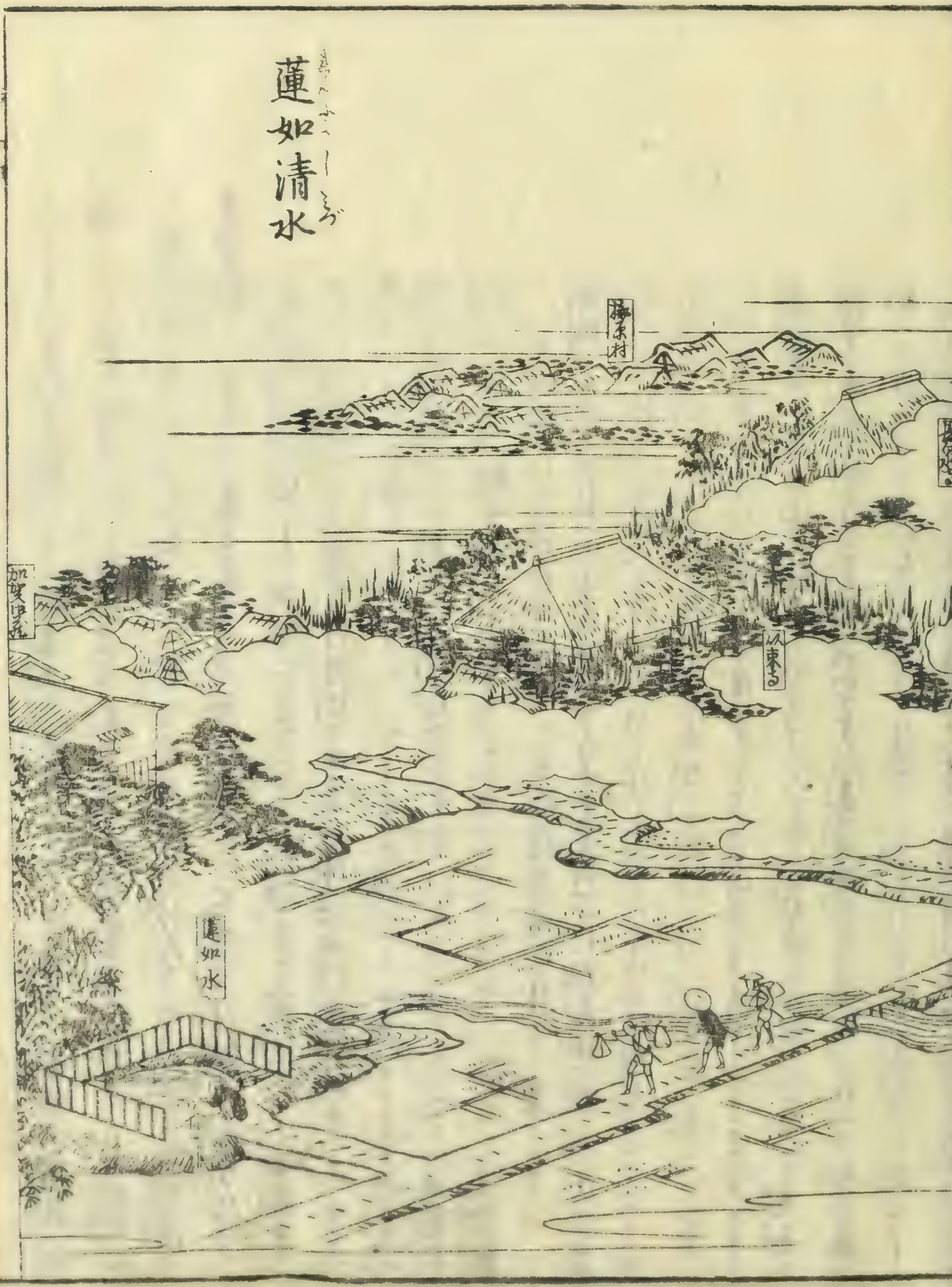

宝坂峠（たからさかとうげ）




廓龍山(くわくりうざん)
善徳寺(ぜんとくじ)
本堂
玄関




祐斎塚
新町

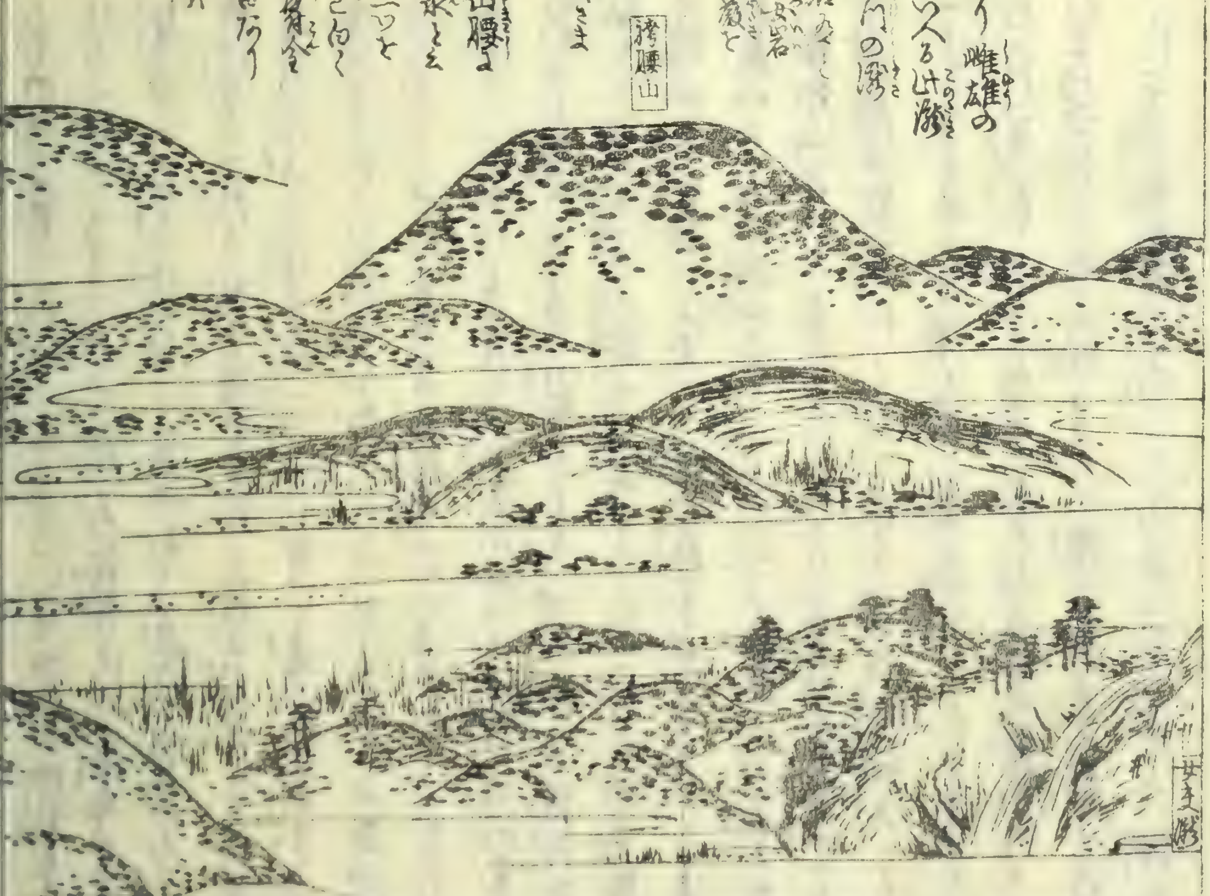

蓮如清水
蓮如水

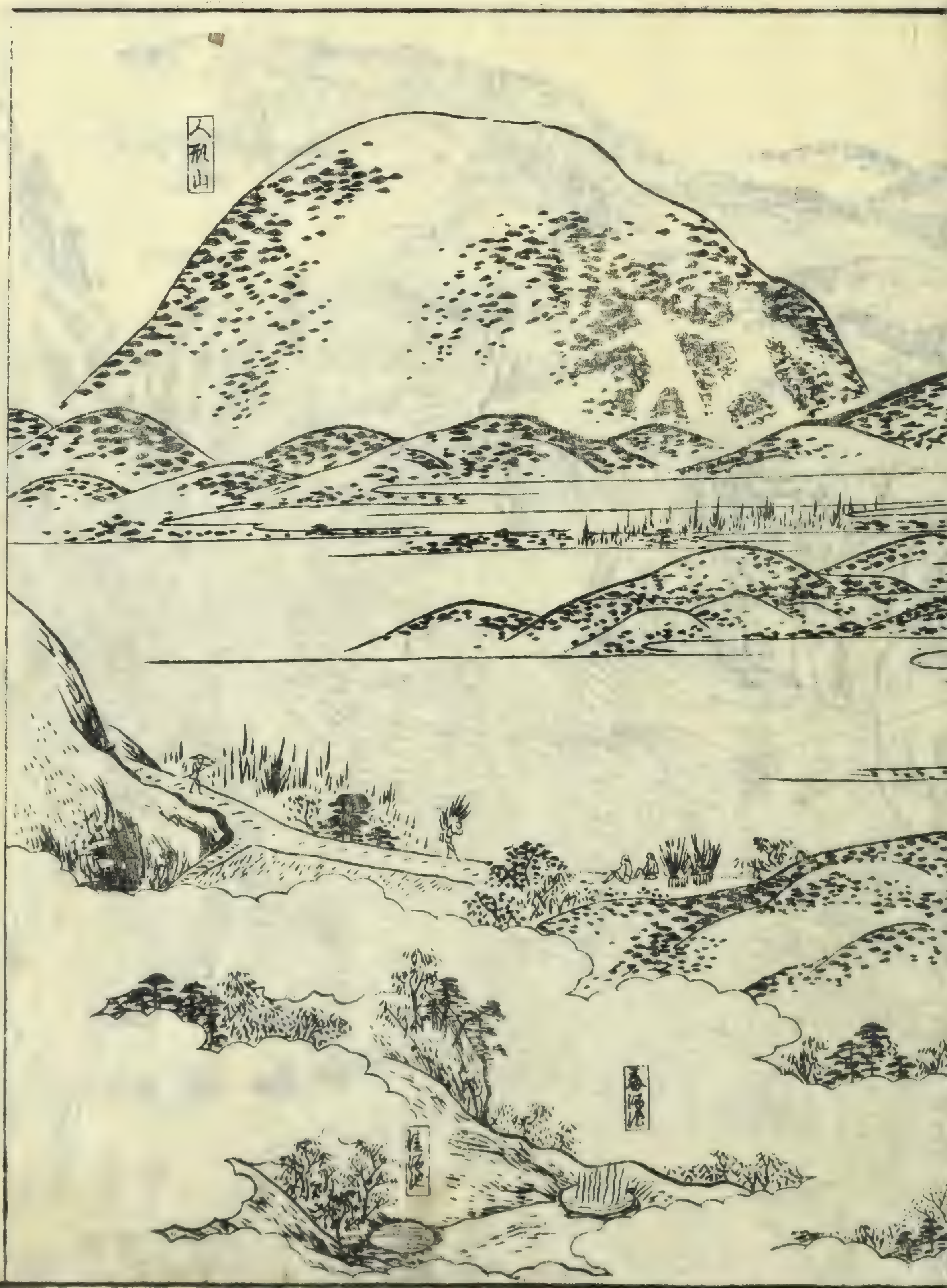
うらぶれて教如上人御自作の蓮如上人乃御像并に数通の感状を
賜ひ同十年三月下旬教如上人摂楽使法播富数依役宮へ寄る御供に
て此地へ下向ましく當寺に数日御滞留御化導ありて貴賎群詣を
なしける縁より東本願寺乃御坊となして今に法脈を相続せり
此寺に城端蒔絵とて金銀を用ひずさまの漆にて蒔絵せし古物あり
文明年間蓮如上人越中御経田の時宗右衛門の門徒に祐玄といふもの
ありし上人に随身して仕へまゐらせしが其孫治五右衛門なる者泥蒔絵
侍りて後明人に逢ひて此蒔絵の法を習ひ越に帰て是を仕て世業とし
其画工のまゝ數百年にいたれどもやゝかへりて[illegible]世人のみ知る[illegible]
し重宝とせしとぞ今になほ其子孫其法を伝へて業とせり
城端より一里余東北に宗守村といへる其寺に接木塚の遺あり
あなたり往来の旅人をむかひて湯を[illegible]此清水の縁若蓮如上人加
賀の國に禅より砺波谷を經て當國板谷(小坂谷乃四地なり)へ越させ給ふ折から此所に
て旅病みに臥させ給ふ其時一人の僧ありて上人をつゝりまゐらせさまざまく
看病申しけるより上人[illegible]しくいふ人のやうに見給ひ旅情ありて[illegible]
此辺りの宗守村に草庵を結びて禅僧修行せる雲水の僧御縁の庵
労ひ給ふをたゞ小よりのびびるかれ労りしことてらく懐中の旅へし
念ずと見出てもとめはせば上人大そう喜び給ひてやがて見上給ふ

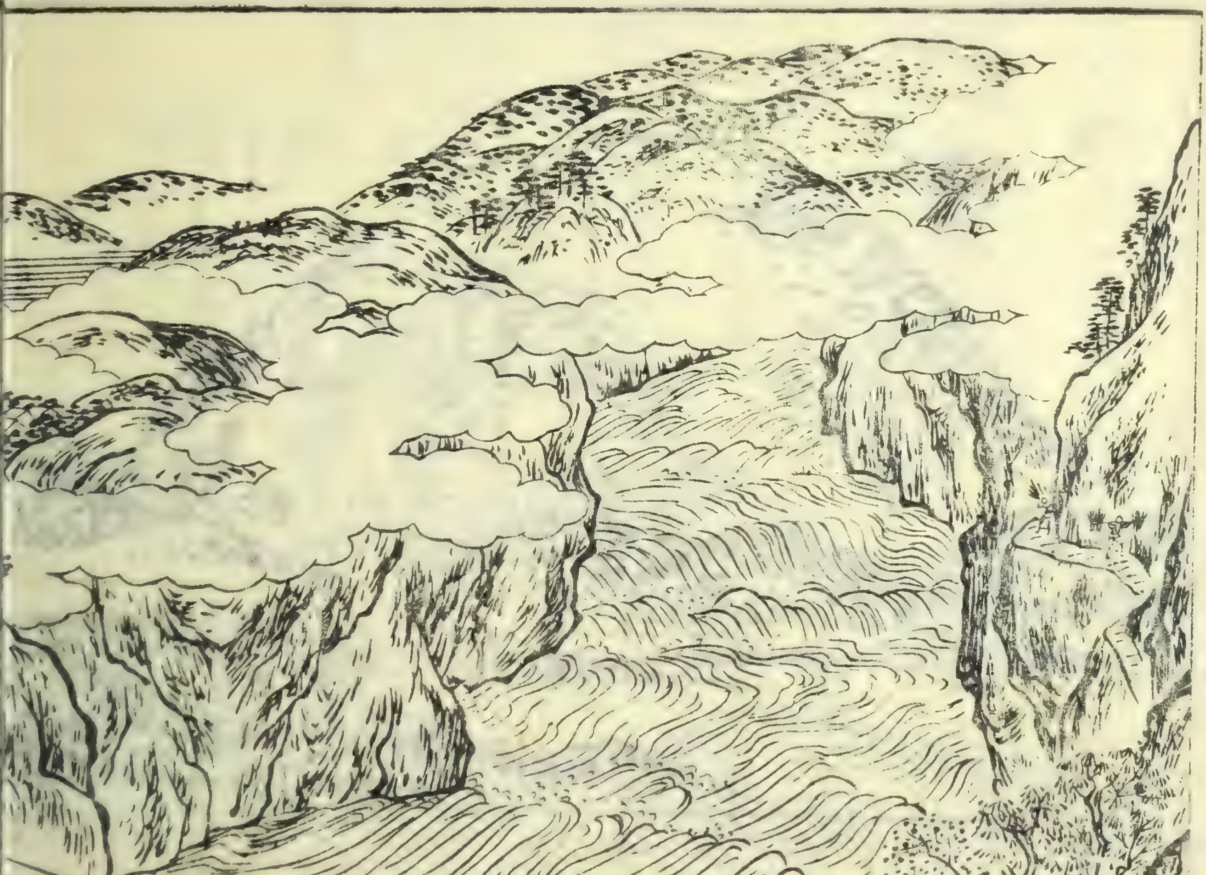
まだ此傍に曾て清水のいでざりしに蓮如上人御杖をもて側の地を穿ち
給ふにいとも清き浄水涌々として涌出せり彼僧是を見てまこと
尊き上人の化僧なりしを知り急ぎ己が庵に具し来らせ教をこひ
御化導に預り猶ど信心を發し終に改宗して御弟子となりけり上人より
名を範祐と授けたまふ則一字の寺を建立し宗守山勝信寺と号し今なを
尚其寺あり此清水を撥木堀の清水といへり又蓮如清水とも称しける
瑞陽城を去る事六里斗に人形といへる大山あり此山卯月の頃消のこりし
残雪人のかたちをあらはして立るに似たり依て土人是を人形と云此人形
のかたちを推へて豆を蒔といへる時節猟師捕獲するなりとぞ
越るとぞ又黄蓮山葵の名品を出す此所美濃飛弾越中三ヶ国の境にして
て険山並び峻峰いふもさらなる難所也其中にいりましては後岩を
五箇山といへる此深山の中に大河あり雄神川といへり古名を
雄神山と称しけるやらん土人名をつけしせるならんかし
河源は飛騨国二渓川より出て越中射水郡伏木にて海に入不通の大河なり
かくて古より両方の山岸高く絶壁屏風を立るがごとし深谷の橋を設く
便なし藤蔓を以て其太さ二尺ばかりの大綱を綯ひ川の両岸に引渡し
ひとつの籠を彼大綱にかけて往来の便とはなしたれども絶壁なる
くして藤綱には数十丈のものにあらざれば此大綱より掛子を河深に結び河

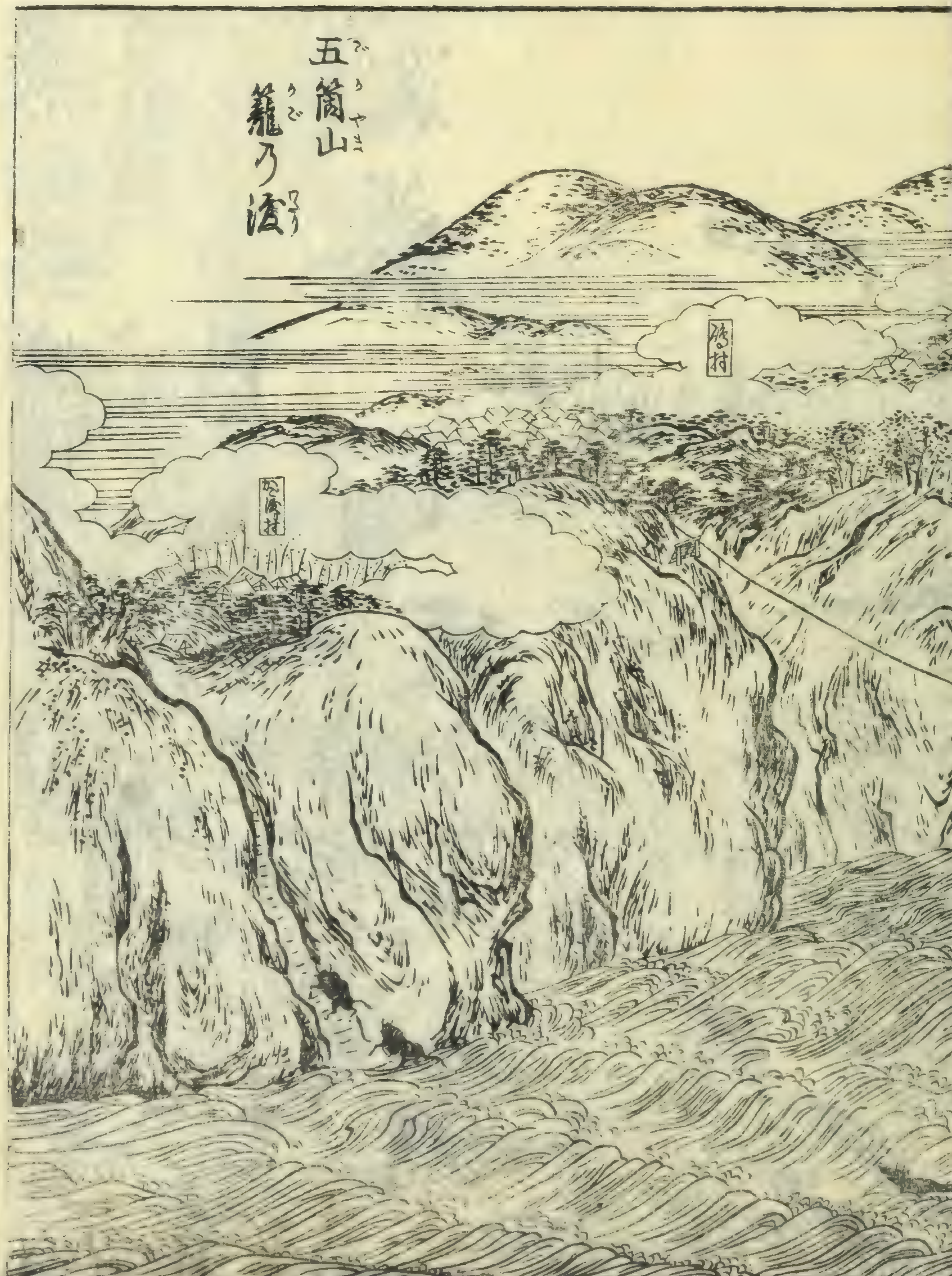
人形山

女夫滝は若松村にあり雌雄の
二流ならび落る古人の入る此滝
夜は雌雄相変へてひとつの滝
となるといへり又女夫の名あるごとく
なや又女夫岩あり是も女岩
男岩並び立てるが夜は重なると
まうすといへり
踊松は林谷村の山上にあり
象は松の並木ありて其さま
人の躍がごとし
此林谷村より三丁斗山腰に
二ツの泉あり是を酒泉とよ
其一ツは濁酒と号し一ツを
清酒といへり濁酒は色白く
して泡あり清酒は清冷
にて香ありて酒の香なり
多く是を飲ば
酔ひて倒るといへり








五箇山
籠乃渡
かご渡村




本願寺(ほんぐわんじ)
用木(ようぼく)を
伐出(きりだ)ん

を渡らんとするもの人は先此梯子を導とするに大綱たわむ梯子にゆらめき川風
山颪にはげしく吹漂され西に東にあちらこちらひきさるゝ度に蜘の糸とのがるゝが
ごとく危き事限りなし手ふしてよする大綱に手付て彼鵜の如く身
を縮め首を延し梯子を離るゝや否や手の者と大綱たぐりて身を射
ごとく三尺十間落ありて大綱の真中に搖くみ動揺震ふ事甚し
此時眼くるめき難渋へ陥どんぞすを忘却し実に天下第一の所踏難
蜀の桟道木曽の梯橋はいふに及ばず人傳の物語りに寄さん険
に此梯に生涯し去人は命のかぎりにあひては恐しかくぬ杖や木など
を携身に負ながら此度梯子のかたり難なく向ふの岸へ通ふよし都の
人の及ばざる処に至るべき業にはあらじ杖をそれより手後よりハ細き後網
を大綱へかけひたりてたぐり登りふやへしとれば気労さ慨然して此手
後と大綱へ梯換し忽ち後さまに四の真中へ廓るの身しとらや此川筋
に数の渉をに十ヶ所あらふしも此は箇山のまふりるん河幅八十間に余り
大綱もかるく手を定にかかり渡り難所なり古歌に
〽いづくにも辻かえて来つらん山伏の数の渉のわたりばかり
近き頃東の本願寺御再建の時御用木と飛騨山より伐出せしにこの
巨材悉く此雄神川へ伐落し谷中より運送してやうやくと都に出で
御堂いよやうやく造立せしを御門下の男女心力を尽しするを此雄神川の険り

[illegible]
五箇山雄神川の両辺数十ヶの村あり傳ふ所以の山奥なれば世の人と交りなすことなく人物皆質朴にして神代の民もかくやあらんと思はせらる男女ともに衣の色きなるも草物と為し男て綿絹の制作白し婦人は白き衣の裾長きを纏巻はし帯も同じく白き緒を結び下げ白き手帕を肩にかけ佳節祝ひ日又は他國の神くしき客あるにも必ずかくいでたちて出ざら對面をなれども此里の婦女の礼服とせりさながら其模様狂言の女のごとく此より始めて見るもの絶倒して笑ふ又此所に伝はる古ぶりといふ踊あり或は舞ひ或は登りたる輪び或は袴をいさめる舞ひならば男女打群鄙風なる謡哥唄ひ得もいふ取敢して踊るなど誠に古代のさまかくく都の方の踊とは甚異なる躍哥一ツ二ツ書記しまし記し侍る

〽舞ひと恋しと笹をてにのせて舞ひはまけむらひを渡

〽いろはの文字にまちかぐでけて此所をせらふ怪せつき

〽うそいろまでひとり見る處女がいうしき白しくいまさ並び

唱哥さまのじいさまも諸処に同じ佗神なり

城端の東南に当て松尾村といへり其所に天柱石といへる奇異の巌石ありて其長さ数百丈に附近にも雲と共び金錦と見る畜構之絶頂に大なる樹ありといへどもあまく雲間にありて何の木なるかおもちて浪高葉の

筑子躍（こきりこをどり）








天柱石（てんちうせき）

時節至り風雲をつかまて龍となりて去や其かゝりへ手の爪の落ちるを忌し猿ていよく
樹の茂葉のかゝちさあるかたハ隠し此巌の根に洞窟あり其中ハ口のかたちの如
き窟ありて其深き事はかるべからず試に家に縄を付て踏出しみるに若あり
三十間斗にして蛇忽しとて故止そや窟の中蝙蝠多く蓋巌の水を
まとひ秋の数の紅葉せしさまいかにゆるになみ鮎川のはるかなれ
あれにして旅の夜の虚空に響き音すこぶる殊勝なりの深かく

飛龍山超願寺

加賀の金沢より倶利伽羅峠を経て越中石動へ七里石動より四里半ある所にあり

開基は祖師聖人の上足性信上人嘉禎元年創建の旧跡也○聖人の
御真影は如信上人の御作○性信上人自画の影像を安置し

○今石動の宿より北の方五里に飯久保光久寺といへる寺あり旧は真言宗に
てありしが改宗して当宗に帰依したる寺院なり

○奈古の浦といへる名所は氷見の浜辺氷見といへる処の北なり

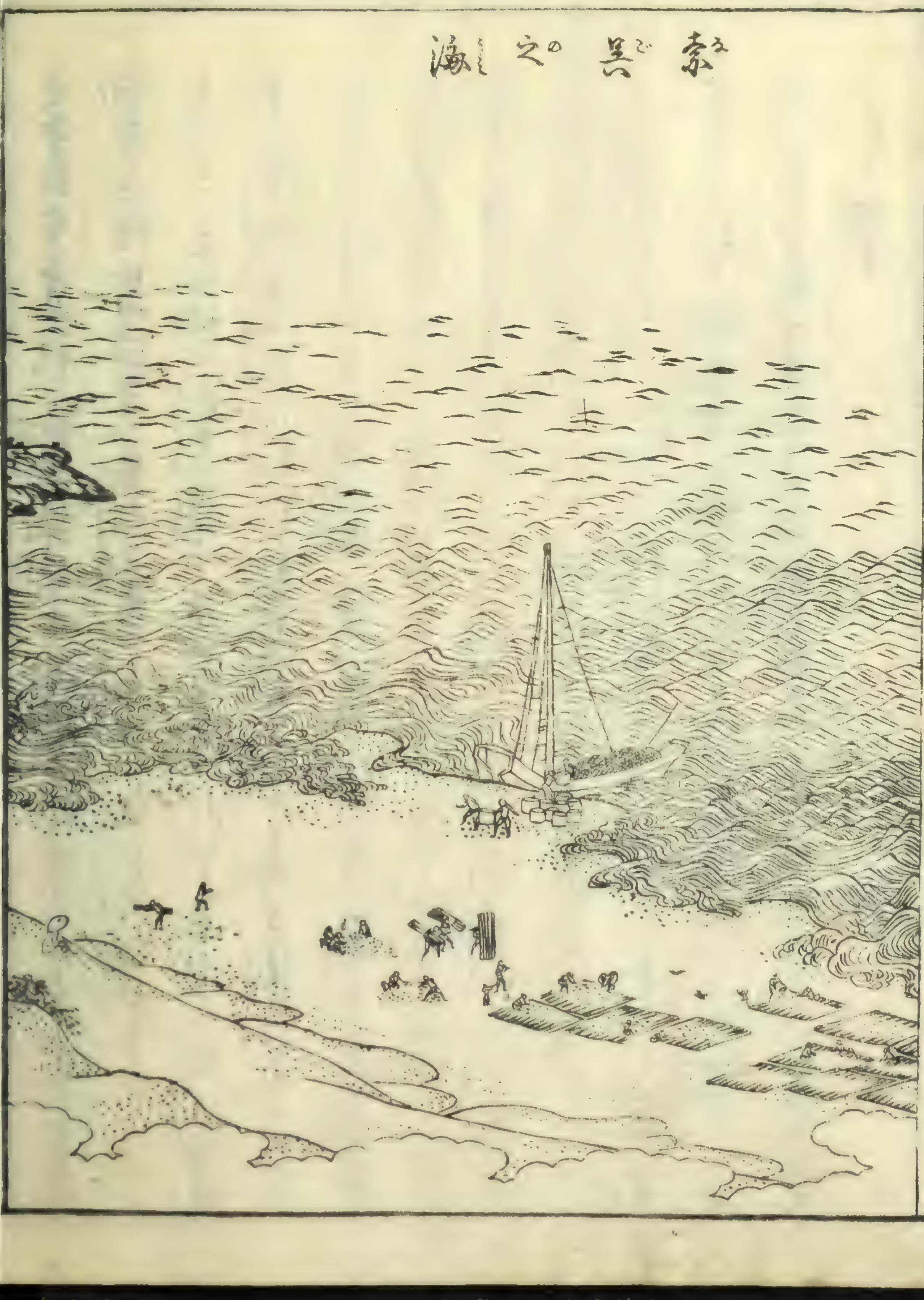
「名古の浦の春はのどや千にかはりはし出んと回ハ今も鳴なり

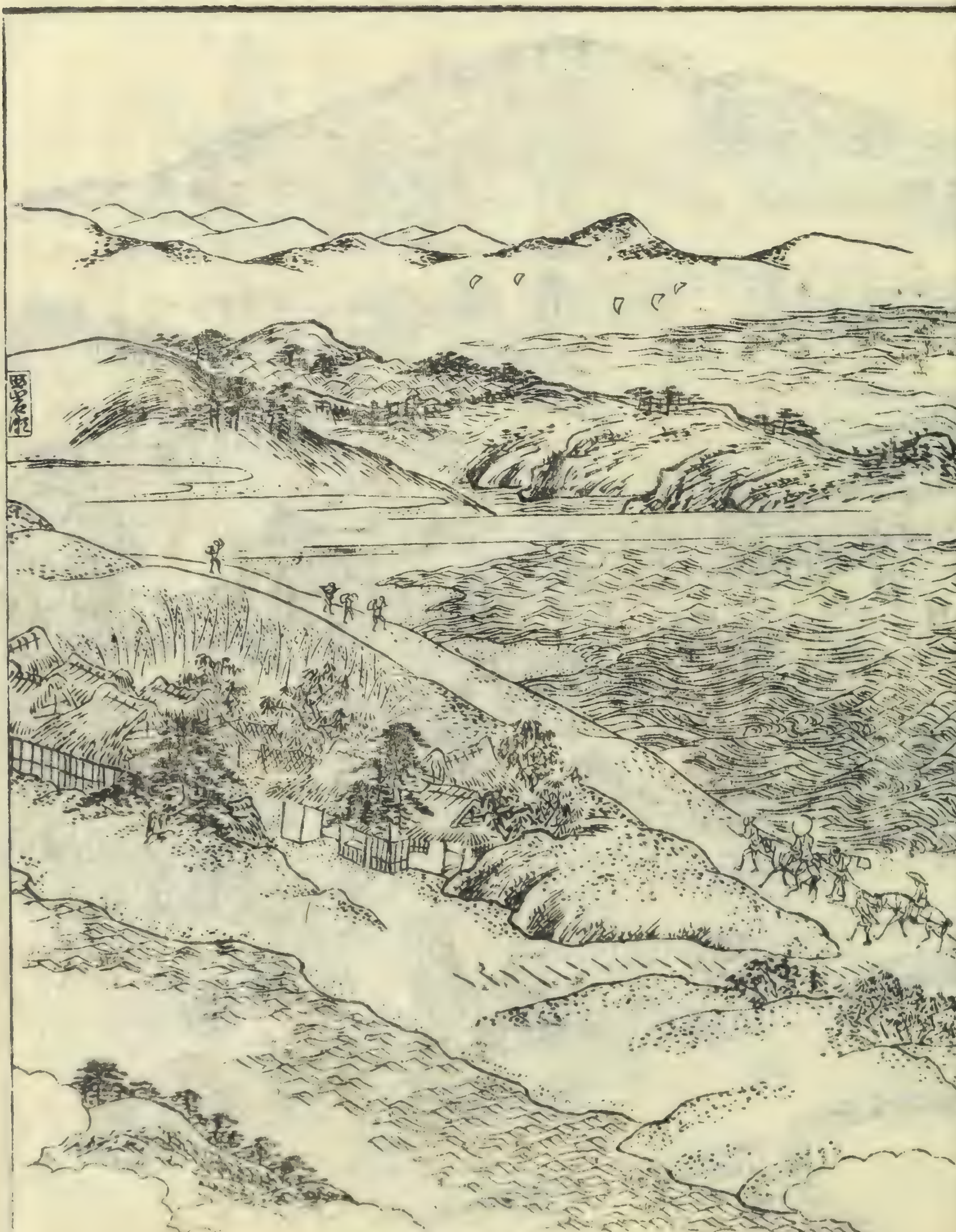
井波蘭

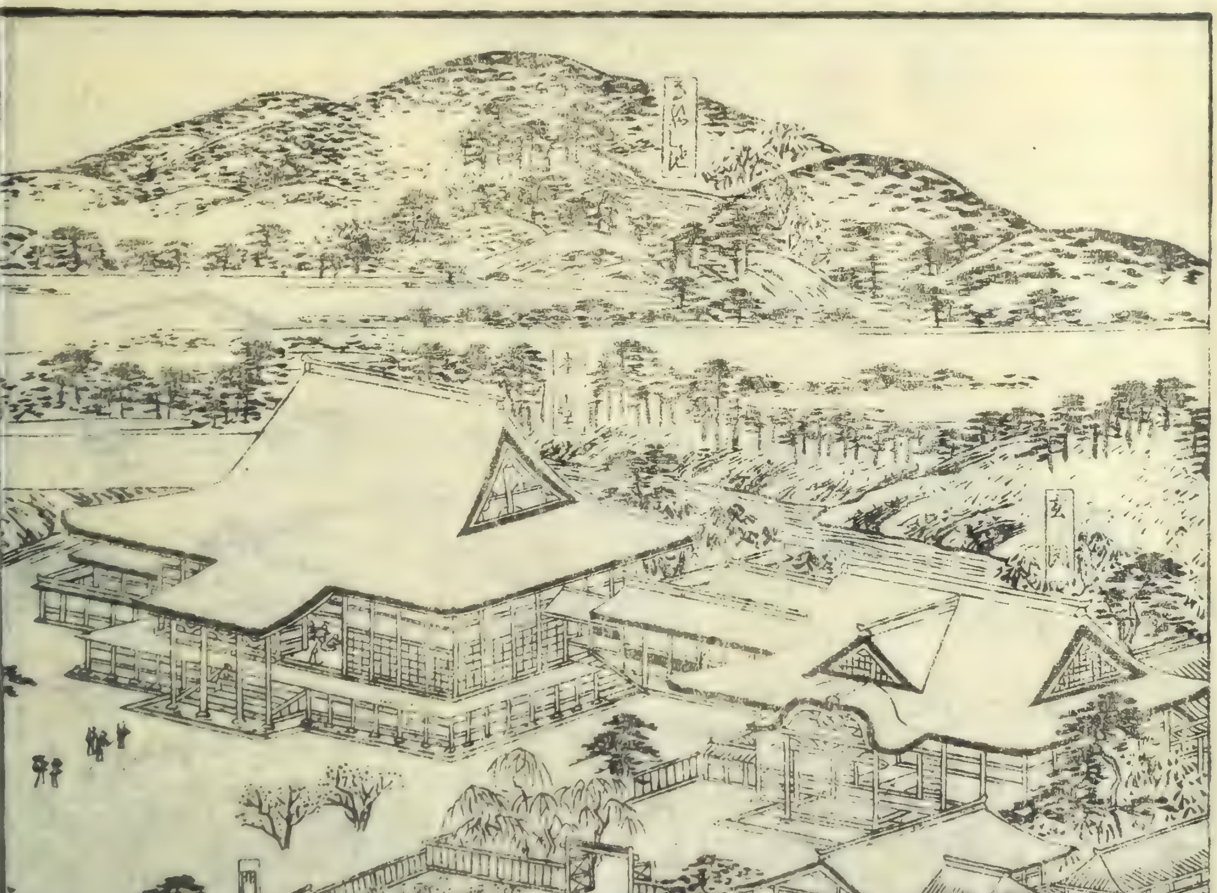
東派 御堂 高岡より東の方二里井波にあり

井波蘭杉谷山瑞泉寺は人皇百一代の聖主後小松院の勅願所にし

て本願寺第五代の別当綽如上人建立し給ふ所なり本堂十七間に
面本尊阿弥陀如来を勅願安国の尊像と称す抑綽如上人は博学
多才にして和漢の文章に達し給ひけるが此折しも唐土より難読難解
書を禁廷へ奉りけるが然して朝廷の官人敢て読得ず是に於て
帝は方々に令を下し能読者を需め給ふ実に釈門儒林の碩学多しと
いへども此文字を講得る者の一人もなかりける所に綽如上人ひとたび
此書を披き看て一字すらも誤らず読給ふ事実に神に通ずる
が如し帝叡感限りなく綽如上人に勅詔ありて今の精舎を創建
し勅願所と成し給ひける仏閣造立の砌に当りて奇異の霊水涌
出せりよりて瑞泉寺と称せしとぞ此寺越中第一の貴院にして
代々本願寺御門主の御連枝寺務し給ふ所なり霊宝数品有りといへど
これを略す

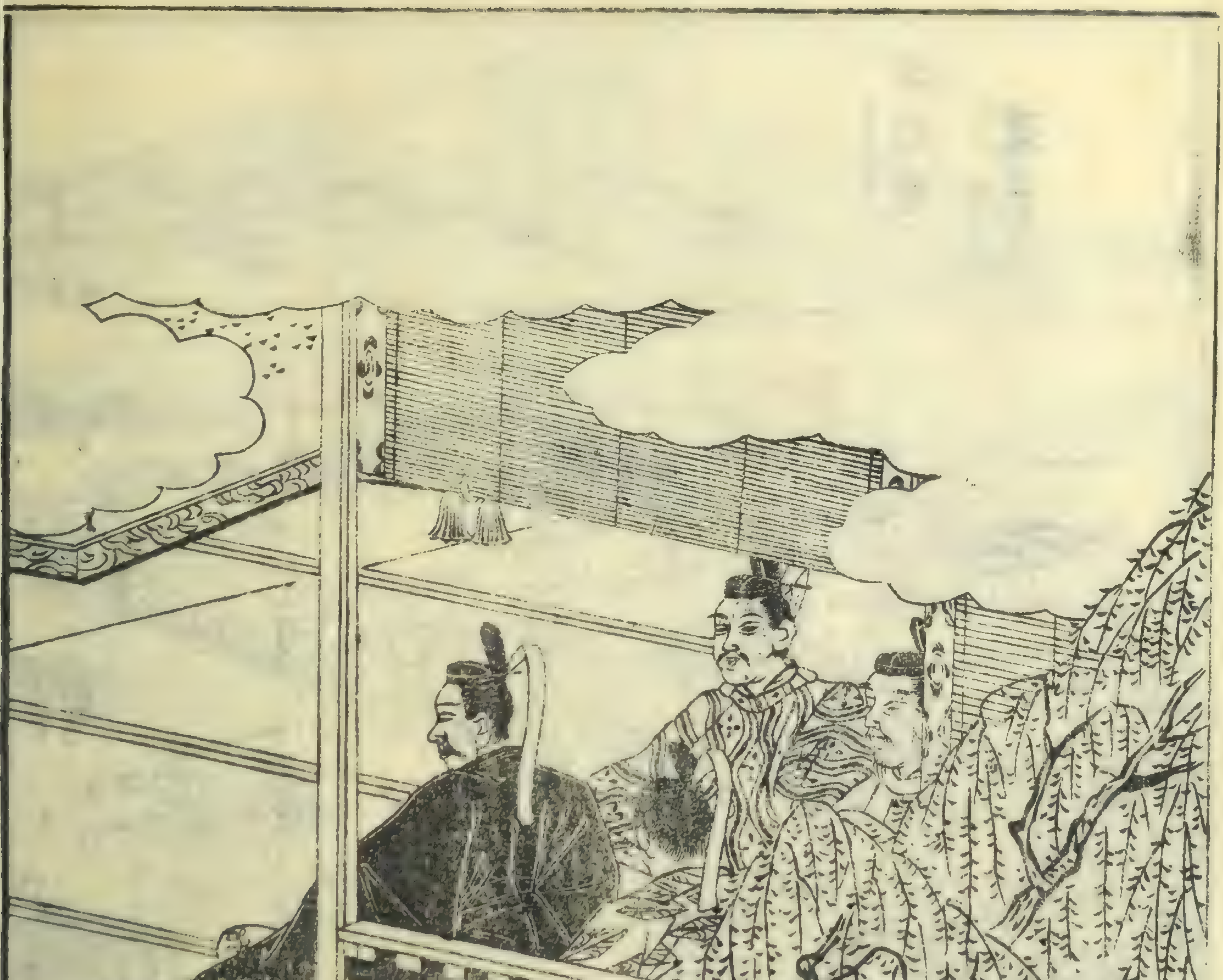

奈呉之海







井波園
瑞泉寺
表門





綽如上人勅に奉して書を讀ミ給ふ

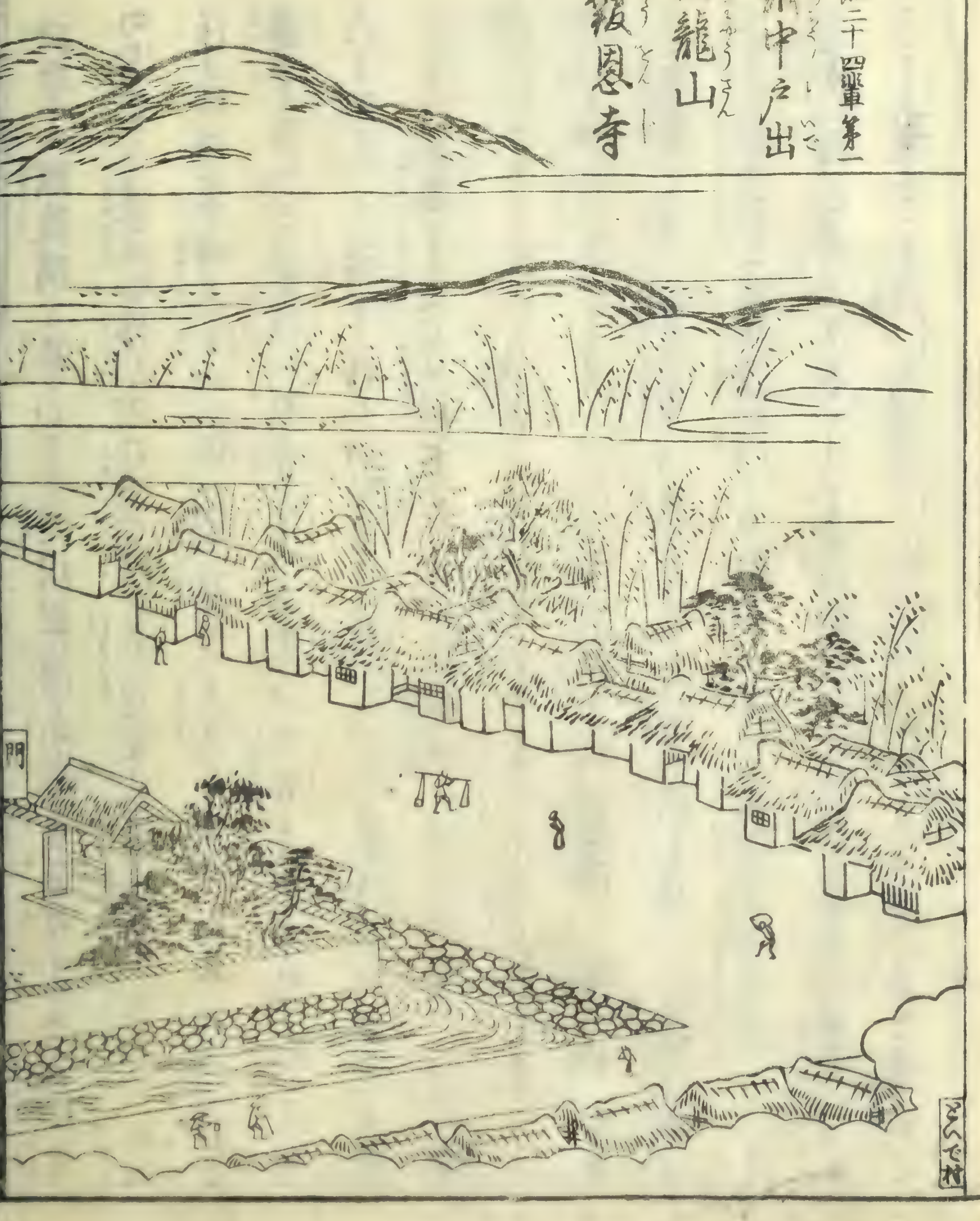
高龍山報恩寺　西流　安波より仁里 戸出村にあり

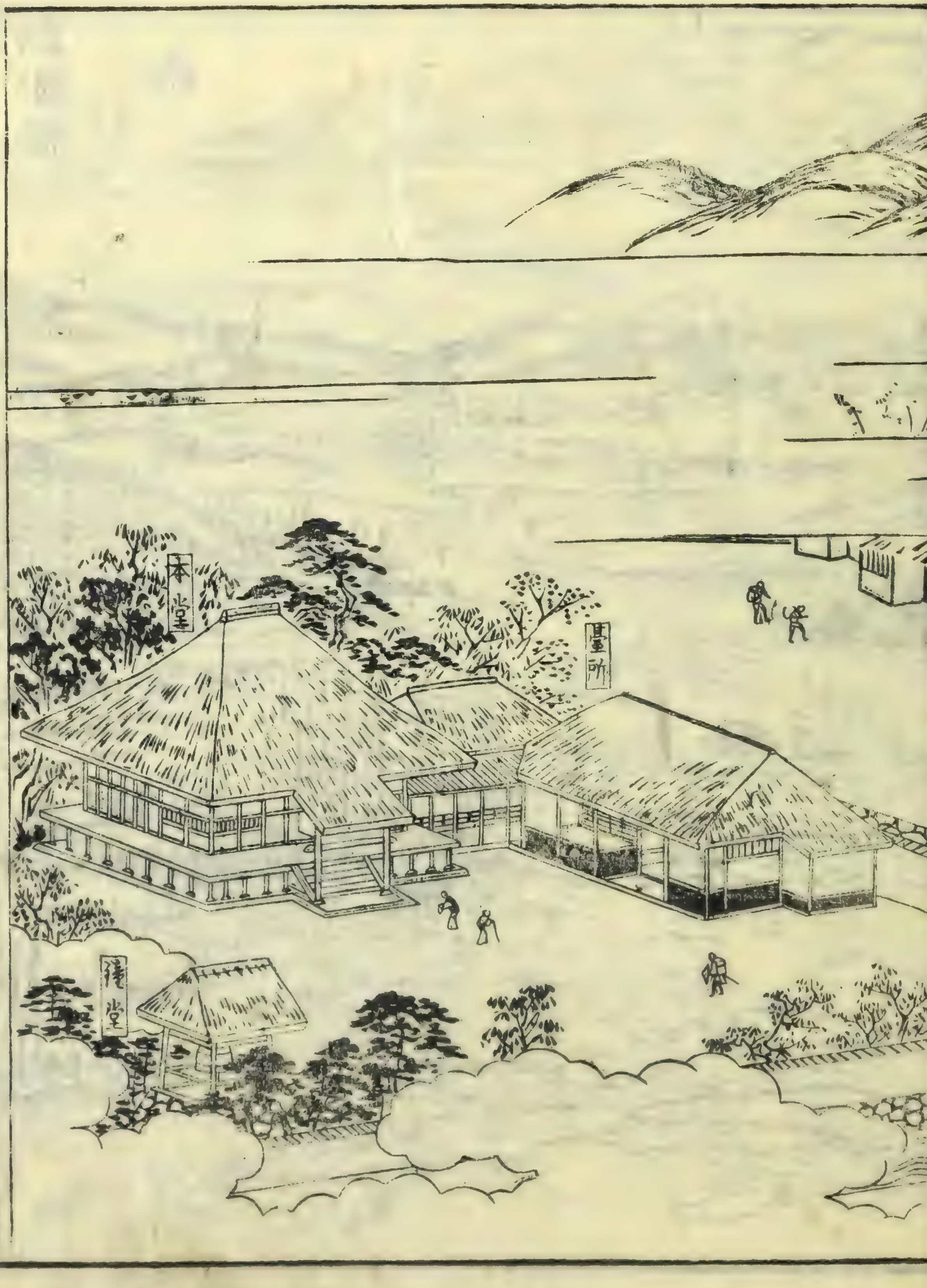
謝徳院報恩寺ハ祖師聖人の上足性信上人の遺跡也　往昔性信上人下総国豊曽根に古院を再興してもいたゞり弘法大師が歴草の後当国に別院を立て是西流二十四輩乃第一番也　本堂九間に面　○霊宝ハ六字十字名号聖人御真筆　○性信上人御自作の木像

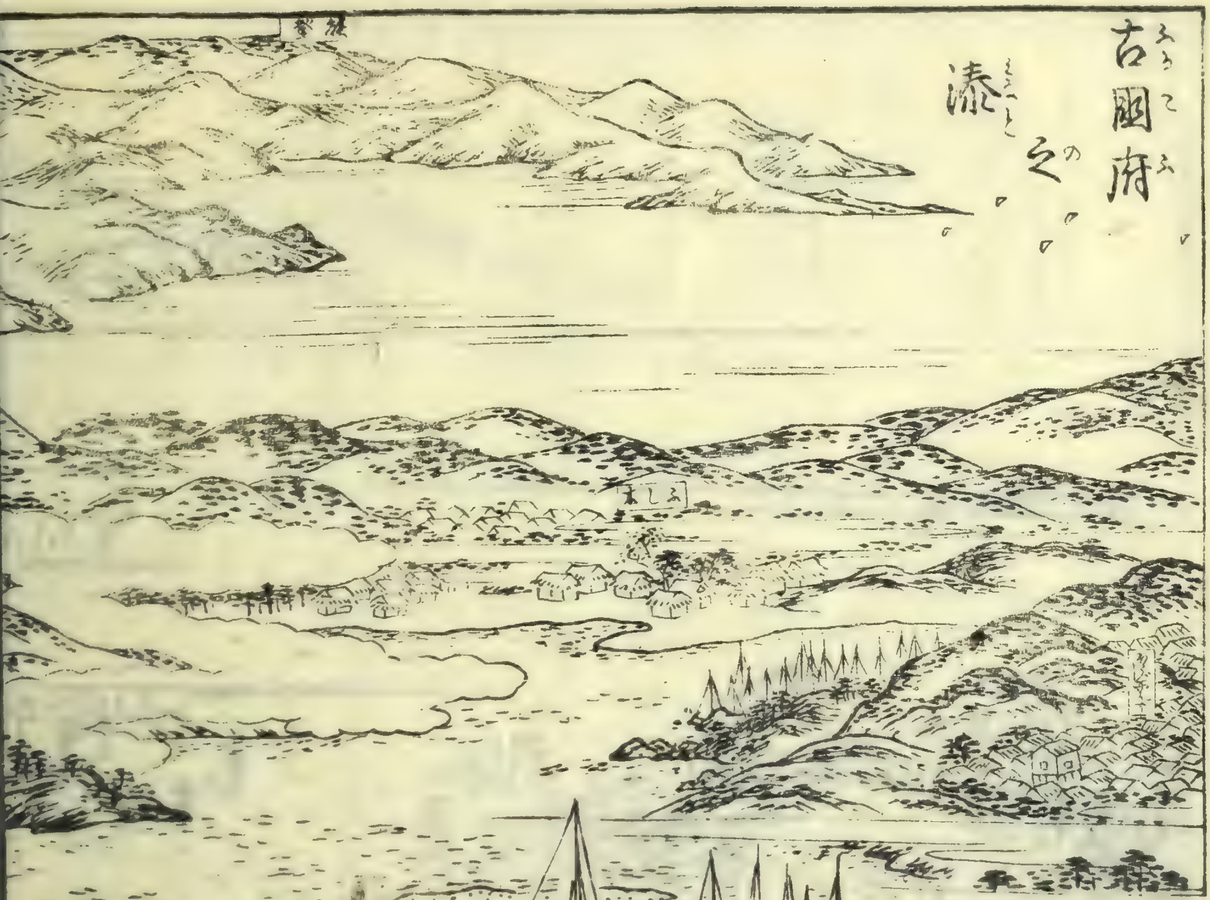
雲龍山勝興寺　西流　高岡より二里 砺並郡古国府にあり

当寺ハ加越能三ヶ国乃太守御帰依不浅にして国中西流寺院の僧録所なり　寺法宗令ともに当山より支配し別て実如上人より北陸七ヶ国の法頭職たるべき旨御書を賜り御本山御代々の御書数十通　将軍家国守御寄進状数十通あり　○本堂二十五間に面　本尊阿弥陀仏 化人の来の作　御寺務職ハ西本願寺御門流御連枝なれ住持し給へり　○坊舎八区　抑当山開闢の来由を尋るに綽如

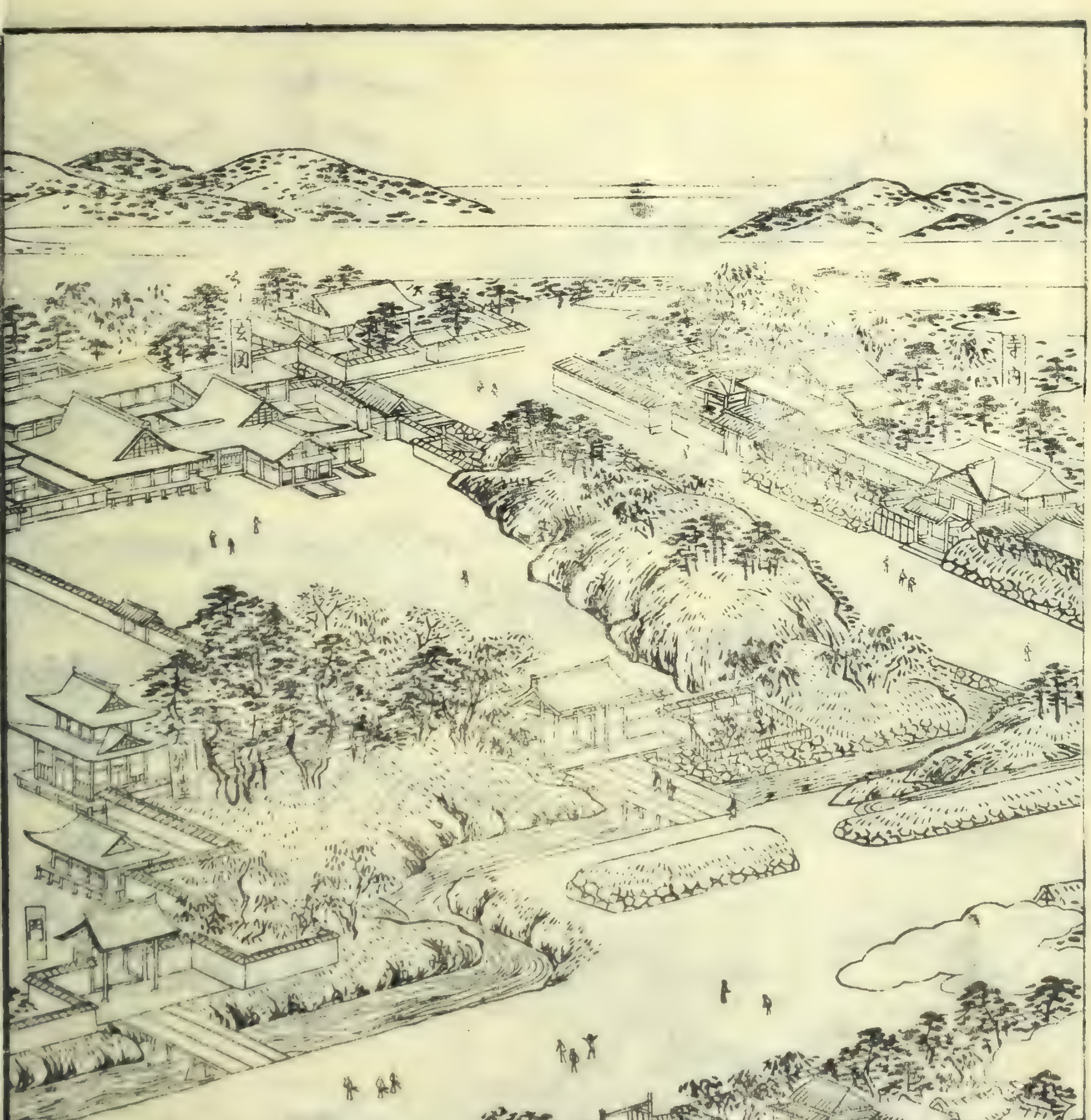
祖聖人越後国に在ませし時は同国蒲原郡なる鳥屋野といふ所に一宇の御堂を建立し給ひ御化益あり其後聖人常陸国へ立越て弘法なさせ給ふ于時人皇八十四代順徳帝承久三年辛巳年佐渡の国に遷幸まし〳〵越後へ行幸ましく聖人乃坊舎に入御し給ふおりから聖人は関東より帰り給ひ此坊舎に在まししかれば帝聖人の徳行を尊ひ給ひ出離生死の要法を示せよかしと勅命なさせ給ふ聖人帝の菩提心よりとつて給ふに欽慕して他力本願の正業一向専念の宗意をもつて念仏に御教化まし〳〵しかれば帝此所に信心を得し給ひ歓びの余り宸翰を染て勝長寺と命ぜられ寺号の額を賜りける順徳帝の皇子彦成親王御幼稚の時より叡山に登り慈鎮和尚を師として出家し給ひ淡路と号せしがある祖聖人乃徳行を慕ひ関東に下向ありて聖人に面謁し御弟子となり給ふ則聖人より法名を信念と

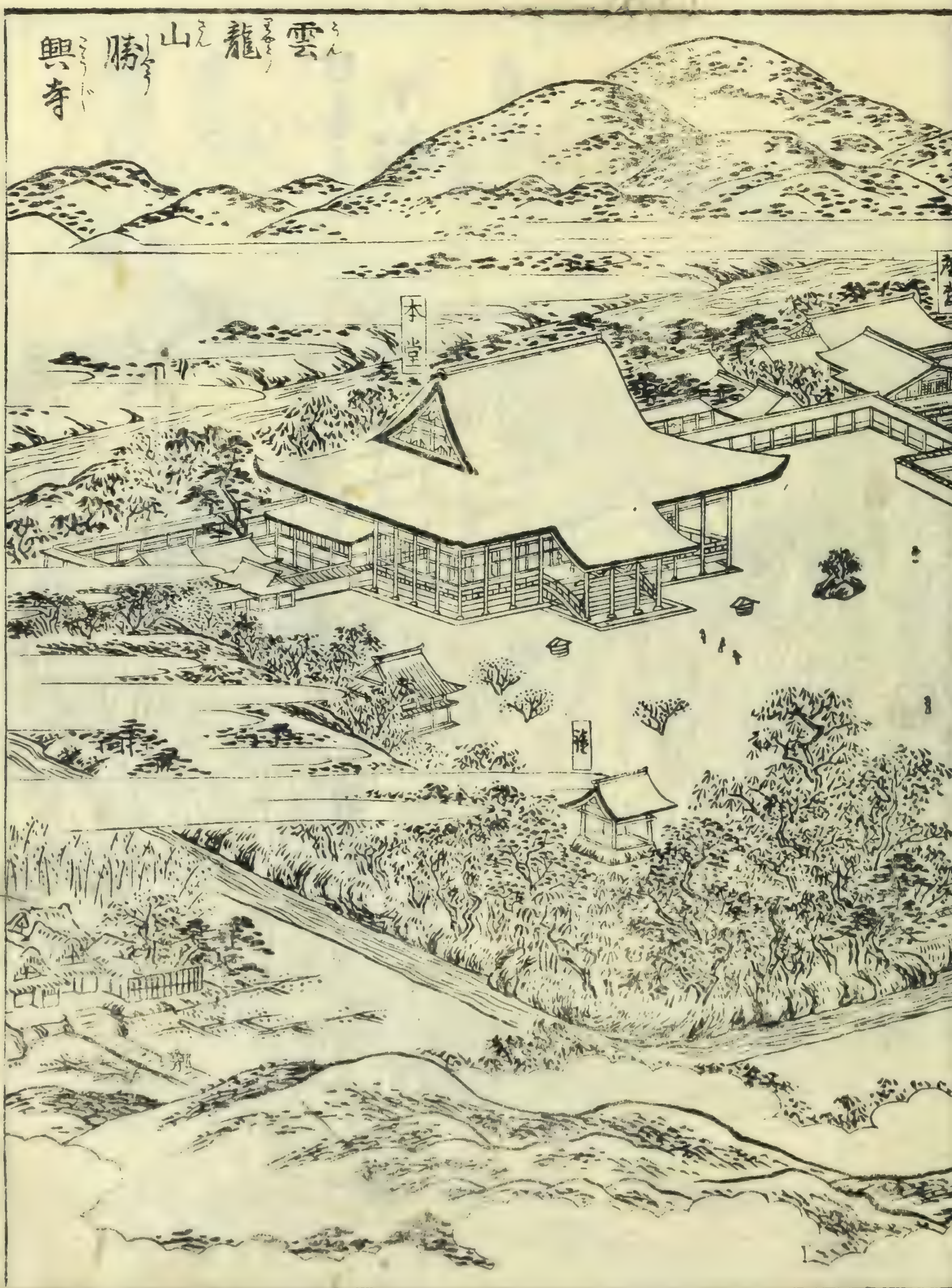

西流二十四輩第一
越中戸出
高龍山
報恩寺
門
といで村


本堂
臺所
後堂


古國府之湊
ふしき




玄関
寺内
門


雲龍山
勝興寺
本堂


順徳帝
聖人の
坊舎に
御幸し
給ふ



名づけ給へり其後聖人御帰洛の時信念に命じて宣ふやう勝興寺
は光坊の父帝勅額の寺なれば彼寺に住して此国を化益し給へと
信念かしこみ給ひ聖人の命に応じて勝興寺に入て住職し其御子に
息信興上人に寺を譲り給ひてより累代相続せし所に中古兵乱
の災にかゝり退転に及んとせし然る所に文明三年の比蓮如上人御下向
の御順徳帝勅額の寺なれば廃退に及ばんことを愍じ給ひ則越後
の旧地を此地に移して御再興なさせ給ふ所なりとぞ〇霊宝
数品略之
○当山縁起に曰祖師聖人一宇を佐渡国に創建し給ふ順徳帝より
親しく寺号を殊勝誓願興行寺と賜りて且勅額をたまはりき
順徳帝第三の皇子彦成親王聖人の御弟子となり信念上人と
号して此霊場を相続し北陸七州の化度を聖人より免許せ

らせたまふとぞ云

高柳山東弘寺 西流 古國府より十八丁 村水郡牧世村にあり

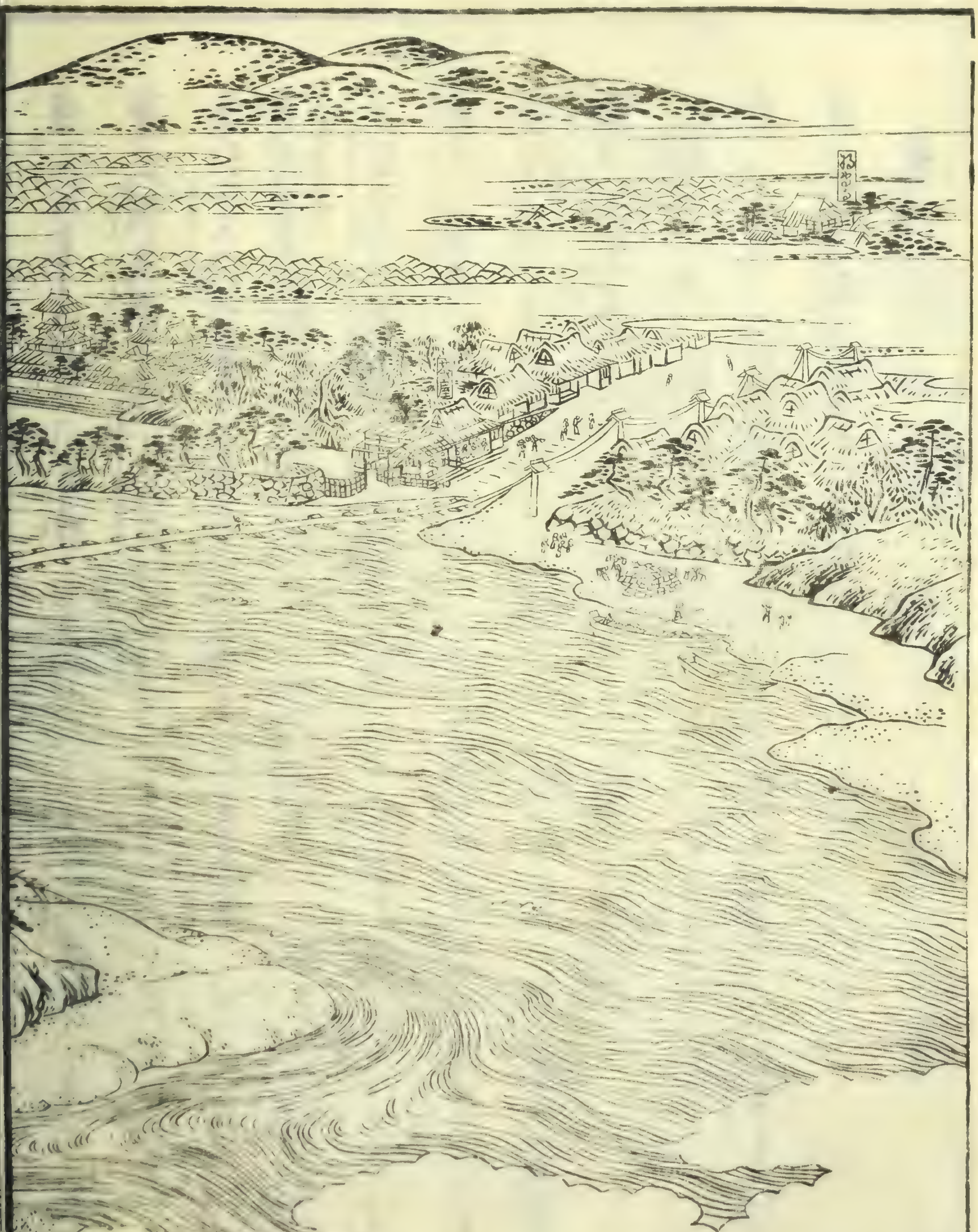
東弘寺は高祖聖人の高弟善性上人の開基なり縁起は下綱の國東弘寺門徒也○練香の阿弥陀如来弥基菩薩の御丈を安置せり○聖人の御真影 覚如上人の御作

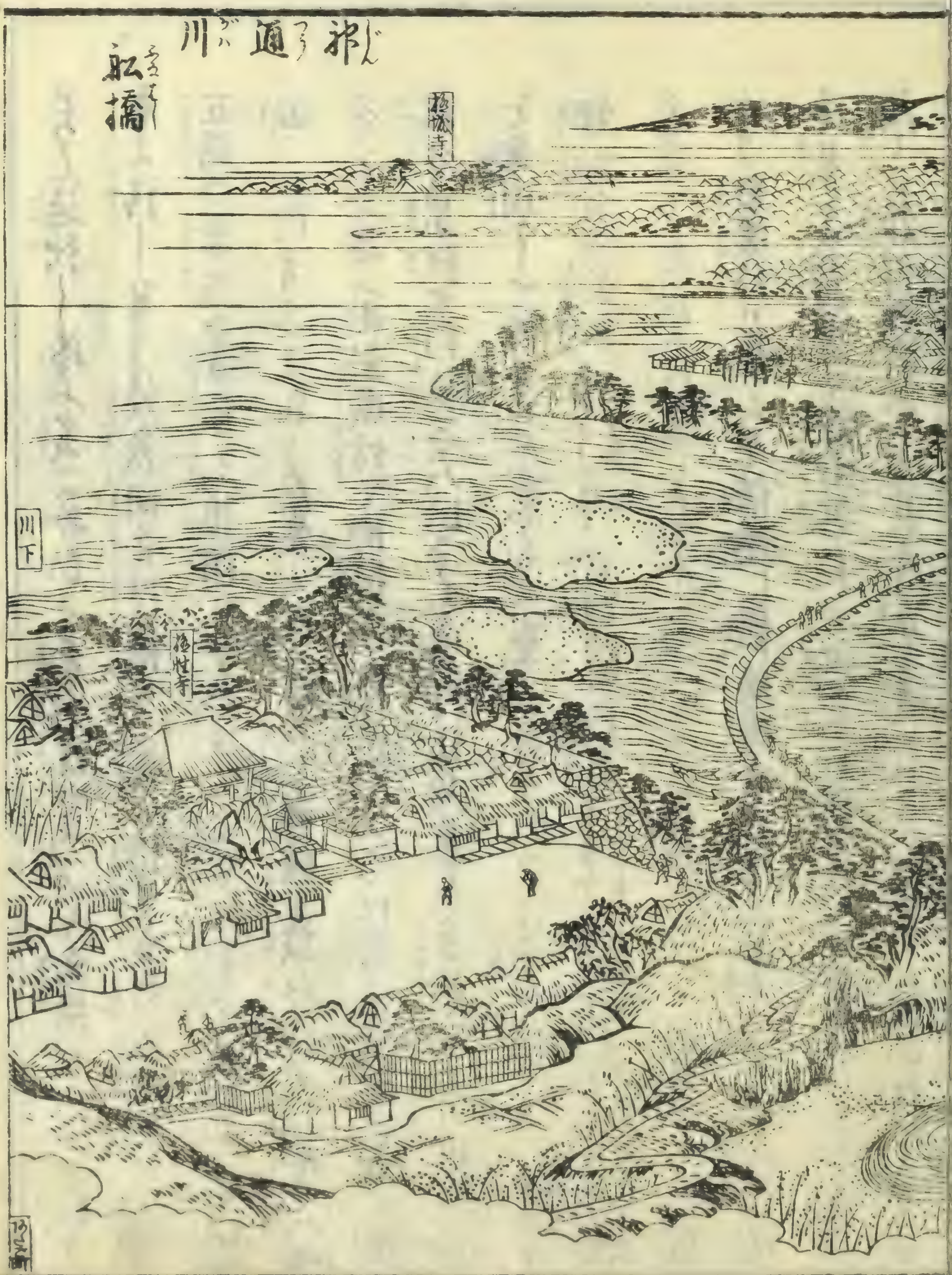
舘定山極性寺 東流 院家 古國府より五里半嵐山の城下にあり

本堂本尊阿弥陀如来弥勒菩薩の御塔中三區 柳嶋寺開闢は従前人皇六十代延喜帝の朝に宰臣藤原基経よりあり基経の三男徳麻呂延喜第二壬戌年弥年十七歳にして世俗の事を遁れ高野金剛峯寺に登り弘法の教を学び三密瑜伽の妙法を得て徳長院と号し延喜十九己卯年当國新川郡舘の里に住せり延長元年に門帝より舘定山極成寺宗貞院と勅額を賜り伽藍を


高柳山
東弘寺
本堂
庫裏
門

建立は是より七世の寺務を恵明院といふ于時建保元年の比高祖
聖人は越後越中所々に往返して化導在ませしが一日彼鵜坂の伽藍を見ん
給ひ仁王門の前なる立石に御腰をかけられ暫く休息し給ふ一説に聖人越後へ御下向の時は里をさる給ふとかや
塔中の安正院といふ僧門内よりこれをみれば門の左右なる二王の像一向腰をとゞめて聖人を拝せるがごとし安正院奇なりけるにとひ
其よし走り入て寺務にかくと告ければ恵明院立出て是をみるに其の
咎に違ふ所なしこれ実に凡僧ならざるものを知りて即聖人に面謁は
聖人其宗旨を問給ふに恵明院答ふるに詠哥をもてし
我法は総山帰の九十九髪結ぬもいかゞは解もとかまし
聖人は歌の意を得て抑は真言天台難解難行の宗旨なと知り
給ふに恵明院又聖人の宗旨を尋ぬるに聖人答へて
我法は朝夕梳し児の髪ゆふもいかで解もとかまし

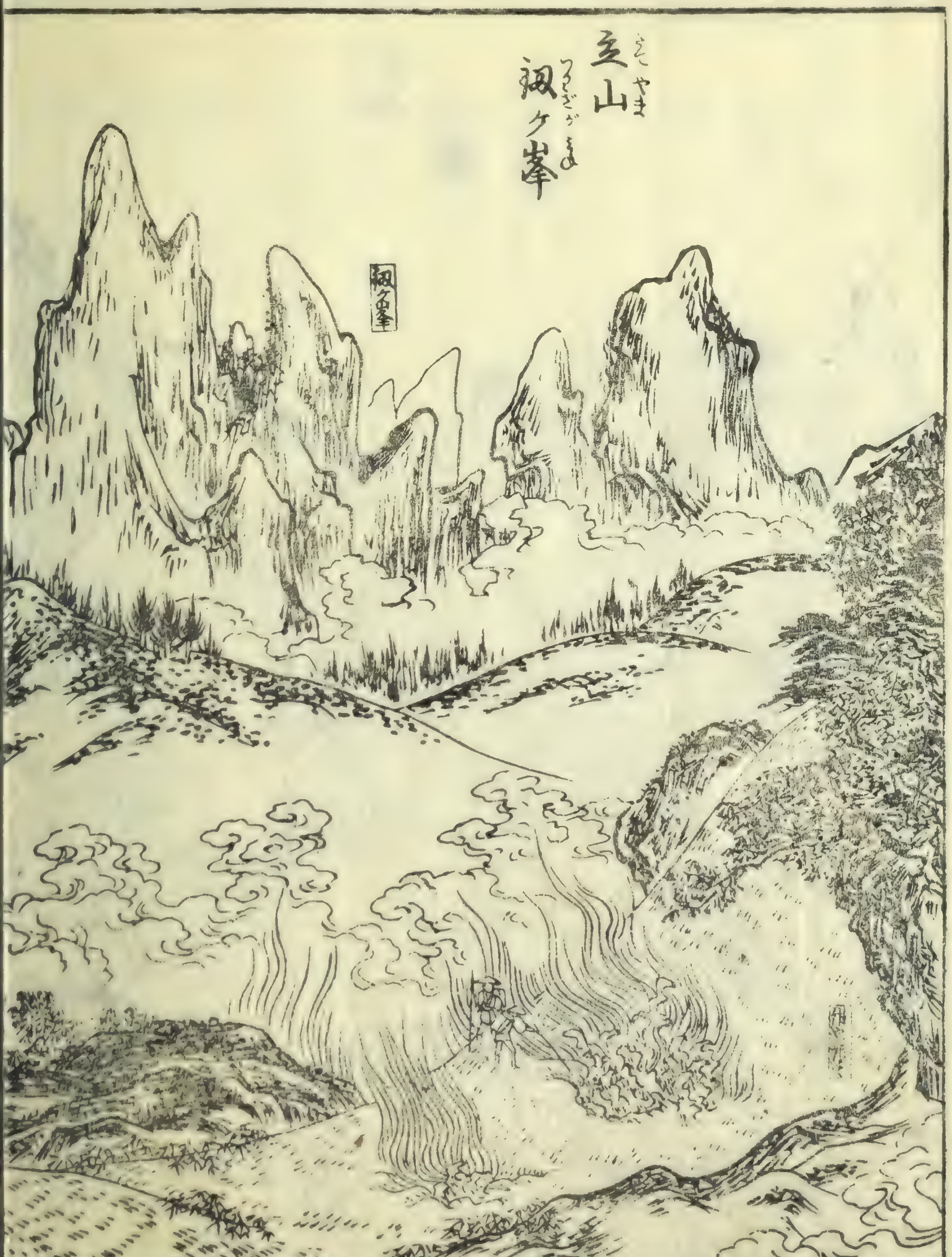


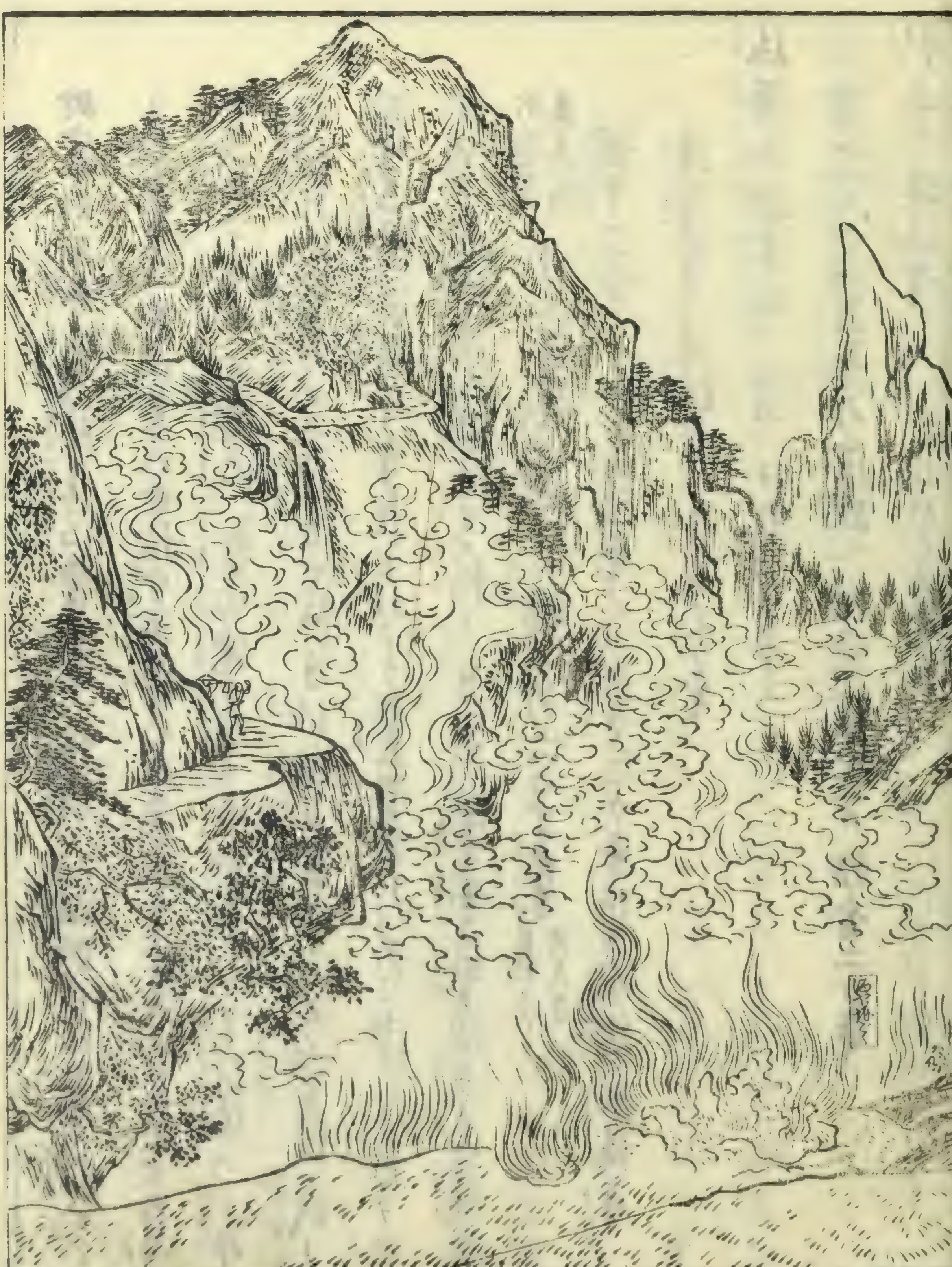

神通川
舩橋
川下

とかく返歌し給ふ處に押ひて恵明院いよ〳〵還相するぞと知り
寺に請しまつり絶歎聞善往復し実に他力易行の難行は末法
五濁の要法なるよしを聴聞せられ返しより立所に本宗を改め宗門に
帰し御弟子となりぬ聖人即法名を教順と授け給ふ扨聖人此
寺を出給ふ時教順坊も御供申し宮崎といふ所に庵し給へり處り扨
浄興寺累代の門徒三人此者ども御跡を慕ひ宮崎に至り御教化
と聴聞して御弟子となりまつりぬ聖人此三人にも法名をたまはりぬる
稗畑村の定観 末孫今の名は十郎右衛門といふ 室田村の寂念 末孫今の名は五郎左衛門といふ 念名 末孫今の名は九郎右衛門といふ
是より当時は法名を家名として子孫相続し今に極成寺の門徒
なり教順坊は聖人を供奉し越後国府に至り配所の年月を牢
寺号を極性寺と改む其後乱世の砌信濃の里の諸堂兵乱の災に罹り
所々に移住しけれども其寺系を失ひし十六世の住持良恵の



立山之圖


立山剱ヶ峯
剱ヶ峯



附寛永元年に當所富山愛宕町へ移徙して祖師の法灯と継玉ふ
ものなり○當山第八世信空寺務の時寛永十七年の春兵火の為
に諸堂ことごとく焼亡し霊宝焼失ある中に本尊の像のこり
相儀親として當寺の中に立せましまし信空斎灰のなかを見出し
たまる重茶敷しまされより以来霊験いちじるしまし世
にいちおほし諸人挙て是を信じ奉る○霊宝に聖徳太子の像を

弘基菩薩の所作　十字名号 附年　聖人の　一幅九字六字名号 法然上人 附年

城中三坊寺ことく高祖聖人の直弟三ケ寺なり不謂　願海寺

持専寺　橋胜寺　これ是なりとぞ

梅澤山持専寺 西派　同所寺町にあり

高祖聖人直弟乃遺跡之本堂八間四方　坊舎二ケ寺

願海山願海寺　同所又富町にあり

聖人の直弟歎異坊善性の舊趾也本堂九間四面僧坊二ヶ寺

錦定山極淨寺　東派　同所材木町にあり

極勝寺門系の寺也坊舎二ヶ寺◯聖人舘の里にて御腰を掛給ひたる石は今此寺にあり聖人御手ぞえを付せ給ふに御指の痕ふかく入て今にあり諸人これを拜して奇異の思ひをなしいよく聖人を尊敬しける始めは極勝寺と号けしが本山の命によりて往古の寺号に復して極淨寺と号す◯宝物御真筆阿弥陀の画像を安置す

◯神通川は富山の城下ながさとにあり其源遠く飛騨国より流れ出て富山の城下をめぐり此海に入る川なれど廣く水気を絶るごとくに急なれば舩橋を設けて往来を通じ舩橋の制は鐵索にかゝりたるなり凡数十艘の舩を鎖もてつなぎ東西の両岸に數本の大柱を建て彼鎖を繋ひ付て舩より舩へ板を渡しもとより往来せる浮橋なる者の附は此浮橋なかりせば通川諸人家作流るが故に領の太守と切て橋杭を立て流し洪水を防げ之




黒部川

其嶺の切所にハ鎖にて綱をとり付是切も攀ぐも自由となせり此移船七
十六渡をならべつるぎより
○神通川のかたよりなかにして立山といふ郷領ハ十八里新川郡信濃の
国堺にあり此嶽ハ越中第一の大なる山にしてなかきこと十三里余也大
宝三年慈興上人示現を蒙りはじめて此山を開き権現の社を営立
せりとぞ此山の頂に仏体を備へ遂にこれバ在像の仏あまたの体あり其際に
妙なし峰を一の越といふ後に鍛冶る峯を二の越と唱へ高きを過て三の
越御前をこの越頂をよの越といへり各修難切所多しく登りにて容易
うるに御中市の谷といへる所へ至るに小瀧大瀧とて難所あり先へ登る
ずなるなき大嶽ありて巌の上より頂を望さげるまでのぼりて下る
のかりて其麓にもすで蟹されど此谷わつかに三条小瀬路といへる
名立の地へとぞ山中に大なる湖水ありて温泉多く涌出る泉気の
よく立登る是を俗に立山の地獄といへり
○富山より魚津へ至る小川多しまで川赤安川岩瀬寺川滑川早月川
等へ滑川後に松明を焚ひ炬を照し夜よく火の細
なるを知るにしく見る也
○魚津と三月市乃にて小溪経田村といふ所あり爰に勝徳寺といふ寺あり
是は江戸穀恩寺の別院にして下間法眼蓮崇が遺跡なりといへり

○黒部川并びにしき大河にして凡十八瀬ありといへりときにわたち急流して三日市の間に繋橋あり

辻徳法寺

東派　富山より八里新川郡三日市にある

辻徳法寺といふは往昔高祖聖人越後にまします

本堂八間四面（なる建　其の他）

まします時（建保元年凡十一歳）所々に經廻ましまして御化導ありけるが此三日市を

通り辻なる所に御腰をかけられ休ひ給へ（に武佐に左遷せられ越後へ流下向の時なりとぞ）其辻に源左

衛門何某といへる者ありけるが夫婦ともに立出て聖人の御容貌を

見まゐらするに聖人の御影傍なる流水に写り光明いかくとかゞやき

ければ源左衛門夫婦奇異のおもひをなし是正しく如来の化現なら

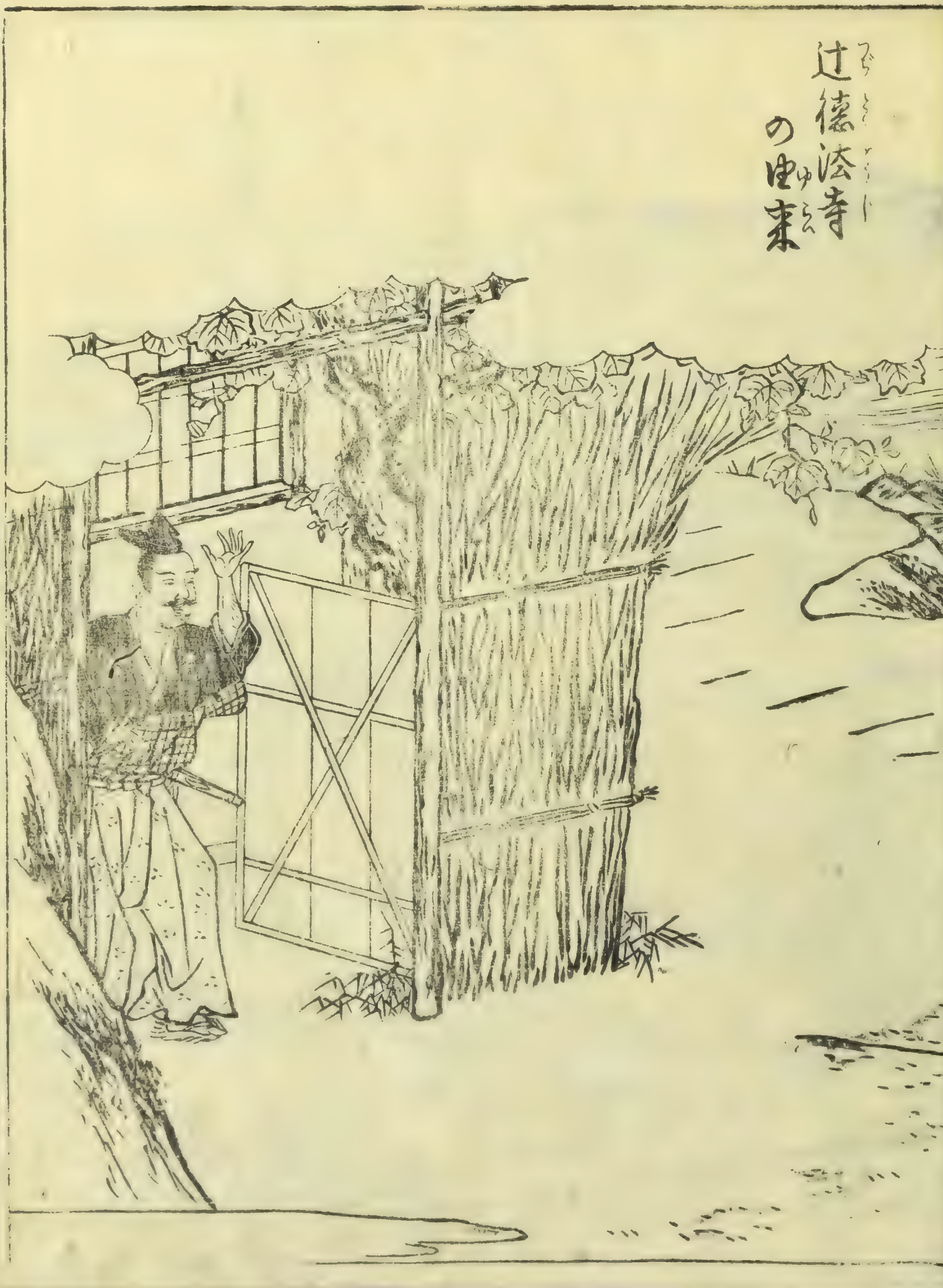
んと更に信心を發しけるが聖人は經田屋（經田屋は其下の三本柳の所に見ゆ）といへる者の家

に入らせられしを承りて拝しけるに是を慕て其まゝ夫婦經田屋

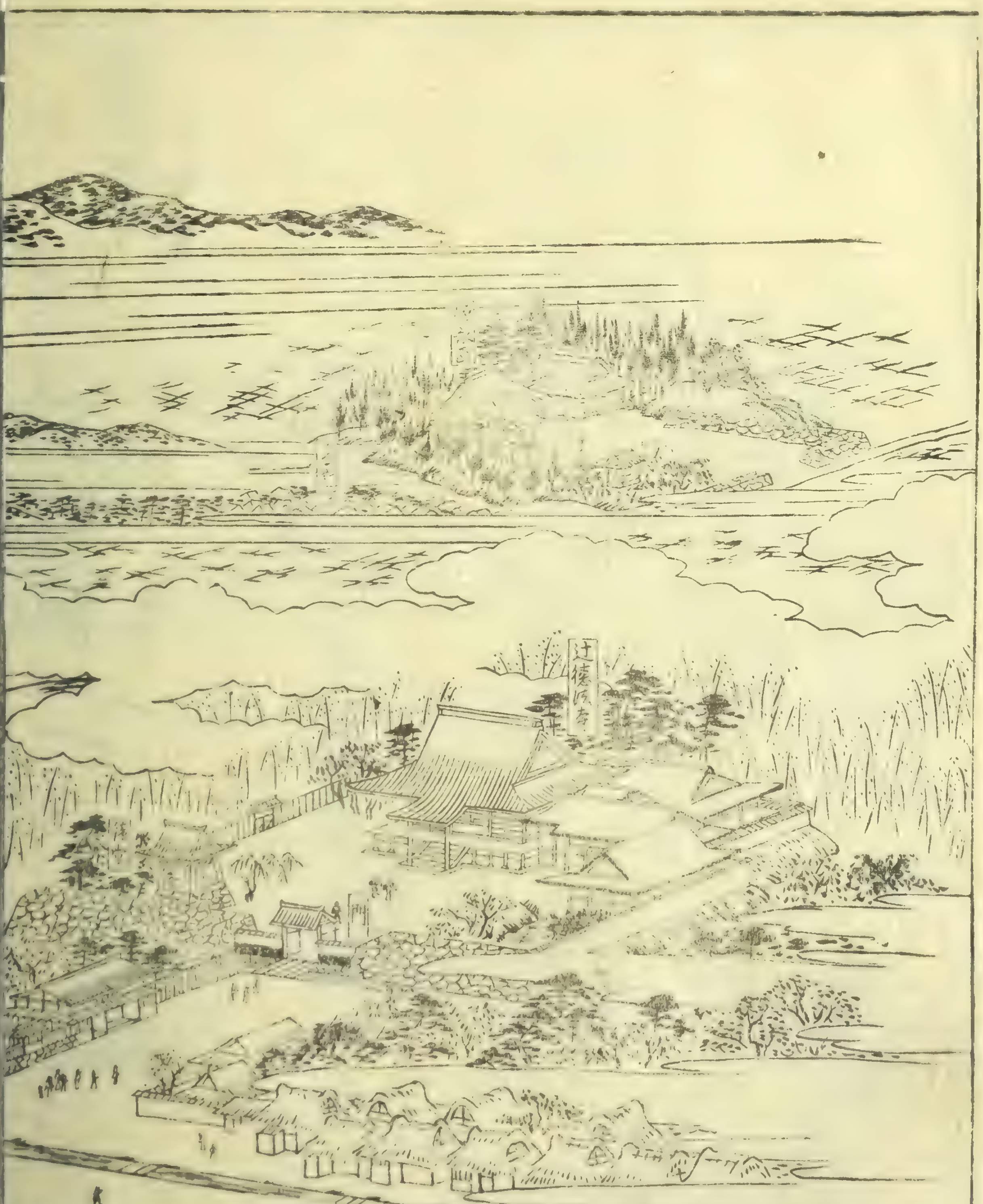
に来り聖人に謁しまゐらせ深く御教化に預り隨喜渇仰して尊

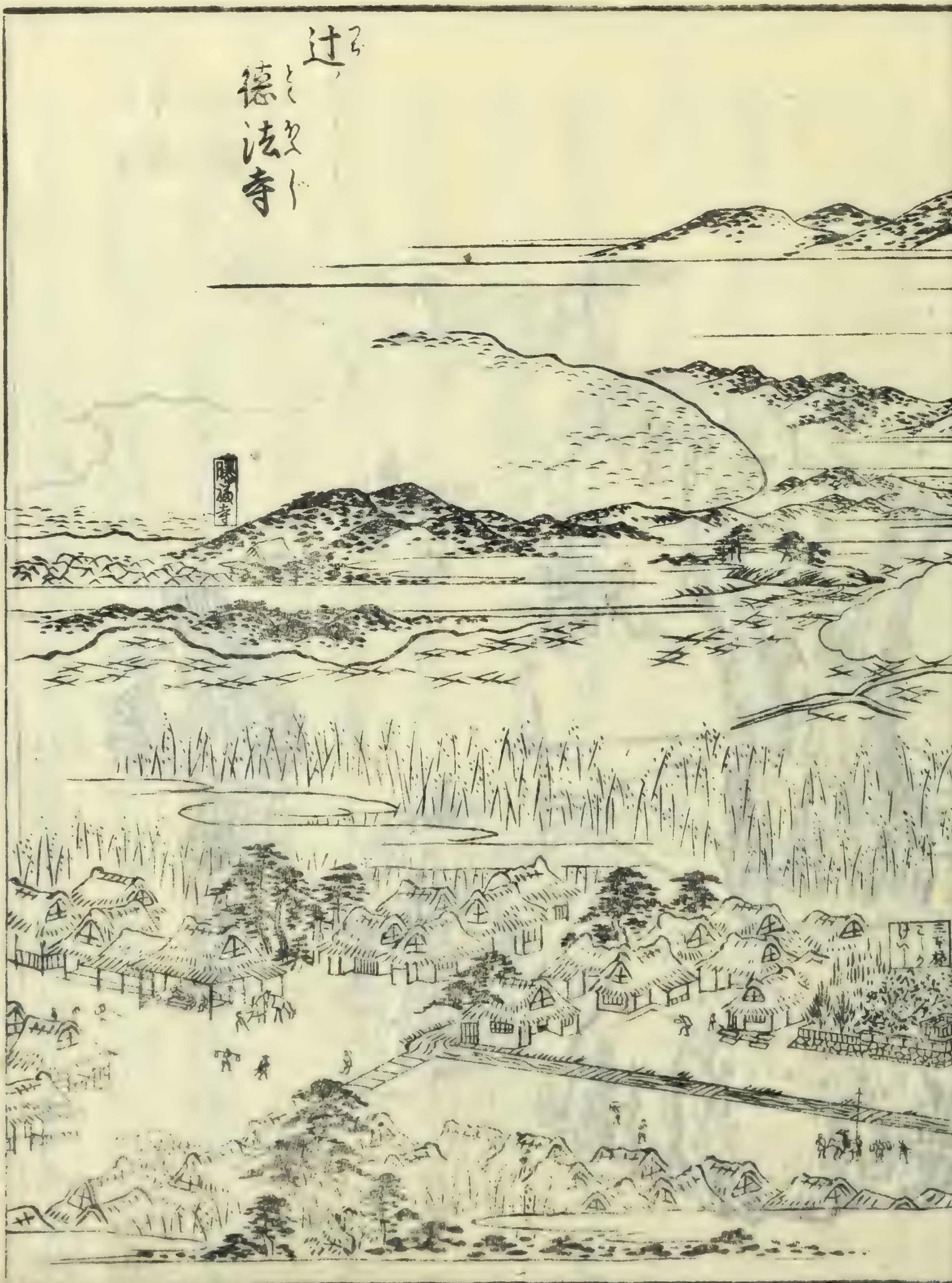
重し奉る即聖人記念なりとて十字の名號を書せられ与へ





辻徳法寺の由来


辻徳源寺


辻（つじ）徳法寺（とくほうじ）
勝願寺



三本榎乃圖

故にこれを世に辻の名号といふ又源左衛門が子孫家に一字を遠慮して本山より寺号を免し故に徳法寺即これ之御記念乃名号当寺に安置せり彼御腰掛石も門内にあるとなり

三本柿　同所にあり

むかし此地に経田屋といへる者ありけり高祖聖人此家に入らせ給ひ斎をすゝめしどもまゐらするに何となく串柿を捧げたてまつれば聖人二ツ三ツこれを召上られて其実を懐の中よりそ給ひながら彼炉中まで串焼たる実と取出し庭に埋み誓つて宣く今我ひろむる所乃法末世に繁昌ならバ此焼たる柿の根と生じ芽を出だしなと誓ひ給ひしに果して此柿根芽を生し枝葉繁茂せり（此柿の根本を同ふして三株にわかれたれバ世人よびて三本柿といふ）今も彼地に繁茂せりされバ聖人御教化の法流末代弥増にさかんなるも実に高

祖の金言剣府を合せたるがごとし尊哉永不滅佛の凡夫ハ焼たる果実のごとくなれども佛智不思議の誓約を信じ奉れバ附ハ忽光明摂取の御利益を蒙り現生に正定の聚に入しめ給ふ他力不思議の御利益仰ぐべし信ずべし

浄永寺　東派　三日市より十丁金屋にあり

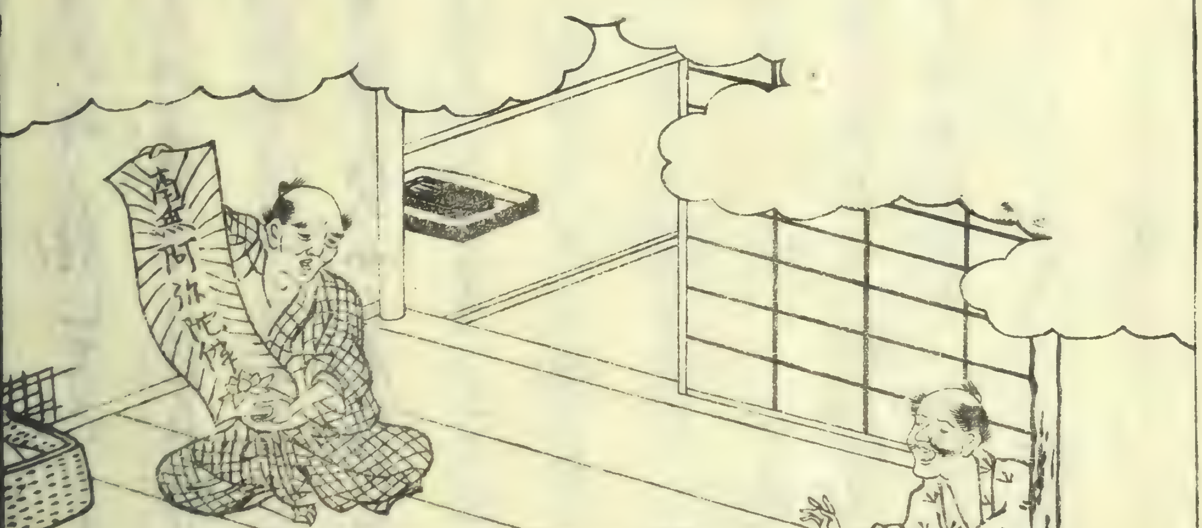
当寺ハ往古平家の侍斎藤別当実盛の孫永海源兼といふ者高祖の御化益に預り其謂を傳へたる舊跡也されバ斎藤別当実盛に二人の子あり兄を斎藤五といひ弟を斎藤六と云兄弟ともに平氏内大臣小松重盛公の家臣たり小松殿逝去の後出家して江州坂本西教寺に住し其子永安源兼ハ当国金屋に居住せしが其比ハ此所街道筋なりしかバ高祖聖人越後へ御下向の時黒部川よりここに出て三日逗留ましまし給ひける

が日〻源茫夫婦に對して懇にし専修念佛の御教化ありけれ
まひければ夫婦諸ともに随喜渇仰して信心受得ありけれバ
聖人御歓びのあまり十字名号を書せられて与へ給ひ別して妻
女がためには第三十五の女人成佛の願意を袮んごろに示したまひ
て紺紙金泥の名号を書て三十五願に表して三十五筋の光明を
畫てこれをも与へ給ふ其子孫一寺を営み浄永寺と号けられけり
右二箇の名号今に傳来れり
○同郡吾埋村託了寺に曇鸞大師高祖聖人對座の御
影あり聖人稲田にて御染筆と云
同郡舟見村雲龍寺に竹布墨筆十字の名号あり眼
に六字乃化佛は高祖の御真筆之といへり

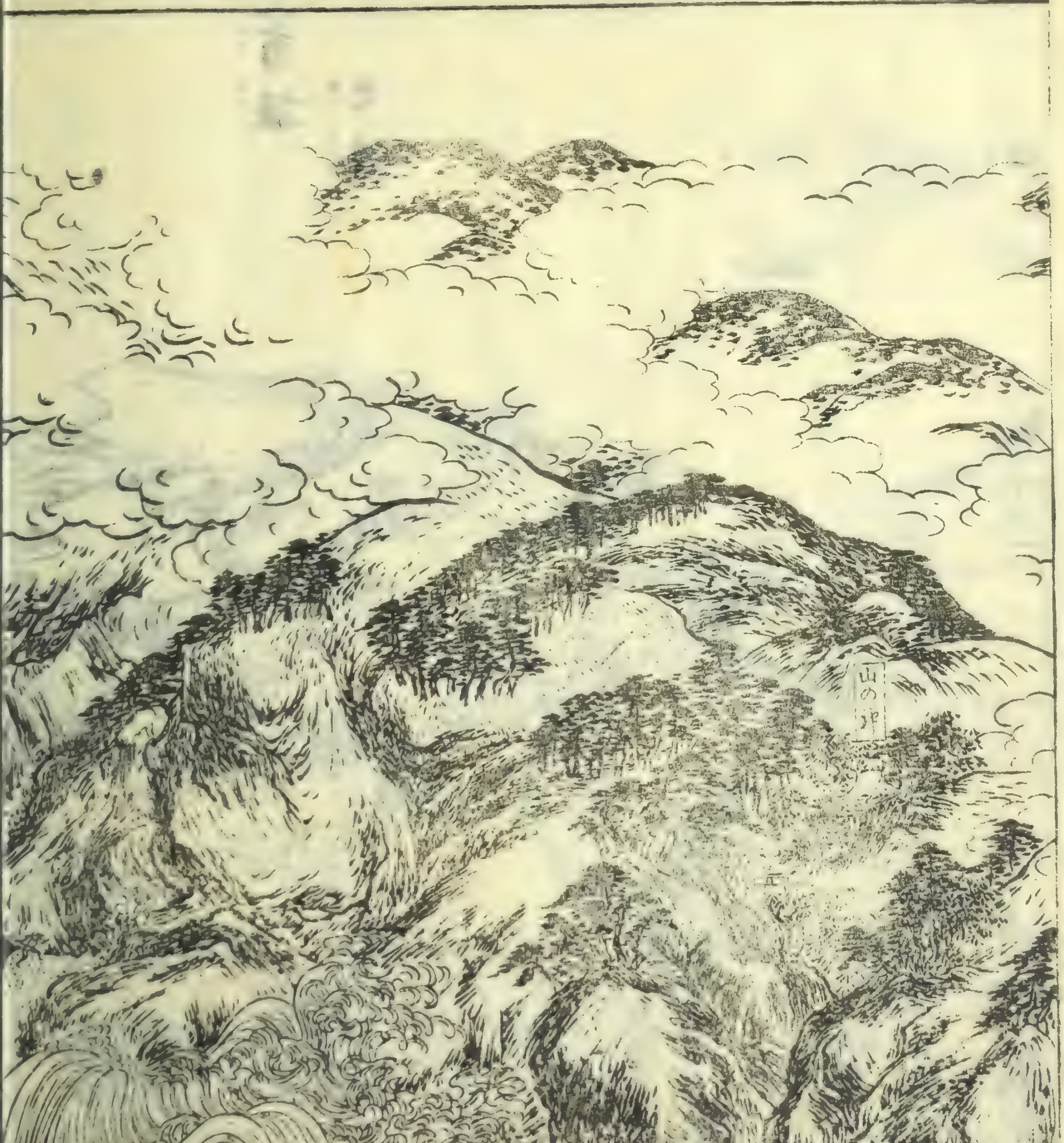
越後國

越中國三日市より横山の宿境の宿に到りて此里中の紀領之境川より越中

三十五
光明(くわうミやう)の名号(みやうがう)




市振之濱
關所


山の神

親しらず



越後の國堺なり是より越後乃市振外浪青海まで濱辺八里の名

天下無双の難所にて親しらず子しらず駒かへりなど云ひて此海道

よの中右の方ハ遠山嶮岸くもなく聳へ連り彼佛岳立岩に續き岩石ハ

屏風をたてたるごとく人力をもて取開くべき能はず海ハ渺々として波打際の危き

道を往還すれバ左ハ遥に遠波の渺々見へて果しもしれぬ蒼海なれバ巨濤

逆浪間なくおしよせくるも乃乱と失ひ魂を消す此の絶壁のかげ根

に大きなる穴ありて或ハ五七間又ハ八九間なして打るじさきまへる穴のいく

つもあり是を往来の旅人彼大浪の引とひき合せ急に走りて其穴の中へ

遁込ねバたちまち沖よりおしよする巨濤巌壁をおしくるに激烱つよくしてはげ

しく立のぼり走り抜きするものハ浪にとらるゝ忽大洋の藻屑とな

る此所に親も子を見かへるいとまなく子も親を顧るに暇なきとて是を

親しらず子しらずと名付り昔池大納言とかや申せし人流浪の時へ左

遷の時此所にて其愛の御子を大浪のために失ひ給ひ親しらず子しらずハ

の名ここにはじまるともいへり いづれ北國第一の難所なれバ風はげしき日などは

旅て往還も絶たえ遥に遠く廻りて此山の絶頂を通行しに是も凡の

ために吹落されていたるの谷間に踏び入て命を失ふ事をしる山の

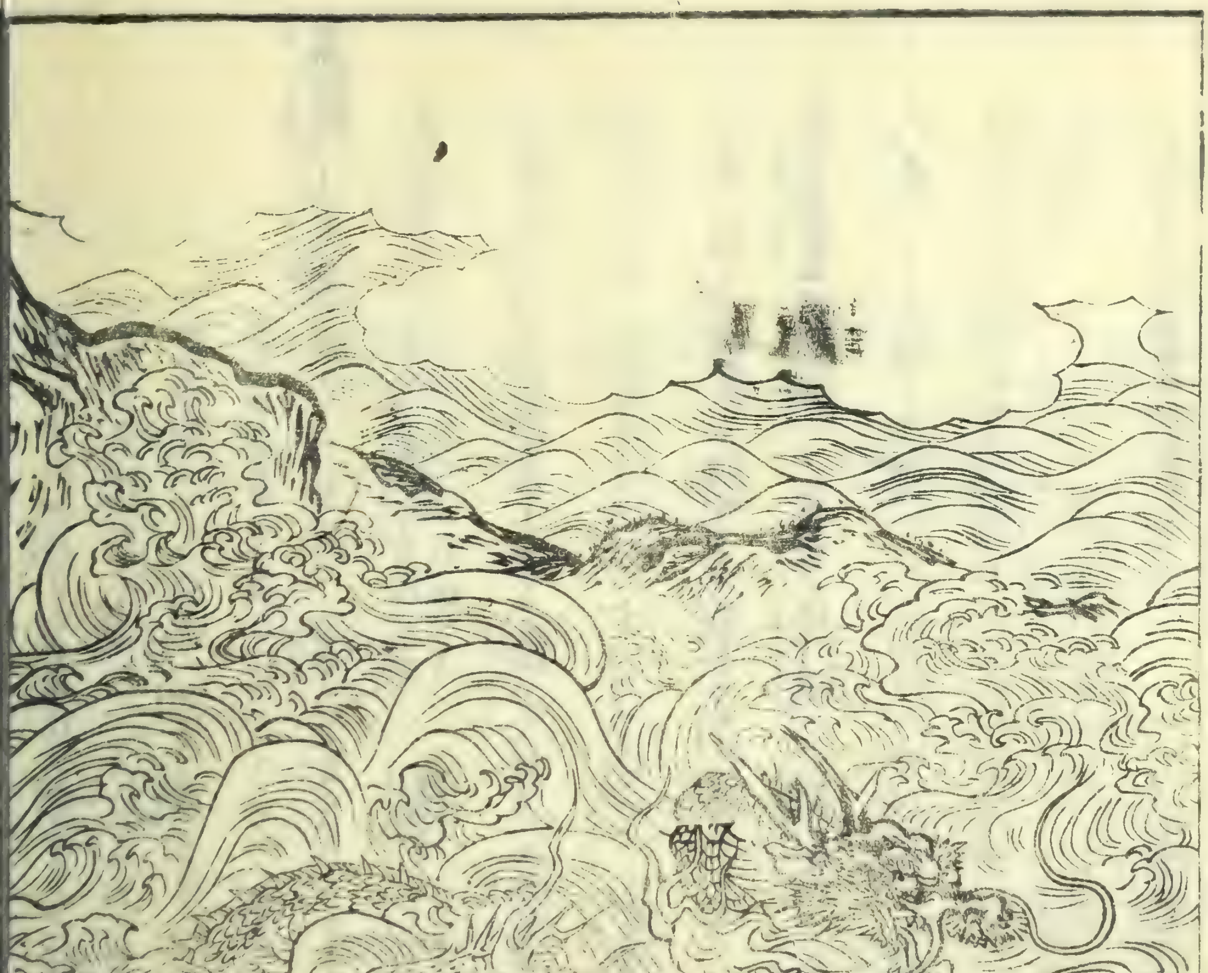
麓に歌村といふ人里あり此釣されバ浪打際の細き岩路一筋なの難

所なれバ旅人馬にて通るの旅人は足を踏みうりと名つけ有り高祖聖人のとす

らへの御時此濱まで荒浪に打まぎれ給ひ既に御命も危かりしに金色乃
大蛇忽然として波の上に現れ出逆巻大濤を遮つて聖人恙なく通し
世給ひしとかや給へ給る誠に聖人は弥陀の化身にておはしませばかゝる奇瑞
みなかふかんとぞよろこびありがたかりき

飛龍山大雲寺　本流　越中三日市より十里外浪にあり

本尊阿弥陀如来 恵心僧都乃作なり　当寺は往昔上人山の林莽外浪村の庄
司太夫の家に居右近といふ郷士なり高祖聖人越後の国府へ遷路乃
節此家に宿をまし／＼たまふ時右近兼て聖人の高徳を聞及び
に今日旅人を拝し奉る事何となく宿世殊勝におもはしまゐら
せ為重恭敬しまゐらせ珍味の飯食を調へ丁寧に饗應まゐらせ聖
人右近夫婦に對して弥陀超世の大悲願は末代罪障の凡夫をし
て安楽国に迎へ給はんがための誓言なれば唯一心に弥陀佛の願
に帰命して不可思議の名号を称じ西方に往詣せよとつく／＼念
じろに御教化ましくしれば右近夫婦涙にむせんで歓喜し妻の名




金龍波濤と交る
聖人の難と

を切て御弟子となり給へり聖人御喜の余りに法名を宗雲となし給へり御筆にて染られし十字名号を書与へ給ふ是より六代の子孫花徳といへる者あり文明四年越前吉崎へ詣で蓮如上人に面謁を遂げ拝見高祖聖人御自筆名号の由緒を物語りしかば即蓮師の御弟子となし給ひ法名を宗誓と賜り画像の御本尊六字の名号を授与し給ひ寺号を大雲寺と給りける

○外浪といふ處ハ海と宗光川の間に姫川といへる大河あり急流の處なれば船にて舟渡しするの難有之

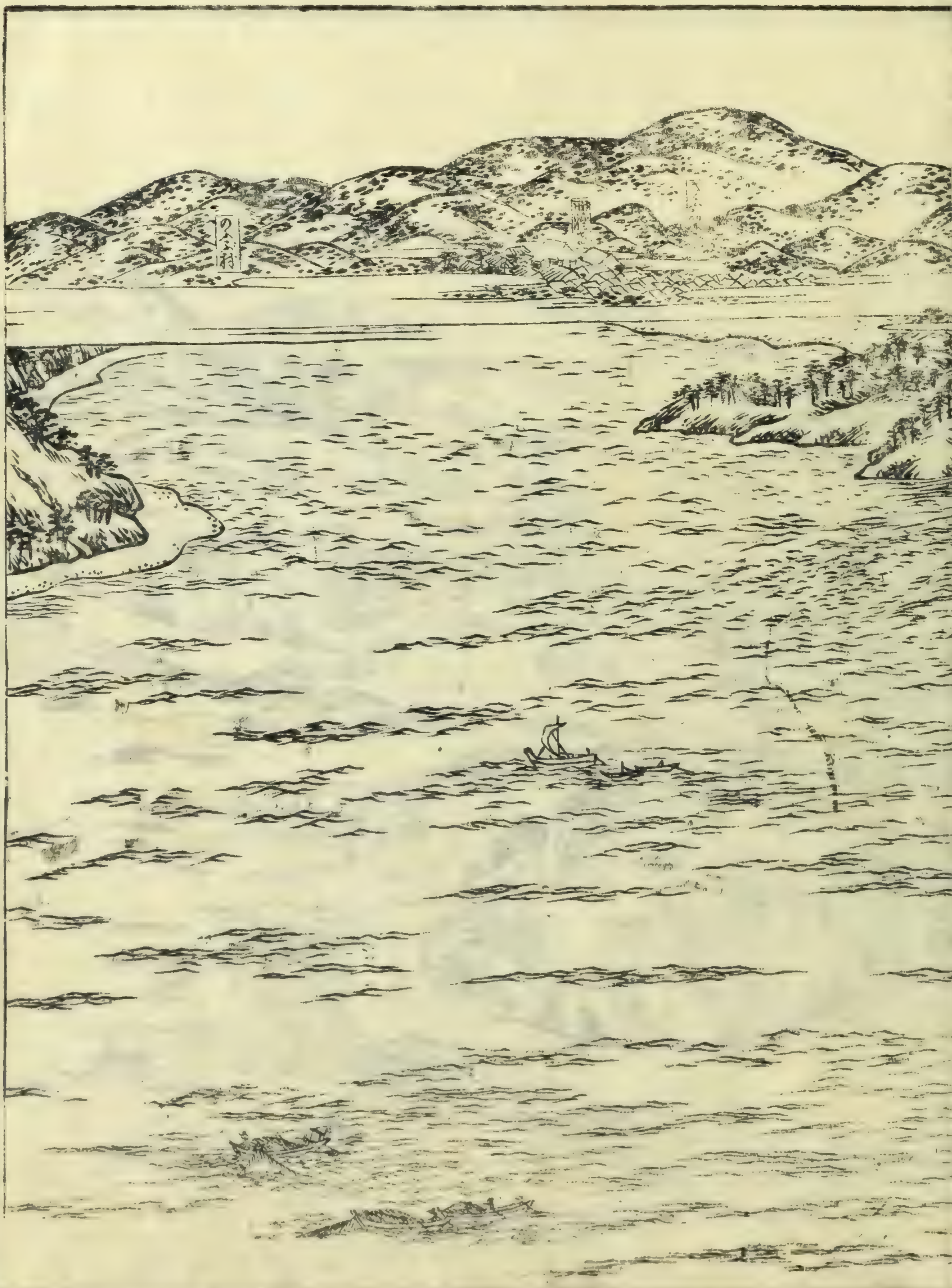
鬼谷山西性寺　東派 院家

外浪より六里半鬼伏村にあり

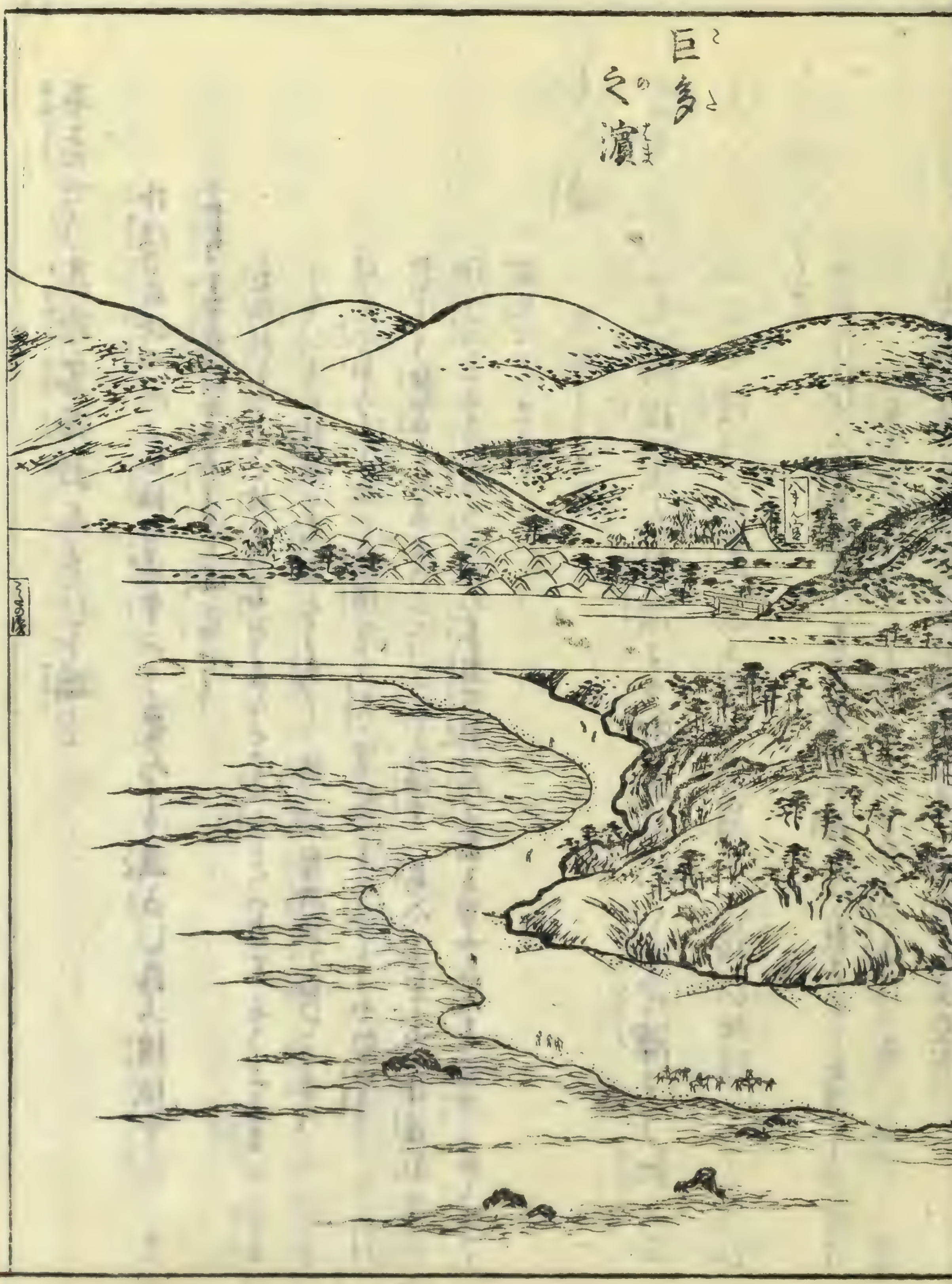
當寺ハ楠田西性寺と号ス本堂十三間四面本尊阿弥陀仏恵心僧都作也○往昔當國の刺史楠田出雲守祖師聖人に皈依して二心なかりしかバ即聖人十字六字の名号三方正面の弥陀仏を授与し給ふ彼楠田氏の子孫記立せる處の寺也とぞ今に此霊宝を


飛龍山(ひりうざん)
大雲寺(だいうんじ)
西蓮寺


鬼谷山
西性寺


のふ村




巨多々濱
八まん宮
こたの濱

安楽せり其外宝物数品これを贈る

外浪と鬼伏の間に田海西蓮寺あり聖人より授け給ひし紺紙金泥の字の名号墨跡六字名号を安楽せり

鬼伏村をすぎて能生の宿なり其間に名立といふ所あり上名立下名立とていづれも猟師の家居あり夫より鍋が浦当柳坂を経て名立川といふあり同じく人家おほく悪しく猟浦なり去ル寛延四年のことゝかや此名立より み馬川の辺より地震して名立の山二つに破れ海中へ落入しかば小山津浪潮涛涌一同に溢れ出名立なる川の人家数百軒一時に崩れ男女多人年海中に押ら入く溺死せしとかや

鬼伏より九里

巨多の濵

古老の説に云高祖聖人外浪より御立ありて小能浦より船に召て八里の海上を経り赤岩といふ所へ着岸し給ひ此浜へとて給ひし旧跡也とぞ

み馬川のむかふに長浜あり是より城の長浜といふ歟名所なる長浜なるべし太刀ぐりの難所右の方には麦田といふ所に上杉謙信の築し城跡あり此山の頂を蜂ケ峯といふ左の方に尼弾内匠が建し五智の如来堂あり

安国山国分寺

鬼伏より九里巨多より二丁余
国府の内五智町にあり

当寺ハ天台宗にして五智の如来を安置ス津梁院と号す本堂十二間に八間也　聖人配流せられ給ひし時暫く此寺の境内に在ましまし即二間四方の堂に聖人御自作の御影像を安置せり後なる山に鏡の池ハ聖人御姿を此池にうつして自像を彫せ給ふ依て鏡の池と称ス此寺と竹の内の御旧跡とハ

太場村御旧跡

五智国分寺より四丁太場村の西にあれ
藁竹の奥にあり今ハ小丸山といふ

此所ハ聖人左遷の御配所といへり後ハ叢林の山嶺に繞へ前ハ深淵の沼左右にめぐり中に山脚の狭き地面十歩に足らざる所即聖人の御旧跡也わづかに間狭なる所に浅猿げなる柴の菴をむすび聖人を入奉りしぞ労しき次第なり石碑両基を建たり　其銘に曰

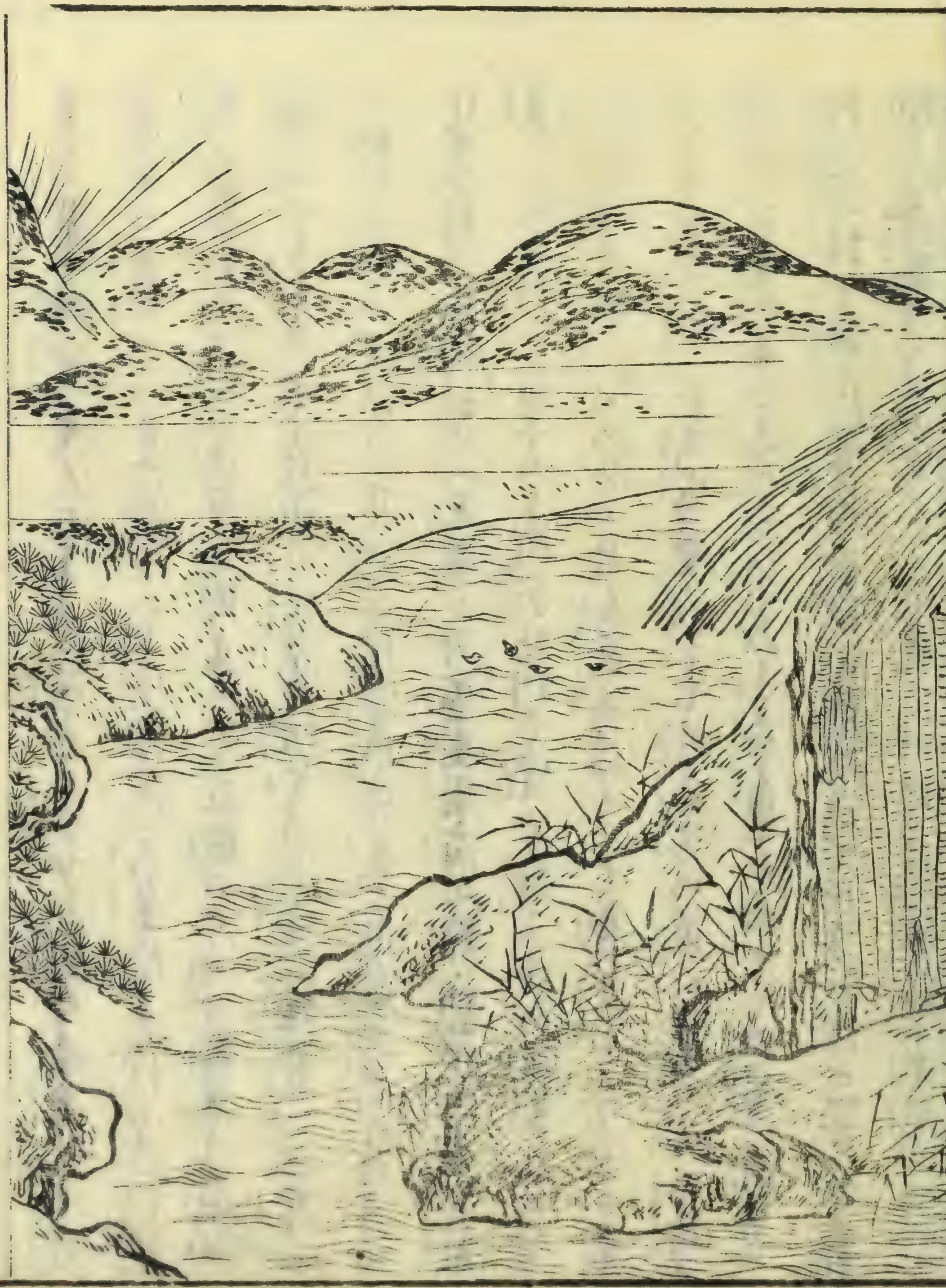
親鸞聖人国府五年之遺跡石燈籠延宝九辛酉年六月廿八日ご


安國山國分寺
五智如来
五ち如来
寺内


樓門



聖人配所の圖



又一基は親鸞聖人五年遺跡處に大谷本願寺奉報謝石燈籠右は貞享二乙丑六月廿八日とかり○人皇八十三代土御門院承元元年二月宗祖聖人御年三十五歳の御時北越後の國府へ配流せられ給ひしが此山の裕なる垣生の小屋に押籠られ給ひ日数をおくらせ給ひける其謂を傳へ兼けるが実に御痛敷おぼし給ふにむせびおわりぬ抑聖人左遷の時當國國府の郡代荻原民部敏景といへる武士の聖人を御預かり申て宜しく計ふらん有勅命なる彼荻原民部始めのほどは無道無信にして物の情もしらざる者なれバはじめ聖人をも只弱き衆人のごとく此山脚にいぶせき萱屋をまうけて入まゐらせ時気もなく其上此屋の形勢は彩木の松を柱とし茅の家根に薦をもて四方を防ぎ古葉を敷物とし浅猿ける庵なれバ風荒く吹時は薦張の端ぞ忽破れ雨潮し

く降積れば茅の屋根漏て御衣にしづくかゝれり住居の荒涼なる事一ッ
そのほかいたづらに痩給ひ朝夕の斎食だに足ざる時は
加之いかりの巡りを堀まはし水を注ぎ入れば誰か一人訪問ふべき
人とてもなく風の音谷の流れのみ騒がしくて樹々の梢とうとし
鶯の音信もなくそれ梟の声に啼狐の山に叫ぶ声のみにて物凄き
御住居なれば御髪も生ひたるのみにて長くのびさせ給ひ鬼乃ごとく
ましませし故自業自得と号じ給へ誠や一行禅師の火羅国に流
されしも秋月の本乃すむなれど猶其事と思ふのみ涙をおとしに
限りなしとはいへど俊寛僧都の鬼界が島に残されしも哀れにはあれ
ども海度利生のためならばかなはじとの心もなぐさし今聖人の流刑
に處せられしかく哀れなる配所の御苦労を凌がせられ御身を苦しめ給ふ
も皆是末代の凡夫をさまじき我々が後生出離のためにこそ撰て



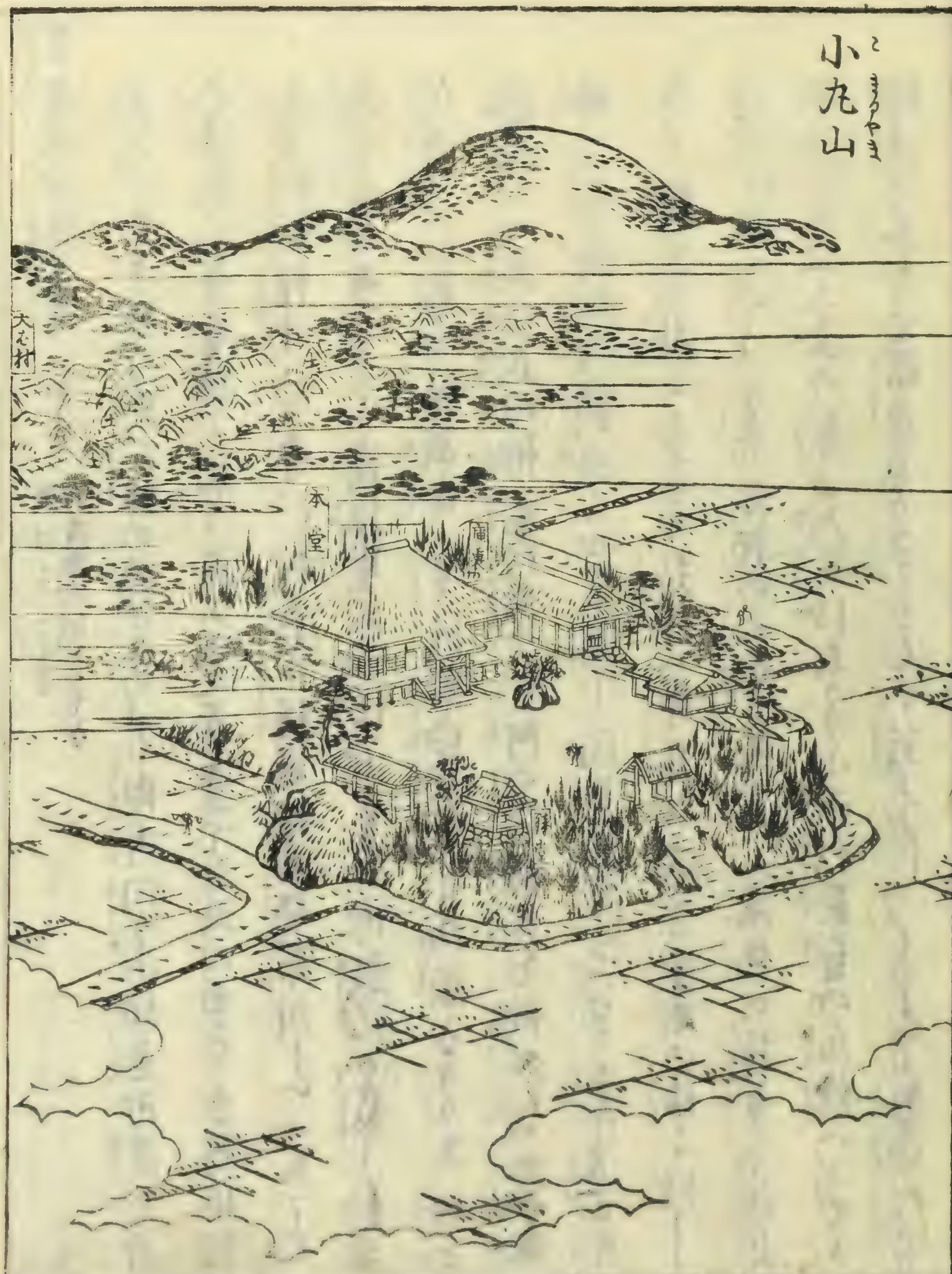
小丸山光源寺


弁天
本堂

の御苦労は遊ばさる所にしあれば爰に至りてこれを拝しまつらん物は
そぞろ涙に襟をうるほし祖師の高恩を感じたてまつるも宜なりと
謂つべし

國府光源寺 東流御堂　五智國分寺より二丁

聖人當國へ左遷御配所の古跡は小丸山とて高祖聖人御自画
先上の御影を安置し奉る又當寺に隣る寺も又小丸山にて真言
宗の寺也即聖人配所の寺なりといへり爰に荻原盛景始めの経
も邪見無道の者にてありけるが聖人を難面して申しけるが
数月をかさねけるに従ひ聖人の高徳に帰依し奉り御教化に預り無
二の信者となりけるとぞ故に聖人も其縁其謂に感じて此國のうち
あまたに移住して済度利生し給ひけるにより御住居の古跡も彼方
此方に多くこれあり世人是を額かしこむるなり


小丸山 こまるやま
本堂

笠原山本誓寺　東流　國府より一里半 越後頸城郡高田に在

當山は東本願寺御門跡の院室にして即御門主の幼君御連枝御入院ありし寺務職と成り給ふ所也本堂十三間に面本尊阿弥陀如来 恵心僧都の作 境中八ケ寺（　）住古は下総國相馬郡布川といふ所にて真言宗の寺なりしが高祖聖人に謁し奉り御教化を蒙り遂に御弟子となり給ひ釋教念と号し教念真宗に帰依なる其謂を尋ぬれば教念或時佛前に坐して阿字の観法を修せしめ即心成佛三密瑜伽乃観念に心を凝し閉目開目して居たるに誰云ふなく佛室の外に声ありて弘法は即身に遍照金剛の位に住し給ふとはいへども実は弥勒の出世に逢ざれば成佛の極意を悟る事能はず故に高野山の奥に入定したまふ末代愚昧の凡僧いかでか観法を以して悟道を得べけんや急ぎ是を廃して教念何若

なるゆへんと甚しく立て戸を開きされば更に人みゆる事なし爰に於て
教念思へらく今戸外に声有しは全く人の雑語にてはあらざりしと
是雑行の徴じなりしを我に告げ給ふ大師の示言なるべし去ながらも
以何なる法を行じて迷ひを遁るゝ事を得んやといふかる心の若し
げなりけりて伏拝びて思ひしが幸なるかな祖師聖人此附稲田小
島辺に居して末世の要法弥陀超世の悲願海を弘通したまふ
よしを聞及び急に聖人の御許に詣で御教示を蒙り立所に信心
獲得の身となり一向専修の行者となりぬ其後教念坊信州高井
郡井上笠原といふ所に一宇を造立ありて真宗寺と号し代々を歴
て後蓮如上人の御時謂ありて寺号を本誓寺と改め其後又当
所へ寺を引移しと云々 ○霊宝 高祖聖人御自画等身の御影 教念上人
御添状 川瀬の名号 柳浦寄子屋が老女に授る 聖徳太子御自画御影 御添
状 由来ハ柳浦御回顧の事に記ス 聖


敬念得真宗圖

人の九字六字名号 聖人の御真筆 後水尾院御震翰の名号 其外霊宝数
十品霊像古筆等数多あり略す
觀喜踊躍山淨興寺 東派院家 同本寺町にあり
本堂十五間 本尊阿弥陀如来 小野篁の作 ○当山ハ正安開山親鸞聖
人開闢造建し給ふの霊場なり然るに寺院ハ兵乱の火災にかゝりて他国にあ
積信し又ハ武ある事に挙せる国主の帰依に仍て往地を他郡に移すと
いへども高祖傳来の寺宝相兼の什宝歴然として現に存在ス
其下の寺院百余ケ寺をおてり 抑高祖聖人開闢し給ふ由来を
尋るに聖人御年四十歳の御時御帰洛ありし都に真宗寺を建立
し給ひ同年の冬の比即建暦二年常州小島の郡司武弘にかに
向ましくるが正又年の間信州上州越後の辺を御化導ありて既に此
建保五年正月より同国稲田の郷に来らせ給ひしが幽栖さらにへん

道俗跡を務め蓬戸を閉といへども貴賤衢に溢る此時聖人仰られ
て曰佛法弘通の本懐こゝに成就し衆生利益の宿念忽ち備足
れ当初夢に救世菩薩の告命を受しも已に今しも符合せりとぞ
御喜悦ありけるが此時に当国の御弟子御門葉の輩頻に[illegible]宇と
御建立の儀を願ひける聖人甚御歓びありて即常陸国笠間郡稲
田の郷雪谷といふ所に一宇を創建して歓喜踊躍山浄興寺と号け
十余ヶ年の間居住ありて所々に往返し御化道ありけるが
嘉禎元年の春聖人御年六十歳にして稲田の御坊を御発足ませ
らる御帰洛の砌に臨き給ひ此時此御坊を御弟子善性といふ人に譲りあたへ給ふ
此善性上人と申は元人乃流にして此人皇八十二代の聖主後鳥羽院第三の
皇子にてましましけるが叡山に登り出家して周観と号し[illegible]
の功積り修徳良秀給ひけるが頻りに隠遁の志おはしまして[illegible]

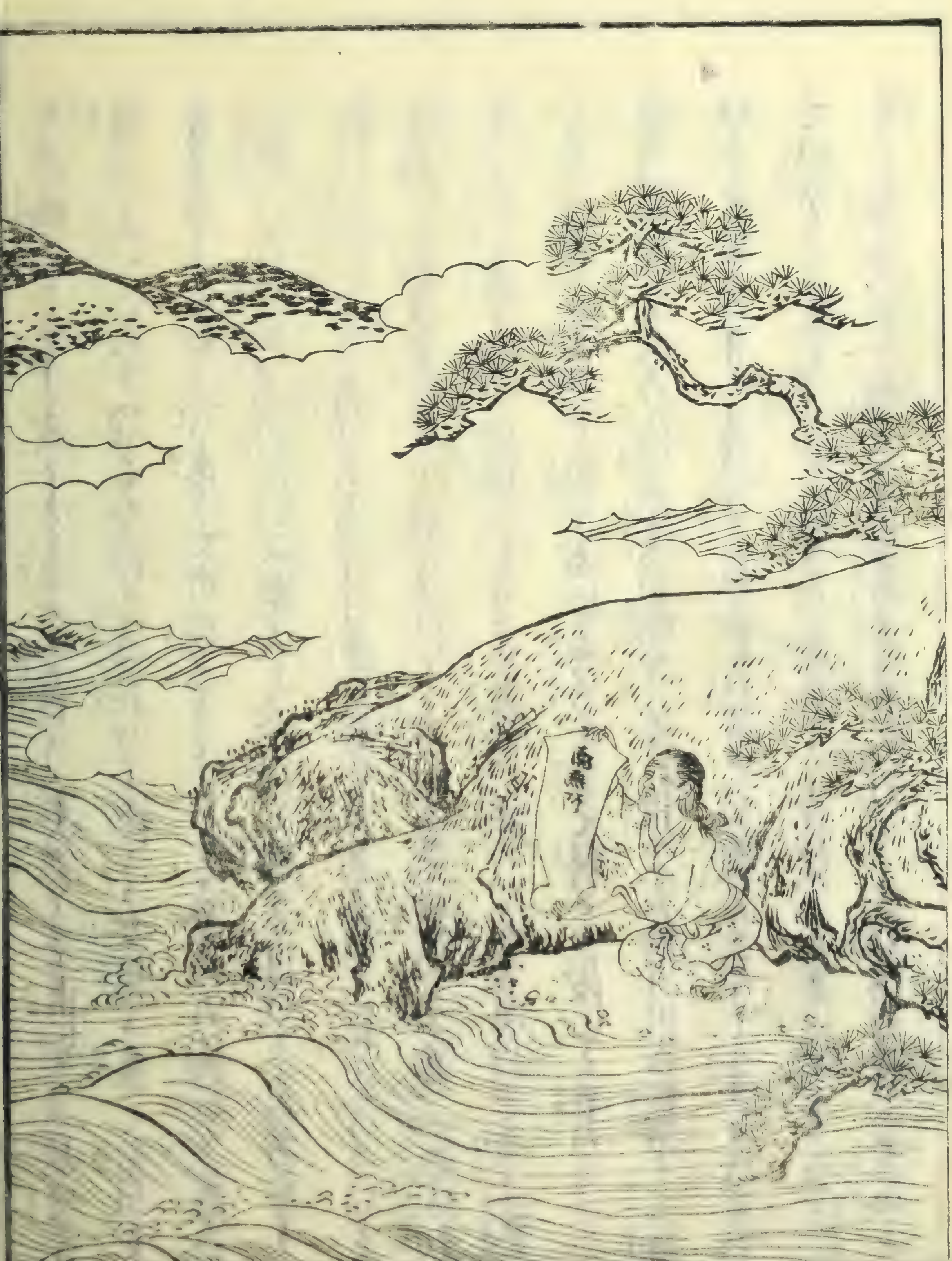
諸国行脚し遂に下總国に到て国守豊田正郎治親が許に逗留
せしが善因に値ふの事ありしにや高祖聖人関東御化道の事を聞しめし
建保六年御年二十歳にて稲田に到り聖人乃御教示を蒙り
御弟子となりて聖人より法名を善性と授け給ふ既に善性上人は
浄興寺第二代の住職として専ら聖人の遺法を弘通したまひしが
文永五年八月廿日御年七十歳にて大往生を遂給ひぬ其後此輪
田浄興寺国乱兵火の災により皆く總州磯部より今の霊場を
移しけりしが再び信州長沼に寺様を引うつして再建ありしに鎌倉
将軍より寺領の田園三千貫寄附ありて嗣子相続し数代を歴たり
然るに永禄元年川中嶋に軍起りしかば兵火の為に寺院悉く
回禄に其時の寺務田園寄附の墨付を取出さんとて堂中に踏入
猛火の為に焼死せり其息乃園未五歳なるゆゑ寺僧等寺号を守りし寺

兵乱の砌寺宝物諸ともこれをもち小市といへる里に蟄居したり
しが謙信の信州を領せらるゝ時没収て別府といへる所に寺を営み
上杉景勝の時当国春日山の麓に方百間の地を寄附ありて当寺と
変じ引続て堀久太郎当国領知の時は又福嶋へ移住せしが暫くして
上杉氏領地の時に今の此地へ移て方百間の境地を得たりとぞ云

○霊宝九字名号 紺紙金泥聖人御真筆 六字名号 聖人御真筆 上宮太子真像 祖師聖人御作
稲田にての 蓮座御影 親鸞上人若壮上人の御蓮座あり 二十一ヶ条制状 高祖聖人御真筆巳て歓喜踊躍山浄真寺
奥書に若壮上人とあり 法然上人御真影御自画 蓮如上人御裏書 寺号の額 高祖御真筆

○川跡名号 此川跡の名号は祖師聖人の御真筆にて海内無二の霊宝 祖師聖人国府にましませし時虫口と
いふ所に老なる夫婦のものありて聖人の御教化を蒙り信心堅固也
けるが一説には大塚村の老夫婦ともいふ或時男一人国府へ来詣しかれば聖人は不識後へ
結ませ給ひしとかくなにや庵室を出給ふに嘆御名残を惜み焼ま

も御暇乞させ申度とく急ぎ立帰り姥にかくと告しかば姥聞も
敢ずては何かに聖人はなや御出庵おもばさせしとや婆が兼て願ひ置
まゐらせもさむへば参りて御暇乞申さんとく聖人の御跡を慕ひ
小俣川の川端に到りしに聖人はなや川を渉て岸のとまでのぼり
給ふ婆は此方の山岸によるがり声を揚げて御名號を唱とまうりにた
ま御記念の名號を賜はらせしと声願きて頼むまで聖人姥が切
なる志を感じ給ひ仰られけるは老女の身のいかでか此川を渡り来
らん其は方にて紙を披くべし名號を書て得させんぞしと宣ひけるに
婆は歓び聖人の仰に従ひ懐中より一紙を出し川の向ひにて押
ひらき聖人のましま彼方に向ひて待ければ聖人其まま筆を染給ひ
て此方よりさらさらと六字の名號を書給へば不思議なるかなさし
も広き川を越て六字の名號墨くろぐろと移らせ給へば老女ま


南無阿

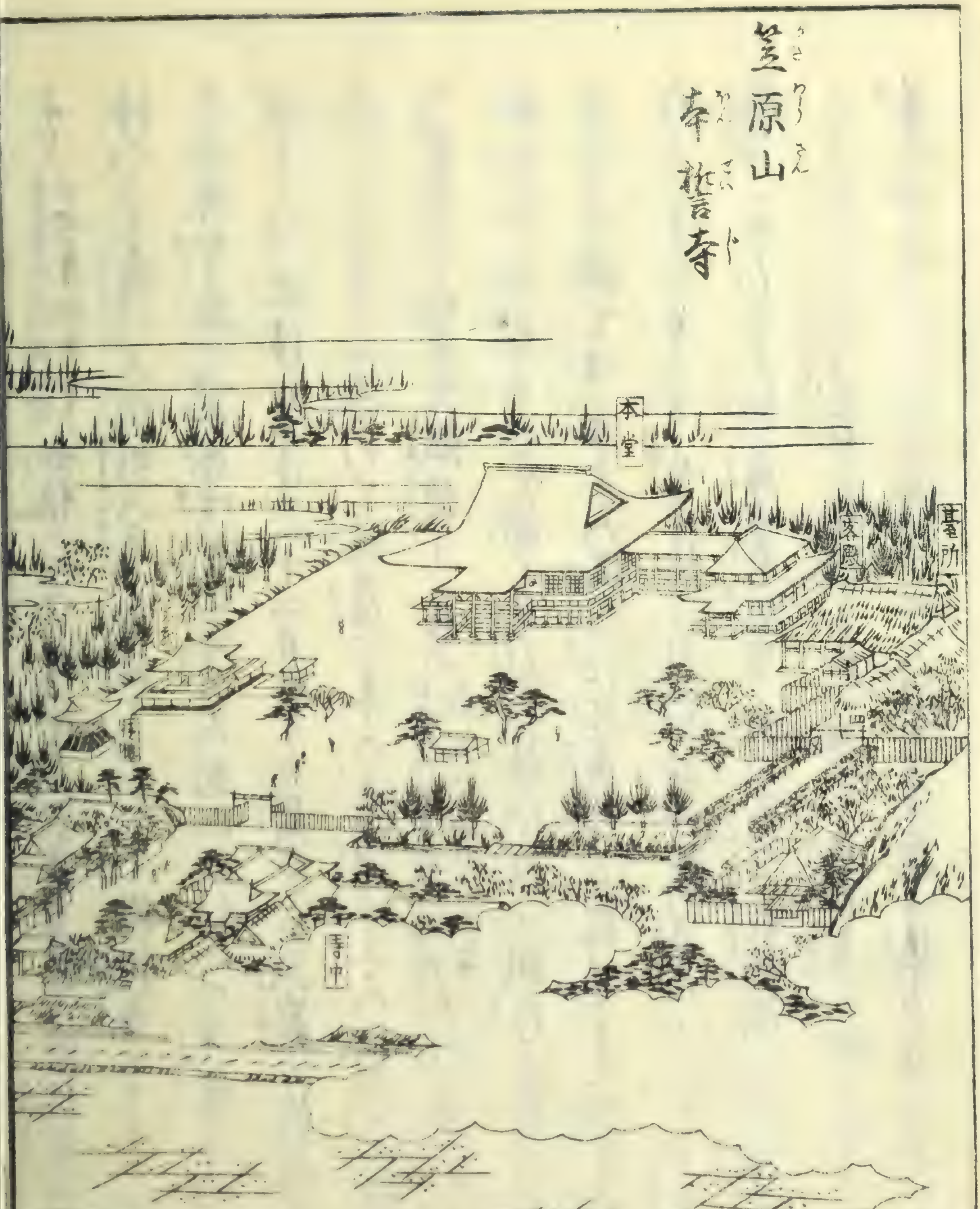

川獺乃名号

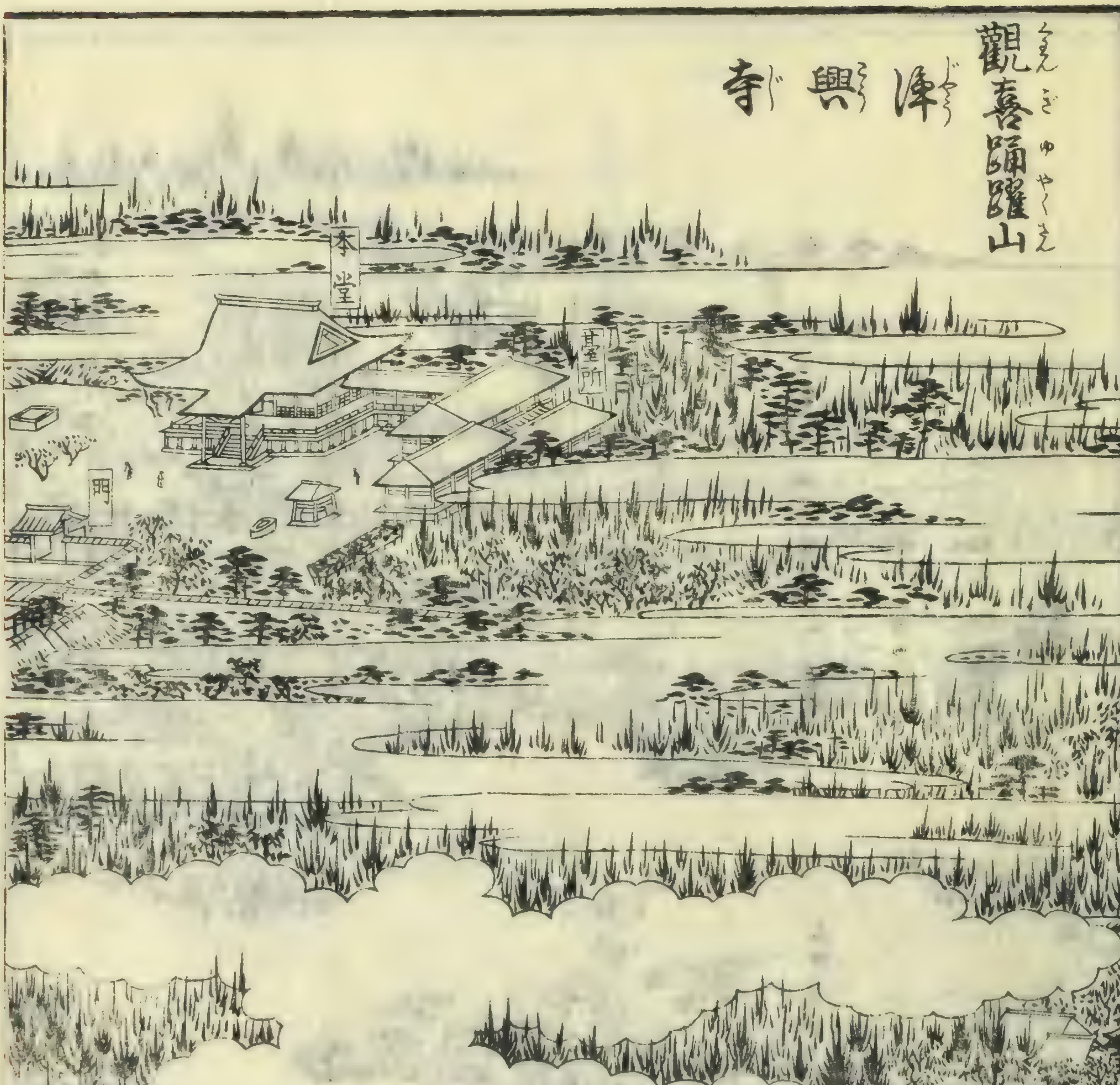
奇異の思ひをなし押戴きく大地にひれ伏拝ミ悦び喜ぶ泣
く御別れを告げて立かへり事の始終を丁寧に物語り彼名号を
拝せけれバ聞て五体を地に投じ歓びの涙にむせかへりいよいよ篤
敬ひけしなりしが年を歴て彼老夫婦が子孫断絶し縁に仍て当寺
の霊宝となしけり是を川獺の名号と称しけり○此外聖人
の御真骨数十粒 聖人御真筆の書跡或ハ霊像霊筆
聖人御所持の法具惣して数十品宝物と伝来せり

中戸山常敬寺 東派院家 同下寺町にあり

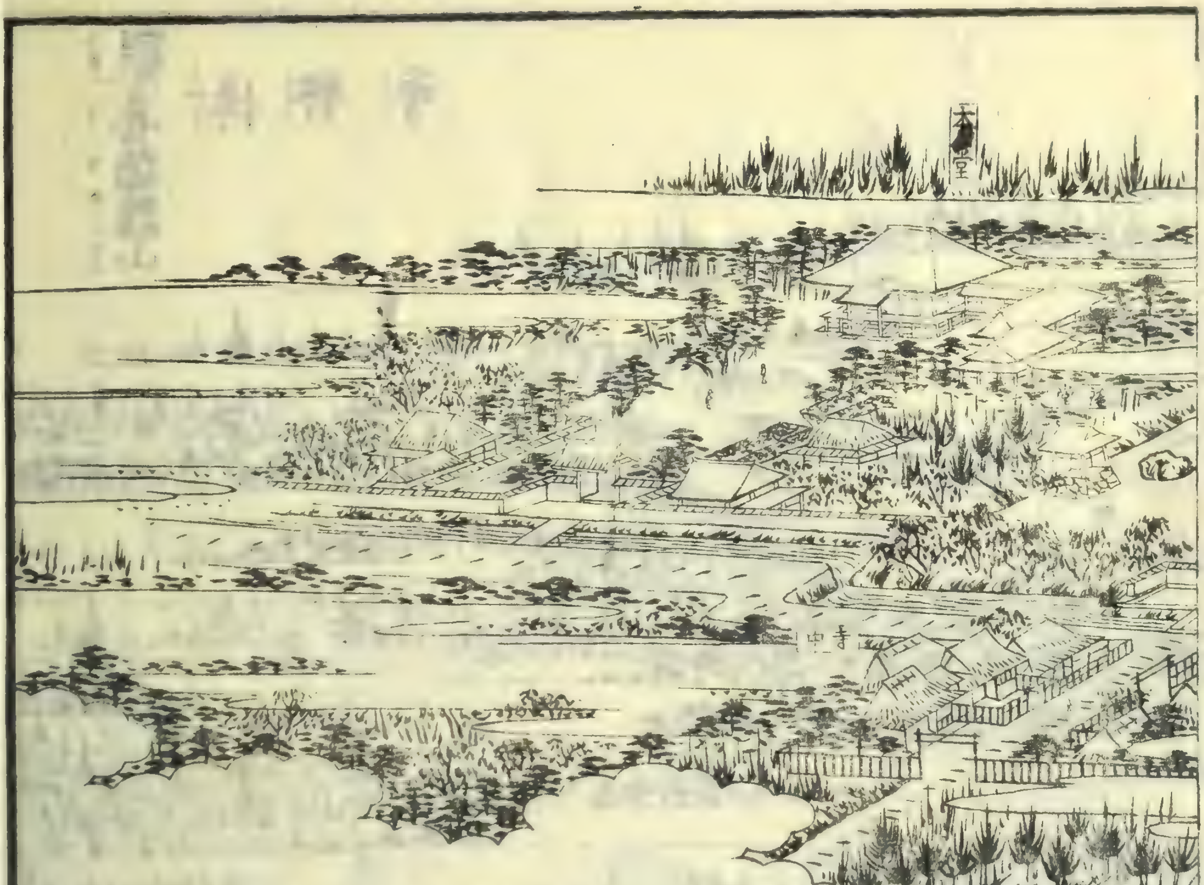
当寺ハ西光院と名づく本堂九間四面南なる相好附阿弥陀如来 安阿弥乃作 塔頭二區○往昔高祖聖人乃御直孫唯善上人開闢ける道場之唯善上人と申ハ親鸞聖人の御息女 法名覚信尼 の御息男にして御父ハ小野宮禅念坊の御猶覚恵上人御同胞

より（覚恵上人の御父は日野広綱卿なり）如信上人は大谷本願寺第二の御住職にたち給へども奥州大網郷に入寺に下向ましまして御化益ありけるによりて大谷御本廟は覚恵唯善の両上人南北に住して守護し給ふ覚恵上人は徳治二年四月十二日六十九歳にして入寂し給ひしが夫より三年に当りて延慶二年の春唯善上人相州常盤といふ所に下向ありて教道し給ふ（□□くは敬重し給ひ一期他慕ひ給ひ誦じ給ふとかや）于時鎌倉将軍惟康卿唯善上人を深く帰敬し給ひ度々聞法の為に参り給ひける儀にて唯善上人関東に化益ありせ給ひしとぞ御堂造営のありしを将軍へ言上ありしかば即ち将軍の御許ひとして下総の国関宿にて相ひて大伽藍を建立ありける時の天子花園院へ奏聞を遂げられ中戸山西光院と勅額を下し賜はり宗法専ら壮んなりけり第三世覚如法師の時京都大谷御本廟に遠背ありけれども

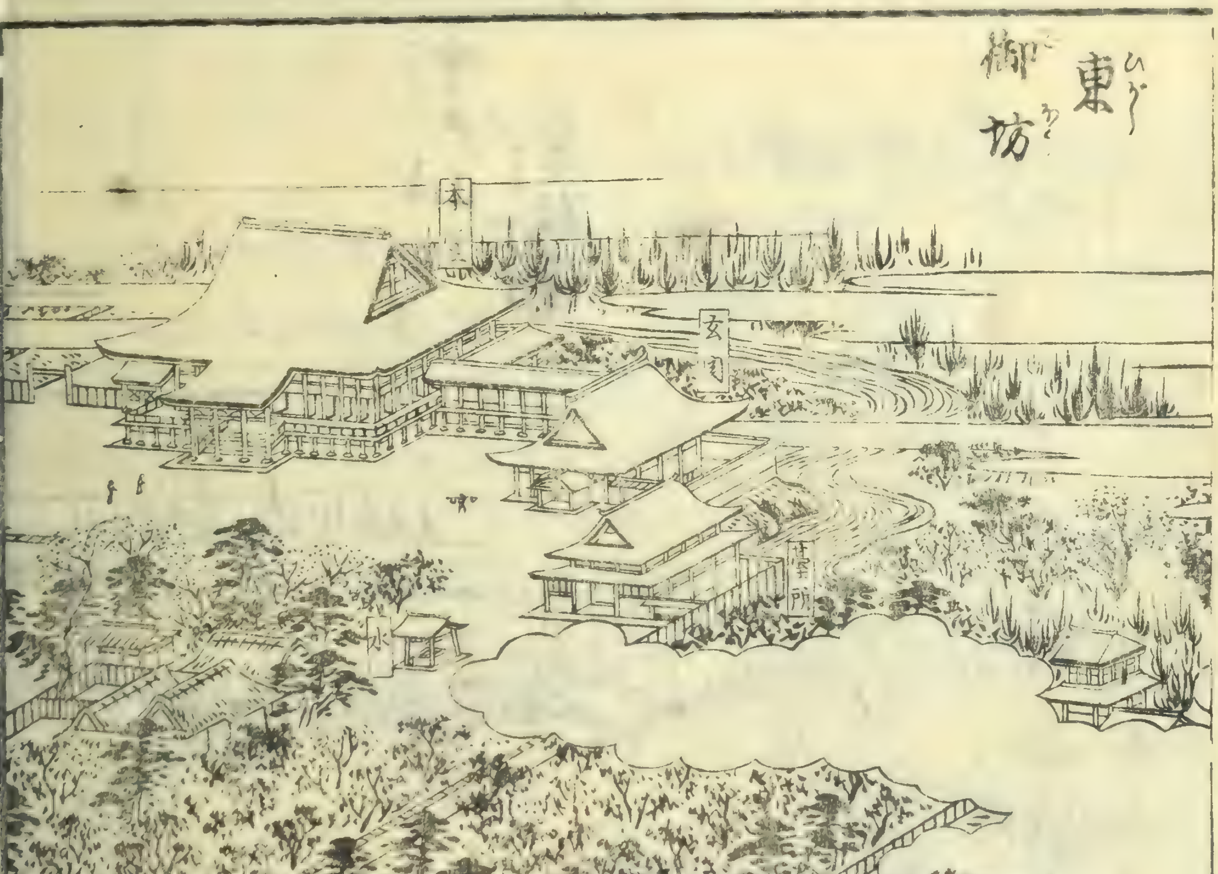

笠原山
本誓寺
本堂
客殿
墓所
寺中

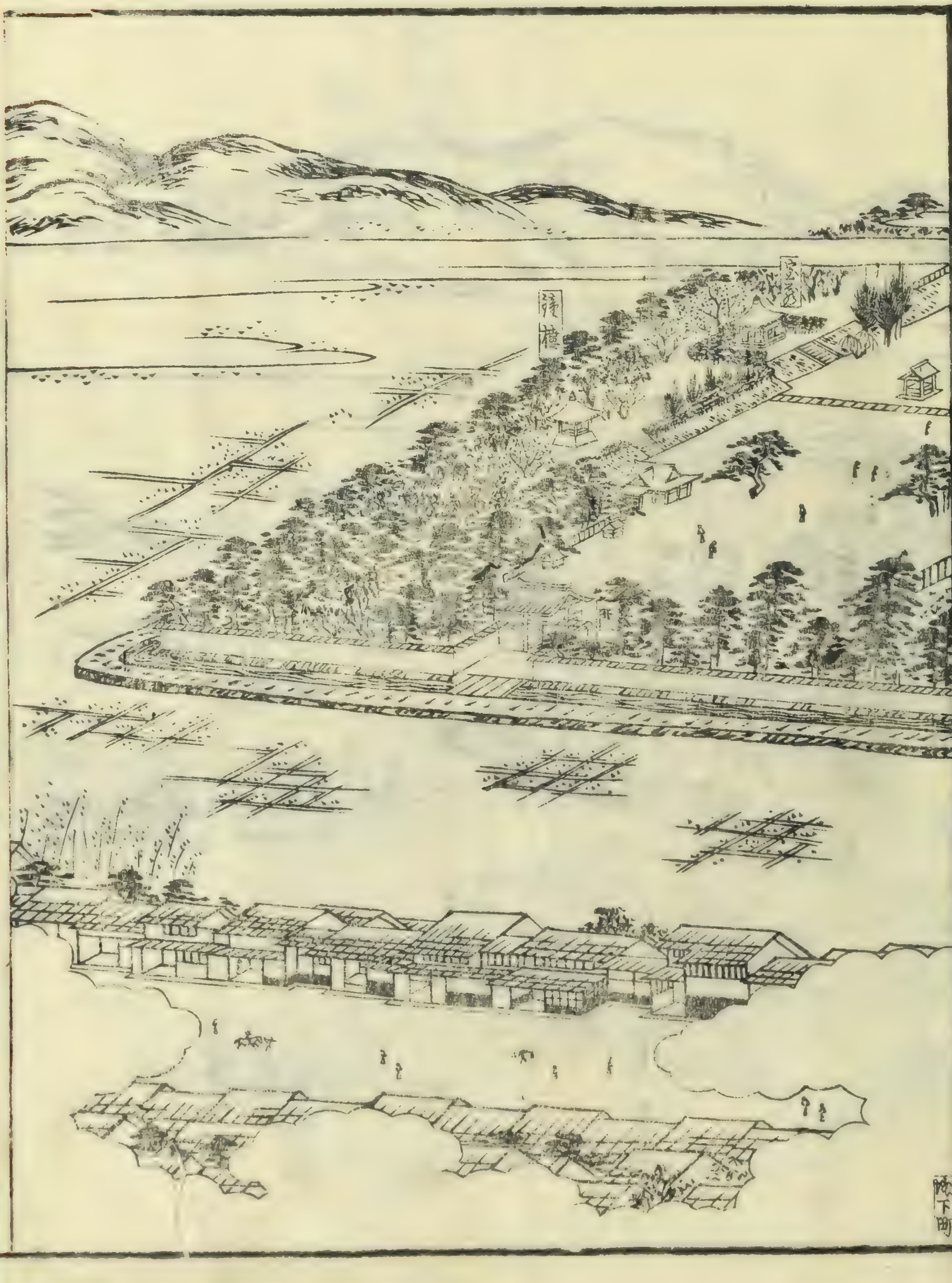


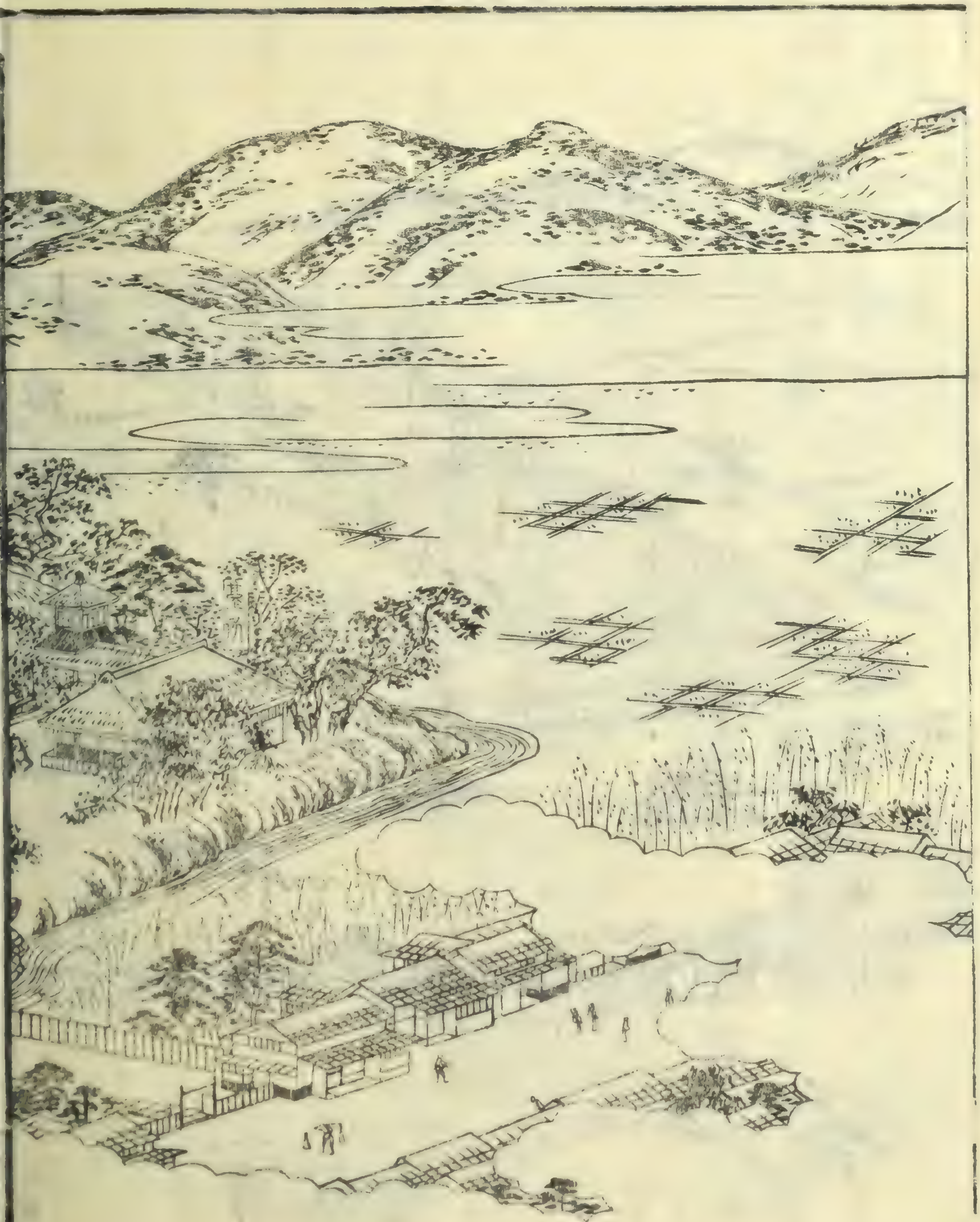
歓喜踊躍山
浄興寺
本堂
墓所
門


本堂
寺中


中戸山
常敬寺


東御坊（ひがしごぼう）
本
玄関
水


鐘樓
陵下町


舊跡


瑞泉寺
本堂
門
鐘樓
寺中

第六世善鸞の時蓮如上人に皈依して即蓮師より常敬寺といふ号を賜ふ其後代々を経て天正年中当寺十世了順の時豊臣秀吉公と小松家と對陣の御中戸山兵火の為に回禄に及べり是より て此所に院を移し今に嗣法相兼れりと云 霊宝九本の阿弥陀佛 聖徳太子十七歳の御作光明佛と称じ 蘆の名号 聖人一刀三礼の御作にして日本一体 乃る像之名號不離の名号といふ 新羅王 中戸山の筆記 聖徳太子の像 聖人御作 其外宝物数不暇なし

性宗寺 佛光寺流 日本とも

当寺は高祖聖人御自畫乃真像を安置せり是聖人三十八歳の御時乃御真像之とりや葉屋の内に御衣をさされる御姿にして債に秘蔵の御装束を掛給ひる御類なり猶南無阿弥陀佛を越後配所笠島国府畫く兼元丁卯年五月廿八日善信とかそかさまへり

井波園瑞泉寺　西派院家　同所春日町にあり

後小松院勅願所本堂十六間四面なる　春日の作　十七尊蓮座の御影

如信上人御筆　證中尼ヶ寺　経巻一函　寺系は越中国瑞泉寺同系は

て本願寺第五代綽如上人御建立の引地之に当寺は越部勝寂なる

の別院也とつたへ殊更ぞも当りしと先師遺跡最に記されたり

東派御坊　同所にあり

本堂十三間四面

同原山明専寺　信濃国水内郡柏原にあり　越後国高田より荒井松崎関山二俣

柏原へ行程十一里　関川まで里程凡八里半此所越後と信濃の境也越後高田より信州

御旧蹟の縁記は信濃国乃部に委く見ゆ以下の寺院準之

遠石山願法寺　柏原より一里半　同国同郡新井村にあり

善光寺　新井より三里　同国同郡にあり

布野長命寺
善光寺より一里
同国同郡柳原庄南堀にあり

浅田山西厳寺
南堀より三十丁
同所長沼にあり

平林山本誓寺
長沼より五里半
信州埴科郡寺尾庄松代にあり

紫阿弥陀堂
松代より半里
同国同郡芝村にあり

白鳥山康楽寺
芝村より二里半
同国同郡海野庄塩崎郷角間村にあり

大宝山正行寺　東流
塩崎より十二里
同国筑摩郡府中松本にあり

大宝山正行寺　西流
同国同郡同所にあり

木曽山長称寺
同国同所にあり

○信州松本の城下より浦野坂木戸倉を経て再び善光寺へ出て夫の街道を越後の高田へいたり夫より越後を出羽国へ出るなり越後の高田より信濃国善光寺へ往来の里数三十三里余又塩崎松代長沼南堀等の旧跡を順拝すれば道法およそ四十六里なり

○或は越後の長浜より高田へ出ずして浜辺をすぐに今町柿崎鉢崎柏崎出雲崎寺泊なとを経て新潟に到り新発田より帰路の御旧跡を経し長岡の城下信濃川を渉り除宮方妙法寺村等をすぎて再び柏崎へ出てまた高田の城下を順拝し本文のごとく信州へ越き松本より直に関東の方上野国に入るもあり此外経廻旧跡名所あるいまでの国の郡に委しく記をうれば考へ合せらるべし

二十四輩順拝図会巻之三終

二十四輩順拝圖會 越後 四

目録

○越後之部

正覚寺　　願敬寺　　荒井御堂

照光寺

以上

…たるべき事
加御誅罰候、若見隠聞…

朱　印(秀吉)

…来る。木賃の定めは凡て旅…
…に、旅人出づるに臨みて、白米…
…五勺となし、十日行くものは…
…匹八文の定めにして、下りて…
…文宛とあり。時勢によりて、…
時代の刑法なり。其義種々…
…たりとも、其持てる隈不残取…
…に解し、豊太閤の始めしも…

成敗事、

、

罪科之由候也、

朱

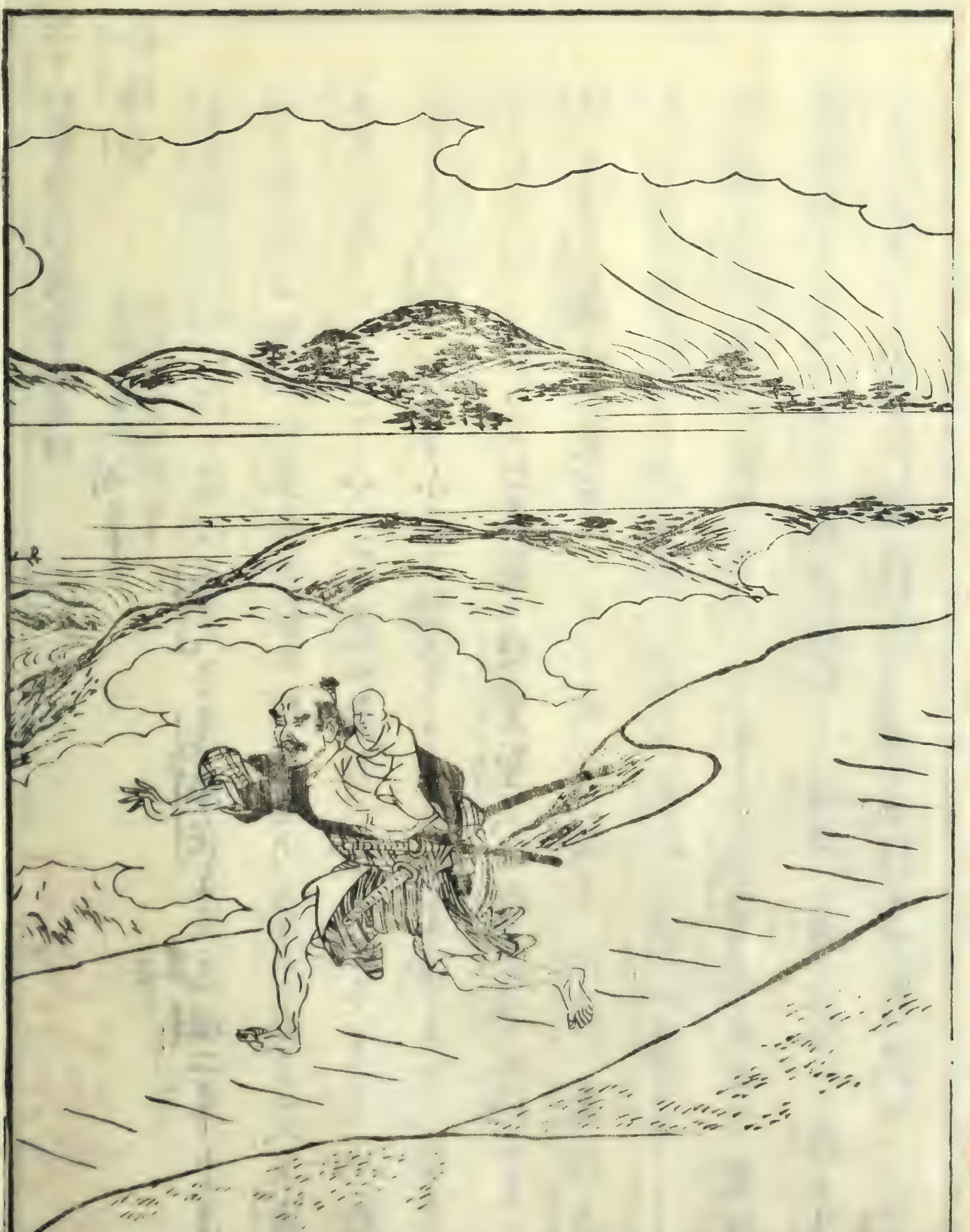
五年三月嶋津義久を討ちて

載する所によれば、同月秀吉

念佛堂

（高田より篠崎の方 頸城郡大曲村にあり）

本尊如來（春日の作）此所に高祖聖人乃眞像在まし元禄二年十月二日國府五智の如來堂回禄の時高田乃来迎寺といへる浄土宗の寺に念心といへる道心者ありしが出火を見て五智堂の方へ走り行けるに其十歳ばかりなる侍来像を抱へ往来り來ていふやうハいかに此木像ハ親鸞聖人の御真像也汝に是を預るなり敬いたすべしとて念心に渡し彼侍ハ忽ち行方なし念心則ち縁き急に来迎寺へ入是を崇奉り信心なる事也其後享保年中此寺に一寺を営ミ此尊像を安置せり或時本願寺主が夢に告曰く我身煩悩しく沐浴して得させよしと庵主夢覚て夢の事のあらひを為し告に任せて尊像を沐浴せんとせしに何事かん胎




念佛堂
御木像

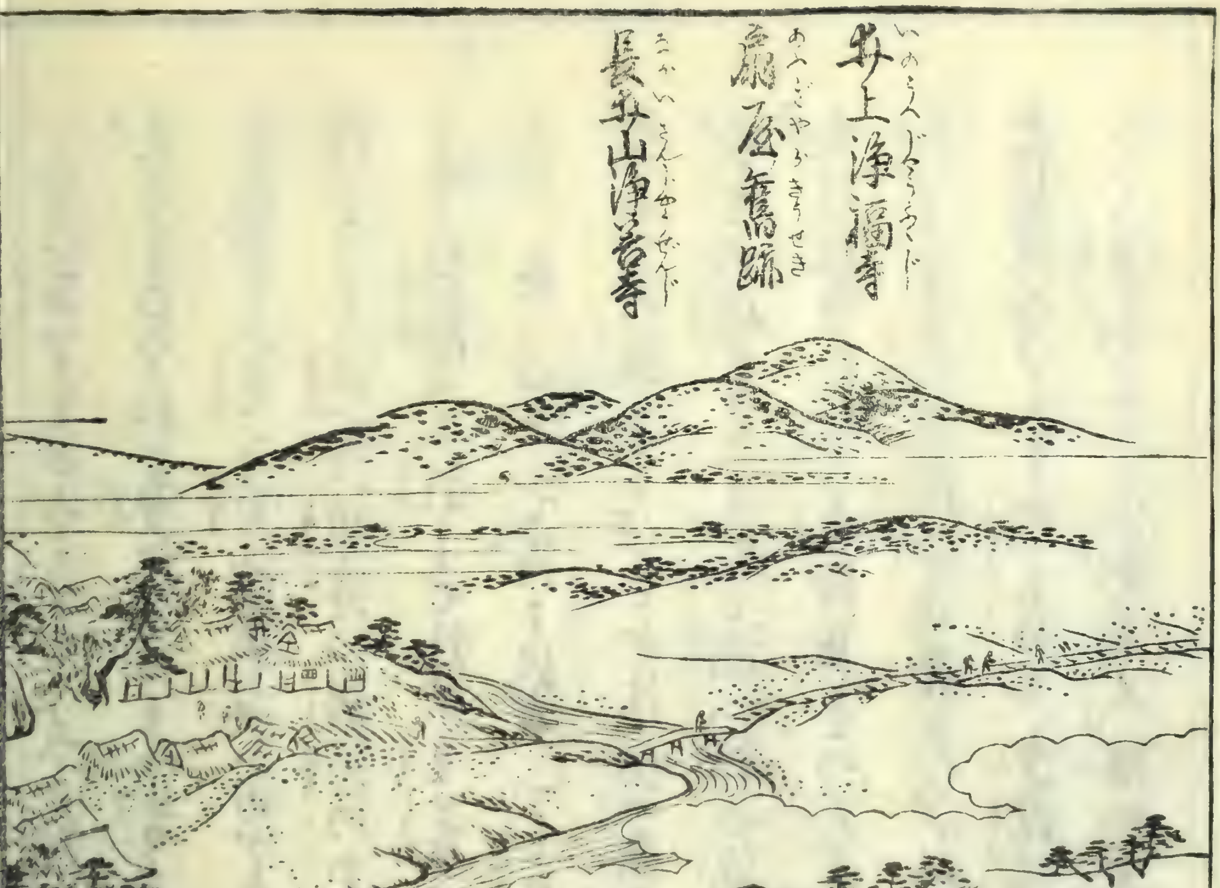
中に物のあるとふしぎにおもひ像中の裏より彫て見たれば中虚は一
て漆塗の小箱あり是を開きたれば聖人の御真筆にて本像彫刻の因縁事
号月日願主の名御銘御判まで書入ある不思議の御本尊にて在しけり

高田より喜目新田へ二里半此あたりに右の念仏堂ありて喜目新田より稲塚へ一
又里此あたりに浄輪寺村白鳥山極楽院浄念寺といふ西仏坊開基の寺あり坂
徳池の濠といふも此辺なり
本山寺川此川岸に続ける川越の名号の旧地なり昔は橋ありして岸渉りつ
てありしが今は板橋にてよし右此傍行町といふ所にはなはだ手て其の蹟なり

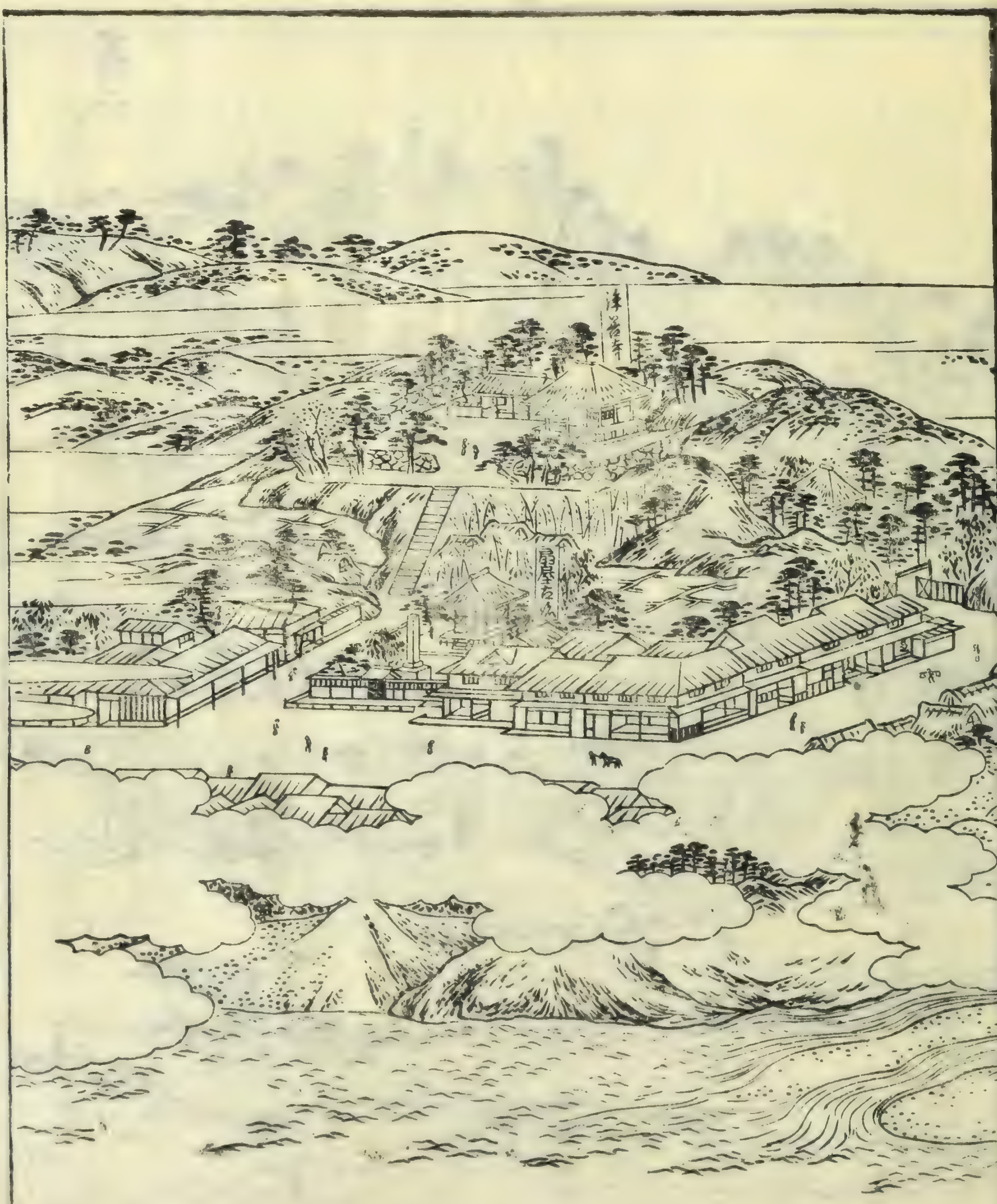
井上浄蔵寺　西派　稲塚に在

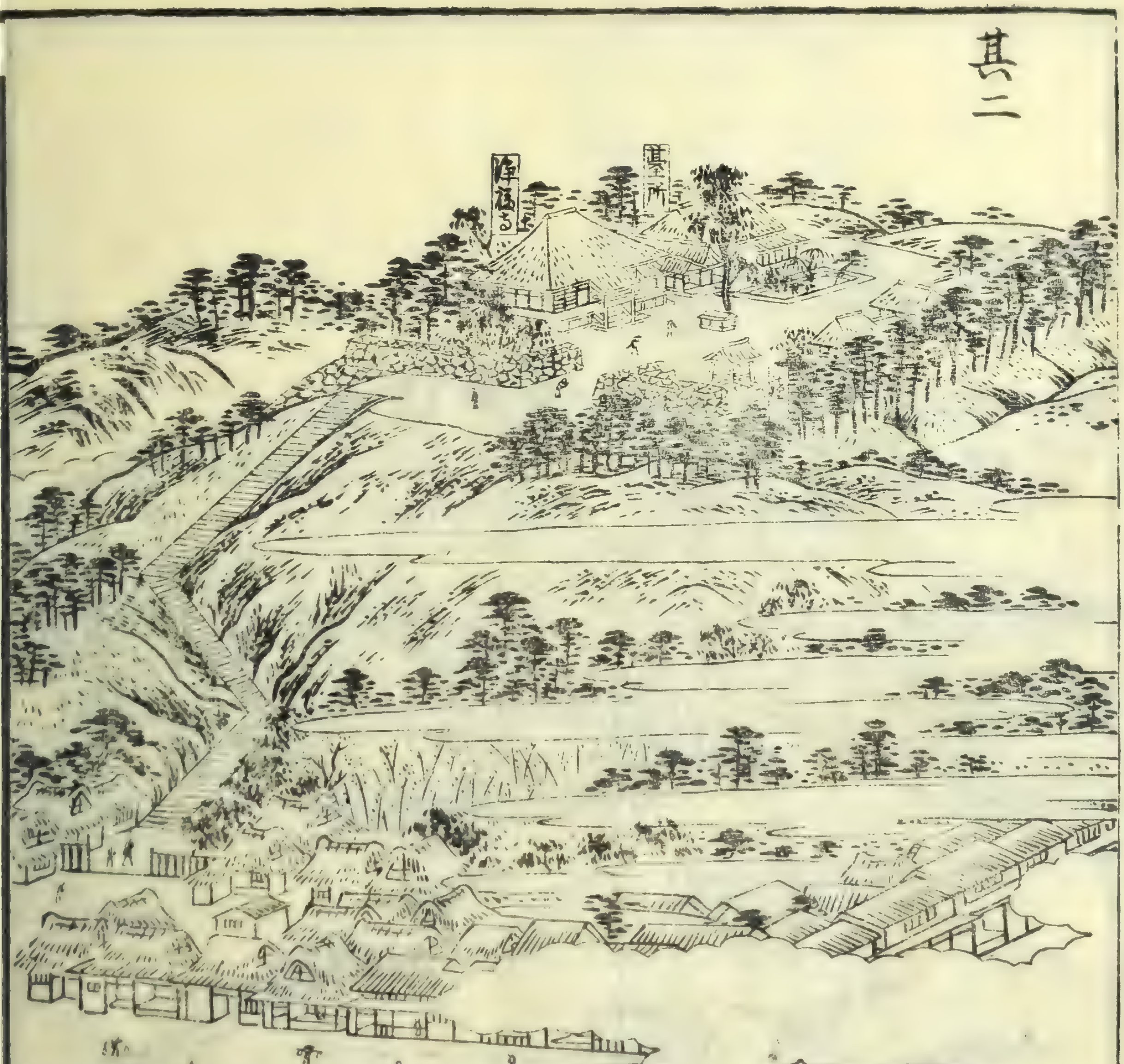
本堂九間四面　扇谷山と号す　高祖聖人の御弟子善性坊
開基の本人聖人真筆九字の名号を伝来せり此名号の由来を
委く尋ぬるに高祖聖人当国に御化導ましまし下越後より
移らせ日も暮に及び此稲塚の扇屋といへる富家に立寄り

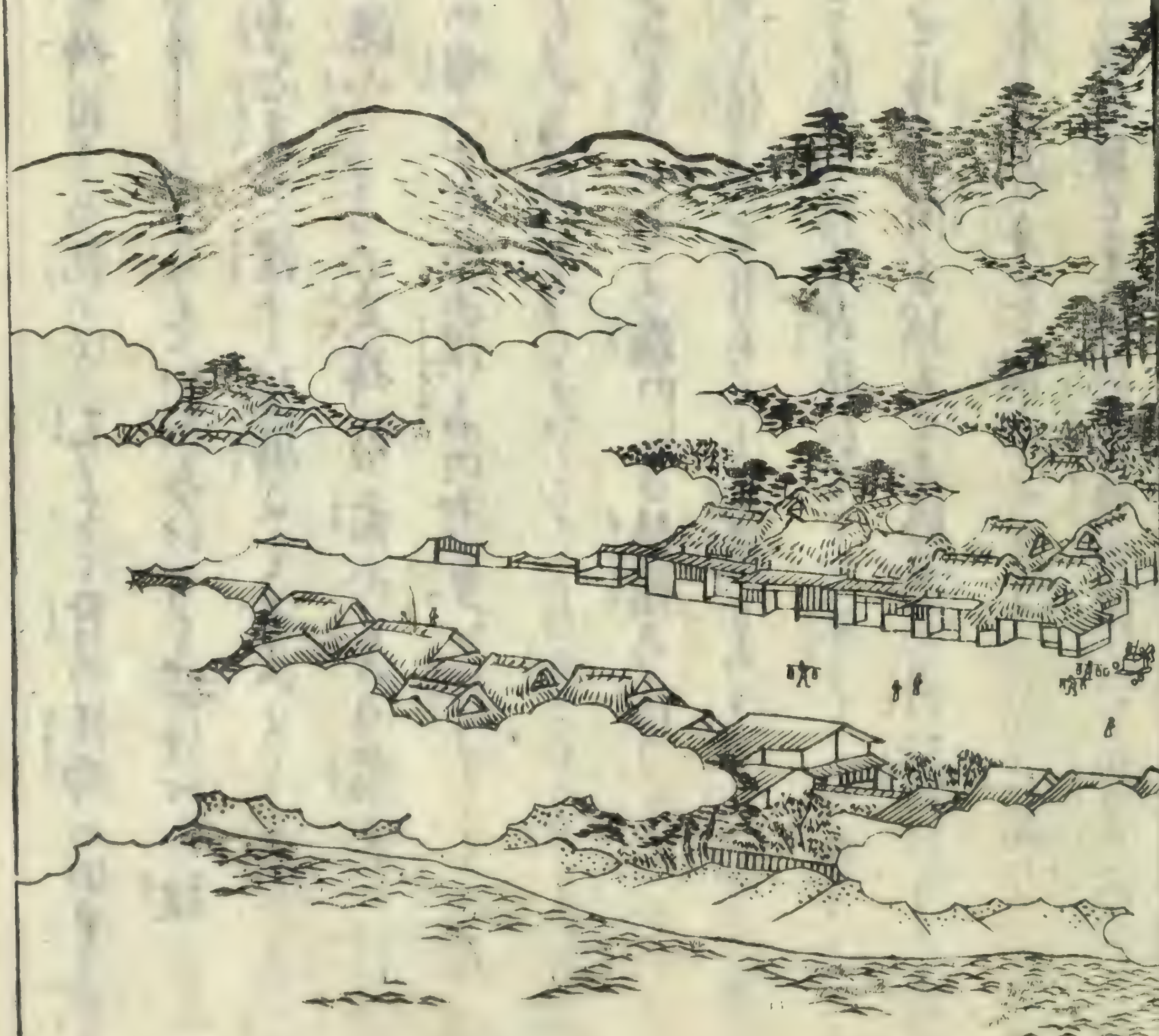
一夜の宿をとめさせ給へと好ませ給ふに扇屋夫婦慳貪邪
見のものなれば夢にもうけがはず罵りなからし御宿申べき様に何
らば聖人重て宣ふは我は世をのがれし修行者なれば食物夜具を
給はるにも及ばず唯庭の隅軒の下にてもよし一夜を明させ給はるべし
とありし殊勝にも好ませ給へ主答てやむを得ず軒の下に宿かるとて
らば一夜はゆるして得させんとて古き筵を借与へぬ御痛はしや
聖人は御頭をさげさせ給ひ一夜の宿りを免し給はるも有難き
衆生の縁なりと筵を抱へ軒の端に出給ひしが時しも霜月下
旬の頃なれば吹く風御身をつんざくがごとく御膚は氷のごとし
元よりも慈悲深重の聖人なれば少しも怨を苦にも厭ひ給はず唯南
無阿弥陀仏〱と称名の御声澄渡りいとも殊勝に聞へ給へ夜も宜
いとど更行かまゝに殺て人語の音なし時はまや寅の刻とやおもへ



井上浄福寺
扇屋旧跡
長井山浄音寺




其二
浄福寺
墓所



かの此老夫婦同じく朝起より去年も霄の法師は此世を厭ひて深へ
てこそ記しあつらしと事をかたらひけるよくきけば難くも聖人の
称名の御声心耳を澄し殊勝にもおもふくもたえてやまさん
せりしは慳貪無信の老夫婦の昔今貧に富家の時ありし多品
つるや聖人の唱へさせ給ふ称名の御声を聞よりも又臓に滲み
の毛いよだちて唯何となく哀しくなるとおもへば相共に何の
称名の声のきこゆるとさよ痛ましき旅僧のありさまやいざ〳〵内
へ呼入ゝ暫く休らはせまいらんと老夫婦もろともに出て聖人を請
じまゐらせ床の軒端に招じ奉りてさて念ごろにこそもてなさんまづ
上座の方へいらせ給ひと御手を取て居炉裏の許へ伴ひまゐり焼火し一
聖人に出しまゐらせ食事を調じてさまざまに痛はりなる聖人く
慈ぐ歓び給ひ扨こそ地獄業数の罪人と浄土へ救ひ得ふり

我身乃寃苦ハ厭ふまじたゞ彼等を教化して浄土へ参らん事乃嬉
しやと彼夫婦に向ひて弥陀超世の大悲本願他力摂生の御理細々
と御教化ありて汝等今勧る所の法を受持て深く阿弥陀仏
の大悲本願を信じ奉り我後世の一大事を御たすけ候へと彼仏に
帰命せよ弥陀ハ必ず其こゝろを志ろし召忽ち摂取乃光明の中
に摂受して再度捨給ふ事なく命終乃時に来りて即時に浄
土へ往生せしめ給へるなり観無量寿経にハ光明遍照十方世界念仏
衆生摂取不捨と説給へり努々疑ひ給ふべからず別して女人ハ三世諸仏
乃利益に洩るゝ身なるが只一ト入弥陀の大悲深く女人成仏の御
誓願明にましませば安堵して往生ハ唯一心に称名念仏し仏
恩を報じ身を終るまで相続称名を忘るべからずとの御理を
懇んごろに御教示在ましけれバ扇子屋夫婦の發心でゝ


聖人捗渉り
宿を請ふ
圖




其二

聴聞し渇仰のあまり面に感涙を流し隨喜の泪にむせびし所に信心
受得して寺主恭敬の手足の踏所を知らざりける聖人寺
を深くさせ給ひ九字の名号を書与へ給ひて戯れ歌一首を口号ミ
給ふ

柿崎にしぶしぶ宿をかりつるに主の心熟柿なりけり

く柿がきれなれば扇子屋のあるじえたりへば

かけ過る法師に宿をかしなるかきまでてりや九字の名号
を御返歌申上られれ聖人感じ笑ハせ給ひ其歌を書そへ
給ひぬ其後なるかの家を歴て子孫断絶に及び御名号狂歌二
首ともに当寺へ寄附して今に伝来ス

柿崎扇子屋旧蹟　柿崎の町中にあり是彼扇子屋が屋敷跡なり撲比丘尼堂
の堂跡ハ旧一本長安山浄善寺の支配地なりといふ

或ハ云扇子屋御化本寺乃附妻女に与へ給へ川越の名号として今に

当国高田笠原山本誓寺に縁来し給ふ也此名号の由来を尋ぬれば
聖人扇子庵が宅に一日御逗留ましく翌朝御出立有らせ給ひけるが
彼扇子庵が妻女心に思ふやう夫は有難き御名号を頂きまゐらしに
我は女の身なれば受ざりし事の残念さよいで跡より追付奉らせ御所
望の名号を願はんとて其侭御跡を慕ふて行けるに高祖
聖人は米山寺川といへる川を渡りて向ふの岸へ上り給ふ所也
妻女是を看て此方の川端より声をたて聖人にのぞみいひければ
聖人ふしぎや此川を渡らせ給ひしかや老少不定の世の習ひ
得度御勧化を蒙らんまゐらせし我にも御記念の御名号を
給はるべしと其方へ参りて裁きまゐらせしところに聖人答て曰く
此川の甚深し女の身まで渡るべからずそれより紙を投くへ
し名号書て得させ給ひしと女は聖人の御心を心得難く拝ひ

なかりし懐中より紙を出し此方の川辺にゐたりし紙を押ひらきて
錯乱に聖人は彼方の川端より御筆をたまひ川向ひの女乃
手をうけたる紙を目当にさらさらと書たまへば不思議や墨は雲霧の
ごとく川向ひの紙にうつりたりしと六字の名号うつらせ給へ
ば奇異のおもひに妻女は仰天投地して大きに驚き悦びの涙に
むせびつゝ伏拝みし我家に帰りて深く尊敬しまゐらせし是を
名付て川越の名号と称しまゐらせしより以来扇子屋が子
孫数代を歴て持伝へたるが後年に及び子孫断絶して老女一
人のこりたるが行く末大切なる名号を失ひまゐらせん事も計がたしとて
なる田所笠原本誓寺へ奉納しまゐらすと云云○或説に云扇子屋が
妻女川を越て契ひまゐらするに川にて聖人女の身の深き川を越へ
来りし一切なる心を感じ給ひ書与へ給ふ故に川越の名号と

称ふしよりて此説を出しけれ後人の他説ありとも聖人ハ唯慈悲
純の凡夫に對して実ある事を説し教化し給ふのみにて敢て
奇怪の事を顕し給はざる慈悲の聖者也然るに川を越へ給ふ力の
猿らせ給ふとは是奇怪の事とおもひ是を厭ひて却て正直の他を
為さんとせしより卒に此説を考へ出しなるべし所意也の心にして却て
聖人への化導を碍し佛力の不思議を信ぜざるの語に似たり其ハ
兎もかくもあれ高祖御一生の間御化益を蒙る者海を越へ聖
人に値遇しまつりて聞法し又ハ深き川を渡り来て御弟の
名号を頂戴するなどの類ひ其数かぎりなし然るを今此名
号ハ川を越へ写させ給ふ奇異の名号なれバ各別に高祖の御
化導を蒙るべく佛力の不思議を信じ奉るべし高祖ハ奇怪の事
を為し給ふにハ非ず唯本願の正道を教化して正直に衆生を導き

貴賤の信心を得させしめ給ふ聖なり他の聖者とは各別なりし御
事ゆゑまでもなく勿論の御事なり然れども時に縁し機ハ品々と
てハ奇瑞に似たる事もまじハり飯栗三度栗ハ焼たる栗に芽を
生じ八房の梅ハ塩梅を植給ふに毎年逆の杖竹より根牙を生ずると
る歎ひ是皆其折に衆生の疑ひを晴させ末世に宗法を弘め給ふ
御教化の方便之又相州当麻寺に安置なる名号石ハ高祖のゆび
さきの御跡にあらずや是等のものを今目前に諸人乃拝をなそ
是を秘之といふべんや去りのものなれバ康陰の神明ハ現に高祖の御弟
子となり給ひ鶴波権現ハ聖人を招して開法の義を聴びまた
箱根の社廟に拘ひてハ権現明りに蒙に命じて聖人をまる事恭
敬し給ふ乃事遂是いこれ神明権現弥陀の本地を信じて及び
聖人乃高徳を尊ミ給ふの謂也誰人か疑念の心をなるべきかや

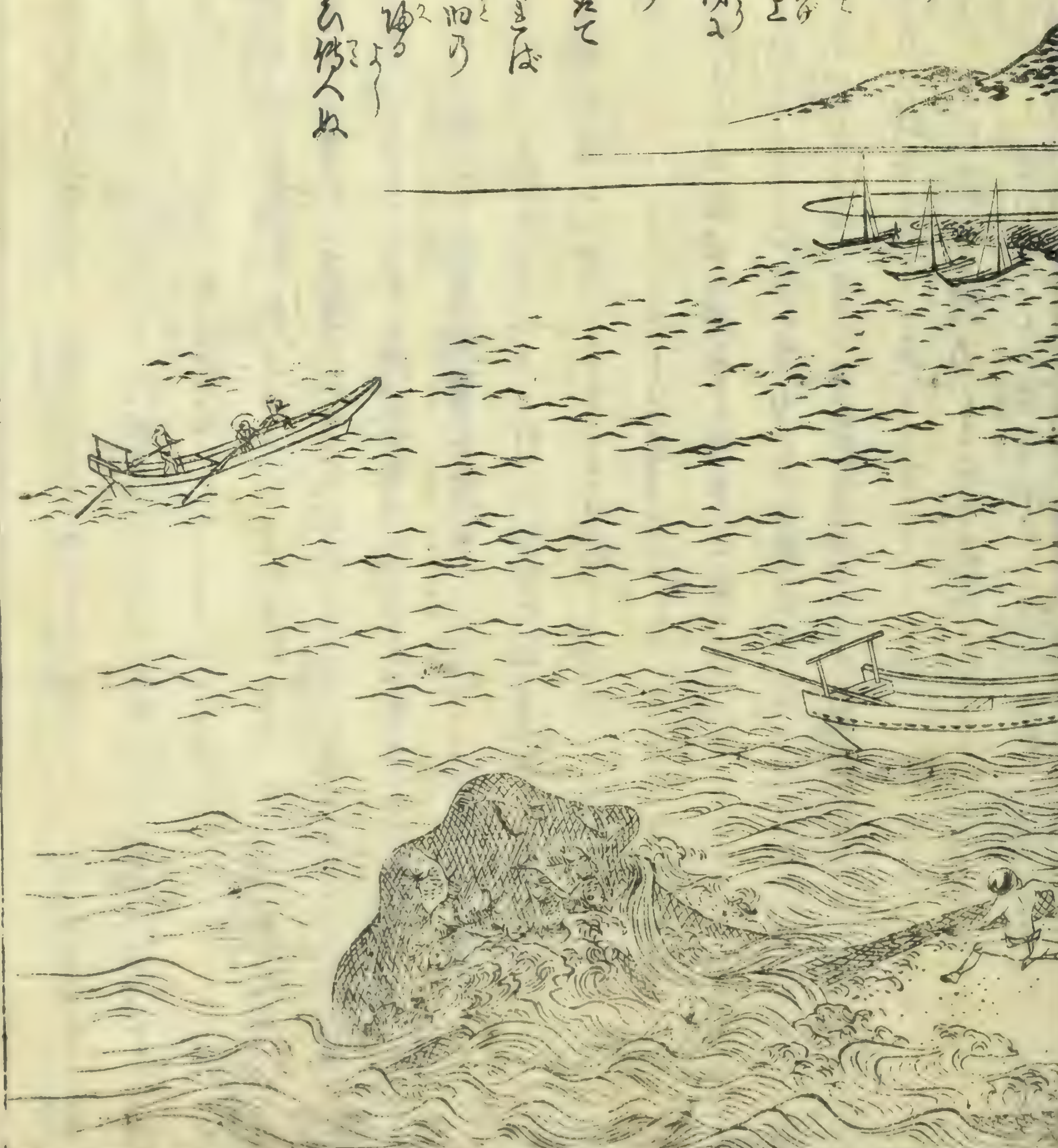


功徳池乃濵聖人御詠歌の圖

故に川瀬の名号といひてたうとぶべし迹示の諸説を悟ゆゑに例て経
等に兼ては聖人の徳並宗法の奥旨を謂ふ又朝には業なるが
枝生して鄧林となり本朝には都藍が枝生して芳野山の桜と
成る例又弘法大師ハ虚空に文を顕し流水に字を書給ふ
高雄山の頭ハ川を隔て筆写し給ひり是等の事紙面に注
今吾高祖枯焼の竹木を植陽川に宝号を写し給ふ於て其為
不同ども是して其欲する所を為しむるに彼ハ一旦の定力事物に顕じ
てる所且筆術の妙を顕ハし不乱之是ハ仏の大悲吾朝に在
まして応化の聖者利益衆生のために其徳を示し給への妙
意之不謂七地以上の菩薩ハ如斯の妙術を顕し給ふところ況
弥陀如来応化の聖人に於てをや毫毛も疑ふべきならずに准じ
○川瀬の名号ハ当田本寺に備来なりしを不淳興寺にお備なりて


押上村
をしあげむら

むかし此海中
より石塔一つを
得たり故に押上
村の名あり其傍に
小石多くあり
人此石をもちて
家に帰れば
其夜旧の
所へ帰るよし
云伝へぬ

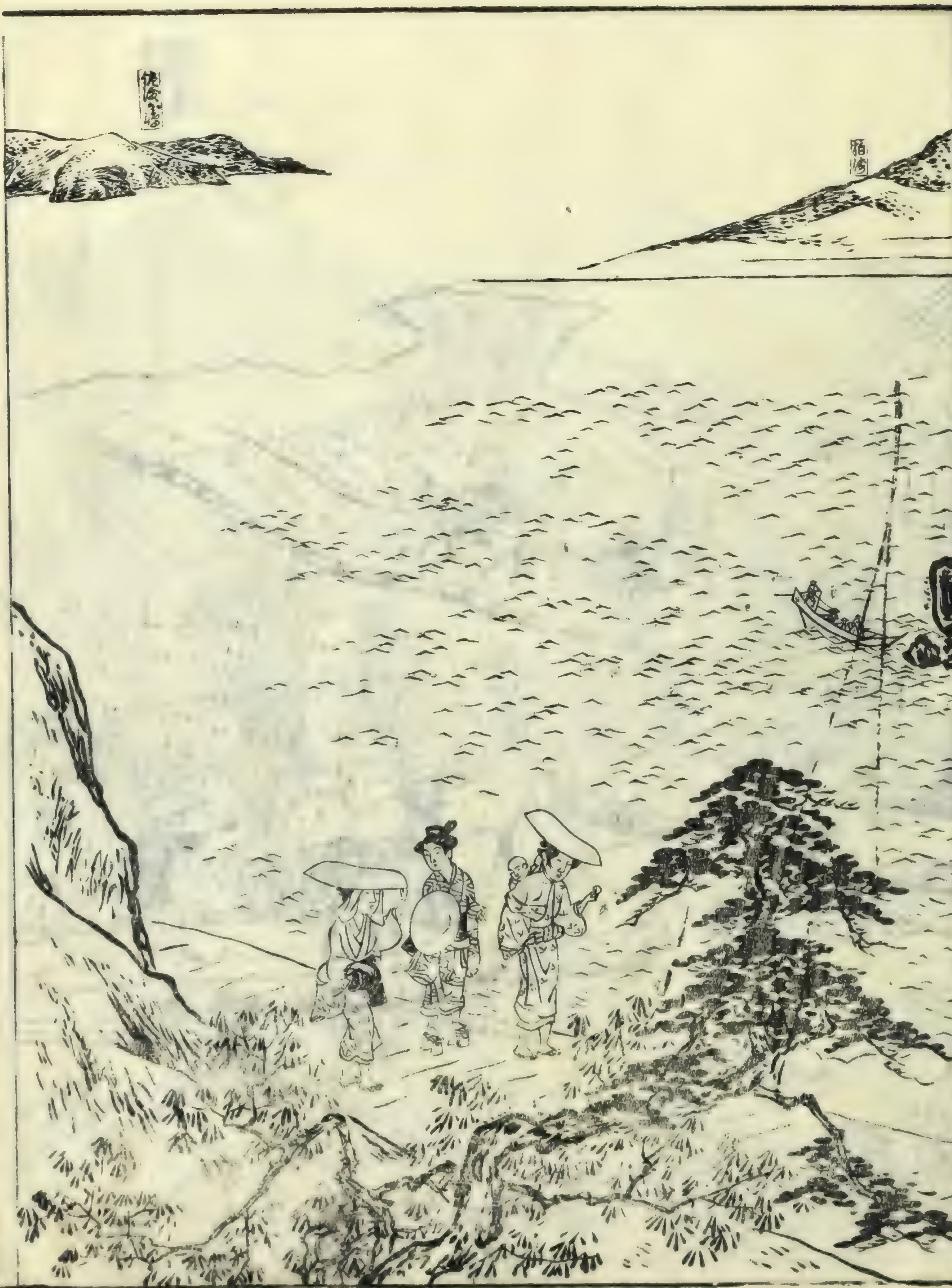


二ツあり是は様かしこく謂別なり何連甚深みえんうく鎖よりあり恐
縁ひて是非を論ずべからず聖者の靈異不思議の善巧一ッハ二も三
も是なるべし凡夫の遅膝を以て一概に定むべからず

○功徳池の濱ハ當國柿崎より黒井との間に里斗を隔て摩の濱といふ
其内米山寺川と黒井との間を功徳池の濱と名付といへり　維古聖人
當國御化導ましませし時此小浜の濱辺まで雲中に来錫ありしに依て
はし御悟修にあり　粗其形勢を賦いたし　給へり此功徳池の濱まで
月かくしも袖よつまんかしの風弥陀の國よりふくと吹けへば
実に欣求浄土の御こゝろをよませ給へる御歌なるべし　まこと
「露めかぬくれいかなる道とは志りるまじ」雲ふかうる芦原の鷺
此御歌も右功徳池の濱にて雲中に通り給ふ時芦原より白鷺一羽飛
出て鳴きりけるに雪の中なれハ白鷺の姿定かならざりし故一首吟して通
皇し教導ことさらく本親を信ぜる心も称名念仏の正行なくてハ
一念義の料なるべしとのよしをさとく讀せ給へるべし　又
草も木も枯る秋乃みちのべに松のこひしう茂のさかりなり
往昔聖人秋のころつかさ越後より信州へ通り給ふに草木まで

落葉して唯松の一本のミ蒼くとして千歳の色代しるきを見給ひ
万年三宝滅止徑々百歳の心をよませ給ひしとぞ
亀まり坂ハ米山坂の次にある坂之此所ハ菅源九郎判官小國彦の間御某所
御産の帯を解給ふ所といへり脇姫明神脇夜あり又弁慶の力餅なと
いふあり
○出雲崎ハ此所佐渡渡海の津也吉浜あり又此所より九里余奥に十日市
といふ村ありて所あり越後縮の趣向なと多くして京大坂の商人ぶみに往
来せり又此山奥に河内谷寺といふあり其辺りに湖あり紋寺の住持遷
化の年には一夜の内に湖出来る石塔形を造り出すよし其余ハ委くぞさき
とも数代かくのごとしといふ
寺泊ハ出雲崎より寺泊へ七里之此間小海の気色都て絶景の地なれ
して近くハ佐渡嶋遠くハ朝鮮國の金山浦まで見るよし絶景甚大
に述べき勝地なり
○弥彦明神の社蒲原郡にあり寺泊より三里あり当社ハ祭神天香
信山命之元明天皇の御宇和銅二年此所に垂跡の当國一の宮と称し
奉る也
○柳崎より柏崎へ又里半柏崎より出雲崎へ七里半出雲崎より寺泊へ


亀割坂

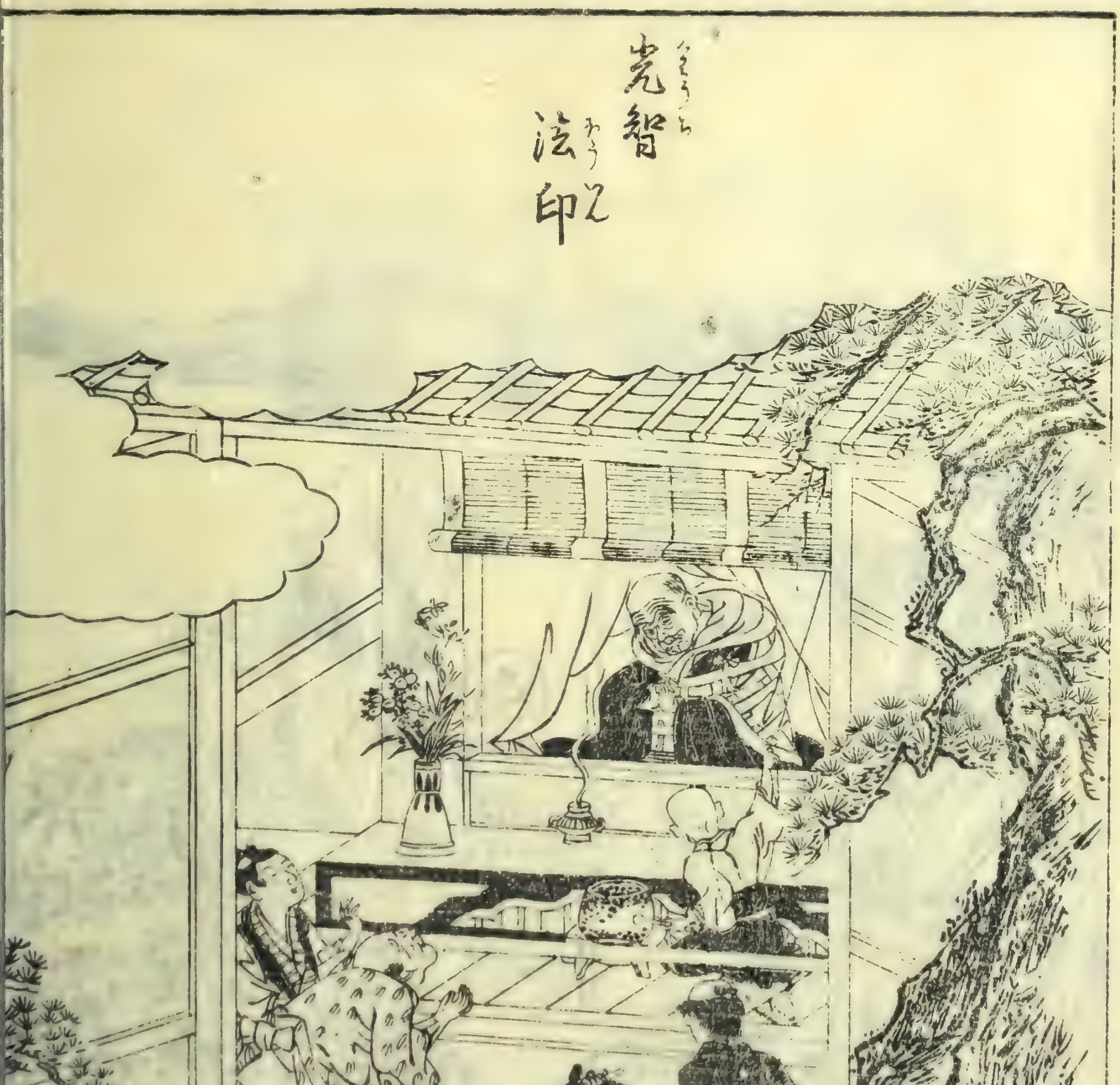







河内
谷寺




光智法印


伊夜彦社

に望ける事なく海辺にして佐渡ヶ洋中によこたはり寺泊より右の方山中に入る事十丁斗是を弘智法印といへり

○弘智法印ハけふ中乃西生寺といへる真言宗乃寺に抑住しける擅者なり寺の右の方に巌洞あり法印其内に入岩上に端座して寂然として入定す其頃女出しも破壊せし尸骸も木像のごとくにて四百余歳の霜を経しかども今尚腐敗せずとするがごとし

○其より海辺の石径を行ハ猿が馬場の跡あり是を過て一里弥彦の宿に至る弥彦の神社ハ右に記す

三条御坊

東派　寺泊より三里　弥彦の宿三条の町にあり

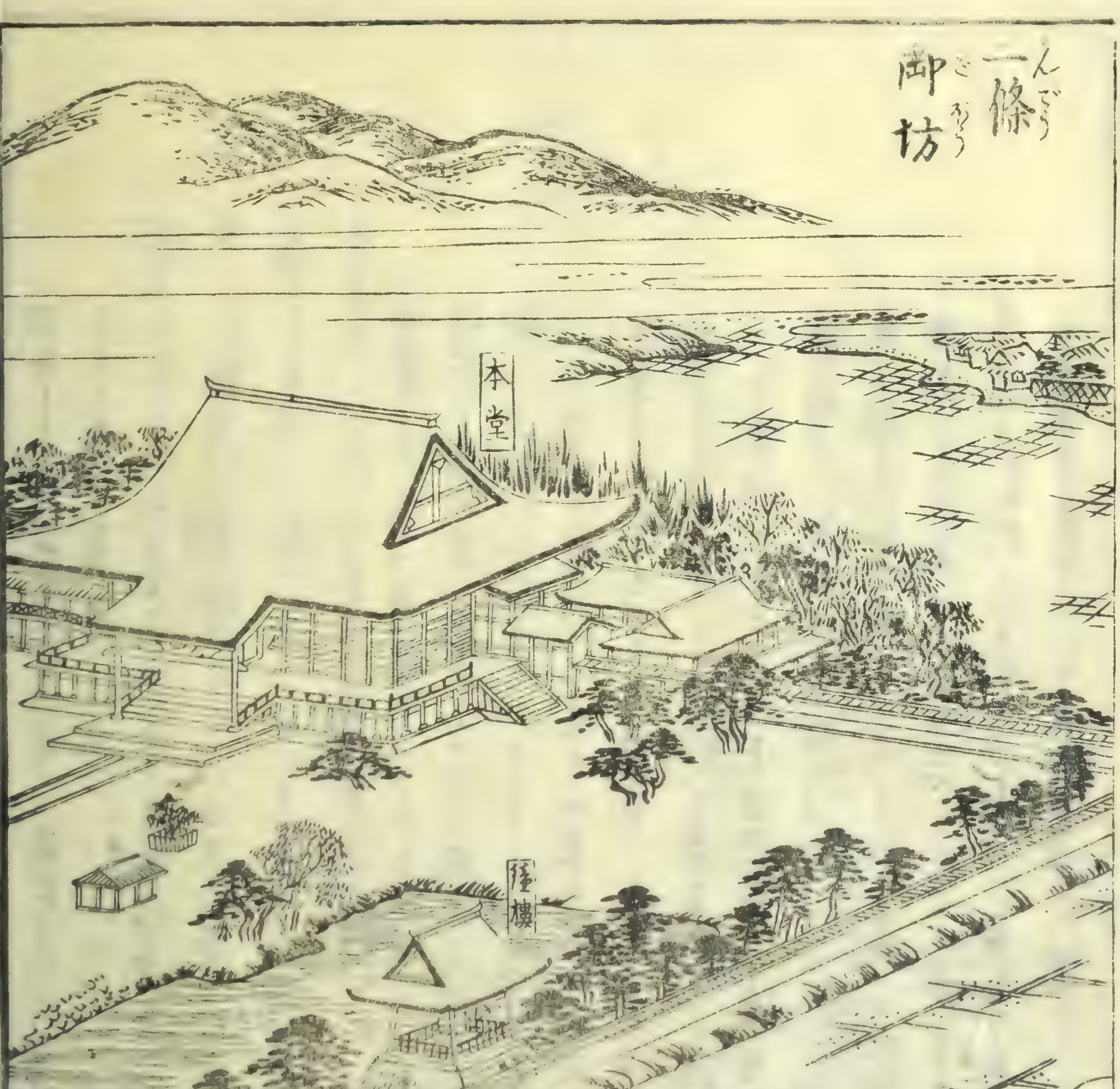
○三条より半里斗に如法寺村百姓庄右衛門といふもののあり此家の庭より陰火燃出焼火の代りとなせり其家に行てみるに石臼を庭に据置り其穴に節をぬきたる竹を突さし附木に火をとほして彼竹の小口にあてたればば地中より火気を引あげ忽ちまき火の竹の口に燃出紙にて覆ども消ることなく物を焼ることなし其竹にて其火の気の熾なる枝竹をこしらへ中の節を貫て火を呼べバ往遠きにまでも火気通ひて火のうつり来ること速なるは国からめき村まで七とよへる百姓の家にも囲爐裏の角より火の出るなり如法寺にあるなるし実に不思議のものなり燃土燃水は蜀の国より

火井と名つけて称しけるよし此地には何国よりもみえけれども称するをと
なるにもあらざる乎

○三条乃町より又里田とよふ里に西念寺といへる寺あり此所にある祖
聖人の植給ふ繋榧の木といへるあり聖人糸にてかやの実をつなぎ
其まゝに埋み給ひしが今も其実の繋ぎ合るがごとき形に生ひ
出しを名として是も旧跡の一ツなり

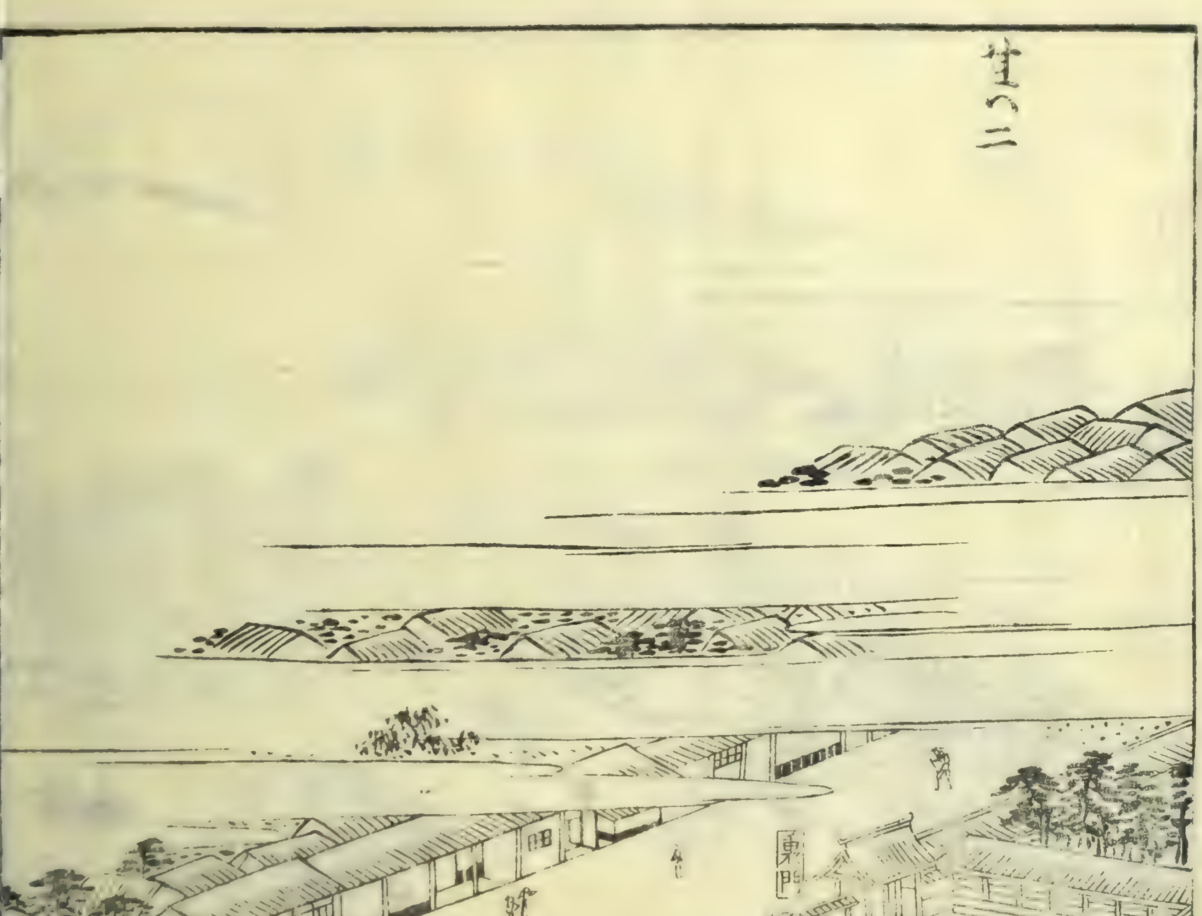
○同じより十七八丁湯川村より小坂を越へて右の傍に出たる池二ツあり
此池に湯の涌るがごとくに波の瀬立ち亦里人かくまぐさといへる草を
浸して桶乃中へしぼり入置ば冷て黒く凝し制法して焼油となづけ
売て草水の油といへり是も又唐土にて石脳油と名つけ山間渓の流
或は井中よりも出るよし諸書にもみえたり其外漢土にて石炭石塩井塩
池塩なども入るみえて石脂焼て炭に代石脂焼きて塩ともし井水の池
みを焚塩を製とる事天性の妙にして其理を押はかり知べからず此城
後の国にも彼石炭なる石の土にあり古を掘泥を日に乾してもし
是を焼きまた柴薪にかゆべし誠に民家経済乃宝なり

○蒲原の郡内都て此辺にカマイタチといふものありて往来の人に傷付る
事甚多しいづともなく痛みて血流り懸けれ出る皮肉切れ只眼
にさへぎるものなくして衣類恙なく傷つくる事古き暦を黒焼にして



一條御坊
本堂
鐘樓


阿弥陀堂
臺所
門


東門
寺中

杳卜せば猿ハ叢し疵も恙ねと此里人のいへり或人弥彦明神の社人に此ゆゑを問ひしに社人の云く此邊り僻地にして昔ハ天狗の雜集して合戰を為し侍る人間の目にはみえざるなり天狗の構へ捨さへし太刀にふれて疵つき或ハまた人のいへるがよつて號けて鎌鼬といふよし答へしと語りぬまことや否や此説も信じ難し又此邊りの山野の中に天狗の飛ぶといへることも石あり一名石の矢の根ともいへり是即ち霹靂の霹靂碪といへるものにして礫のごとき石なり異國本朝にも偏僻の國に生ずるもの有り

逆竹之藪

弥彦の宿より八里　同國蒲原郡今津の鳥屋埜にあり

逆竹の舊跡ハ承元元年高祖聖人當國へ配流せられ給ひし御とき建暦元年勅免を蒙り給ふまで五ケ年の間ハ上越後下越後の所々に往返在して御化益ありせ給ひ勅免の宣旨を蒙り給ふといへども猶此所に化を施んとて建暦建保の間ハ東関の國々へ立越て諸方の群類を教化せしめ又此越後の國へも歸りたまひ御教導壮んに[illegible]しましゝが聖人當國御在國の砌此地に一宇を


火井(くゎせい)




西養寺
本堂

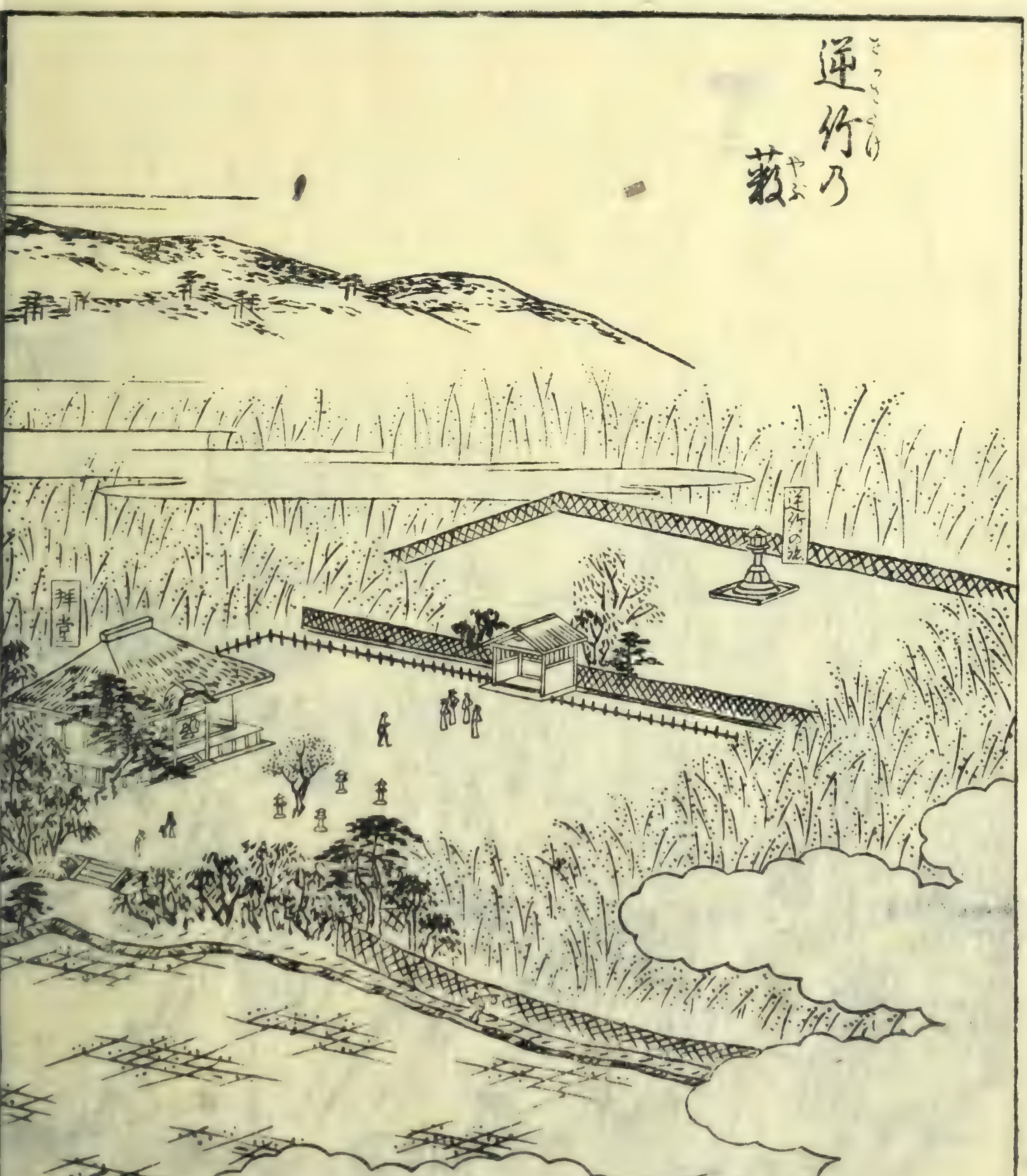

田上
湯た


新津村


草水乃油

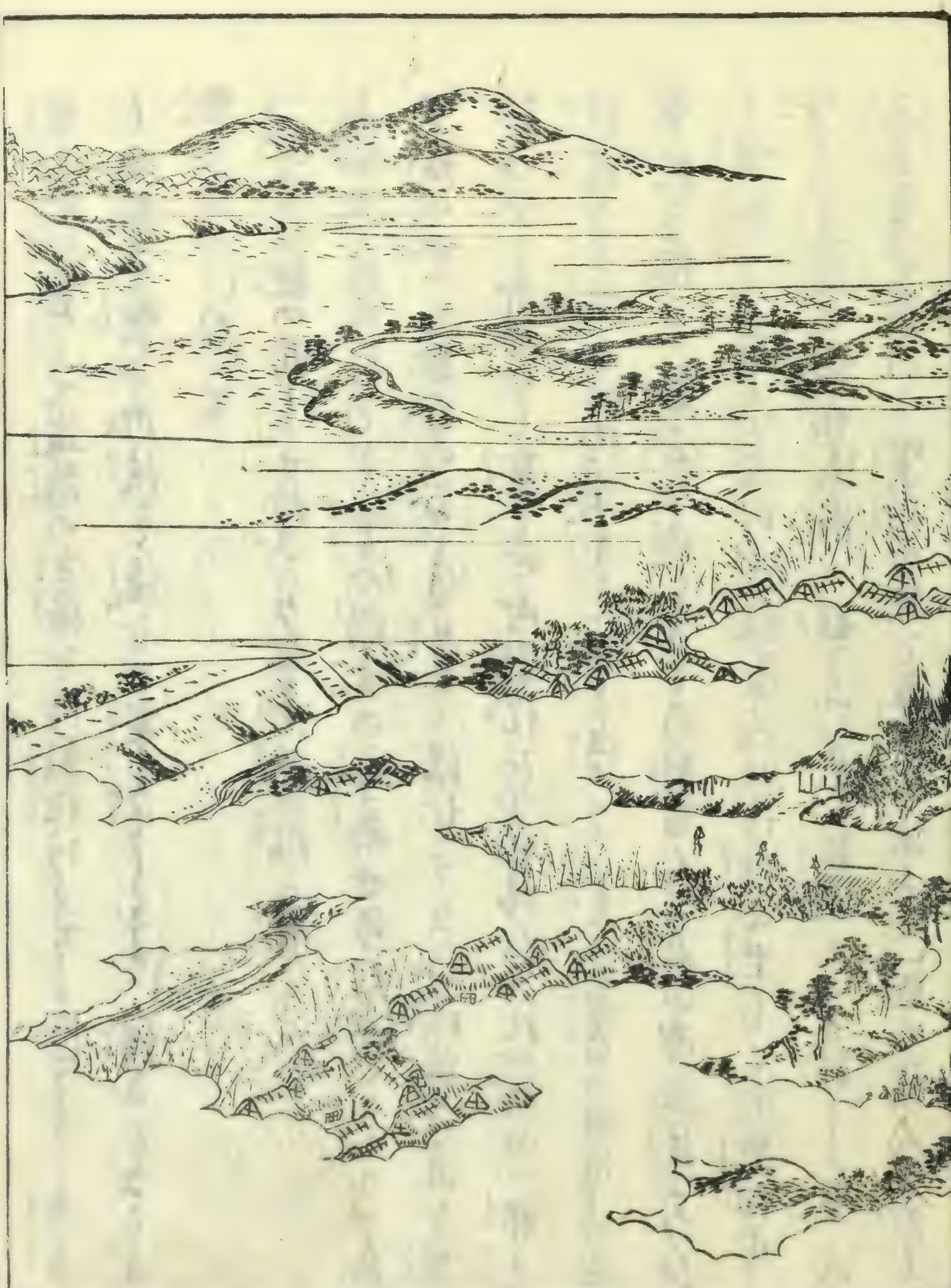



かまいたち


逆竹乃藪
拝堂




小菌山
西方寺
本堂

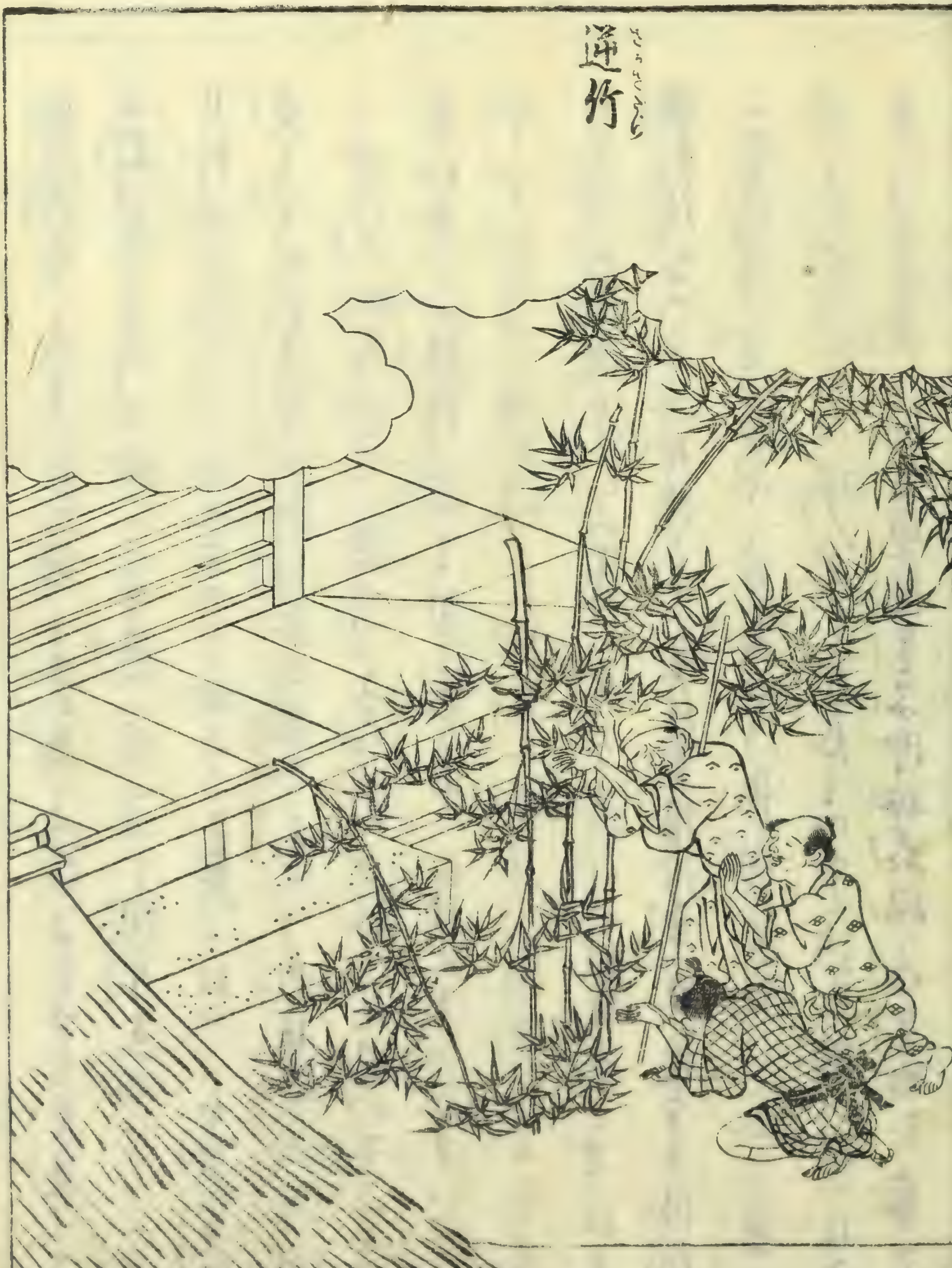


常に居住して近隣の道俗を御教化あらせられしかども兎角して教に靡き御法を信ずる輩多からざりし程にある時歎き思召して

「此里に親の死しゝ孝子あらば御法の風に靡くべしと宣ひ給ひ何とぞ無常迅速の無墓世の形勢をも示さばや後の世は三悪道の苦しみに堕て浮むよなき浅猿きさまと思はざるやと御心のつくさせ御教化ありせ給ひければ始めは邪見放逸なる族も此御教示を聞と等しく立に宿善の時ありて本願を信じ称名念仏するもの数百人に及び御教法にうるびく帰服しけりかゝる折高祖聖人此御坊に坐して御教化ありけるに近遠の道俗参詣し群をなし是を聴聞しける折から聖人久しく御身をせ給ひし紫竹の杖を庭前の地にさし込て諸人に対し

て宣へハいろ〳〵にくられ見て猿人となりて草木心なしとハいへとも今親
鸞がとくむる念の法義佛意に叶ひ末代に栄ふるものなれバ此枯
竹に根芽を生じ而して枝道に繁茂をなしこれ聖人が教法の真
仮にあらぬ事を宣ふ此時いまだ不審ある人ありて年月を歴ざる
に不思議なるかなる此枝竹枝葉茂りて道横に生出たれバ諸人驚
奇異のおもひをなし遠近に伝えて群集し実に聖人ハ凡人
にあらずまさしく権者乃御教法いかでか疑ひあるべき哉と弥
信仰勝に弥ゝ御教化に随従して本願を信じ念仏となふるもの
少なからずしかりしまより年月歴るに随ひ筆を生し株を増し
枝葉ともに繁茂せり然れども年久しきを経りてハ家台
信仰の者其外の諸人折取て持行ことく伐とるが故に老竹のさ
かしき竹滅ひしてかく枝も葉も一の竹ともなりしかども節ハみなく




逆竹

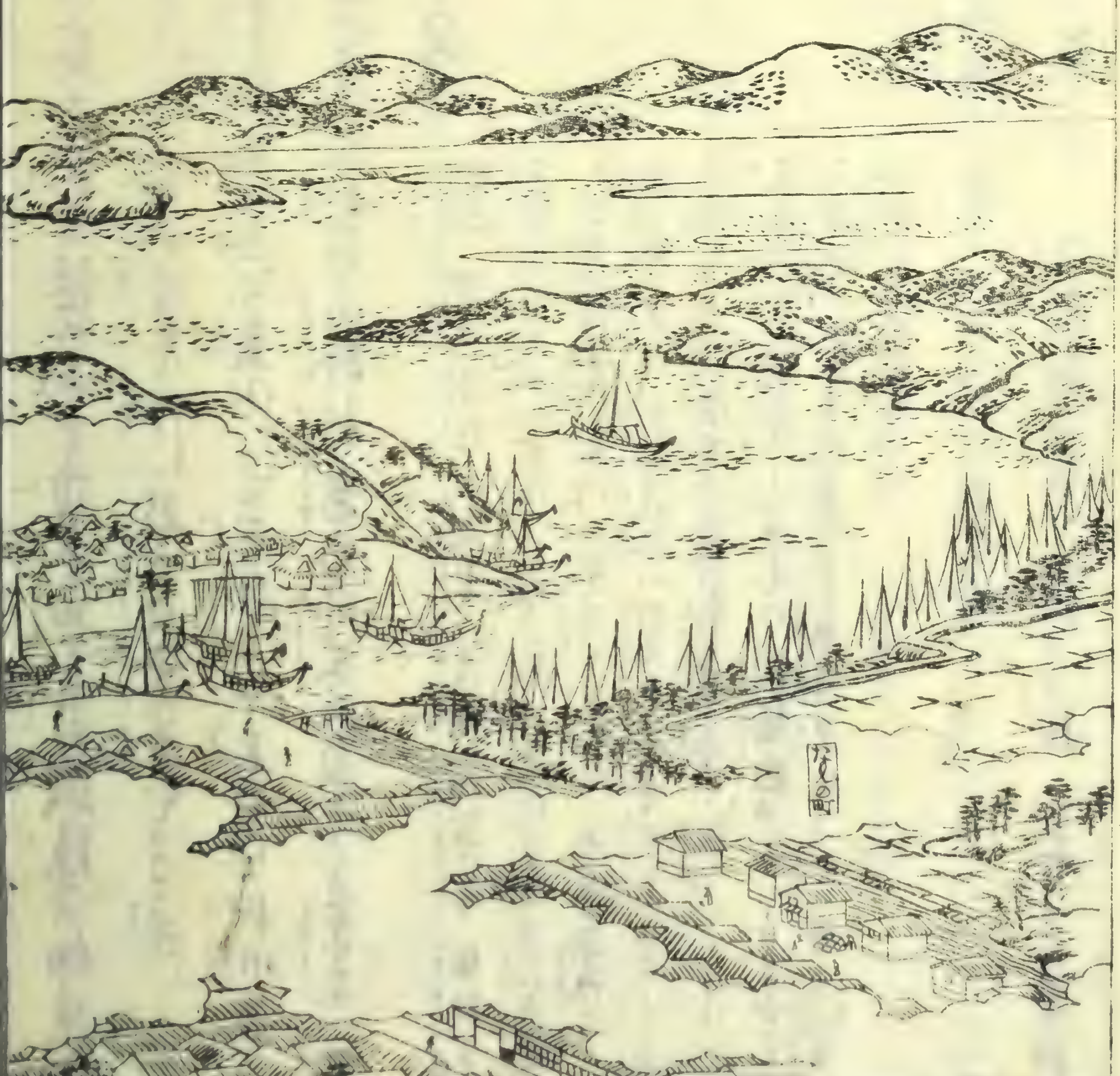
靈の筋なくて袈裟襄を返し袈裟表うらむきを中にて遂しまゝ
に枝の付たる竹を間くにみる藪は南北に十間斗東西二十間ほどある
其竹林の内に三六間に方の空地ありて所には竹は勿論一茎の
草も生ぜず是聖人御經窟乃跡なりとなり聖徳帝御幸の
し時の馬冷の池あり藪の中に馬繋ぎ杭とて榎の老木あり
高祖聖人の掘給ふ井もありしところにあり正保三年の頃華山より
命令ありて御敷地に石燈籠を建給ふの題銘記及古の裏
又云越後國蒲原郡に一宇を建給ふ浄光寺と号る是
勅願所之にある居屋跡とや亦貴場御幸ありし所なり彼所
に紫竹あり昔より今に繁茂せり佛閣の其跡には今に茎一
茎も生ぜざりしとぞ諸人尊るものなりと云云柳枝の根を
生じたる其側は往昔聖徳皇子御母君間人皇后を葬て

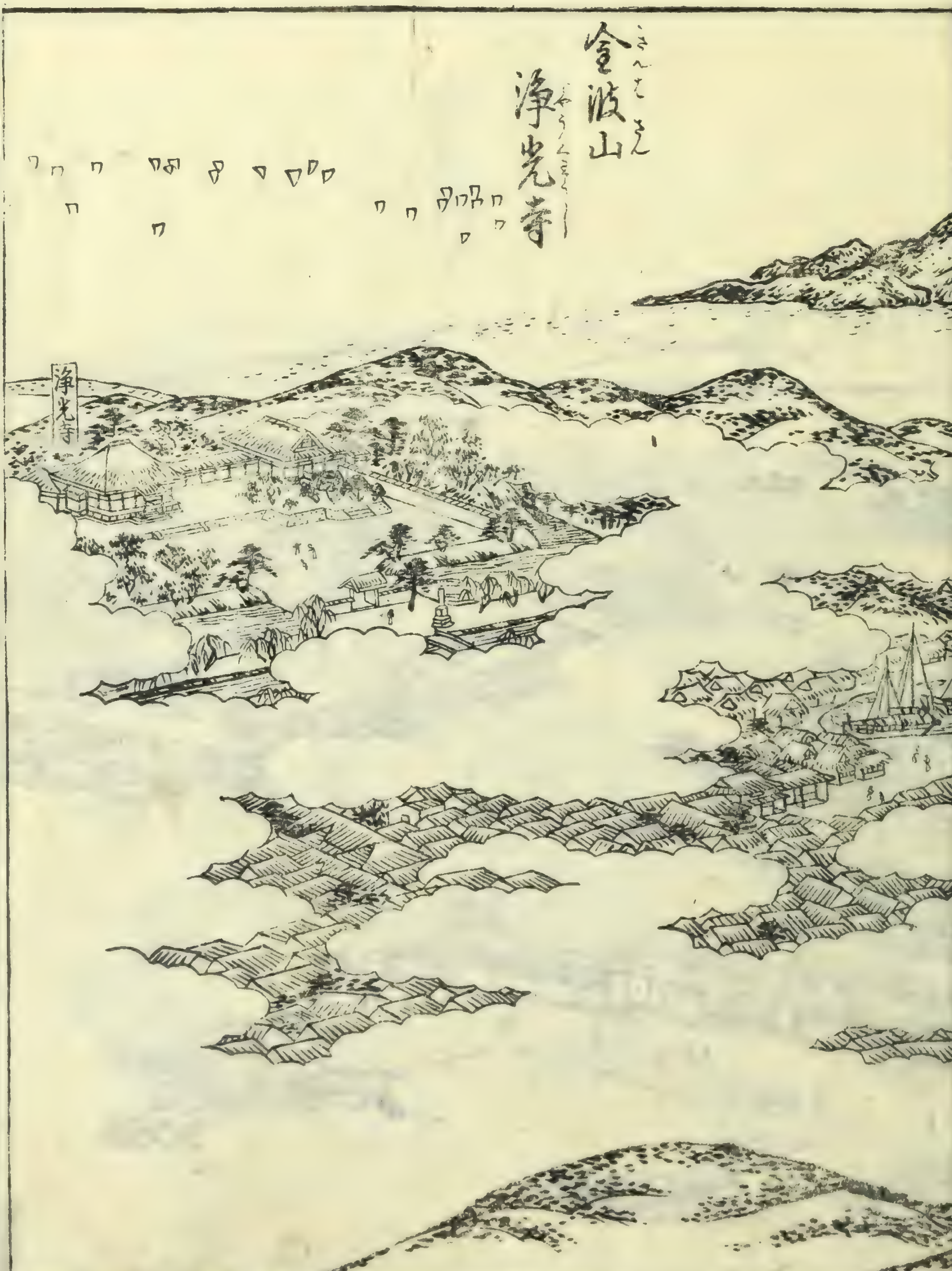
給ふ所御杖を地に立て誓て曰く吾滅後に佛法興隆すべき
ならバ此杖根芽を生し枝葉繁茂せよと深して御杖今に至
て青緑甚色を變ぜして大念木と名けて河州志多が[illegible]の御廟に
なせり猶智の山郎紗耆の郎而には今に菩本一茎も生ぜず
といへり

央鉢 泥塗 逆竹 三度栗 八房梅 弘智法印 蟷螂 是等なさしめ、
古俗滅後の七不思議といへり 按ずるに逆竹三度栗八房梅ハ實に[illegible]秘蹟
人の廣徳業代宗門の繁昌を前知せしめたる勝蹟にて不思議と称すべ
き[illegible]可之次で弘智法印の入定是又異なるものにあらず 央鉢 泥塗ハ其[illegible]
に記とがごとく漢土にも其類多く全く地気のなすところの然らしむるものなりしく
不思議と唱ふべきにあらず 蟷螂のなれハ古書に見えたれども是も
又陰陽の地のなれハすへして佛祖廣徳の靈異と同日に論じがたきこそ
勿論となしとやいはん

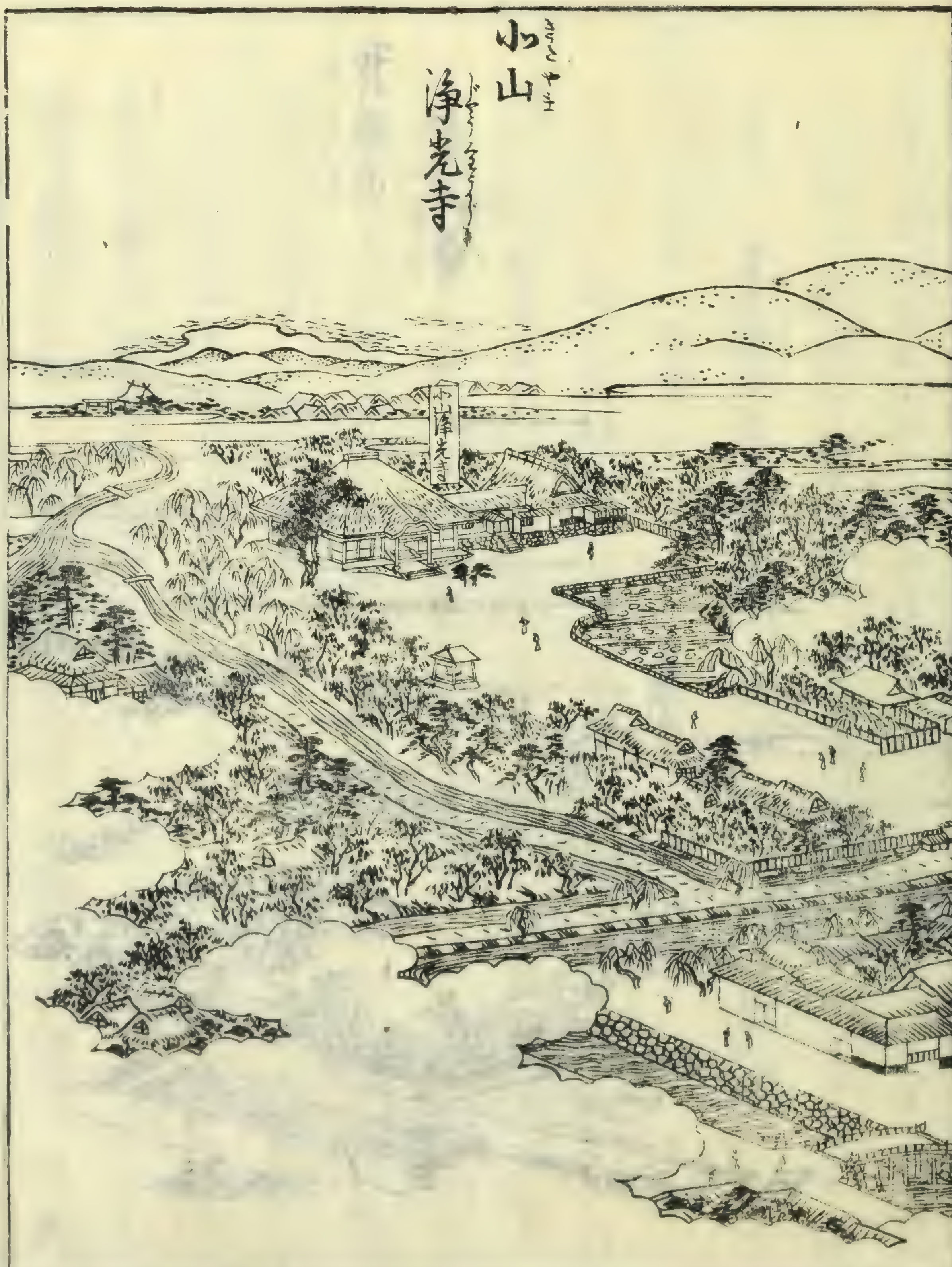
北闕山西方寺 東流 同所にあり
鳥屋院と号す 本堂十二間と九間 右に云逆竹の御舊跡ハ

新潟の湊




金波山
浄光寺
浄光寺


長法寺


小山
浄光寺
小山浄光寺


實源山
真淨寺
実源山真浄寺

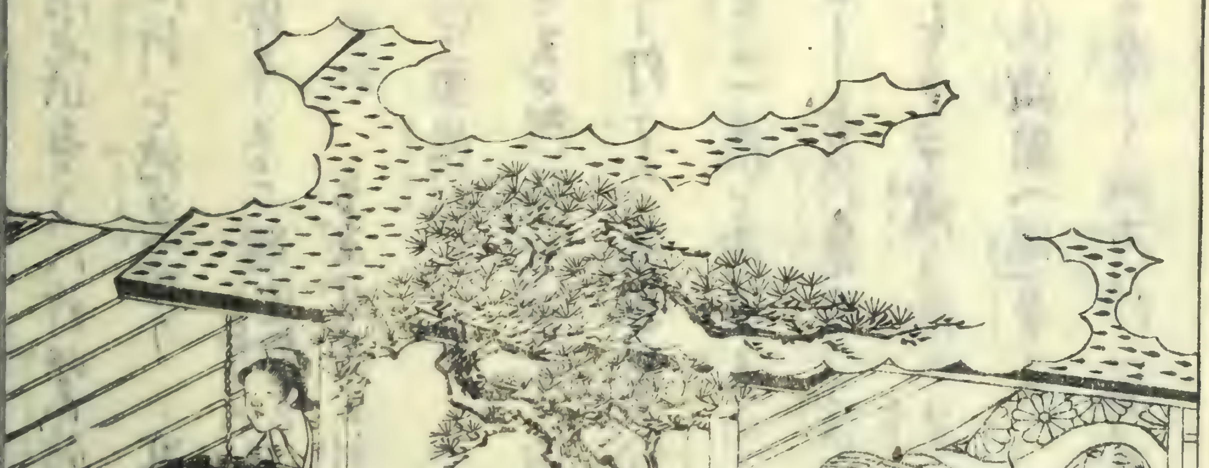
此院の支配所也此寺に八竹紫竹淡竹一重竹とて道竹の藪より出る珍竹を傳来せり　高祖御真筆十字の名号を安置し　畫像本尊二幅 覚如上人 蓮如上人 御筆　御傳繪抄 覚如上人の御筆

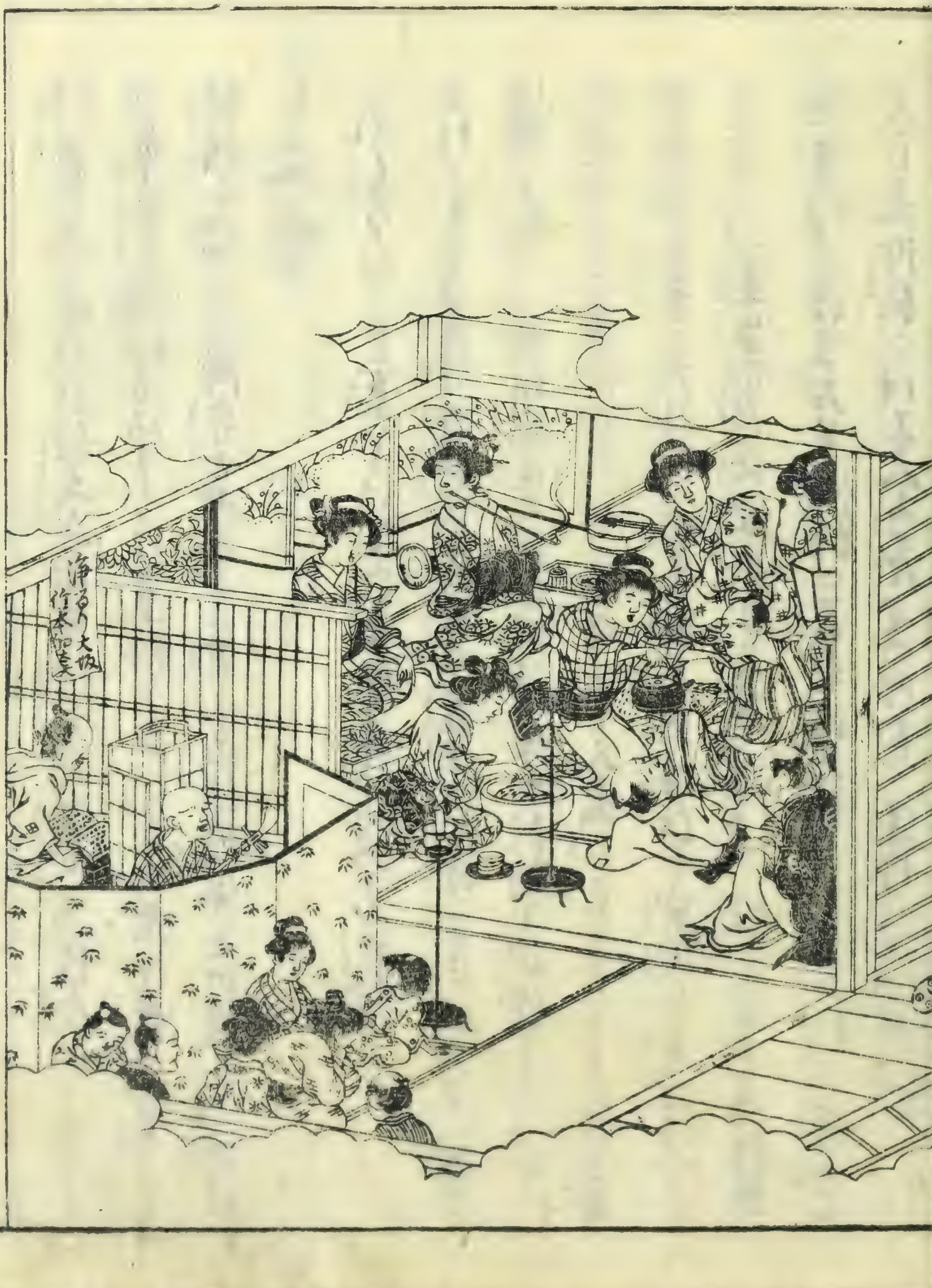
北山淨光寺　西派　鳥屋埜か一里彰深にあり

本堂十一間に面僧坊二區　人皇八十四代の聖主順徳帝の勅願所也本尊ある阿弥陀如来は同帝の勅願安座の靈像なり

一承元元年丁卯より高祖聖人当國に五ケ年の間在國坐して鳥屋埜の里に一院を御建立の上御化導なし給ふ彼竹杖に根芽の生ぜし奇特遠近に聞へて諸人参詣の足ひきもきらず参詣群集ある事蟻の集るが如し其折しも承久三年の曆順徳帝佐渡國へ遷幸ましましけるが聖人の化導道行の奇特を叡聞に達し此御坊に御幸なし給ひ即聖人の御

新潟三乃町の宿屋乃圖




浄るり大坂

教化を受させ給ひ頓速に念佛往生の安心を得たてまつらせける
が帝随喜渇仰のあまり宸翰をなして鳥屋野院浄光寺と
勅額を賜ひ又御守の御本尊黄金の弥陀仏を此院に奉納た
まふ御製衣

〽うちなびく人もとうけてなびく鳥の鳥屋野のはなに霜結らん

これは今の鳥屋野逆竹乃御坊乃旧地にして中古故ありて院を
此所に移し高祖開建の御坊明徳帝勅額所と相續すと云云

○蓮如上人遺徳記の一に曰先師三十五歳乃至そのとしより北山鳥屋
野院浄光寺に入給ひけるとある跡を見給ひて感涙を流し給へり
とあり○霊宝品目 泥筆十字名号 高祖聖人御筆 ○往古室中乃阿弥
陀仏 同御筆 ○六字名号 法然上人御筆 ○名号法然対座の御影 同御筆 ○蓮如上
人自画御影 ○同上人鳥屋野の御書 逆竹 是即御杖にせしめ給ふ竹 みな枝下り逆にさく

の竹なり

黄金の弥陀佛 明徳帝御守佛之 ○明徳帝鳥屋野御詠歌 御震翰之

金波山浄光寺 西派 鳥屋野より一里新保にあり

当寺ハ新保鳥屋野院蒲原浄光寺と号く彼鳥屋野竹林の御坊より此地に引移る所之山浄光寺と同由緒乃寺なりしが御弟子蒲原法尓相続せる寺なるにより同所同号なるゆへに山浄光寺と号し蒲原浄光寺と号くるなり○高祖真蹟十字名号 御光の中に十二光佛あり下に蒲原法尓とあり ○弥陀の尊形 法然上人之御筆 ○六字名号 蓮如上人乃御筆

赤沼真浄寺 東派 同所にあり

当寺ハ聖人の御弟子明慶坊の開基也抑明慶坊の俗姓ハ常陸國乃住人土屋太郎重行とて源氏譜代の勇士なりしが偕老同穴の愛妻を失ひ執着の妄念却て發菩提心の善縁


二崎乃渡し
此川の両端河骨一面にありて
いともうるはし



となりける終に出家遁世の身となりける當國頸城郡にて辻といへる所に
ひとまはしてありけるが其折から高祖聖人當國に御座て御化導
ありしを聞給ひけるを既に彼所に至り即聖人の御教導に預り
速に信心了解して真の御弟子となりける法名を明慶と號けける
其より已後聖人東関へ趣き給ふ時供奉しまゐらせ信州水内郡赤沼
といふ所にいたる處に抑ひて聖人暫く化益を施し給ふ諸人信
仰して本願を信じ念佛するもの多かりけるが聖人又處を去て
常陸に趣んとし給ふに諸人御名残を惜み悲しみける故に聖人
明慶に命じて宜く此處に留り予が代りに専修念佛を弘むべ
しとて門葉の衆中をえらみて明慶の教化予と同じて出しま
異なるなかりしと示し給ひ数珠の御讓物を賜りける明慶師
命に背き難く遂に此所に留り一宇を創立して真淨寺と號し

専ら真宗念仏を弘通せしめらるゝが中古律謂何く寺を此派に
移し侍りぬと云　宝物　上宮太子の尊像　聖人御作　十字六字名号
聖人御筆　茶碗　高麗青磁　香合　堆朱　腰差　虎文字七寸五分　以上高祖より明慶へ譲る
此外霊宝数品これを略ス

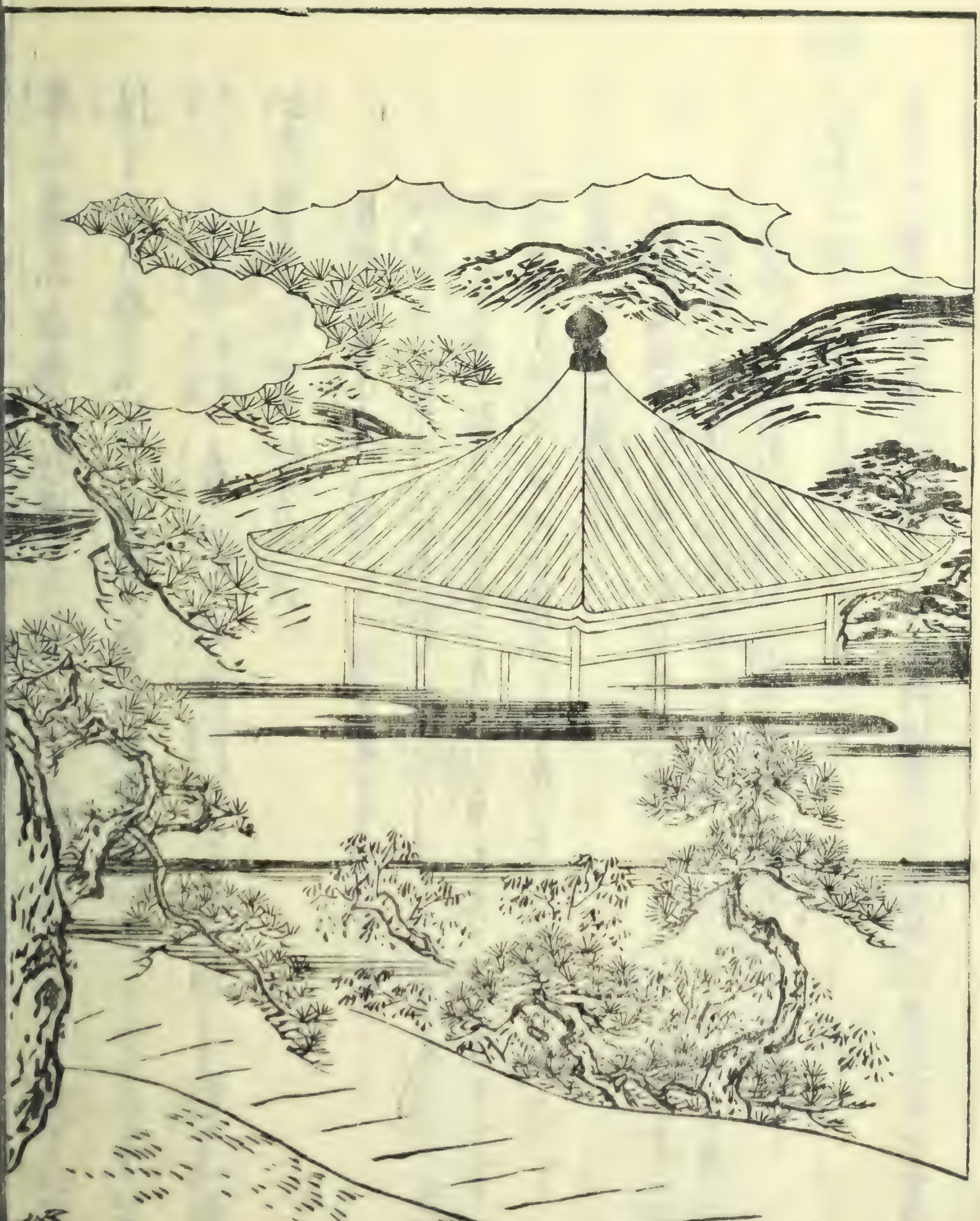
長濤山真宗寺　日所にあり　此寺蓮如上人御旧跡也

越後の国は大国にして此新潟を始め湊く多く小国第一繁昌の地なり
別して東西本願寺御末寺の寺院数百ヶ寺ありて其中にも大寺多しと
いへども祖聖人の御由緒ある寺院はまれなればこれを記せず此外
の国々も是に准ずべし

○新潟は越後第一の大湊にして家数数千軒　其中に遊女の妓楼ありて諸国
の商賈入つどひ繁昌の風情妓婦の粧を得て其種尽しへきごの湊之諸国の出船此
に入津し或は小洋を出り南部松前の遠国へ往来し融通自在の繁花なり

徳之本太子堂　新潟より二八里半徳之本村にあり

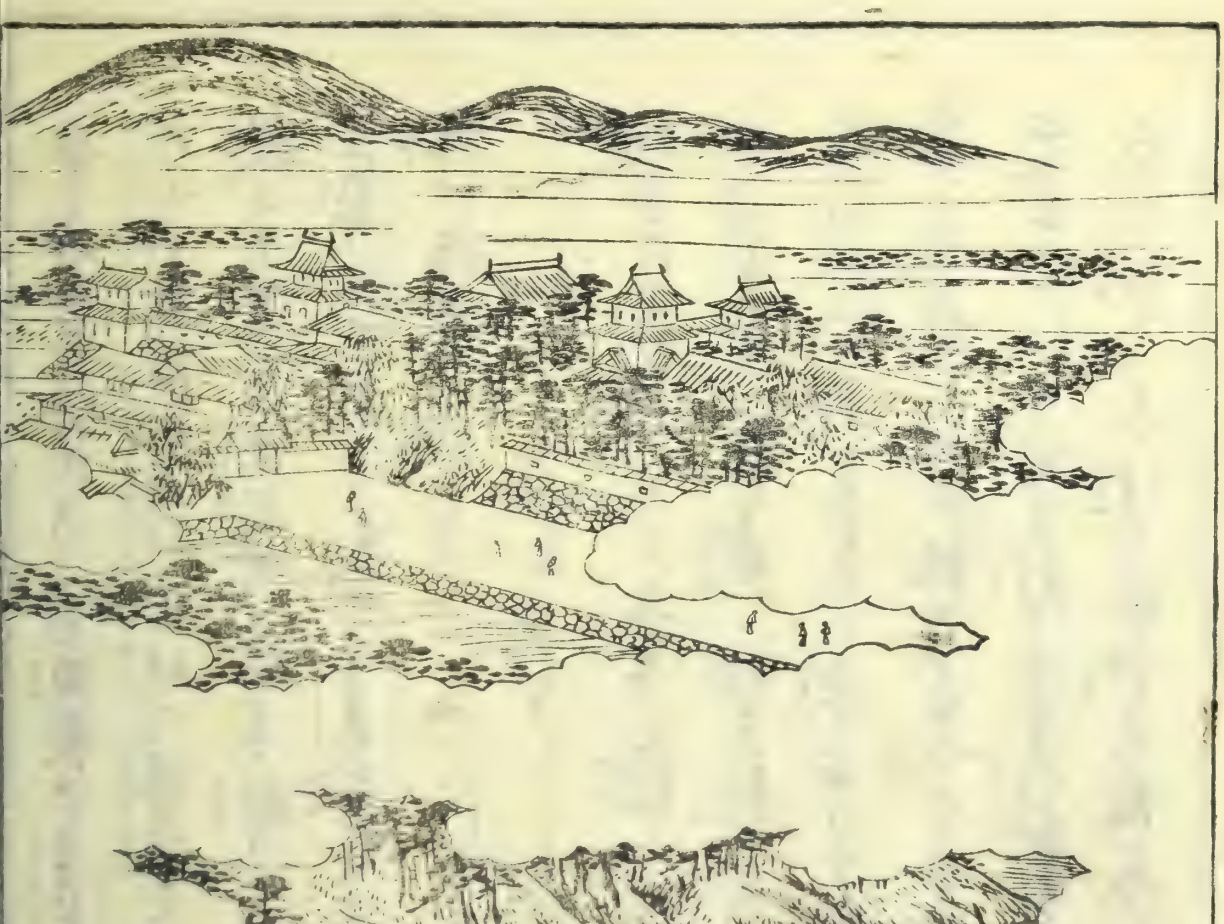
本尊は聖徳太子の御像にして高祖聖人の真作也御長二尺八寸余

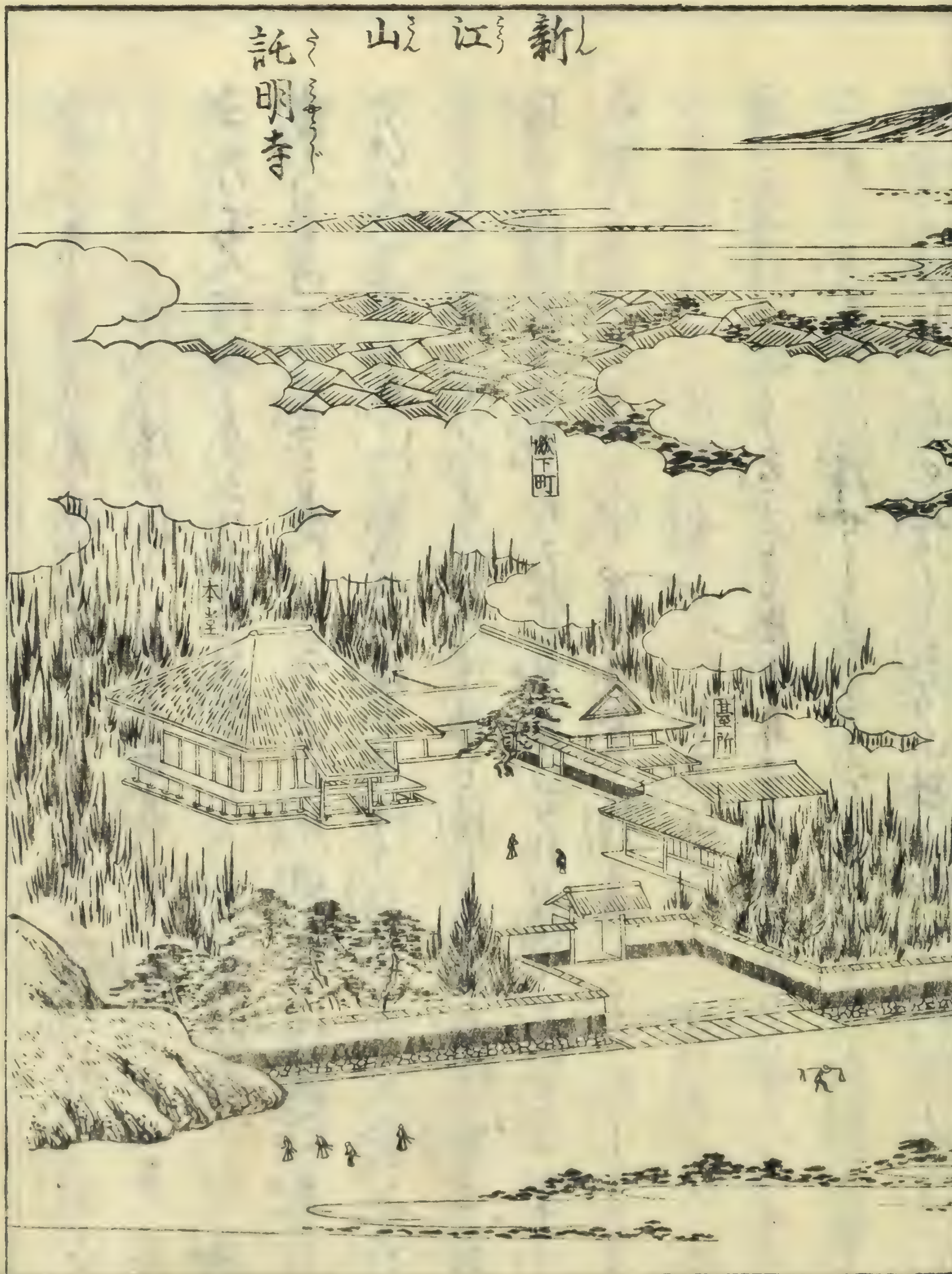



聖徳太子霊應

瑞いちじるく在ます故國郡こぞりて崇とする新發田の溝口信濃守殿で
信仰ふかく供料八石を寄附せられぬ元禄年中の比新發田の所をはらずまで
然るにこゝにある貪き百姓なりけるが夫婦が中に子三人あり又八旬に近き
老姥ありけり目も盲ひたり元来夫婦ともに頑固の信者なり
されどもいかなる先世の悪業にやありけん至つて貧窮暮せり
去ながらも少しも宗旨の掟に背かずして神佛に祈るなど
いかなれば微にもせざりしが年々困窮して一しほ労をなしつゝ地
頭へ奉る年貢金をとゞこほり未進になりけるが下の庄屋是を
立替地頭へ納めけれども猶なく極月中旬に至り庄屋方か
ら度々催促せしかば夫婦種々心を砕くといへども金子償ひがた
く討ふさかれてぞありける兎角に覚えとべきやうなく思案と
なりし折から十八歳になりける娘の日比殊更優しく孝心深

きりの之されバ去るころ両親の辛苦を見るに忍びがたきを
遊女に賣られ其代を以て借金を償んとおもひ究めて此事を両
親に申けるに夫婦の者も親しき子を賣んは去とても不便
に悲しくおもへども年老たる老母の彼借金のあるを案じ
煩ひ給ふを女ひとりにかへがたしとて是非なく其詞に従ひ
て極月廿日父茂兵衛なく〳〵娘を誘ひ連れ新潟の湊に至
知音の者をたのミ三年を限り彼娘を遊女に賣て其價の金
を請是心ならずも娘に別れ新發田へ帰る比日もはや七ツ時な
ればひくれバ足をはやめ急ぎけるに新發田と佐々木村との中程
にて夫やされ日影のはやくも山の端に沈ミ果しかバ弥こ
心いそがしく帰る折しも人家を放れてある縄手にて盗人三
人に逢ひたるに詞もかけず茂兵衛を捕へ首にかけたる金子を




新江山
託明寺
城下町
本堂
墓所

鵜飼ひなりしたり我命ハ今にもかゝりしかば天に叫び地に轉び
てさま〴〵歎き悲しみたれども更に盗賊どもハ耳にもかけず泣
るに所存人何國よりか來りけん十二三歳ごろへしが少年の來りて彼
盗人どもの先に立て見えしが三人ともに打倒されしハ彼少年に
なひ流し金をとられし我命に添し中ゆう汝もとより我を救
ひたまひしハ誰にしところへども阿弥陀佛と信ずるが唯今ハ金子をも
返し得させる也尚行末も光來るならば佐々木の甚子堂う
今宵を聴して歸るべし我は彼堂に住りのえらきかしことさ
して淨ハなりぬ我は集ゑ返し金再びもいりし給りたりのみ
雑さ骨骸に徹し去まても彼が少年の名も弱稀に深く謝の
言葉もと道みがして帰せしたるのありとも淫言せんものそ急き佐々
木堂にまゐりしが堂の辺りをも覓るに彼少年と覺しき人もなし

ざりければ當寺にも同じく様子を物語りて右様の少年の人や拙生
まゐらせし當寺顕息して云やうそれこそ正しく當寺にて御
まどろみし先當寺に入りたる像を拜しまゐらせよといふに心付てその
役者子の尊像を拜み奉りしが夢に見し吉子の御尻に泥の多
く付く拙見しるにぞ弥吉子乃御化現にて急難を救ひ給ひ
しをみ難く思ひ居たるに翌日新発田へ帰りてすぐさま庄
屋のりくへ借金の未返し彼吉子の御利生を觀び奉り我
兄来吉子を祈りしまゐらすれど弥陀佛を信じ奉る處このさ
まりし事どもへがいよいよしたのもしき弥陀の大悲うりさて
信心たくましく悦びたる此より諸方に告へ廻りて人々感心をお
ほまれてくる處次第に幸ひを得て後年大福人となりかの
娘も有徳の商家の人に縁せしも追々家の上となりしとかや

これ実に現世利益の御賛文に符合せるものならんかし

新江山説明寺　東派　佐々木村ゟ一里新発田村にあり

堅固院説明寺は開基祐玄法師也本堂十間に面す本尊阿弥陀仏（春日の作）檀中三ヶ寺　柳當山の開基祐玄頑徳の俗時は平氏小松内大臣重盛公の家臣斎藤別当真盛の子にして兄を斎藤五といふ後に出家し天台宗を学び坂本西教寺に住職ハ弟を斎藤六といふ法相宗を宗とし南都東大寺に住せしが学功年を積て後故郷に帰り先祖追修のため小識茶の園華ばといふ所に一宇の精舎を造立して普く弘法せり就中ある祖聖人越後へ御下向の砌其高徳を慕ひ来らせ面謁して聞法随喜乃おもひ浅からず遂に御弟子となりて法相唯識の修行を捨てひとへに専修念仏の一行をとこうし年齢八十六歳にして病

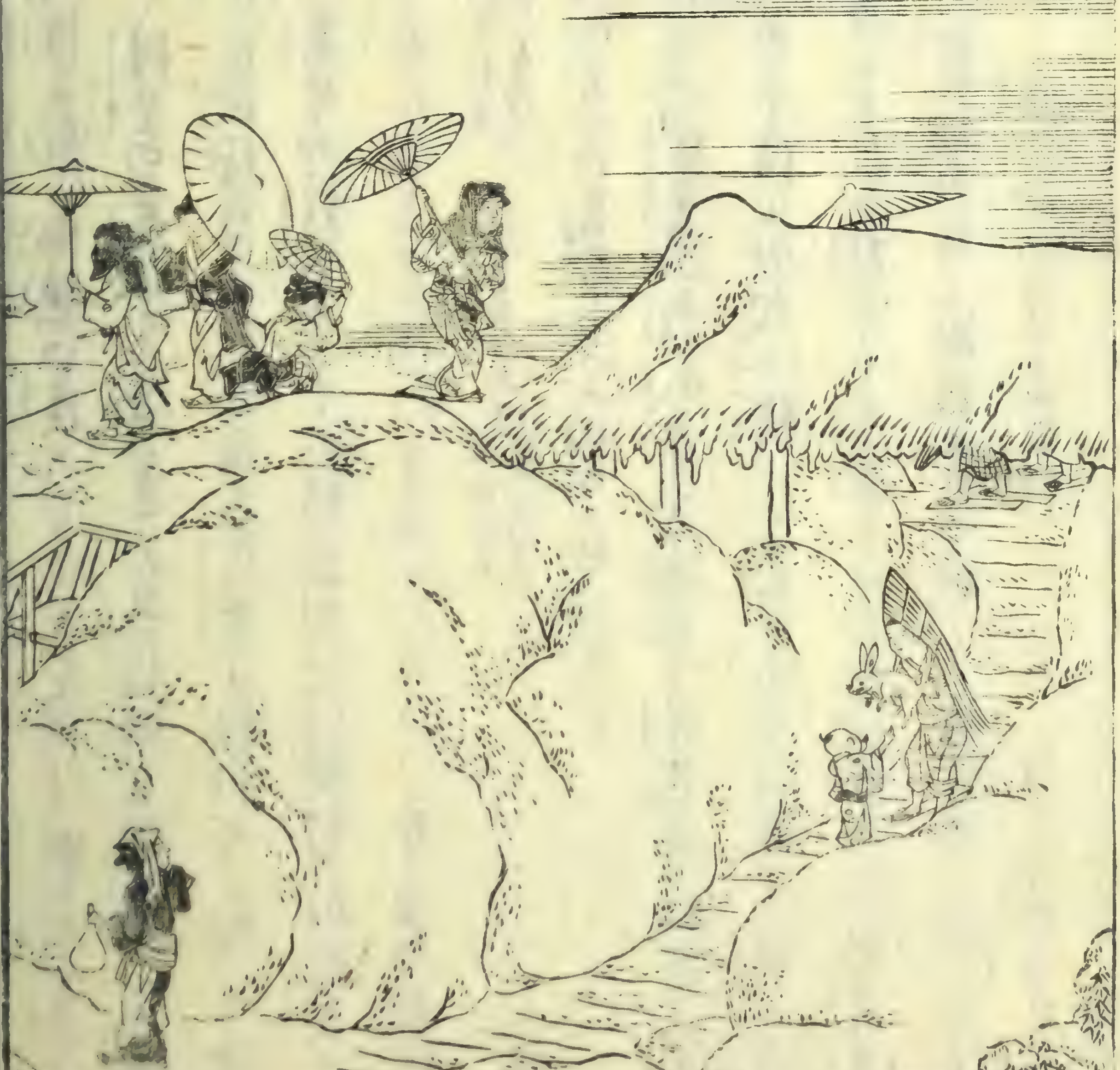
なかく門徒に對し佛恩の廣大なることを説し稱名の要旨方
に學えて往生の素懐を遂られき其の後師弟相承し退轉なく
是なるが中古由縁ありて加賀國大聖寺に移住せしかども御領
主溝口伯耆守御領替ありて此新發田へ御移住の時随從して
此地に移居る然るに菩提所となせしとなり○本尊阿彌陀如
来 春日の作本願寺教如上人の寄附之　九字名号 高祖聖人九歳の御筆

三度栗

又燒栗の御舊跡ともいふ保田と新發田の間

此御舊跡は保田燒栗山孝順寺といふ所なり往昔高祖聖人御在
の昔に往返し給ふ時或女燒たる栗を聖人へ進じ奉る聖人
御弟子達にこれを持せて大室といふ處へ移りしに此土地は原
なりけりて將体ひ給ふ時彼栗の燒たるは芽出し后よりても御
弟子方へも分ちへ給ひたるが草村へ二ツ三ツこぼれ落たるを拾ひ

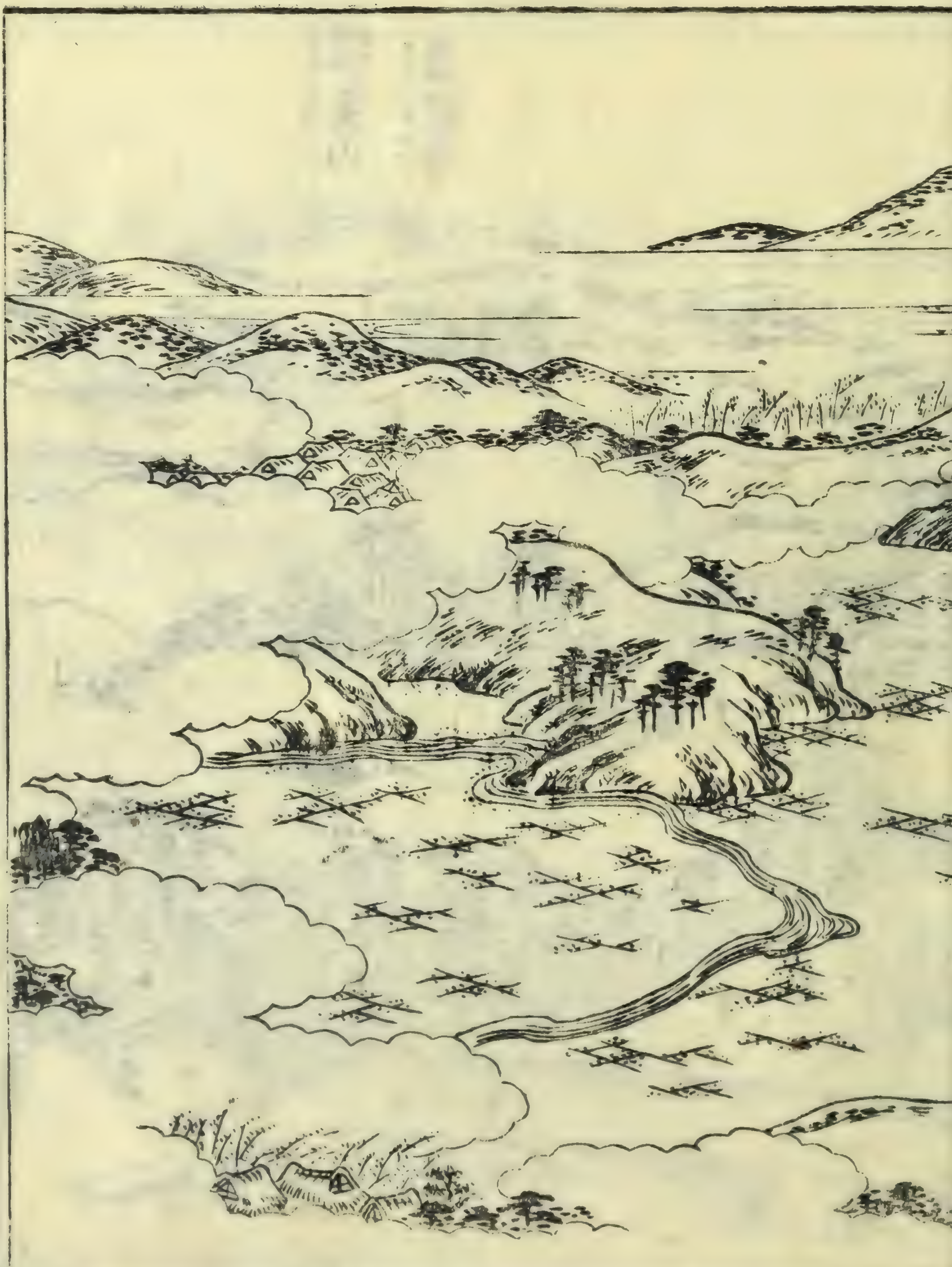
下越後の辺雪中に白き兎多く徘徊せり其色白玉のごとし白雪の色に感じてかはるなるべし



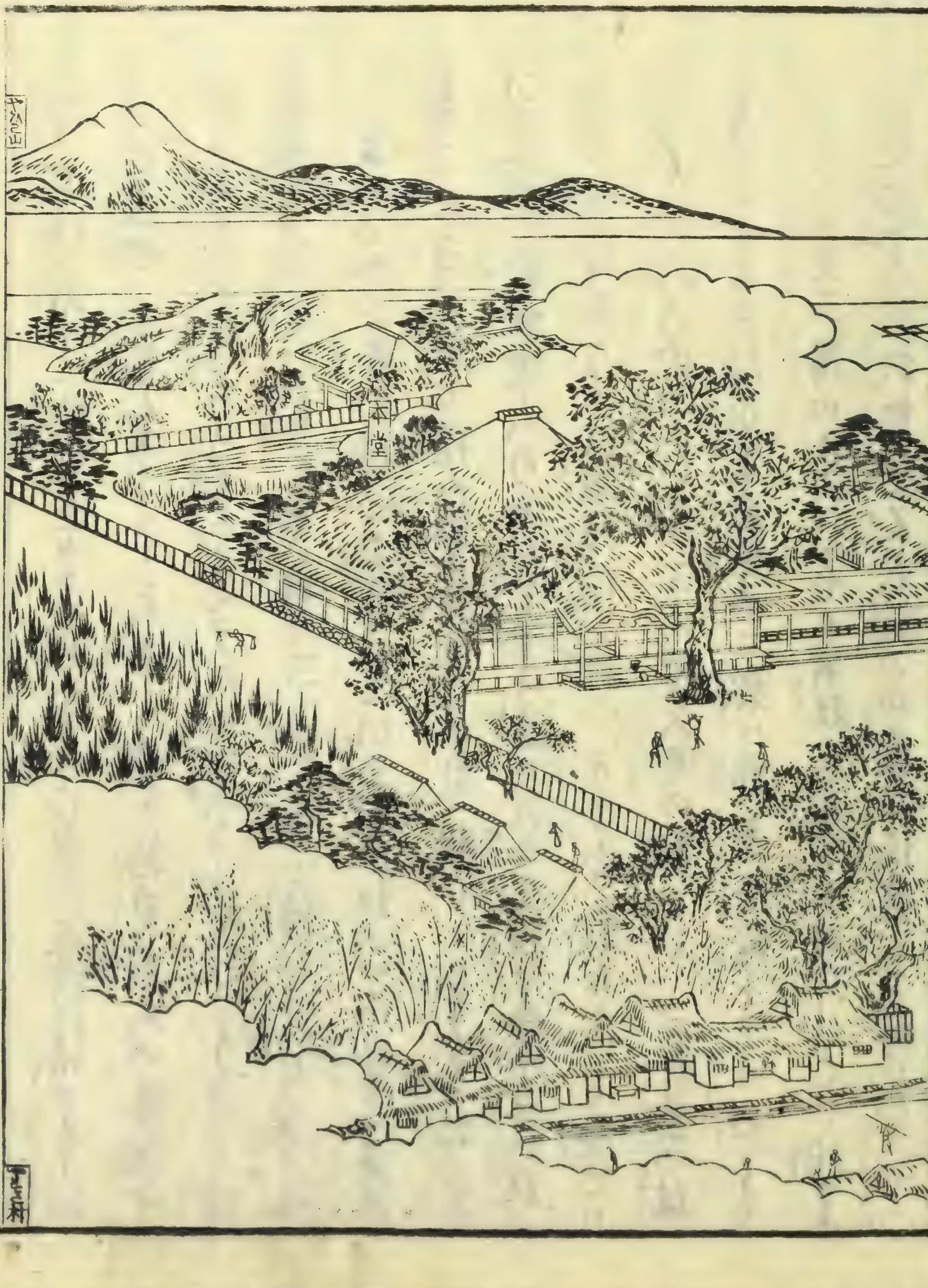

小間物



燒栗の林




燒栗山
孝順寺
臺所


ヤクシ山
本堂

なく世給ひにして仰らるゝは我今うづむる所の弥陀他力本願
の法末世に盛んなりて天下に満ち極重悪人の弥陀本
願に乗じて浄土に生るゝ事の決定ならば今こゝにうづむる焼
栗根芽を生じ亦も年毎に三度の葉を結び広野の栗林
となるべきことを示し給ふに果して此栗高祖の御誓ひに違はず
年に三度の葉を結び繁茂せり実に叶ひて国人奇特の思
ひに信を弥増聖人の御教導に違ひし凡夫往生露塵斗の疑ひ
なしと渇仰かぎりなく感涙信を厚ふしたり今数百年を歴されど
ども聖人の御誓ひ空しからずに又所の間もなく三度栗の林
となりたれば永不成仏の二乗は仏果を證するあるとも
悪逆の凡夫五障の女人いかでか解脱を得るの時なからんや然るに
弥陀超世の悲願仏智不思議の妙益を信楽する時は凡夫女人

饒栗山孝順寺 三度栗之圖

此栗ハはじめ花ひらき実をむすぶ
事也常の栗よりかハりたる事なし
其実の大きさなることなどよあり
なる頃其の実よりかしらの方に
二度乃花ひらき実をむすぶ
此実ハもとの大きさよ
なれる頃ハはじめむすび
たる一度の実ハはや其
いが破れて栗の実
外にあらハれぬ此時
梢の末に又三度乃
花ひらき秋に実のるなり
秋冷ならやく僅に年ハ三度
乃花ハ実らざるもあり冷気
遅き年ハ一二三の栗皆を遂へて
悉く実のるなり故に奇樹と謂べし



ありのミつからびいくさに乱やけこより
其木のかれまれたれども
さるゆへ焼たる栗の
ごとし其実を生まで
皮をとれバ荒波に付く
渋のミもからくくさるれ
是を又焼たる栗のありさまへ
実の大きさ一段はそれて大きく
二段の実は是よりぞ三段へ漸小し
圖とうつす其大概とまなぶべきなり

○八房の梅は小嶋の善照寺にあり
八重の紅梅の花一輪に八ツの実と
むすぶ是即聖人末代の衆生として
八葉の蓮臺に生ぜしめん
御誓約給ふ



八房の梅の圖

迚に安楽界に至る事譬ば燒種の栗の芽を生じ枯木に花の咲
出るがごとし唯人々これを疑ひ給ふなかれ

燒栗山孝順寺　東派　新發田より二里余保田に在

本堂十一間に九間○高祖聖人御真筆布の名号を安置せり
当寺ハ上野ケ原三度栗の御旧跡なり夫三度栗遺跡の霊験ハ
是ハ高祖聖人北陸東関に修行して化を凡俗に施し益を衆機に
施し給ふ事御在世の衆生を導引し給ふのミにあらず滅後数百
歳の後其證跡を残して末世の凡愚を度し給はんが為なり
去程に此孝順寺布の名号の来由を尋ぬれば康元元年高
祖親鸞聖人当国へ左遷とならせ給ひしより建暦元年勅免
を蒙らせ給ふまで五ケ年の間此国にましくて御化益専らな
るが或日此保田村の隣邑分田村といふ里に入て法縁を結

だんが為家毎に鉢をもひ給ふに此里慳貪放逸の族のみに
して一紙半銭の施しをもなし若るに一説に建保元年のことゝいふさて只貧
家に老女あり獨生の小屋に布機を織居るが聖人を見ん
まゝ戸口に立り出ていふ小僧衲若今日は我主父の周忌
に當りて暫く休ひ給へかし供養致しまゐらせんに聖
人心に鉸びたまひうれ慳貪なる里乃内に殊勝なる言葉
を家ふよそく彼茅屋に入給へば老婆何をがなとく饗する粟と
炊出し聖人に供養しまうれ聖人二ツ三ツ召よられ老女が赤の厚
きを感じ今此老女一人を濟度せばおそらく此里の諸人佛法に引
寄らるべき基なるべしと召上ぎ彼老女に對し彌陀大悲の誓願女人
往生の理をといて慈悲に御教化在しけれバ老女が宿因のもよほしにや
忽ち随喜感嘆の泪を流し信心决定を速に得られ其日は念じ奉る

なれバ寺の名号を賜らまほしと願ひ給ひけれバ聖人然らバ
せられ即書与へんと紙を求め給へと云ども素貧窮老女なれバ一紙
ともし給へるに老女たちまちに気色もなくなりしとて自ら織る麻
布を刀をもていさゝか裁伐し是に認め給はりしと聖人に奉りけ
れバ弥感じ給ひ御洞を深めさせ給ひ織りけたる麻布を
捧げまゐらす裁伐しまゐらする是貧女が誠の信心深かりしとて奇
特の志を歓び思召て頓て御筆を染させ給ひ六字の名号を
書して与へ給ふ老女ハ平伏合掌して暁ぬ限りなく尊敬に
安置して因縁ふかきを崇敬しけり是より子孫相續し二百余歳
真翰の徳光都鄙に耀き本山に聞へて専念寺といへる寺号
と賜ふ其後わづかに寺を務ける数多成なりしが其無
寺号を改め賜りる寄附の寺号ハ専念寺第二ハ親威寺第三




布乃名号の由来

い長福寺第一い本善寺第二い孝順寺と是易乃寺号を免許

ありく家々佛閣を建立しけり○六字名号 布の名号と称し縁起ハ先ヶ記しん○九

字名号 絹紙金泥聖人の御筆 田中読後等有之○八字名号繪像弥陀 釋圓空上ゝ御自畫 ミ縁る

等身御影 顕如上人 御請判 ○上宮太子等像○竹布の弥陀佛 法徳上人 御筆 ○高

祖御木像 蓮如上人 御作 ○蓮如上人自畫御影

○寺記に曰此光女ハ渡辺綱が玄孫源二競といへる忠武猛勇の武士の妻たり

競ハ源三位入道頼政が隨一の臣にして主人頼政高倉の宮に頼まれ奉り

平家を討んと軍勢を集め給ひし時宇治郡に對陣し武運拙く

平等院にて生害せり此時源二競も主とともに宇治川にて戦死しけるば

其妻娘都を落て小国にさまよひ終に越後国比角田村の里にかくれてま

づしき婆となりたりしが主夫の周忌となりけるに則ち頼政と競が命日

まて治承乃年宇治の合戦より此時建暦二年にて三十三年に当れる

ゆゑをとぶらひまを報く熾心の激しくやるせも高祖聖人の御弟ひに語り

ありかたく又修三経の女の身佛得脱の化益をかうむり安心決定せり

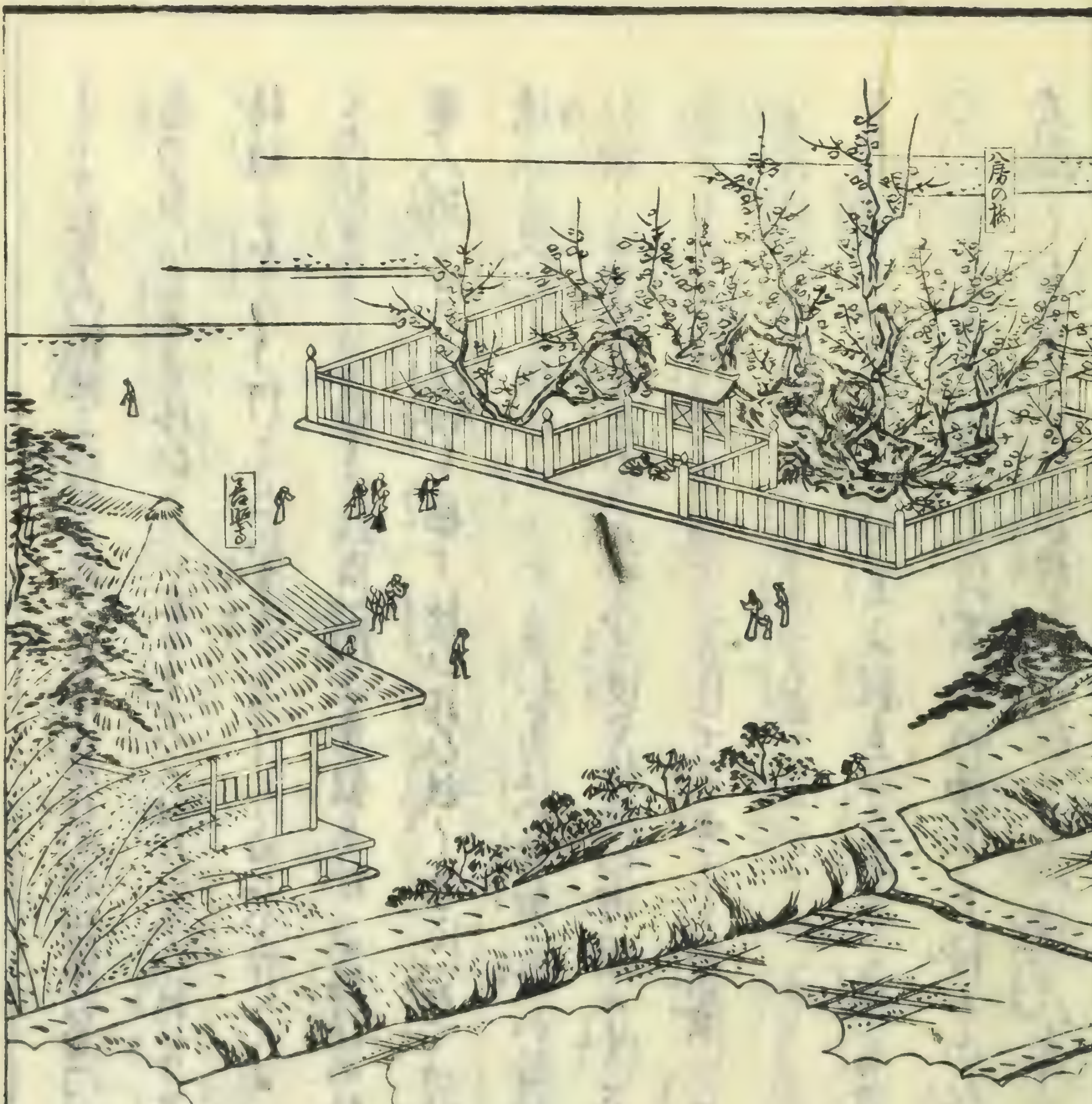
ゐるハ元雑りし衆生廣劫の大善縁となるべきものなりとぞ

八房梅

安田より分田へ十八丁まより又十八丁小嶋にあり

寺ハ菩提寺と号く東派 同國下條村八房山菩提寺の鎮守なりし此梅庭前に繁茂して十間四方ばかりに石垣を構へり其中に六百余歳の年暦を經ぬれども木勢強健として盛なり千重の紅梅鮮に美しく葉ハ一花に八実を生じ味ひハ酸しこれや世俗是を八房の梅と称し當國七不思議の一箇とぞ又珠数掛桜とて珠数の房形に咲出る桜花あり〇抑此八房の梅といふハ往昔高祖聖人當國御化導の砌鳥屋野院に在して御教勧ありけるに遠近の道俗日夜に来集して聞法帰依しける恰も釋尊出世の時八部衆の佛所に詣でるがごとし家に護摩堂の緒を改義とありハ今武官殊に聖人を帰依ある重みじく適居法中さきけ


八房(やつぶさ)乃梅(むめ)
會津川


八房の梅

よより聖人彼地に赴き給ふ其中程に小鳩村治右衛門（与次右衛門とも云）といへる
者の家に立寄せ給ひけれバ亭主大に歓び聖人を茅屋に入奉り纔に
得難き幸なり何とぞ饗應し奉らんと心ばかりはしくあせりしも纔のみに
て御供者中残りのまゝこれを以て汁に麁飯を炊き塩漬の梅を添て進めける
聖人彼が心の深切を感じ歓び給ひ膳くさしおて此梅の実を地に埋め
諸人の教化し給ふハ吾が今弥陀別願法の佛智に叶ひ弥陀の本願末代ま
弘興し悪逆の凡夫又は殊に女人成仏して弥陀の御國に生じ八宗の宝墓に宗を
なるのを説バ此塩梅より根芽を生じて末世とも繁茂し一花に八ツの葉を結ひ
八宗の秘を極ハれし是吾法流の興隆を末代に示し置くものと折玉ひにし給ひ
なるが然に如来の善巧方便に聖者の真言靈踏にも遠からし
て感應非靈にやまりし深くして此梅年を経るに随ひ衆人の繁昌して
大樹となり一花八實を結びけるゆへ諸人奇異の思ひに信心

を發し祖聖人の御教化を信敬し頑鈍の本意を翻ひぬ
今聖人御入寂よりして凡五百五十年浄土真宗の教法日々
に繁昌し年々に増上し普く四海に壮んなるは此梅樹のしげ
るに割符を合せるがごとしに生ずる青梅を喰ふ其味ひの如し
鹹し是塩梅の生ひ出る謂と知べきなり
宝暦七年の春予師圓尓御舊跡巡拝して此御寺の里より参り御寺に
一夜旅宿せしがつらつら聖人實に教を示させ給ひし恩徳など思ひ
めりて廣くふるに我家の中に高祖聖人に謁しまつり其御面顔の甚
痩させ給ふを拝して圓尓うつ心に中よろいかに聖人何の御悩にて
かく迄てかかく御面像の痩衰へ給ふやと伺ひまつれば聖人の御仰に吾
宗法今壮んに弘通せるといへども自力の我執に募て安心を乱れ後人
おほく邪見をいだしくそれが為にかくのごとく衰老しぬと圓尓にあ
御詞に衣の袖を絞り[illegible]心よかくうん
「我祖師の思塩梅し痩給ふ御法を開け八房のうめ




佛性山
無為信寺
本堂
墓所
鐘樓

と詠じたると見へし蓑さへあり發ところの蓑中の流は枕と滲し
ていまだ乾かずつら〳〵蓑乃さまをおもひみるに頭具姿にして飲ませむす
はさながら人の何となく蓑の中に此法號をつゝみ縣又よく記臆して見え
たることそ不思議なれとく言葉の極まり故に蓑のまゝを語る也ちかく
さめぐし洞と流れまて遂にしも及び難く筆へ侍る

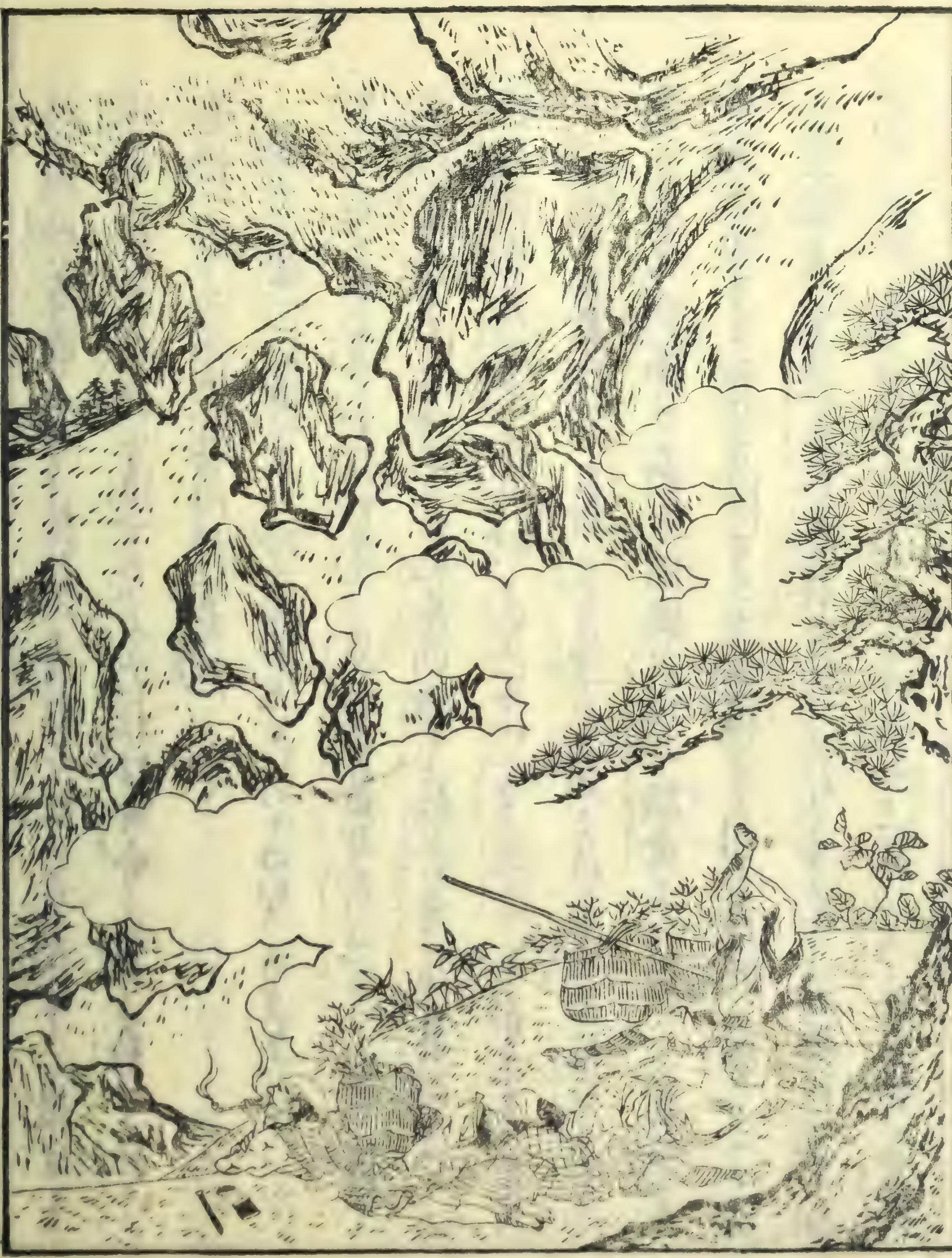
佛胜山無為信寺　东流　八房の橋より一里余 下條村にあり

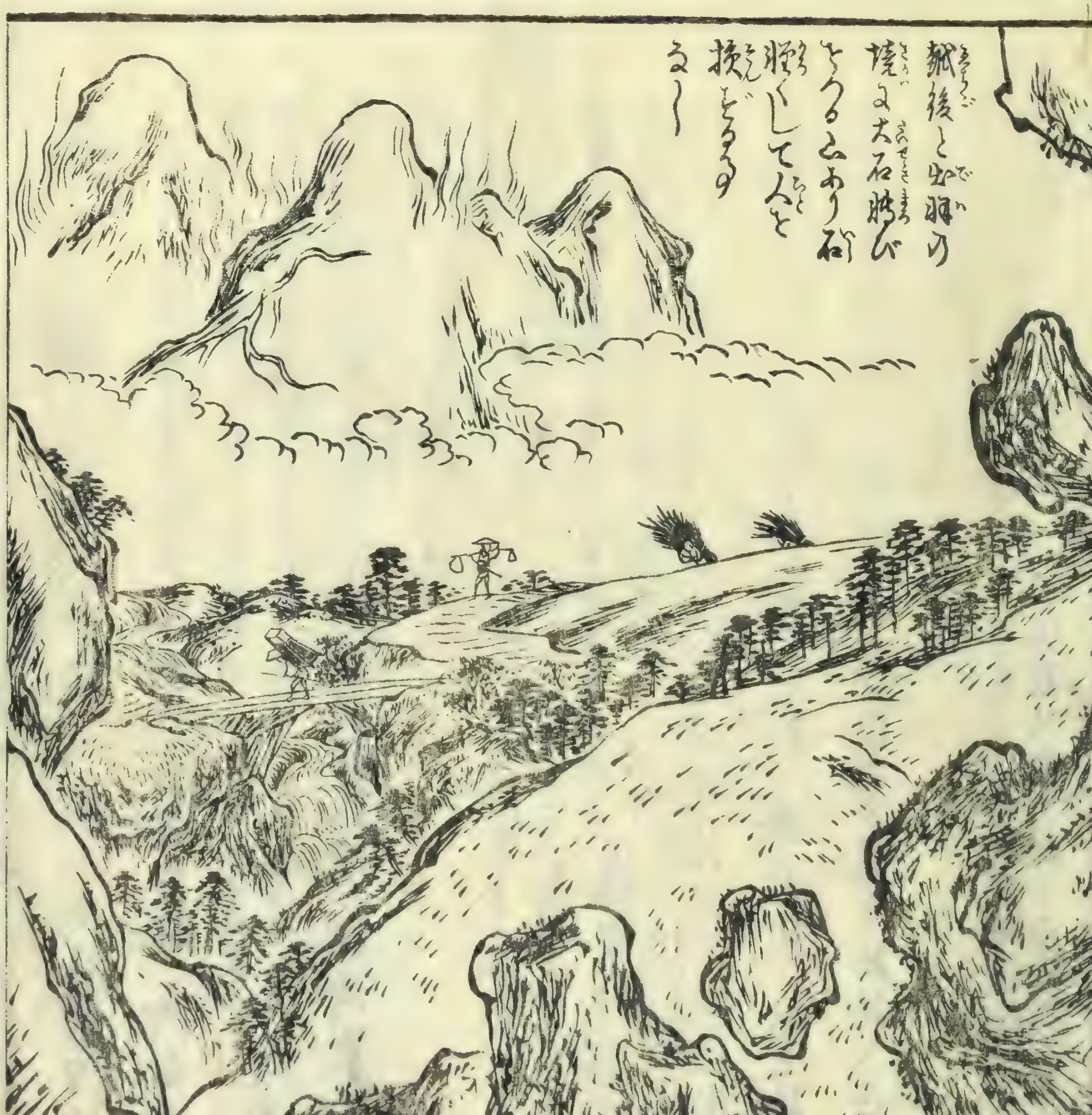
金剛院と号す本堂八間本尊如来（湛慧の作）二十四輩第十一番
無為信御坊の遺跡也無為信法師俗姓は清和天皇六世の裔
伊豫守源頼義の三男甲斐守源義光（新羅三郎と号す）乃後胤武田
太郎信義の子にして母は藤原の大宮司權次女なり奥州會津
郡柳澤といふ所にて誕生す幼年より勇猛英才群を秀て自武田信勝と名
乗同國綾和に居住せり信勝或時彦兼に山賊多く集り古跡をく其人運んで
一所につかみ古室を造り其中に出なとを引入て兵粮と隱し住居となる

有様なり暫くありて雀二羽飛来て忽ち蟻の土を拵へたる土室をつき破り集り居たる蟻を皆喰ひける信勝これを行看て忽然と歎息し嗚呼浅ましの世の有様然甚るきは人間の境界なりけんし今此蟻居住の屋形は要害を構へ米穀衣服調度を備へ妻子眷属を労ひ永く安住し万歳するんとするを雀の飛来るに無常転変の悪敵来りて忽要害堅固の居宅を裏破り子孫を断しける其身を殺害し目下今蟻のあはれに全く人間の業に異なる事なし此蟻大小も更に同じ殊更に当時乱世諸く静ならざれば人心は虎狼のごとく漸もすれば他人の所領を奪んとし合戦をいどみ国郡を争ひ弱きものは忽ちに亡び強き者は勝誇ひと振ふに似たれども僅かに五十年の命を保つ者かし我は理を弁へむしろ武をすてゝ勇を屈さんと欲は誠是よりて仏道のずくれ浮世の中に蟻の造りなしける土室の如き苦悩をまぬさん

よりてよく明師に帰依して未来永劫の苦を遁んには志道
と覚悟しければいかなる縁の善知識の坊にしまをやし附くに
是を尋ね申されたる経る宿習の善縁宗にありけるにや聖
人常陸国稲田乃郷に在して専ら衆生御化導ありせ給へこ
こと聞て急ぎ彼地に至り聖人に謁し奉り遁世の志さらし上
それば聖人信楽が心のたくましきほどを感じ給ひ弥陀超世の
悲願は好るであれ悪逆の凡夫を浄土に迎へ給ひんがゐなれば一心
に称念すれば変じて安楽に生せん事更に疑ひなしと細く
と御教誡ありせられたる不信勝これを聴聞し忽ち無二の信心を
発得し随喜の涙にむせび御弟子ならんずるを願ふ聖人許容し
給ひ即御剃刀を当させらるゝ法名を無為信と揚させられより
常随給仕の御弟子となり二心なかりけるが其後聖人都へ帰ま

然ル附海ハ本国ニ帰リ弥陀の本願を弘め是ゟ代まで衆生を
化益せしと仰渡されしかば無為信坊師命に背き難く泣〻
奥州へこそ下られし其時歌一首詠じて
捨て来し故郷へ又も帰らん弥陀とたのむのみのりなれば
かくうたよまれし無為信坊遂に奥州宮城郡に一宇を造営して
専化乃寺と号したる今の仙臺の城下称念寺ハ此寺の旧跡也又その
後同国会津郡大房若松の近隣といふ所に一宇造立し文永元年十月
廿三日七十九歳にして大往生を遂られぬ是を無為信寺と号て
慶長三年因縁によりて同国白川郡棚倉に移住し寛永年
中越後州田中に寺をうつしたるが異縁によりて退轉に及ばんとし
又享保年中洛東に再興せしめられしかども無縁にして荒
壊せしが終に宝暦年中御学頭従如上人の尊命に仍て宮府





越後と出羽の
境に大石駢び
たる山あり石
勝くして人を
援とするの
るし

の許命を蒙り当寺に再興し永く不退轉ならしむとぞ雖けり○聖人真翰十字六字名号二幅○御自畫半身御影 弘安第二年正月八日親鸞壽像とし玉ふ宣如上人添書に曰親鸞聖人御自畫半身御影寛永三年正月十四日書添ゟ○七祖連座真像十高僧唐画○聖人御骨○聖人骨類御影 蓮如上人御筆

其外霊寶勝之

歡喜山正覺寺 西派

下條村西為信寺より又泉へ二里又泉よりかりまへ二里かりまへ加茂へ三里 加茂より大浦へ二里 大浦より大茂へ一里半

大茂より三里長岡にあり月圓房田淨眞寺の弟子なりしが永禄年中に起立せしと云云 ○当寺什宝高祖聖人御自刻御真影 御八十九歳の御像なり ○聖徳太子御像 太子十九歳の御像にして般若之筆を為弥人聖人御彫 十六字名号 蓮如上人の御筆 ○蓮如上人御自影○佛舎利 以上傳来に

○長岡より上除宮本妙法寺を通り柏崎へ九里八丁

柏崎より高田へ十二里半

板敷山大覺院願教寺

此高田より無全川浦倉間安塚上方圓平保坂須川村との巡路を行て須川村にあり

後鳥羽院勅勘所寺領十二丁四方なりとぞ○宝物祖師聖人乃御木像 御自作 六字名号 如信上人の御筆 ○本尊御裏書号 聖人御筆 ○高祖聖人御頂骨 御本山御免許御添翰 以上傳来

葛野御堂● 何ヶ井より至る四に二里半

東御門跡御坊なり本堂十三間四面○本尊阿弥陀如来 聖徳太子之御作

照光寺 西派 小出雲村にあり

寺中二ヶ寺○高祖聖人配所御真筆西觀坊の舊跡へ云

二十四輩順拝圖會巻之四終

二十四輩順拝圖會

信濃　上野

五

目録

○遠江之部

普済山善勝寺

○参河之部

吉田御坊

寂光山勝鬘寺

野寺本證寺

柳堂勝蓮寺

高取專修坊

○尾張之部

羽塚山無量寿寺

東流御坊

小田井西方寺

濱松善生寺

三徳柳堂之
表宗帰明

太子山上宮寺

楽命山如意寺

小林光明寺

七宝山聖徳寺

光明寺

吉田高田御坊

稲荷山浄妙寺

桑子山妙源寺

照高山願照寺

西流御坊

円通寺

小牧西源寺

河畑勝宝寺

日野遅善寺

河野崇泉寺

河野善龍寺

奥村了専寺

西方寺

河野妙性坊

○美濃之部

河野西徳寺

河野称名寺

河野西入坊

河野安楽寺

河野専光寺

渋谷西方寺

足近西方寺

竹鼻西岸寺

河野専福寺

金足山万福寺

福島永寿寺

光雲山安福寺

八幡山西蓮寺

○近江之部

宝福寺

西方寺

天神護法院称讃寺

近松御坊

○山城之部
山科御舊地　蓮師御廟　西流御坊
東流御坊　日耀山永福寺
○攝津之部　溝咋佛照寺
○河内之部
戸森山尊應寺　福安山慈願寺　松谷光徳寺
後園傍郡毘沙門の　玉手山安福寺
霊告を感ス
○大和之部　恵日山立貞寺
○備後之部
山南光照寺　常石宝田院
○伊勢之部　専修寺御門跡
以上

親鸞聖人御舊蹟二十四輩巡拜圖會後篇巻之五

河州專教寺 了貞 撰

相摸國

古傳に曰むかし男あり其妻を先立て悲嘆のあまりかゞみに貌を出して見て一體をだありし姿のまゝにうつりしかバとふしぎのおもひをなし貌を祢にいはひ其相の貌に摸りたる地なれバかく相摸とハ名づけぬと云説荒唐不經の説信ぜるにたらず○坂東とは箱根より東の地をいふなれバ當國ハしも其東に有ところ第一にまれば坂上の國といへるを一の加乃字を省るなる第二に箱根山ハ中古以来の坂路にて往古足柄山以往来ひく足柄の御坂なと歟にもよくされバ此坂のよしといへる義にもやあらんと思へりしが加藤氏の語意考を按ずるに曰東方の國ハ上下を合て爲ち西北の國ハ前後を合てかつ道いろる所ハ考ふ猶ど妙之といへりされバ相摸武蔵ハ四一にて牟佐といへりしを上下にわかちて牟佐上牟佐下と仕したるべし其牟佐といへる名の義ハまださだかならざれども今も國にてよさつへる地なきを多かりさて佐加三に相摸の字をあつるゝハ人多く論ふなるがこハもと佐加武といへるがつゞまりし唱のさまにて佐加三とは後の唱なれバなり其相の字乃音の終のウをガに轉じ摸の字をミに轉せしなるよし玲屋氏地名考字例に

○また當國ハ右幕下頼朝公創業の地にして往昔ハ無双の要地なれバ今ハ其遺風をて都下のにぎはしき廟社寺院の結構壮麗比屋の数多なる挙て算へがたし これより以下の諸國東武西藩往還の孔道なれバ小細の名區勝景をも諸書に委しくあげねをば異説遂するにいとまあらざるよりすべて畧してこれをのせずたゞ有さいまは其疎漏を咎むるなかれ

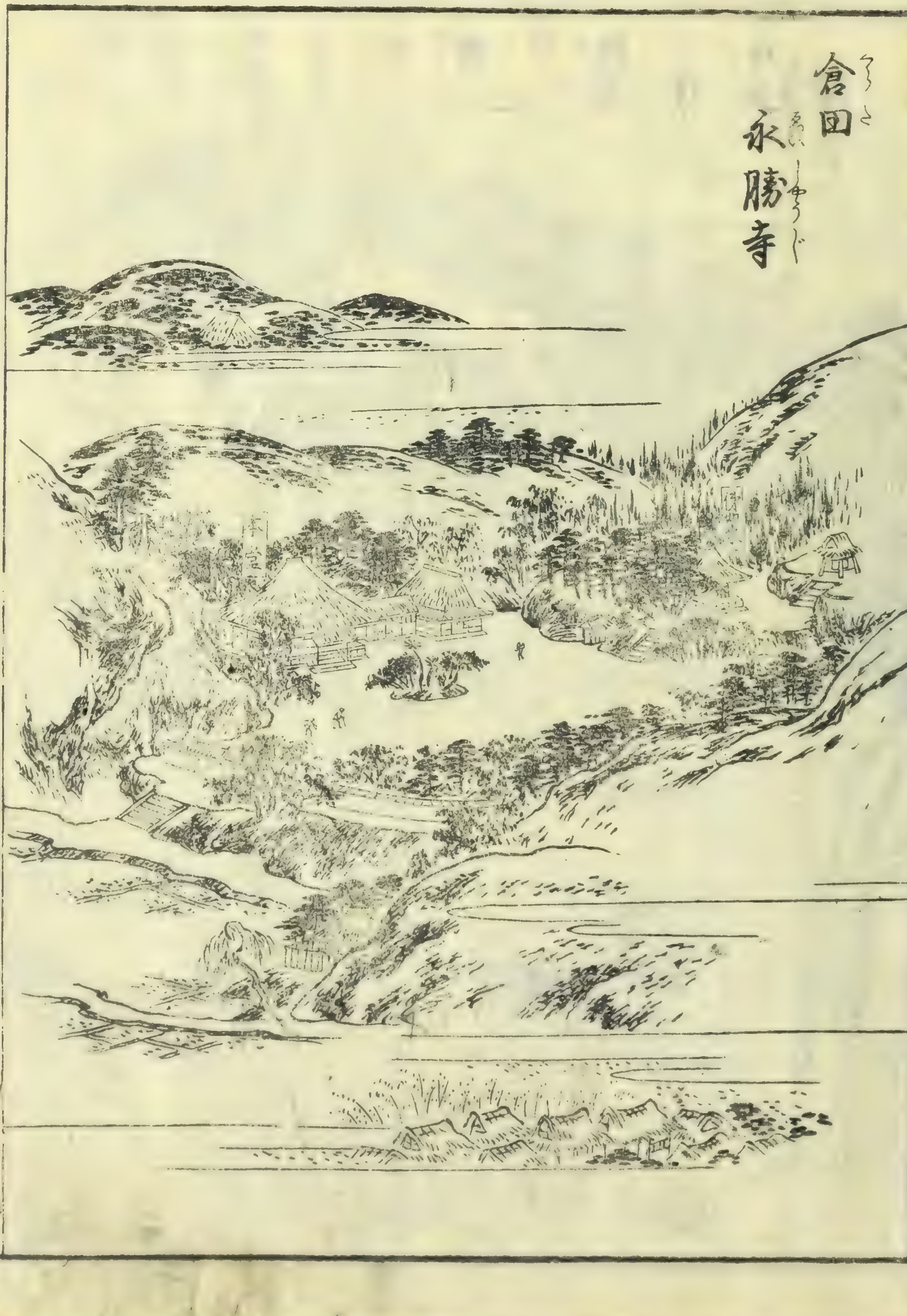
千葉山弘徳寺　西流　相摸国海老郡 今津村にあり

高祖聖人上足二十四輩第五信楽房の旧跡にして下総の国
新堤弘徳寺門系の寺なりとぞ

臥龍山永勝寺　东流　同国足柄郡 倉田村にあり

祥端院と号し聖人御真弟慈海房相承の古院にして関東
七箇霊場の其一なり

当院は往昔台宗の霊区なりしが嘉禄二年高祖聖人東国御
遍歴の砌おりく鎌倉に往返し給ひ普く群生を御化益ある
せらるゝに当寺の住僧窃に聖人の高徳を慕ひ奉り深く専修
念佛の法門をよろこび終に精舎を聖人に寄附ありしかば聖人
当院に住し給ふこと凡て七年 安貞二年より文暦元年にいたる当国国府津 御勧化の内も多くは当寺に抑止しましゝとぞ
又宋朝より一切経を渡せし時執政北条武蔵守泰時聖人を招請し校合のことを属しまう
しけば聖人とつて当寺に於て考討し給ひしとかや或曰此時聖人を屈請せしは泰時には非

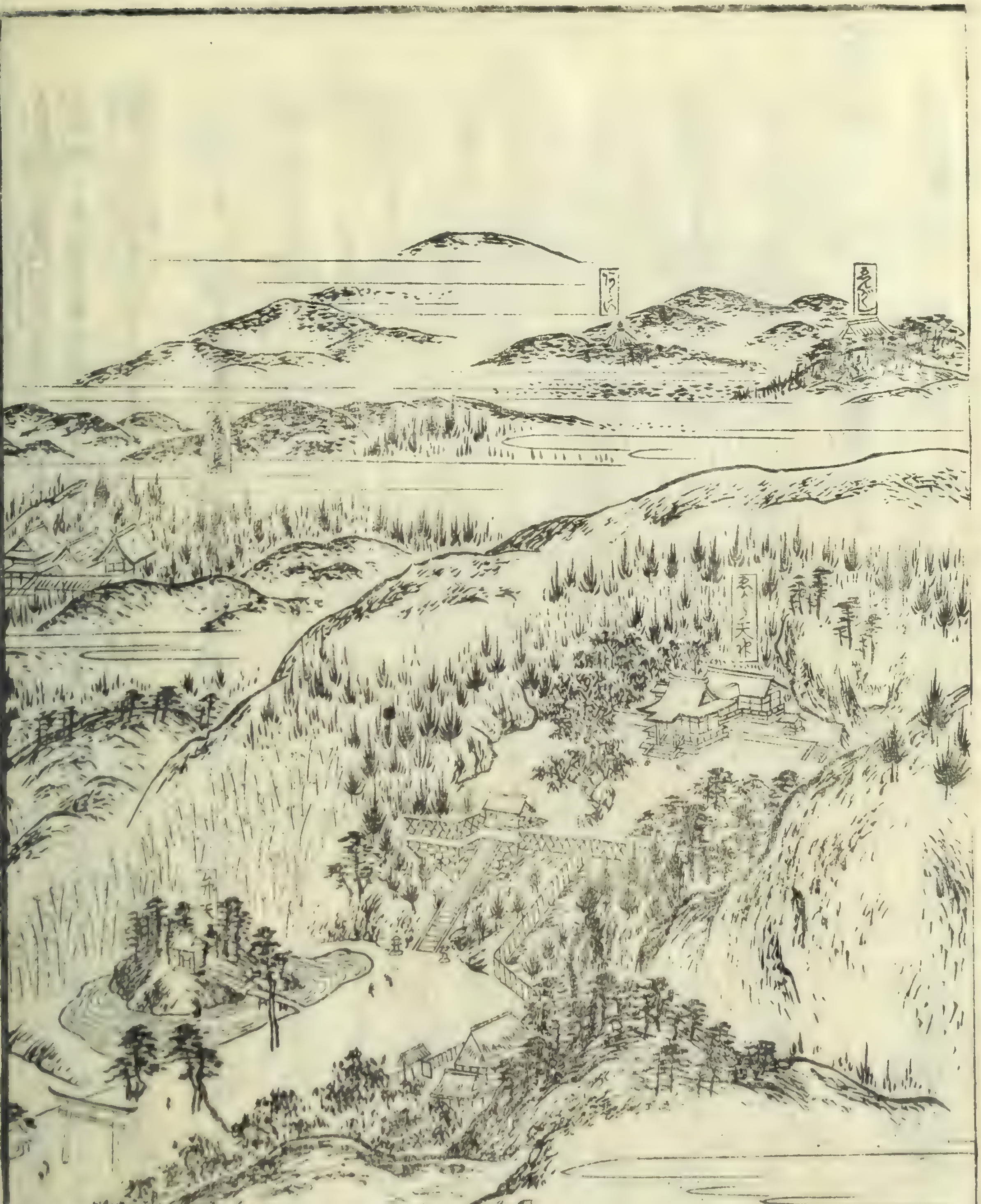

倉田
永勝寺

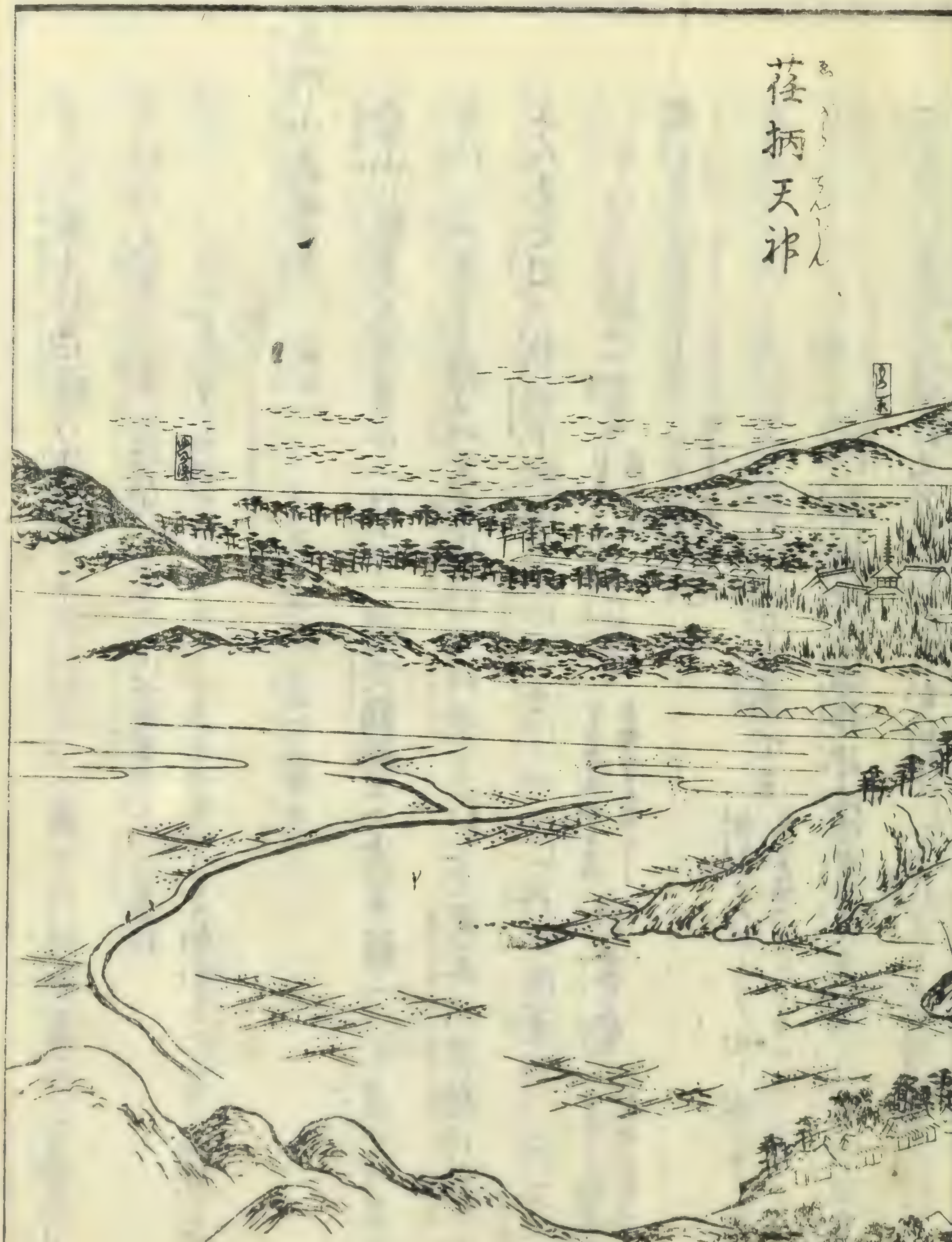

聖人春日ノ明神より七佛の假面を得て全躰を作り給ふ

子息修理亮時氏なりしかども時氏卒去ハ東鑑に寛喜二年六月十八日と記せり聖人御校合の砌ハ天福元年のよしにて時氏卒去より四年の後なれバ泰時の請ひなる事あきらかなり
専ら弘法あらせ給ひしに御帰洛の期到来して即当院を捨て誓海房に附属し給ふ実に於ひて誓海法燈を相承し当寺中興二代にして相続て真宗弘通なしけるとかや ○霊物本尊面影の如来 聖人当寺にありし自斧をとりて弥陀の尊容を作らせ給ふ折から春日明神かりにかたちを現し聖人と礼拝しけるに七体の仮面一箇を捧げ給ふ聖人これを得てすなはち尊像の面をつけ給ひしより伝へてかくハ称しますとかや
聖徳太子尊像 聖人の御自作にしていづれもあらたなる霊像なりしが別にをさまりてありしが中古当寺衰退の折から諸堂大に破壊し雨ありて尊像を浸しけるほどにふしぎやあやしき御声を発し給ひ我を笠ぶせしより是よりここに登りて僧侶これを聞つけてすなはち取あげしにそれよりいそぎ本堂に安置しまゐらせしのちして今に本堂に安置せりとぞ
香木切目の枕 これ聖人一切経御校合の砌武蔵守泰時献じたてまつるところとかや
此外常盤御影と称し聖人御自作の寿像并に御同作七高僧の御影像等当寺の霊宝なりしが故ありて東御本廟へ寄附しまゐらせしとぞ

荏柄天神 同国鎌倉にあり

当菅廟ハ後土御門院長享元年二月廿五日吉田道灌の本郷




荏柄天神

よりて建立せし當社乃神宝ニ高祖聖人十六歳の御時自南無天満大自在

天神乃尊号を書し給ひける處の御真筆を傳来し

○秋田乃一覚薩柄の平たる者も當社のかたハらに邸宅をかまへし恵我氏のごとく

と称せしとなり

五明山最寶寺　西派　同國三浦郡野比村にあり

當山ハ征夷大将軍正二位右大将源頼朝公の御本願にして建久七年草創

ありし名區なり始めハ天台圓頓の浄刹なりしを関東六老僧乃随一明光

上人是を改め我他力念佛の法燈をかゝやかし再び開基たまひし霊場也

○本堂阿弥陀如来　行基菩薩御作　太子堂　太子御自作の尊像なり　諸尊堂　別當なり行基菩薩の御作御衆の薬師大日如来

観音薩埵不動明王等の尊像を安置せり是ハ慈覚大師の

くりし州の備へる所にして月山飯食寺の遠地也

享保乃記ニ當山院の畧縁起を挙て云　明光上人の御事詳に述べたれバ略す　且享保の記ハ當寺の縁起によれるものなれバ

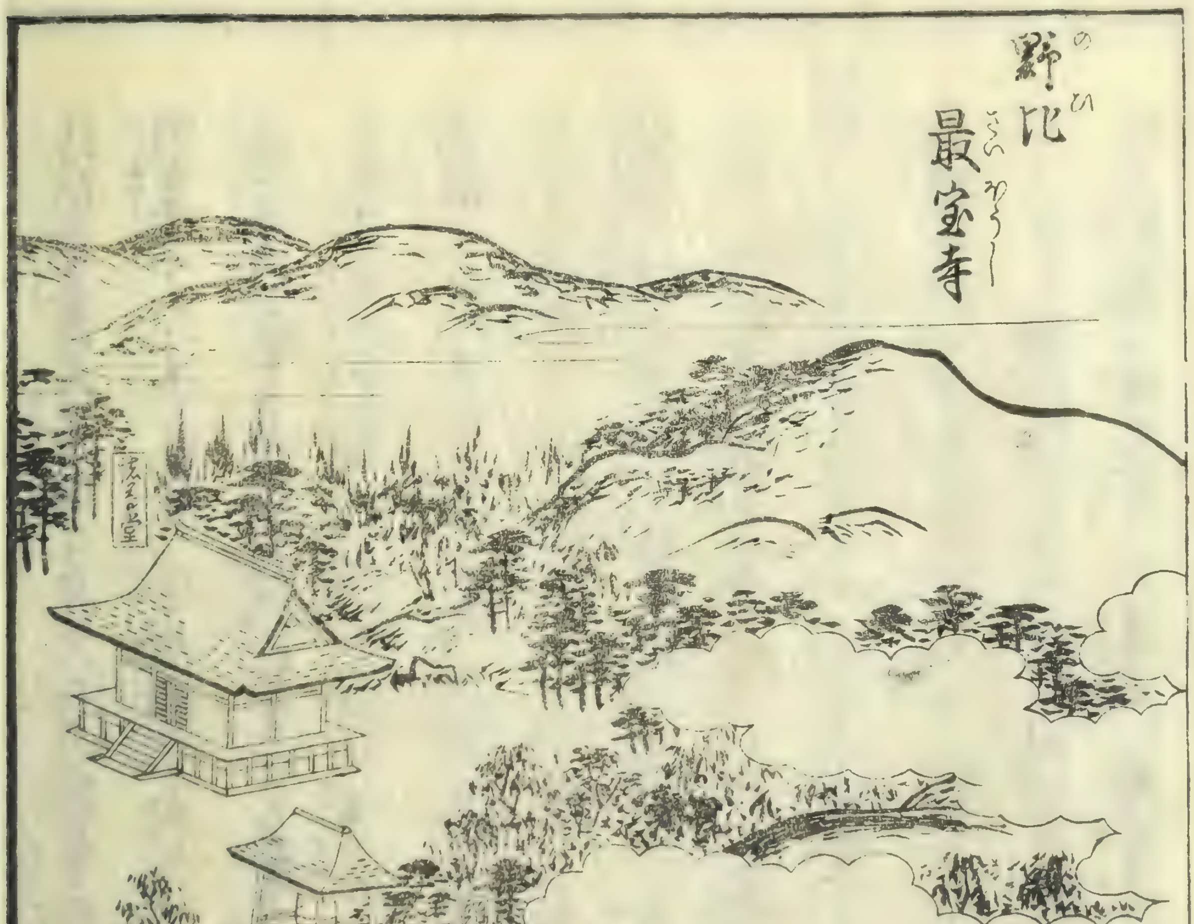
去りしくさまでれを兆とのせ其

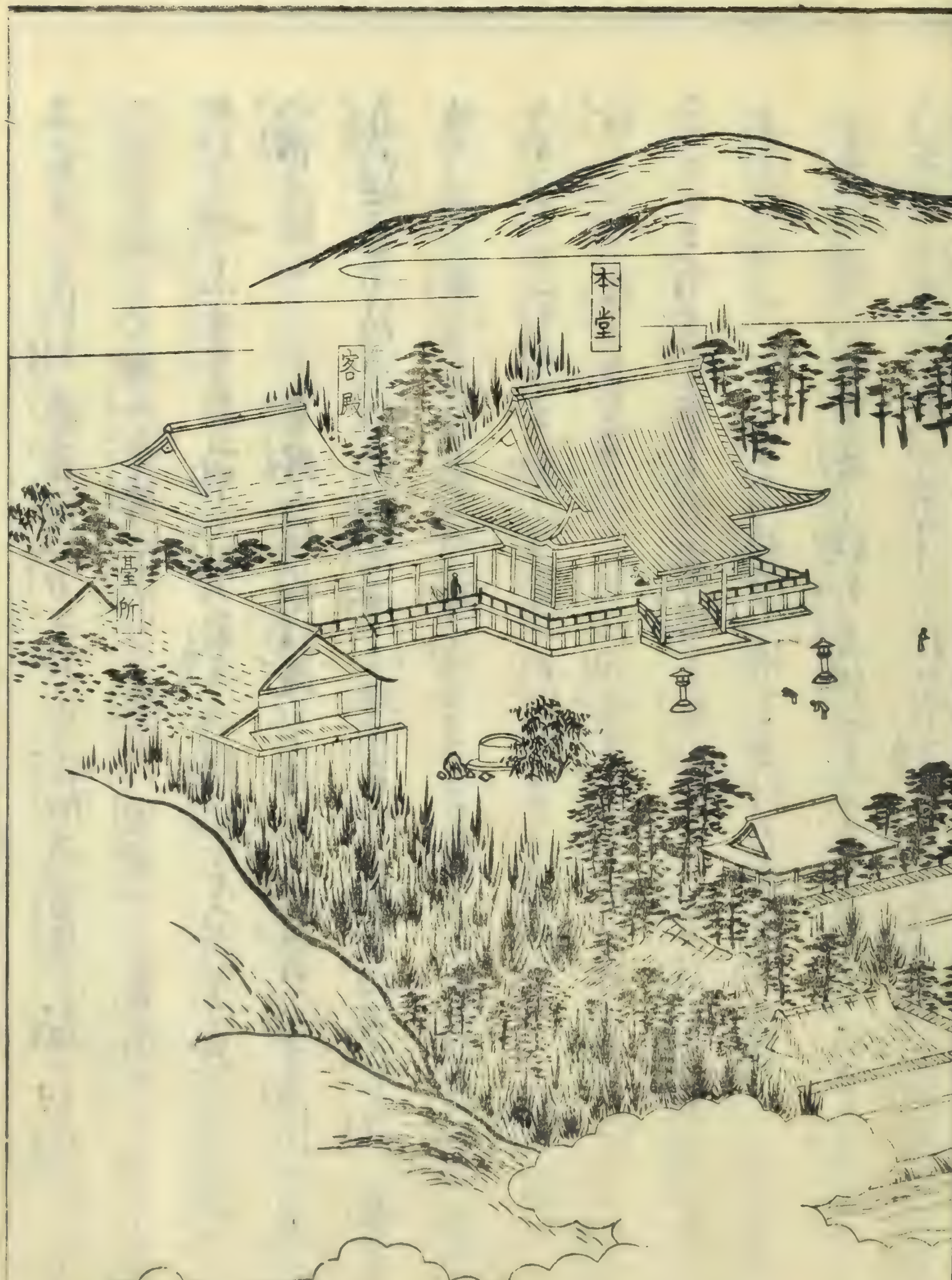
論説ニおよびてハ伝ふる事に在

抑相州三浦郡野比の里高御座五明山最宝寺ハ

征夷大将軍正二位右大将頼朝公の本願として建久七年丙辰草創ならせ

給ひ供養の大導師ハ天台の碩学明光上人をぞ招せられける此上人の
明光上人と申しハ其俗姓藤原氏にして大織冠鎌足大臣の玄孫右大臣
従一位内麿公五代の後胤和泉の国守信濃守季平より六代の孫教盛
の四男也母ハ右馬助源義朝の嫡女にして頼朝公にハ姪なりされバ明光世
原赫々たる武門に生れ高位高官をも望ミ富貴栄花の身ともなるべき
を宿因浅からずして未だ三五の春の花ひらけざるに世の囂塵を厭ひ
恩棄恩入無為の機に投じ我門杣の峯をまけ慈鎮和尚の法窓に
いたり師弟の契をむすびて専学業を修しさるに元来英敏聡明に
して終に円教円融中道実相の真理をきはめ自利の功徳をとゝのへられバ
利他の化益を識んと円明の霞を立出て東関の遠里の旅の空にぞ赴き
たり爰に鎌倉源二位右軍ハ叔姪の好なるうへ明光の碩徳大なるに感じ
給ひ即雑が谷に一宇を建立し御庵山最宝寺と号し都下の高御座にも


野比最宝寺


本堂
客殿
墓所

安置ましまし給ふ地蔵菩薩一刀三禮の先師の霊像を以て本尊とし給ふの
明光を招請して開山祖師となし若干の田園をぞ寄附せらるる事夥し
抑此明光山号を五明と改め数年の化導をぞ施し給ふ然るに高祖聖人
北越にましまして専修念仏を弘通し給ふ法の声日にまして遠く坂
東の地まで聞えしかば明光安からぬ事に思ひ忽ち我慢の心を生じ急ぎ北越
後の国に赴き高祖聖人の禅扉をさし兼て勝負を決し数條の難詰疑問
を入れてたくしかけてぞ挑みける聖人少しもさわぎ給はず一々其が機に教し
給ふ鸞の教に應ずる如く法門無盡に應答し給ふ程にさしも碩学の
きこえある明光も聖人の高徳を計知ず忽ち我慢の角をお
自力難解の法を棄て始めて浄土易往の念仏門に帰入し即御弟子
となりて聖人に常随し敬愛他にこえ寂を経て後世涅槃と呼んで
六老僧の第一とはなりされば明光其後年を経て五明山に皈院

さかんに他力念佛の妙徳を弘通し先よりして台宗に最宝寺一変し終に真宗乃佛閣とはなりにたり後又明光ふたゝび聖人に随従し給荘厳寧に怠らざりしが一日聖人明光に仰てのたまはく我今小識東関乃間にありて本願念佛の法を弘むるにいさゝかまひなし志あれども関西のこれをひろむべき其人を得ざれバ尤心に残し故に今にいたるまで企るに由なし徒に年月を過せり我汝をしりてより其才徳を考るに実に其任に所べよりて佛恩をかへりみて労をいとふなかれ速に彼国にいたつて弘法せよ我本望こゝに満足せりとありけるに明光再三其器におよばざるを辞し他に譲るといへども師命重くして遁るゝに所なく終に西国にぞ赴きけるかくて備後の国山南のほとりに徘徊し終に他力本願の旨趣を勧化なしたり易行直入の法門末世頑愚の衆生に施しやすかりしかば遠国近里乃緇素老若ひとしくに馳集り聞法随喜して法に帰を

なまの一日に百あんて篤ふ宴に抄ひくはじめて彼地に一宇と
開闢しこれを光照寺と号く後に日国源津那掌石の邑
に隠居してこゝに精舎を造立して宝田院と号け弘法教化
をなしたまふこと十有余年真宗無縁の西国なるに今に至
ざるまでさかんに弘まれる旨を聖人これを聞及たまひ
喜悦のあまり自ら明光の肖像を画せしめ且源家が俗姓
の系譜を記して一軸としこれを送り給ふぞ（此二品今に彼寺にとゞまり）時に
明光洛陽にまゐりさらに念仏を弘通するの倦ずして寛元
後堀川院安貞元年丁亥五月中旬第十八日端坐にして往生の
素懐を遂らましければ（行年六十四歳）郎等遺跡に抄ひてこれを荼毘
し遺骨を備後国光照寺に抄さめ廟墙を建造教まをしき
かんなり去あふに今れ世にいて西国遺弟改悔の玄系にて明

光上人出世の恩あるを加へまことに誠に文翁蜀の民に耳目とひらきし功徳に比すべし豈涅槃下らんや明光始め西国に鎮きたる時最宝寺を徒弟明故に譲りて明故より九世の後明心寺勢ありし時寺を今の野比より爰に旧野比の里は鎌倉より寄附の領地なるが故に弟二世明円の乃時寺薬師の霊仏を鑑地より移し一宇を建立してこれを円山飯食寺と号せしが九世明心の代鎌倉の地戦場となり兵革の災ひ甚しかりしが終に大永元巳年雑か谷の最宝寺と彼飯食寺は地より移しとも此地や一方岳に面をむかへて松柏道にそびへ其幽邃なるすと実に勝因を結ぶの佳境より今に十八世の法燈をうけて経るなるべし

○遺跡抄と按ずるに明光上人は相州甘縄に生て甘縄了円に武州

麻布了海師の門弟に列なりのち覚如上人の門侶となりて源二位頼兼
の建立ありし五明山を真宗の道場となせり五明山とは扇が谷の最宝寺
のむかしの扇の縁によりて五明山とは号す正和元年二十一歳にして佛光
寺六世の寺務を受く其後覚如上人の命によりて佛光寺を室町
源に附属し元應二年三十歳にして西国に趣き後備後国山南の地に光照
寺を建立し又正慶の比同国常石に宝田院を造記し化導せらる十余
年覚如上人大に歎び給ひ自ら明光の像を画き及ひ系譜を記して明
光にあたへ給ふ又彼地に於ひて法華宗と宗論の砌なれば覚上人是を諒して
額同宗紙隠せしめ又後続に洛陽より入る此所なる覚上人源が寂室に任せ
明名抄を記し与へ給へり文和二年仲夏十六日年附入寂し行年六十八
歳なる辺地に葬し遺骨を備後光照寺に収むなほ西国へ続く心登
し寺と後弟明故に譲りて其後九世明心の時るを法ようとよ○附翼
に享保の比乃住持なるを論し諸書を引記せる衆遺跡孫に移旧
仏し入寂の地は佛光寺の実録を引て備後より佛光寺へ降り佛光寺
に於ひて寂にとて彼是異説何まうるやるもや蓋遺跡孫及び附翼よい
各引説の書れをし公れがこれをや正説とせんか当後の識者を待のみ

○霊宝 聖人真筆十字名号 勅書綸旨征夷将軍家朱印

御宸翰古筆墨跡等什物数多あれど先を畧す

龍臥山菩提寺　東流　同国渝綾郡大鐵鎮高藤寺山下村にあり

花水院と号す関東六老僧第二平塚入道了源房の開基なり

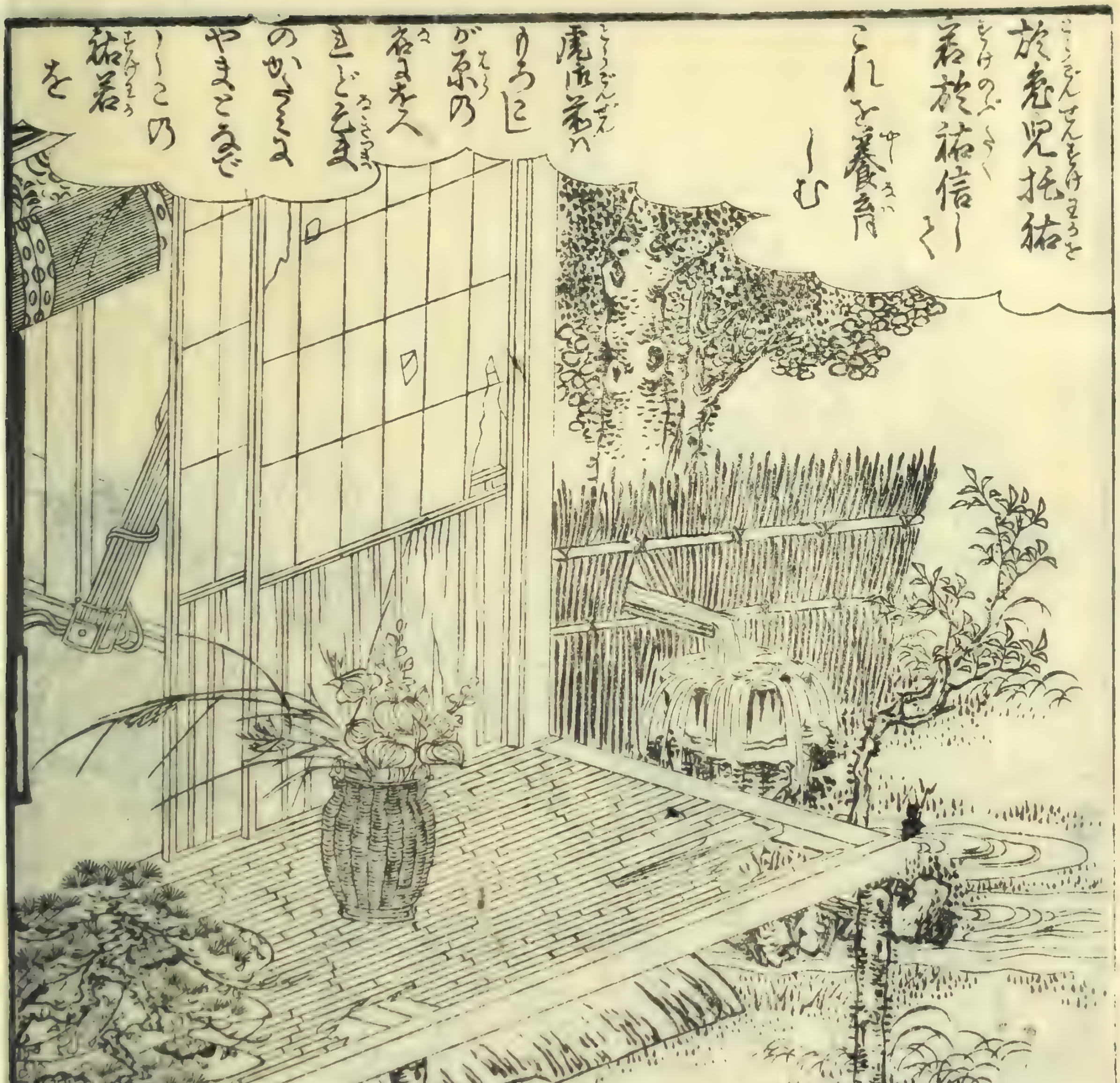
○本堂本尊阿弥陀如来 聖人御自作 恵心なるよしふ 並に高祖聖人御自作肖像を安置す

了源房俗姓は藤原氏にして鎌子内大臣より十六代の後胤伊豆大領主光孫右ま維職より五代の孫曽我十郎祐成が異腹の子なりされば祐成は舎弟五郎時宗と倶に不戴天の讐工藤左衛門尉祐経を富士の狩場にねらひて討おふせ其弟も続て刀下の霜と消しかど名は万歳に遺しぬ[illegible]この了源は祐成が妾大磯の名妓虎といへる女が胎内にありて[illegible]迄て後降誕せり初名を祐若と称し継祖父曽我祐信に



山下善福寺


丸山


於是冤児托祐若於祐信しく
これを養育しむ
虎石若ハ
りうに
が原の
右まさ人
まどろま
のかくくよ
やまとうぞ
しこの
祐若
を


二たび
世に
出世し
けり
和漢に
まれ
なる
貞婦
とや
いふべし

出けり其後程經て和田三浦の一黨謀叛せし時初めて大に武功を顯はせしかバ平義時吹挙によつて終に大樹實朝公の褒賞に預り當國平塚の邑を宛行ハれ河津三郎信之とぞ呼しける時に行年二十一歳是よりして専ら忠義を勵ミ再家名を興しけり然るに信之つら〳〵往事を思慮するに又祖三世ともに天年を盡さずして終れり曾祖父伊東入道寂心ハ頼朝公の疑ひをうけ誅罰せられ祖父河津三郎祐親ハ工藤祐經が為に討れ實父曾我十郎祐成伯父五郎時宗もともに復讐の志懐を遂るといへども同じく刀下の鬼となり皆是非業の死なれバ冤魂修羅の悪趣に沈ミ更に浮む瀬あるべからずたとひ我今絶たる家名を興し再び祖の名を顯はすとはいへ先祖先考現世夢中の非業なり未来冥福のためには武門の身なれバ

却て罪に罪をかさね苦をのみ受るの理り知べし如何
なる善根をも修しなば菩提の道にも向ひて彼業果を滅
すべしと頻に浮世のみをいとひ偏に人間の業をたえることにて
ぞ嘗しなるが爰に元仁甲申の年執權平義時朝臣卒去
を吹挙せり信なくこれによりて忽厭離の心を発し終に薙髪染衣
の身となり自ら平塚の了源と改号しところとましてなる
が宿善ふかくも發起しけるにや高祖聖人當國鎌倉に往返し
國府津にいましけるを聞て夜更に禪室に詣で聖人を頂
禮しまつり日比の素志を委くのべ涙とともに慈教を請し
拜謁しませしとぞ觀ひける聖人いとゞ不便のことに思召弥陀超世
の本願他力念佛の旨趣を説せ給ひ十惡の罪人五逆の悪業
猶之も不可思議の悲願を信じ稱名念佛の正業を修すべし

む永く生死無窮の迷ひをまぬがれ速に清浄安楽の佛土に往生を况や我有縁の親属いかなる業報を受るとも其次順次の往生を遂るならば自在神通の大悲力をもつてまづ化益を施しはく浄土に引接しとかく快楽無窮のさとりを開くべしとさしも細やかに勧化あらせ給ひしかば了源随喜の涙にむせび渇仰の心せちなれば師弟の礼おごそかにして是より常随給仕怠りなく其実をぞ盡しける其後文暦元年聖人御帰洛の折から了源離別の名残を惜み切なりしかば聖人も其真心をあはれと思召自ら親像を彫刻ましましてこれを附与し竟に京師に帰らせ給ふ爰におひて了源花水の邑宿河原の園をうけて我師御影の遺跡なりと云とて則此地に一宇造立し普福寺と号し専真宗を弘通し遍く群生を利益すること多年にして建長三年辛亥年三月十二日午の正中寺

にかひ〻往生の素懐をぞ遂られけり 行年六十歳 依て按ずるに高祖聖
人自書し給ひし源の往生を称嘆ましく関東の諸弟に示し給ふ
末燈鈔に これなん呼嗚乎源武門の家に生れて再び父祖の家を出し
芳名を後に海に施し終に菩提の彼に入ては他力易行の本願に帰し
聖人の賞誉を蒙りたるもの実に二世悉地の達人と謂べし
○當山境内古跡遺物 東街道平塚より大磯の間なる薬寺山下にあり ○宿河原長者屋敷 是虎御前の住なる大磯の長が館の跡也
唐が原 古き名なり多く唐土の舟によせくるより
月の本より月かげを入てあさぢりしかみしが原 冷泉為則
龍臥山巌窟 高さ八間横十三間あり 中に仏像あり ○虎御前像 法名了正比丘尼 ○虎が涙石 林羅山詩に 十郎
気武人犀甲 纏妾婦窟附 憶慨愛泣兜面 哀此石似二思一 ○五郎時宗が力石 其外弘法大師御作 石地蔵
諏訪明神の祠等あり 都て此辺古跡多し 大磯小磯こゆるぎの磯ふさ
皆頗名所なり
鴫立沢 大磯の町はづれにあり

世傳にむかし聖人此所に来りせ給ひ西行が無心樺の風流おもひ出られ
玉ひ彼シギとは即鴫本と書て卒都婆のかたなれば此沢邊やむかしは
人を葬埋せし所にてありけめと宣ひて
「是よりてこれが楽しきさまをかり鴫本立沢の露と書人へが
かく詠じ給ひしとぞや

新古今
心なき身にもあはれはしられけり鴫立沢の秋の夕ぐれ　西行上人

むかしへより傳ふる名所にはあらじ此歌によりて名付しなり今はかたちなる庵を
出来りく彼上人のあはれを訪ふて家に杖をとる騒人詞客の歌に詩にさかしくの
其の筆をとゞめぐしくらせぬ世にもありけるとあれなりそが中に飛鳥井雅章卿の
よまざくあり。中山のこゝろ鴫立沢より是より行て
「義まされ秋なり給ひも去りし是なり鴫立沢のむかし尋ねて

勧堂
旧國足柄下郡國府津町東の入口にあり
高祖聖人当國倉田永勝寺に在ひて化益したまひし砌此所に

草菴をむすび志ばらく往返し群民を御化益まし〳〵ける芳跡也

これによりて世俗称して御とゞめ堂といふ

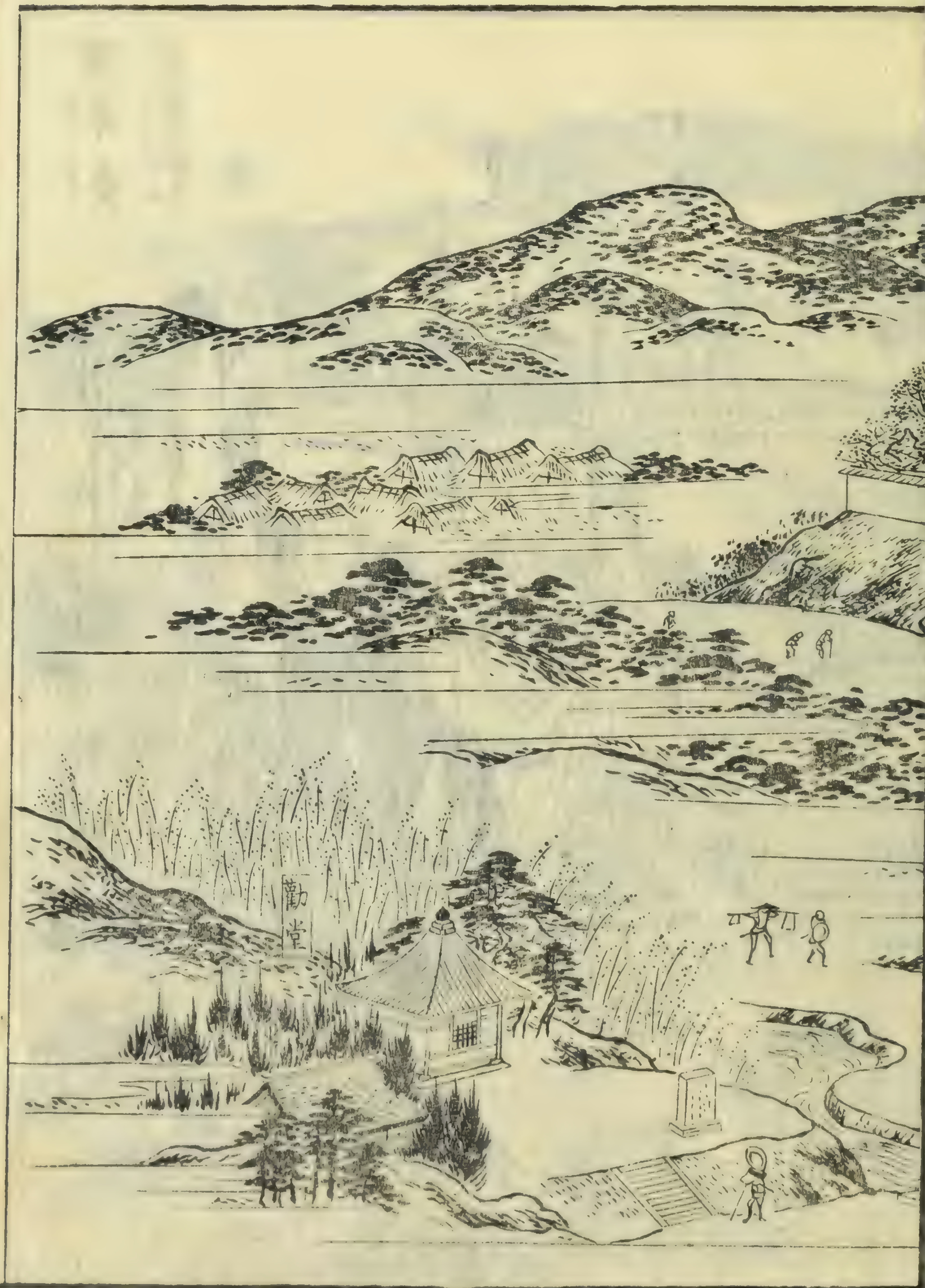
○本尊阿弥陀如来 下河辺行光が舎なりける所なり行光ハ聖人御在世にまうでし帰依の人なりとぞ

勧山信楽寺　東派　同国同郡にあり

信楽院と号す高祖聖人当国御化導の旧趾なり○本堂　本尊阿弥陀如来　聖人御自作

当初安貞二年聖人御年五十六歳常州稲田の郷にまし〳〵ける比時々当寺に往返まし〳〵給ひ専ら勧化利益にのゝせ給ひしが貞永元年秋八月御帰洛のおりし当寺を属させ給ふに兼て利生を蒙り恩徳を慕ふ道俗の族こゝに蟻集かしこに麕至渇仰の思ひしくかくて錫をとゞめまいらせしかば聖人慈悲の御心には衆心の恋慕もだしがたくやおぼしけん即当院に御淹留まし〳〵さらに御化


國府津勧堂
同 信楽寺
信楽寺


勸堂



帰命堂名号石之図



益なくし世給ひしが終に御年六十二歳文暦元年中秋の比ふたゝび
玉趾をとゞめ給ひ京師にそまで登らせ給ふ今に至て國府津
七年の御在住と称して最も尊き御遺跡にこそ

○國府津七年の御在住といふは聖人いまだ稲田にましまして當國往
返し給ふをはじめ貞応二年より文暦元年までを通ひ給ふすべて
七年とはいへるなり享保の記には貞永元年御帰洛の砌より七
ヶ年といへる書にも見へたり是大なる誤りなり聖人御帰洛
御発足は御年六十歳貞永元年なり其は年此地よりうつりて給ひ
六十一歳天福元年鎌倉にて蔵経を校合なし給ひ其後の年
文暦元年を経て洛嘉禎元年六十三歳までそ三州尾州濃州を
化益なし給ひ其後より江州木部に移り給ひて其年秋八月入洛は
つくり犹是を見し貞永元年より七ヶ年の間といへど聖人の御
年は六十六歳にして暦仁元年ならでは御入洛ならせ給はざるを
七年の暦といひ御法臘といひ三年の相違ありこれそのあやまり
なる事を知るゆゑんなり或は曰聖人在住して教化行はせましゝ所は
彼勧堂これなりと云々

○帰命堂名号石　佛殿の前さがりにあり石のたかさ七尺横三尺二寸面なめらかにして鏡のごとし抑この名号石と申すは聖人當寺に御淹留の折から執権北條武蔵守泰時の請に應じしばらく鎌倉に逗ひ給ひしが一日泰時来て申さく此里にあやしき石ありけり是異國より一切經をわたせし時船底にありし石なりとぞ承りし此石附としていと己とふるひ動きて響の數を出せりこの由人々諸人大に怪しみ是いかなる石にてやありつべき聖人なる徳にましまさばそれをもて愛にあらはれこれを告とぞ中にも愛におひらく聖人とりあへず彼石を見たまひ筆に筆をとりて石面に十字八字の名号と書写し給ひければ是天竺石なり此後奇特あるべしとのたまひしが果して怪異は止にけりなると其後覚如上人御巡國の砌この石の名号を稱讃ましましくまるは庵の服へ右志有為境空影光門弟一向専修念佛者なる右の服へ建武元年十一月十二日於心敬白と両行に書添加し給へり然るに中古真乗といへる僧侶の時平ノ氏網當流をも忌悪んで享禄の末年終に真乗を擯出し其時此名号石をも土中に埋まておきけるが又其後平ノ氏康國を領せし時真乗再帰院して住持しけるによりて今にをかわりて退轉なしとかや享保の記には大宋國より託經をまうせし時船底に一ツの一石あり聖人これを見給ひ是即梵石なりとて指されそ十字八字の名号を書し給ひしに文字皆凹入て彫るがごとしと云傳記の異説いづれか是なるやしらず

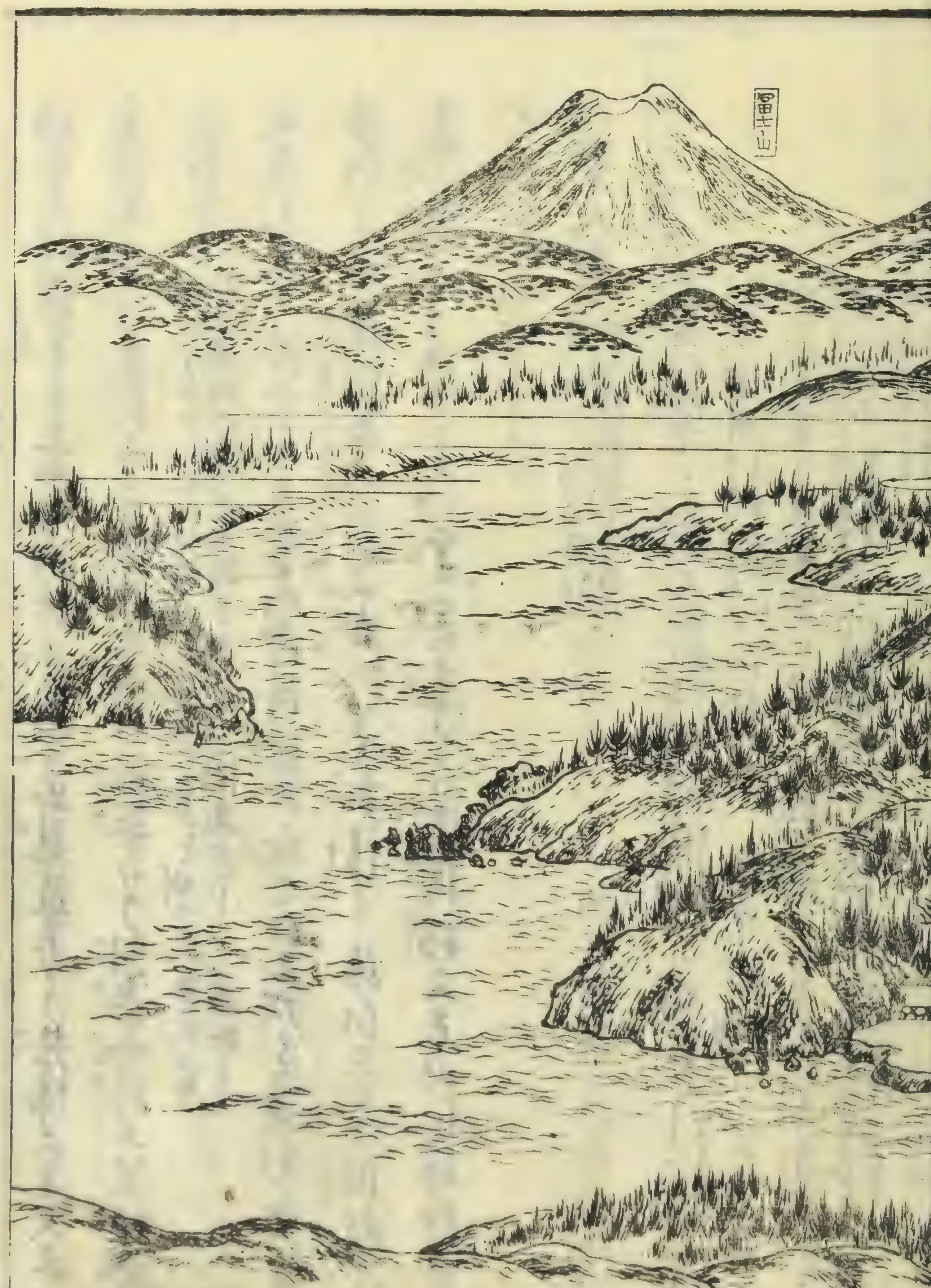
河津若福寺　西流　同國同郡保下村にあり

當寺の元祖は河津三郎信之入道了源房なり　来由山下若福寺の記に云がごとし

○本堂に壇了源房自作の肖像を安ず

箱根太權現　同國箱根山にあり


箱根山
權現祠
聖人堂
上人堂
箱根權現


富士山

當社大權現と祭る所の御神彦火々出見尊なり孝謙天皇天平寶字年中の草創にして萬巻上人の開基より別當金剛王院坊舎六區あり

當社寶物に三尺余小鍛冶宗近友切丸の太刀を初めとし曾我五郎時宗携へし遺物書簡等あり古き遺構寶とする其物なり

文暦元年八月十七日聖人御歸洛の砌この山坂を通行ありし給ひける時權現巫の翁に命じて招請し給ひ三日が間[illegible]て御饗應ありけるとぞや事實委くは御傳鈔にしるし給ひ世のよく知る所なり

○聖人堂　聖人六十二歳の御時の御自作の肖像を安置せり

○當國の名産・秦野大根 [illegible]にて生ずる種を蒔付して自然と生ずるとぞや・嵐大こん かまくら辺より出る[illegible]に似たり・柴胡 かまくら柴胡ともいふ上品なり・紅花 かまくらより出る・海老 世に鎌倉ゑびといふ・江の嶋[illegible]・小田原海苔・[illegible]・[illegible]・[illegible]漬梅・小田原外郎透頂香・盆山發石 大いそより出る五色の石なり・川村材木・十國坂[illegible] 玉の中に[illegible]あり・[illegible]石 [illegible]布川より出る

甲斐國

按るに當國は東に大目西に白嶺南に士峯北に金峯四方をめぐりて嶮嶽そびへ其中に冨士馬入の両水源を發したまりこの中へに峡と名づく峡とは川をはしたさきて両方に峙き山のならびたる形をいふ字なり山のかひ山のそはなとゝも云ひ皆同じ白ねをかひが称とらへすての山はつまりなるくそれぞれねとは國の名の標にや呼るらしん

阿弥陀街道御舊跡　都留郡内阿弥陀海道にあり

此所は聖人嘗て暫く居住ありし給ひける阿弥陀堂の墟趾也（先達暦二年御淨治の事なるべし）

傳へ云く昔此所に川の淵あり（篠子缽さて村にあり谷川是なりこ川と云）久しく大蛇潜く人民を悩しけるに聖人當國御經歴の折から是をあはれと思召し即山上より崩落る岩石を集め悉く六字の名號を書寫し彼淵に投入給ひしかば大蛇は忽ち抜苦与楽の果を得て天人の姿を現じ虚空に凌ぎうせにけり是よりして彼淵も埋てなく里民歡ぶ事かぎりなし其後年を經るに隨ひ

淵は瀬となり瀬は陸となりて終に平地となりしが彼名号の岩石砂ひろひ集め其跡に一堆の塚を築て念佛塚と号し御旧跡をのこしたる　同郡真木村にあり 当寺の支配なり

○同郡内野村医王山一蓮天台禅寺安養教院といへるあり当院の本尊三ノ面の阿弥陀如来脇立十字名号并光明品六字名号等ありて高祖聖人御真筆なりといふ

正永山善福寺　東流　同国同郡真木村にあり

当山は聖人御由緒の地又篠子川念佛塚は当寺より支配といふ

真木山福正寺　西流　同国同郡同村にあり

当寺も又御由緒の地なりといふ○霊宝川越の名号 紙にかゝれたる名号なりといふ むかし聖人当所御経[illegible]

聖人初篠子河原のかたわらなる阿弥陀堂にましまして群民を御勧化ありし[illegible]

しかるに何某といへる者に権太郎といふ去民あり此比聖人の御利益にあづかり歓喜渇仰しまいらせ

け[illegible]聖人の御もとに参りし御名号を乞ひまゐらせんとて三尺あまりの白布を携へ急ぎ彼阿弥陀堂

へ来てけるが折ふし御教化の最中なれば御安地はいふまでもなく篠子河原にはまた[illegible]

ぶれともあまたに群集する地なればさらに御側へよるべきやうもなし[illegible]

よりて権太郎がおもふ白布を投入れて終に聖人へかくと申上る即六字の名号をあそばし[illegible]

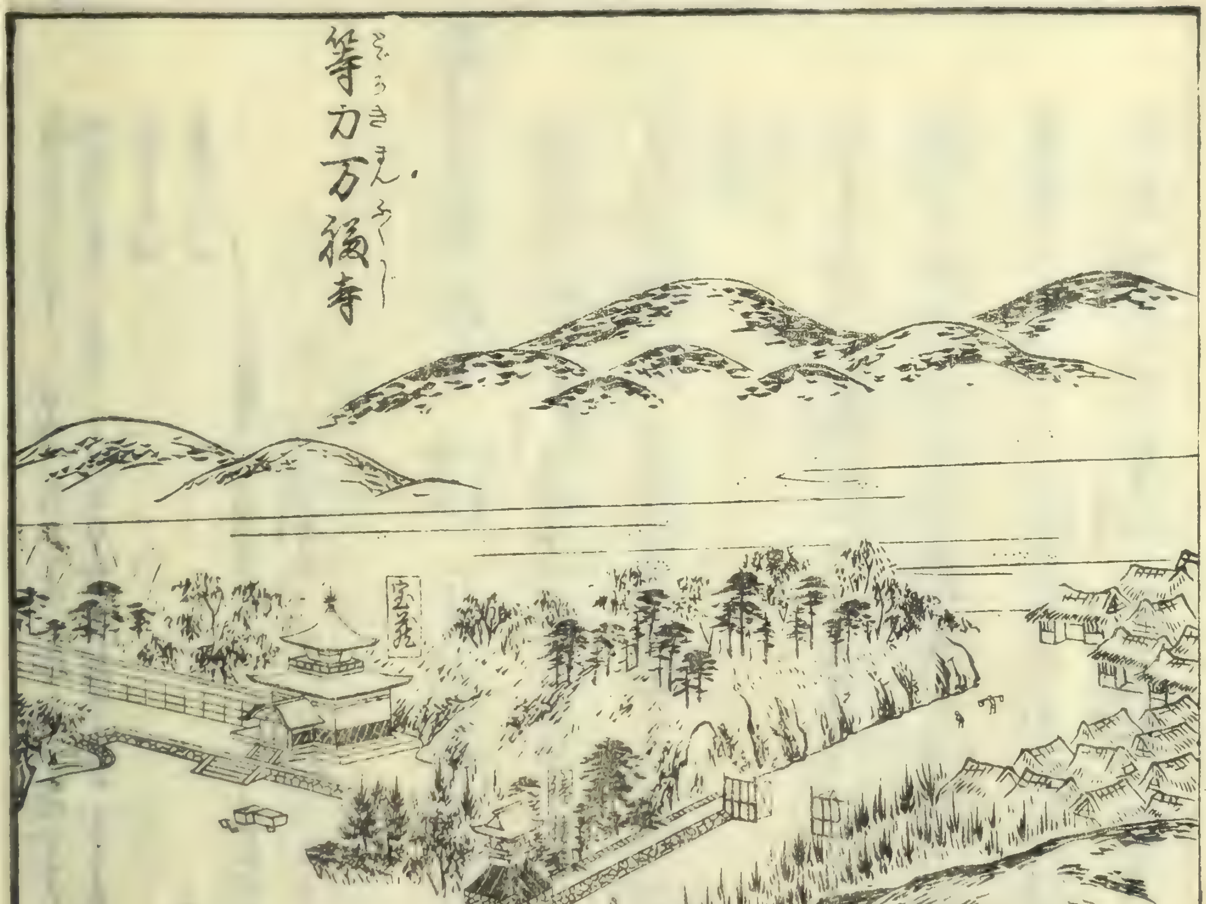
錢ひろひのごとくなぞりて下されしかば他之方郎ハ涙をながし恩徳をふかく歎びけるとなんされど川越にて拾ひたりといへるをもて川越の名号ともまたひろひ名号ともいふなり其後あまたに
當寺に傳ふ
來れりと云云

○當寺より北里ばかり行かたに吉田郡新田村に福源寺といへる寺ありこれも同じ
聖人御歩行のついで止宿の地なりとぞ

等力山萬福寺 西派 院家 同國山梨郡等力村にあり

於の御坊と稱し東國七箇の大寺の其一なり六老僧第一の真宗歸依釋源誓法師の開基なり○本尊阿彌陀如來 聖徳太子御作

夫當山の濫觴るや其靈異なる他に超えるものなり今窃にこれを考るに佛法最初弘通の上宮豐聰王 聖徳太子の御名也 御遊戯の勝地にして御愛馬甲斐の黒駒を出せるの名區なりされば往昔聖徳太子彼甲斐の黒駒に跨り給ひ神通を得て空中を飛翔し三日が間に諸國を經歴なし給ひしに



等力万福寺（とゞろきまんふくじ）
門


本堂
墓所
ちろん松
太子堂

此地に於て沓をとゞめ空中より降らせ給へば黒駒即ち当山の巌上に立てり（今に寺内に馬蹄石あり）時に皇子侍従調子丸に謂て曰く今より五百歳の後我後身此土に来て弥陀の本願を弘通せしむべし誠にこれ化益因縁合成の地なりと勅ましましてふたゝび飛行し去給ふとかりしより星霜積て延暦の比道忠法師皇子降臨の地なる事を伝へきゝて始めて此地に一宇を造立して万福寺と号し法宗の宗風を仰ぎしが元久の比に及んで源誓法師（遠蹤源誓は覚如上人の御弟子にて三世なり時に聖人の御弟子となりて覚真法師と云ふ是明石の明）寺務として天台円融の道場となせり寛に建暦二年高祖親鸞聖人　勅免を蒙らせ給ひ御帰洛の折から上野小倉山に於て智明房聖人に謁し奉り法統上人御遷化ましましを告まいらせしかば聖人悲歎にたえさせ給ひ今はいそぐ就かれたく即御帰洛止り給ひ更に東国化益の事を思召しける

然るに因縁の到来するやありけん此も当国に来らせ給ひ往々の結縁に陸
りく化益を施し経歴し給ふに一日この等力郷に到り給ひ微方所を
と宿りを求めさせ給ひしが但有叢林の中に一宇の梵刹当福寺是なり見えしか
ば即彼所に至りて投宿し給ひけるに住僧源哲元より国学者なりの
為せしものなりしが自法堅深の我情を逞ふし一対に聖人を挫んと国記
三乗の奥旨をふるひ乗分に難問を発せしかば聖人これに対して和顔
一実絶対待妙の法をもて臨機應変恰も環の端なきがごとく説かせ給へば
さしもの源哲終に広大無辺の高徳をたふとみ然れど足踏をたどらで
らして忽ち我慢の幢を倒し帰法屈伏し竟に御弟子となり剃髪加へりけり
寂に於ひて高祖当寺に数日御滞留ましく諸方に教化ほどこし給ふに源哲
日々に随從し聞法刹益数度なりしかば終に真宗の淵源をきはめ
歓喜踊躍して遂に念仏の信者とぞなりにけり既にして聖人更に他

邪に移らんとて其催を促し給へば源誓やがて浄業を調へ御出立
乃御膳をとゝのへまゐらするに聖人即喫しおはらせ給ひ二條の枝箸を
立て是れ俵なる地に挿て誓てのたまはく我きく如来大悲の加護ある霊
枯る木にも花咲といへりされば凡夫の往生もまたかくのごとくなる
遂しに源誓の門葉一派居てぞ要路みさるにても権者の奇特いちじるくいま
だ幾日を経ざるに彼箸漸に根芽を生じいらじら大木となりなるは不
思議なんども無かりなりかりし程に源誓此二本を守る事尚聖人を
敬るごとく日夜心を盡させる法勤かぎりなかるにや源誓既に入寂有
て其後年ふりれ春秋をかさね慶長二年の事なりしに民屋より失火
して此二株の枝の樹ようつりよなる鳥の巣にをよひて霊木
忽ち焼失んとせし時源誓自作の小肖像仏室より飛出
中にはに彼木に攀のぼり両手をあげて悉く是をうち拂

絡ひしとかん爰をもて世に當院を枚の御坊とは稱しける
○靈佛 聖徳太子御自作ゑる像 太子まに安じ太子自ら髪を剃切てゑる像の胎中に納め玉ふとぞ 調子丸及び黒駒の像并に御馬具等 ○馬蹄石 寺内にあり太子登嶺の時黒駒此石の上に止りし其跡 ○御箸杖 寺内にあり彼太子の附より一株は枯ちりとかや
のとき折けし箸ひし杖をゆびに挿け跡あり誠や聖徳太子の遠き滅後かくんど凡百年の星霜を經るといへども尚かくのごとし豈木像靈ならしといはんや仰ぐべし ○源誓房自作の肖像 本堂の傍に安置

等力山萬福寺 東派 同國同郡栗原村にあり
等力村にある家と同寺同系にして源誓法師の開基なり○什物 記念の御影 法然上人の御真筆之中央に源誓の六字の名号右の脇に御自影及安元年とあり左の脇に聖人の御影及安居信とあり是まるのから御流罪の御時空師より聖師へおくられし御紛なる御影なり

御堂光澤寺 東派 御坊 同國同郡府中村にあり
仙龍山と号す此當寺は相州倉田長延寺の引地也 長延寺とは永勝寺の古名にて寺號を今長


甲府光澤寺


本堂
寺中

迦寺と号す
ほとりや

○本堂十一間四面　一切経堂及び僧坊七區あり

○当国名産・郡内紬（都留郡内より織出す）・白絹・白紙・白蠟・小梅
姫胡桃・荏油・柳下毛氈・蒟・葡萄・梨子　岩淵村岩倚村等より出る砥石あり

駿河国

風土記に云　旧事記に珠流河と書す　前は潤流河とも書す　郡に駿河といふあり　流るゝ国の名となりしやさだかならず　按るに和銅六年五月の詔に畿内七道諸国郡郷の名好字を着よとあり　されば当国東に富士川西に安部川遠江堺に大井川あり　これは珠流河といふべきを前の語によりて駿河の二字をば定めしか　猶後の考を待しことなるとこの類を略して尽とは用ひざるなり

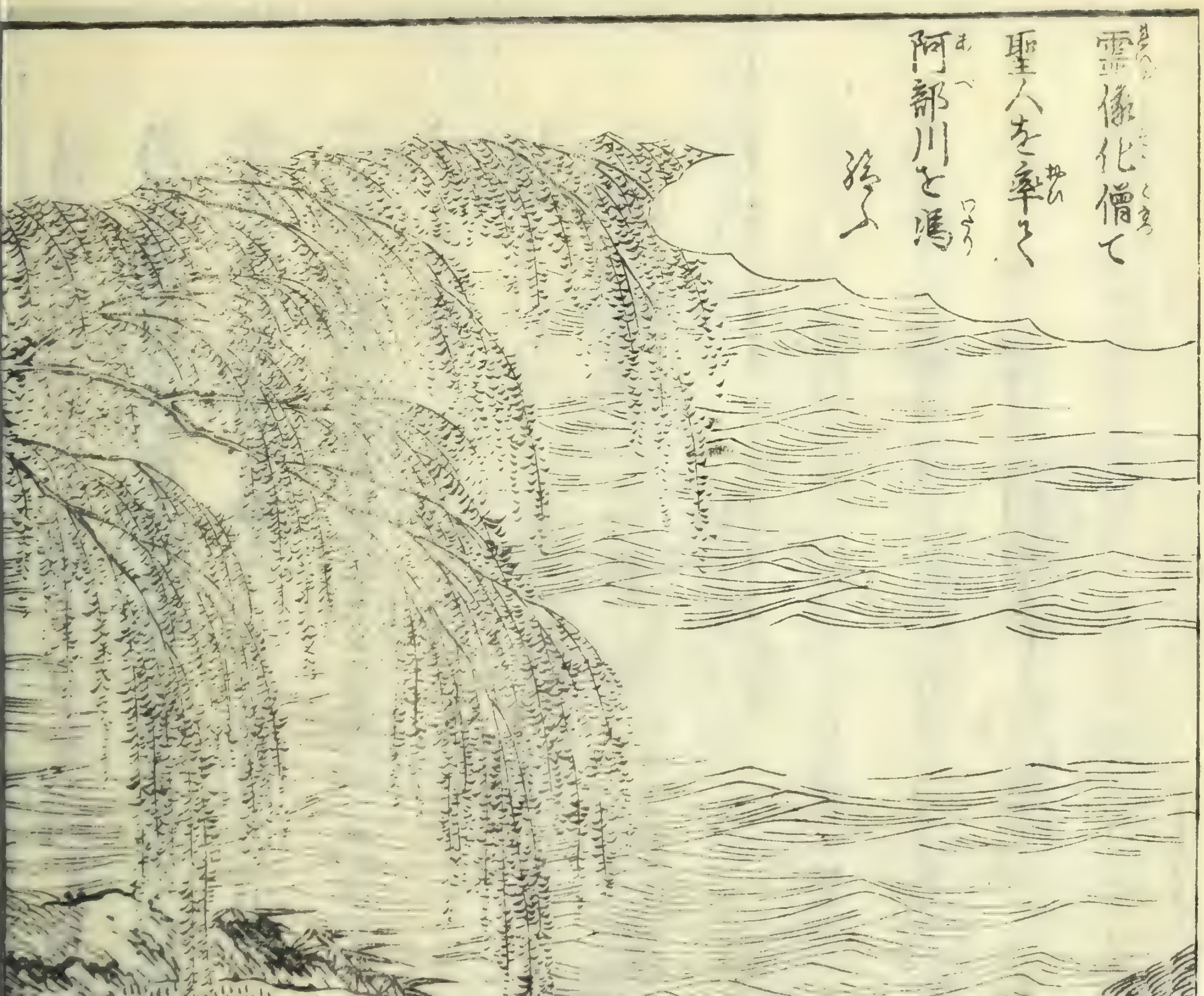
○当国府中に教学寺といふあり　これ聖人御由緒の寺なりとぞ

富士郡にあり東海道の駅路なり

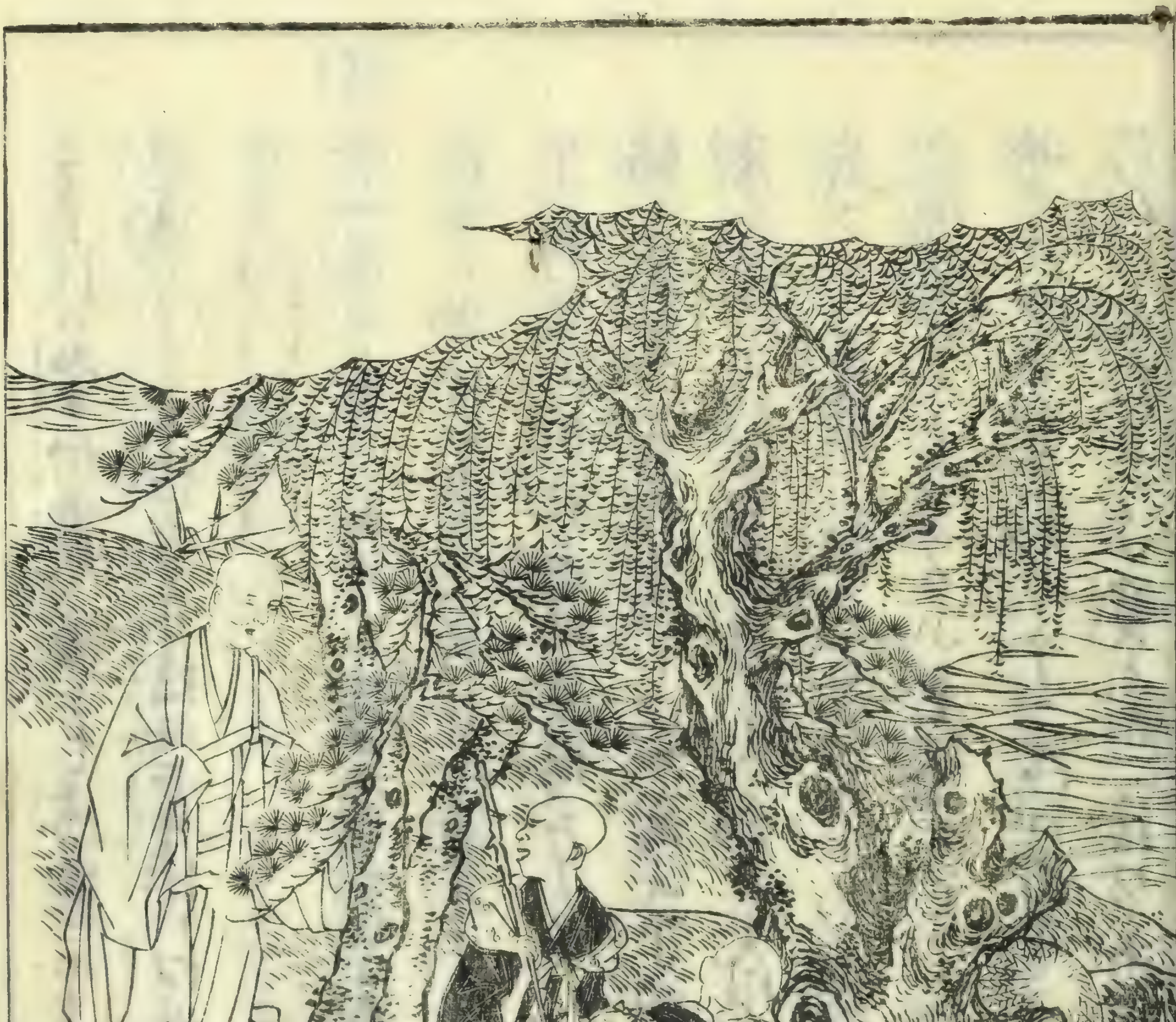
阿部川

水源は阿陪郡の内より流れ来り末は海に入る　東に富士川ありて西は大井川に隣れり　是東海道の駅亭なり　往昔文暦元年秋八月高祖聖人御帰洛の折から此川辺に立て見せ給ふに　滚々たる長流満水山岸を浸してなびかれず　舟楫あり

ともし豈たやすく渡ることを得んや然るをいかんや助る事のと
乃ハ唯黎杖草鞋のミなるをや爰においていかんともすべき
せうなく筏をおもひして暫く憩させ給ひたるに御後より
一人の僧忽然として出来り聖人に向ひ此川の浅瀬我よ
よく志りいざさせ給へと御手をとり先に立て行程に聖人
何事ともなく是に随ひ渡らせ給ふに不思議や甚深く
て恰も陸地をあゆむがごとし軈て西岸に着給ひしにかの僧
即飄然として筏の中に入よと見へしが終に其行方をしらず
聖人奇異の思ひをなしれど直に筏を開きて見給ふに筏仏の
尊像御腰より下ハひさとみるに濡おはしましたる頂に感て
今の御僧ハこれ如来にてはしましたるぞやと感涙数行
志て戴頭の稱号をぞ唱へさせ給ひたるとかんすく此尊像



霊像化僧て
聖人を率て
阿部川を渡
給ふ



とかれハ常州霞が浦まて感徳あらせ給ひし夲の霊験不可
思議なるゐる像なり後此霊像ハ江州東部村錦織寺に安置
せり　委しくハ錦織寺の条下に記せり

熊谷山蓮生寺　東流　同国蒲原郡茂枝にあり

当寺ハ世にしる所の熊谷入道蓮生法師止宿の古跡にして
宗祖聖人御化益の霊場なり
偖も蓮生法師たまたま本国より下向せんとて此茂枝の宿に
来られしに折節路用に事欠てせんかたなく家居たづね
数さし富饒したる者のありしまゝみづから内に入料を貰
文備用せんとありけるに主驚きて中々そも何国の御僧にて
抑これ中々見知りゐ中さまハ御望に随ひかへし備ゐがら主従
の代の那たまはり賃を給ひ路用に中足に給しにあるに蓮生

善人とて我れ一夜一鉢の負債あれバ一物も帯る事なしといへど
家にひとり子にもかへざる宝ありさし合しけるおりなれバ我に
示よ帰んがはこれを足に取け並べしいさ口を開ひてうけ
見らきよとやさ遣しかバ是いよく驚きこれ真ぐる御僧かゝる
賀物なしがゆにこそ渡し給ふ爰ゆに口と開きて請ましとは
我れを嘲弄し給ふやと蓮生いやとよ海がいかれ朝暮の物
なり我世思ハ世にめづらしき物まで申しく手にて見べき思に恥ぢ
とく口をひらく遣しと再三申さるゝにも足も生ハ腹たゝしく
冥加は押しきらずにおもひるゝ凛戯を恥ぬにも足跡まで
ともかくも終りぬ遣しまいらく苦労もわすれしが志がらく
詞に随ひて其さまを見んとのみ大きに口を開きてさたり
む賀物を渡さるべしといふ家に押ひらく蓮生合掌し足の口に向



蓮生法師十念を質して錢を借る



てゐらゝ不称名十念せられしぎや一念毎に金色の
化佛蓮生が口より出させの口に入給へバさハ大に驚嘆し奇異の
おもひをなしたるが何さま此僧凡人にそれよもあらじと急ぎ駕を立
出てこれとまいらせ玉すてもいかなる御方にておはすれ申さん今の奇
特を見るよれハ御名ゆかしく存るよし聞たるが蓮生ハ唯餘の事とはさ
へず無上功徳の佛名一念をまづかに一百疋の銭に併て貯ふると寒く
勿碎ゆきたるがいつまでも喰ども不もならさまかし路銭ハ備用ゆ
あり我帰り来らん時ハ元の如くならすによせられよといひつゝたち
出本国へこそ急がれたり跡にハ家内おこぞりて眼前の奇特を
感じあひしが志かしハ此法も止ざりしが旅経るに随ひさし当る用
にかまとれてありたるに蓮生房ハ既に本国の所用と達し又も
洛にのぼらんと此宿をすぎしまゝ彼さの家にいたり懇懃にいれとの

べて即ち貴文の名目をかくしさらバ其時聞ける十念
を請たまひしとおもしらバまた迷惑しいふも御念佛を
聞まいらせしに相違なしとへども我等ごときの凡夫の身に
していかでこれを返しまゐらすべきやとさまぐに陀
なれバ蓮生かしらをふり唇をとぢて唯無餘念なく聞と
かぎりに称名を唱ふなし我らも仰ぎ吉と請たまひしと自ら
口を開きて待なりしかバ主心なしぐれども押へて陸ひ
称名念佛なれバ辞にこれいなぞや一遍でふ主の口より化佛
出で蓮生の口に入せ給ふ既にかたのごとく九遍まで唱へ今一
遍と唱へんとせしに妻たるものかたはらにありてたれとてしく
主の口よりとをあて蓮生に向ひたまへるの御有様やかなる奇特を
見奉りもるもの皆泣さけび一遍も妻に讓り拝まし寺せ殊に廣大の御恩

徳ありめと称ふまぞ至も敢て口をひらかばこそ只ハ低頭して渇仰はし
けれバ蓮生ハ止ことをえずさいかバ我大切の宝なれども夢にまかせ得さ
せし為ハ是を因縁とし何とぞ善知識の教化をうけ来世の果福と
成んと胸にゆかしく思ひてありしと終に別を告て洛よそれのがらま
なりかくて夫婦の者ハかく不思議の縁に値遇をとげしかども未宿善
の時至らざるにや菩提を急ぐ心もなく唯々怪異の事にあひけれ
ばとのミおもひて篤と聞まで過しゐるが其後年ありて高祖親鸞聖
人御上洛の御ありしが此家に宿らせ給ひしに夫婦の者立出て
告じ爰にかゝる不思議の御僧ありて我家に入せ給ひぬと始終の事
ども聖人に委く御物がたり有しかバ聖人ハ尋だゝせ給ひそれこそい
熊谷蓮生房にてましますぞ我とくより是を守り本尊とし汝等よき
法の宝をさづかりぬと南無名号不思議のいはれをときしめし給ひしかば

夫婦はこれを聴聞したちまち宿善発起して聖人を礼拝し何かと
たゞ今まですぐかくも愚闇なるは甚しかるぞかなしきはしの我等がみさまや哀
此よりは後世の一大事を御慈教し給はれとひたすらに願ひまゐりけ
るが聖人その心をあはれみて即夫婦に向ひ給ひ我は他力本願を
深く信じまつり仏恩の称名怠りなくたとひ十悪の罪人又濁の
女人とのみとも西方に引接し浄土に向へらせ給ふ御いましまやうに教
化ありさせ給ひしかば夫婦の者は随喜の涙にむせびあへ立所に信心
獲得して即念仏の安心をぞ了納ましまゐりこれより後に俗家を転じ
て仏閣となしこれを蓮生寺と号し嗣子相続して今に三百年余に
移転するなりと云

○世俗に云彼附蓮生法師念仏を勧んとて家のうしろなる小池にむかひ十数遍唱へ通し
またちまち白蓮十茎生じて花をひらくあざやかなり蓮生其後又あふり
残とらへして念仏をとなへてさゝげしに蓮花ことく青かし一遍をもつて一葉の中さ

巳ありし一葉いのこりてあかまざりしとあらんいづれ是なるやしらねど
又云彼畠山の主人とあるは悪七兵衛景清が妻なりし妻後そのあとしが平家
滅亡の後彼幼稚の子をいだきて家にしのび世の佗びのひそみ居りけるがとく不
幸にして身を失ひけり然るに民間よみぶりて彼地に住し世の為ぬと見合せて
ぞあなるとあらん来寺僧を考へざれどこれを示して然れば

○什物高祖聖人真筆十字名号 泥書なり を傳ふせり

○当国の名産には ●志戸呂紙 安倍川より出る紙也 くらうじき紙也 ●たたミ入 日本より出る紙る たたミ入なり

餅 安倍川の茶店にて商ふ風味甚よし ●折さいく 府中の町にて作る花入 諸家よりこれを求むるよし 餅ふご 硯箱いろいろあり ●久能澄柑

十团子 宇津の山の茶店にて売る名物なり 鄙陋浮六 十団子も小粒になりて童させる 那 ●瀬戸の染飯 ●大井川 ●川

甦 若徳寺のかみ 風味格別なり ●沖津鯛 名ぶつとうろこ ふどの形あり ●白藻干 ●蒲原鮎 ●川鱒 ●三保松

露 ●豪士茸 山中谷川よりいでて佳なり ●紫蕃 ●日香鱸魚 ●丸子石 佳石なり ●麦山又柑 ●清見寺膏薬

府中表庶 あべ川 此国暖気にして諸菓ほか餘国よりはやし

遠江国

按ずるに今切の渡しの切ざんじ前は当国も湖水なりしとぞされば湖水を淡海といひ
遠きを近淡海といひこれに対へて此国を遠淡海とは云ふなり訛るし和銅六年の詔より国名を二字に
定めしより近江遠江の字になりたるなるべし

○当国浜松の城下に福田山広楽寺といふあり福田村より引寺にして聖人御旧跡の地とぞ

佛法山禅勝寺　東派　濱松にあり

当寺ハ高祖御帰洛の砌御休足あらせ給ひし霊場なり即其ハ御旧跡とて九尺四方に墻を結ひおかれし後御弟子専信房一宇を造立せりといふ

○当国の名産　・干姜 国領と云所より出る　・紫茜 二俣と云所より出る　・濱松番椒　・雛豆 気賀の名物也　・葛布 掛川の名ぶつなれども根本ハ上ミの村にて織る　・揚和布 掛川の海辺にてとる　・白羽柑子 掛川より五里斗南なる白羽村より出る　・荒和布うるさぎ　・納豆 濱名の名ぶつ　・松茸 小笠山より多く出る　・湿地茸 横すか山より出る　・小尾山鷹　・菊川飴　・月夫根　・新坂わらび餅 此宿の名物にて其名高し　・濱松ごし足袋　・有松絞

参河国

風土記に云当国に男川 豊川 矢作川 三の大川あり是の由へに三河と名つくとや

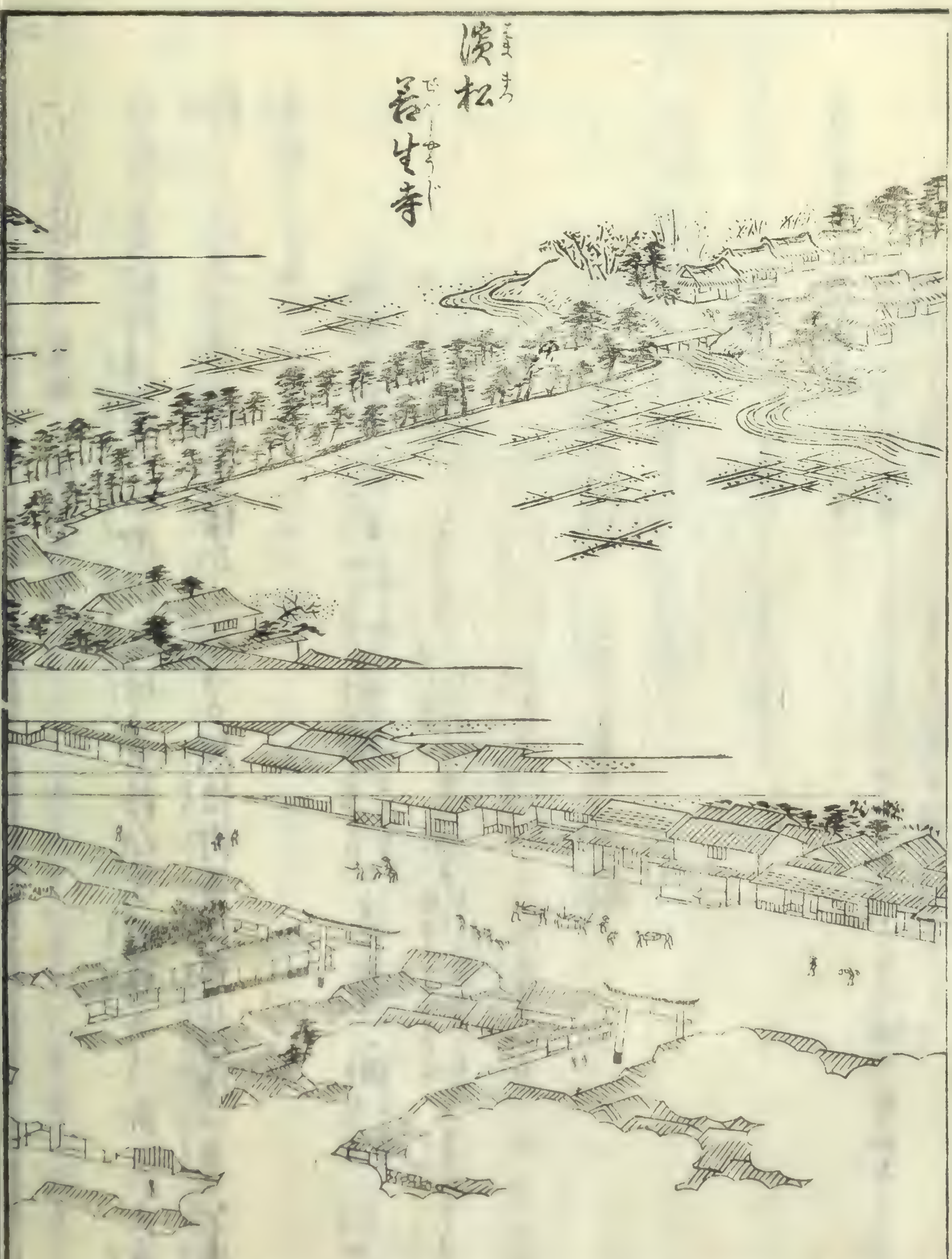
吉田御坊

東派御坊也　吉田にあり東御道場跡なり

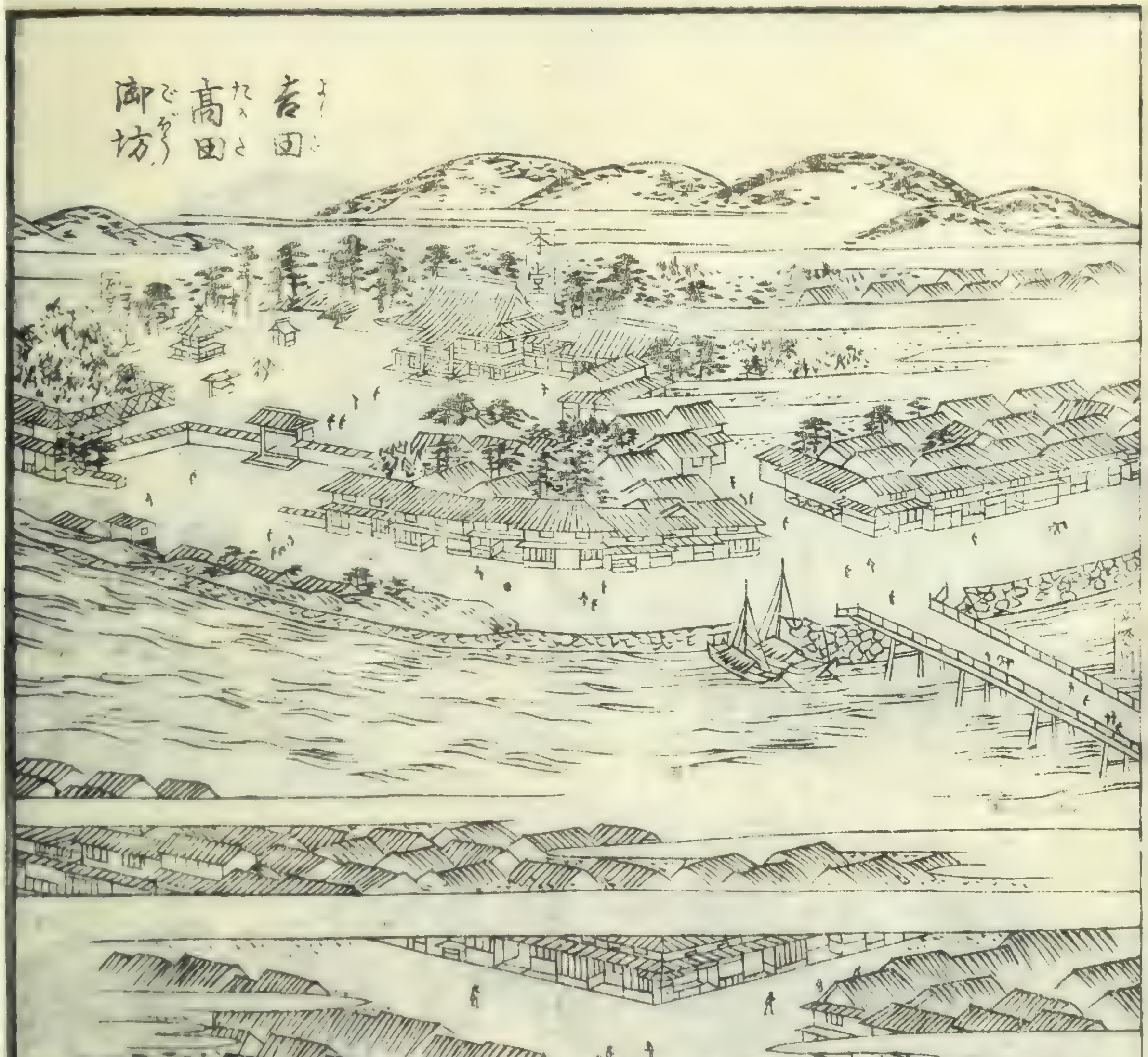
本堂十間四方

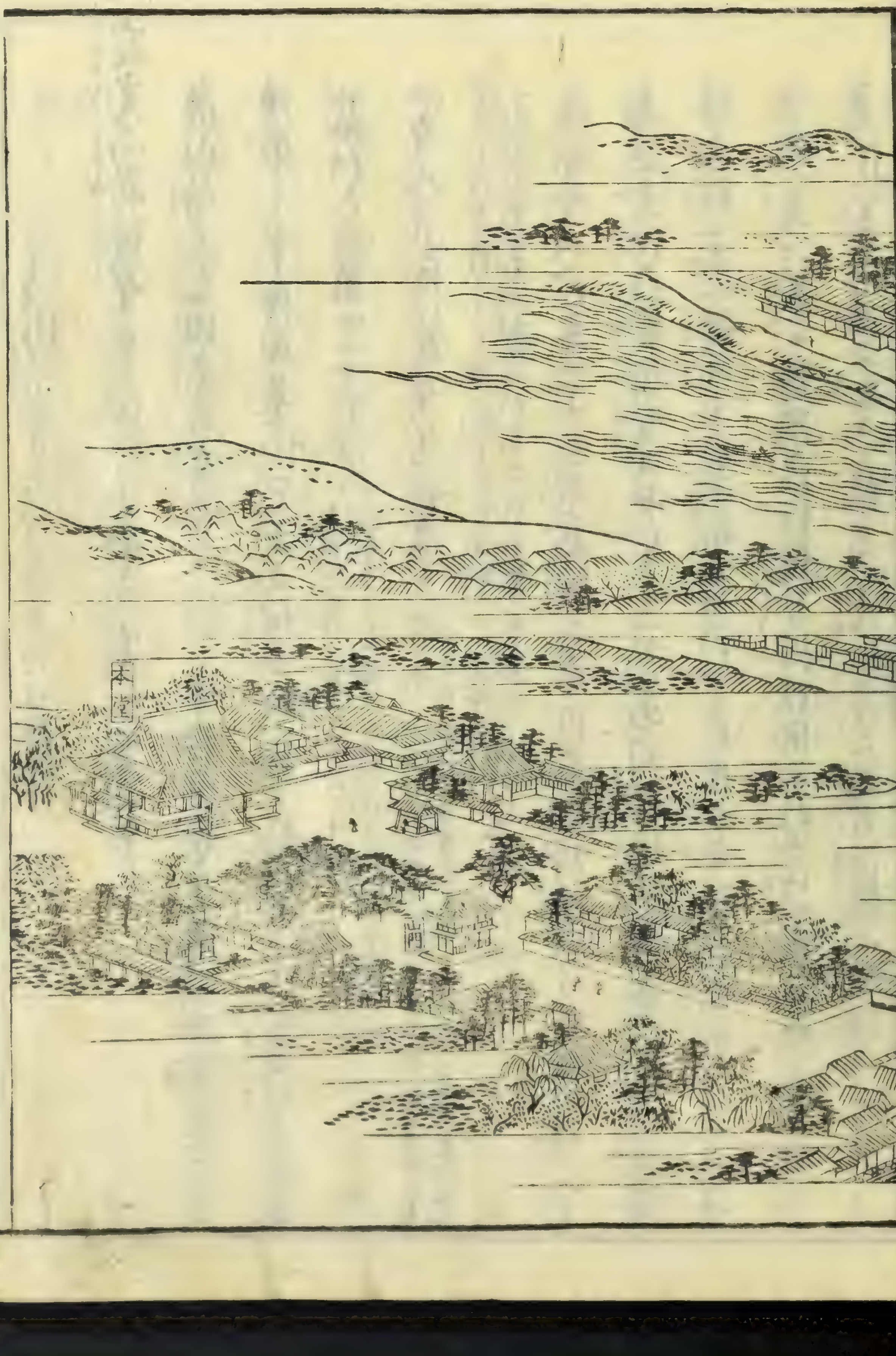
○当吉田の城下に正源寺といへる高田流の大寺あり聖人の御由緒ある院家なりとぞ

○赤坂といふ所に正法寺といふあり是も御由緒の地なりといふ


濱松




吉田
高田御坊
本堂


本堂
門

○平地村光勝寺より入るハ西派の御坊所なり

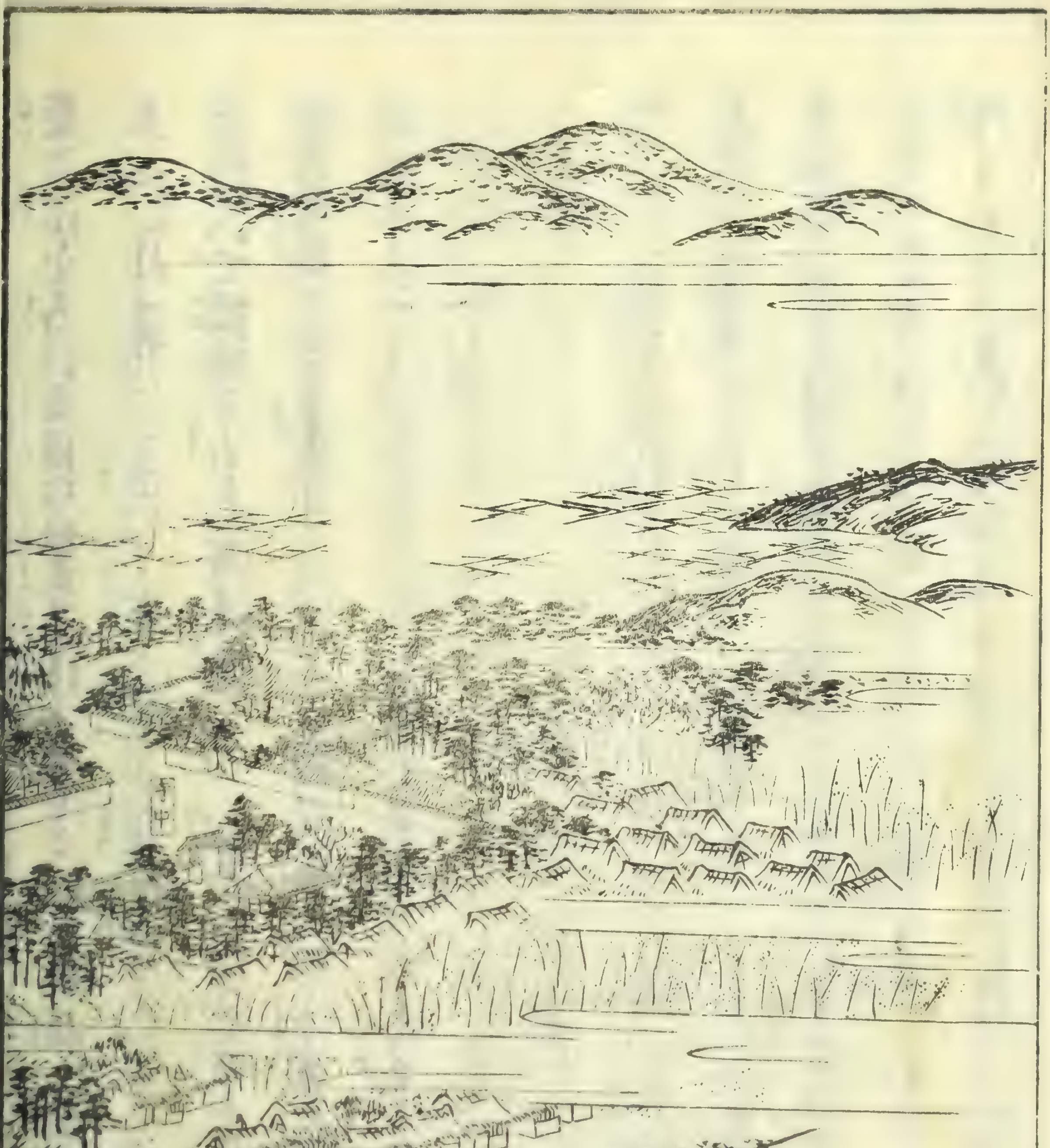
寂光山勝鬘寺 東派院家 同國額田郡深溝の庄針崎にあり

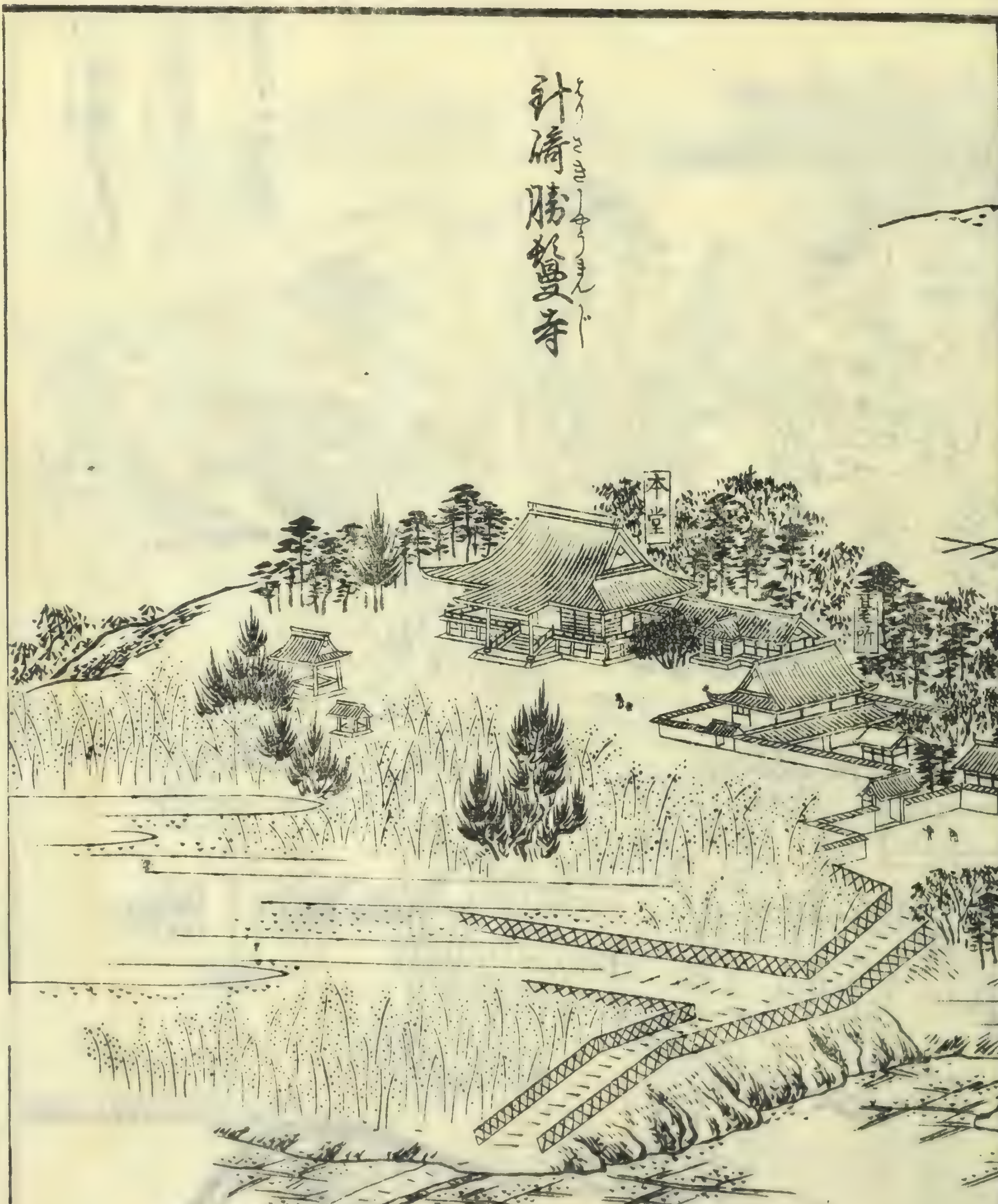
當山ハ昔天台圓宗の精舎なりしが中古寺務了海法師我真宗に帰依し中興開基として更に他力念仏を弘通ありし霊場ハ當國において三箇の一院とよべ 當國三箇寺と稱するものハ本證寺上宮寺并に當寺なり先哲旧跡に帰法ありし處ハ稱しくや

○本堂九間に面本尊ハ如来尊像 聖人御真作御涙如来と稱し高祖聖人當院の寺務了海法師へ御記念として譲らせ給ひしに此る像御名號やむごとなし給ひしかバたちまち震ひ動かせ給ひ連眼より御落涙ありしとなん今に其涙痕の跡あるをもてかくは稱しまゐるなり 塔頭二坊

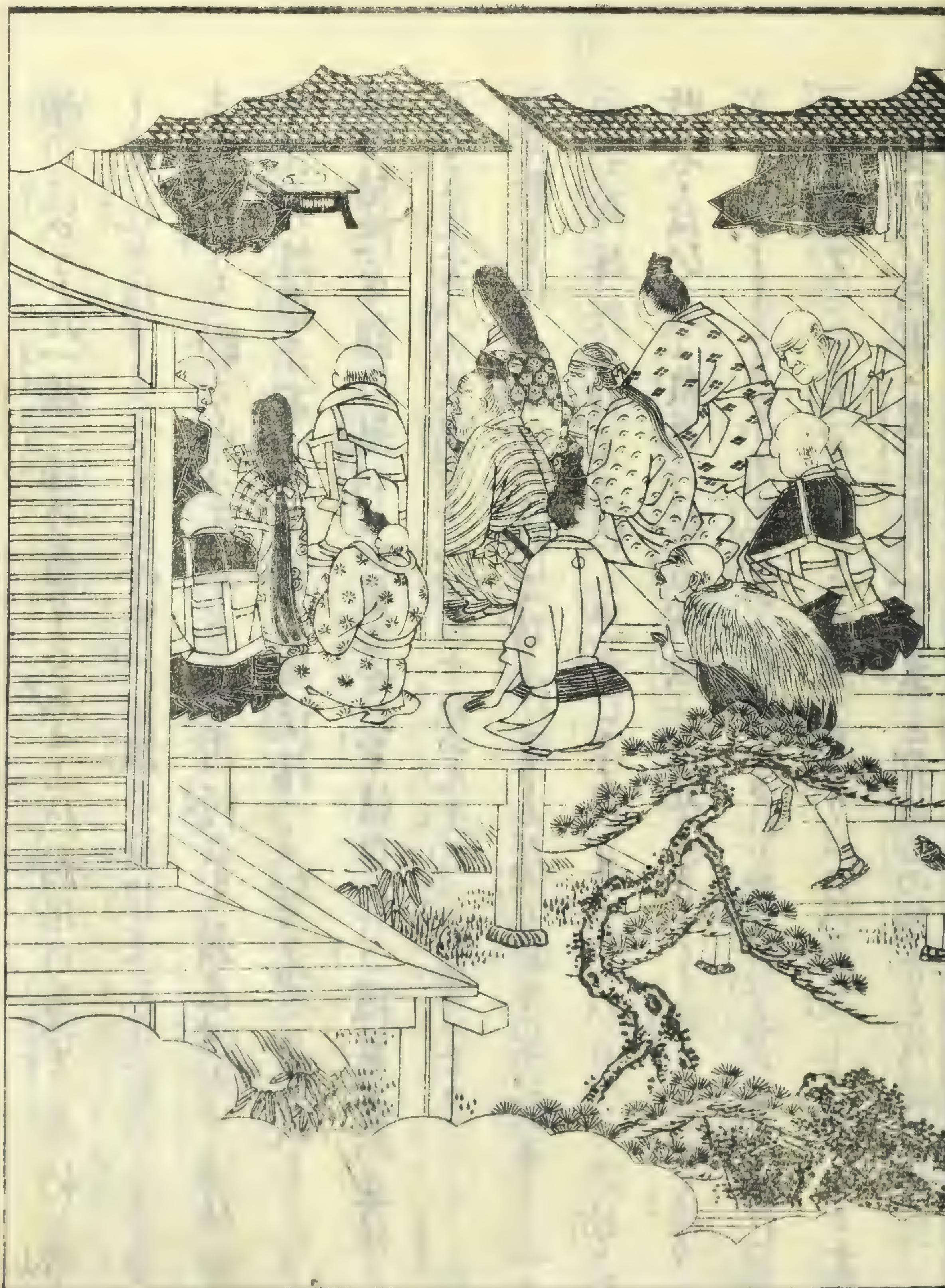
高祖聖人御年六十三歳嘉禎元年の春御帰洛あらせ給ふ折ふし當國矢作の宿柳堂において三七日の間御説法なし給ひけるに遠近の緇素群集し聴聞せる者恰も山のごとく日々に帰法渇仰の族千をもて算ふ實に當院の住僧了海法師これを安息我慢の旌旗をひるがへし當國に在て我この勝鬘寺ハ天台圓頓の道場として代々三

乗の法を尊ひ六國の衆民貴賤ともにこれを帰依し尊重すること
年久し然るに我代に當門く宗がために覆されんと何かう無慙のする
らんやいで彼地にゆきて我法徳をもて難詰し一時に宗を屈伏せしめ當
地を追拂んすと思のうちにありて即日真乃本住寺教圓上宮寺蓮
紛あんといへる悪せ法師をかたらひ竟に柳堂にてそろすかう招う聖
人御説法の最中なりしかバ三人の僧いやむてをうく此座のまへるを結居
なるが聖人かくとも志らせ給ハで聴衆に對して大經をとき給ち御釈ある
御一代の教法その数多門なりといへどもいづれの門か佛教にあらざる何
れ法か殊勝ならざらん但これを修行せんすゑ各如説に隨ひて其功徳
を積時ハ終に利益を得んすゑ必然なり然とハいへども世に上代末代のたが
ひありく人に厚薄の二ツあれバ法ハ必ズ一概に帰しがたく元来世運に
隨てうつり変を以て釈尊多端の法をとき給へりたとへバ彼大乗実


寺中


針崎勝鬘寺
はりさきしようまんじ
本堂


了海敬圓蓮紹の三徳柳生に到て真宗に帰服す



頓の法のごときハ一機一縁の益なるが故に上代利根の衆生ハ其行を修
し其證を得るといへども當今末代鈍根の衆機在家造悪の凡夫争
か其苦行を勤ることをえんやされバ御經にも我末法時中億々衆
生起行修道未有一人得者とは説給へりかゝるが故に今我等ともがら
所の弥陀本願の教行ハ如来出世の本懐なれバ万機普益の要法に
して五乗斉入の大道なりたとひ十悪の凡夫五逆の罪人なりとても一念
に本願を信じ専心に弥陀に帰命し奉りなバ他力攝取の御利益によりて
みて即得往生住不退轉と安定しさらに其うたがひあるべからざれバ
此うへはひとへに報恩の称名を勤ぶべきものなりと恰も懸河の流るゝ
がごとくいともこまやかに御教化ありせ給ひけれバ衆人随喜の涙をながし皆
一日に称名をこそ唱へけるかくて三僧ハ先よりしばしば聴聞してありしが高
徳無双の見識に忽我執の心を失ひ我偏心の陋なるを悔み歎きつ

聖人に謁しまつりこの小田心懺悔して竟に本宗をひろめんとし真宗念佛に
ぞ帰せられけり

○当国はそのかみ聖徳太子勝鬘経御講讃の霊地なるゆゑに寺号をかくは称しけるとぞ
やゝ当国保安といへる地に勝鬘寺といへる寺院あり是も聖徳太子の霊跡にて真宗
無本寺にて日光御門跡に屬せる院家なり

稲荷山浄妙寺 東流院家 同国中ノ郷にあり

当院は二十四輩第十三番の信願房の遺跡なり始は相州鎌倉に
創建ありしが中古当国に移轉して 信願房の俗下野国廉湊慈観寺の主なりしが
始めは相州より当国赤渋にうつりしが終に当国一本宗
芳流を弘むとなり 此故に今に関東七箇の大寺にて一院と称せり

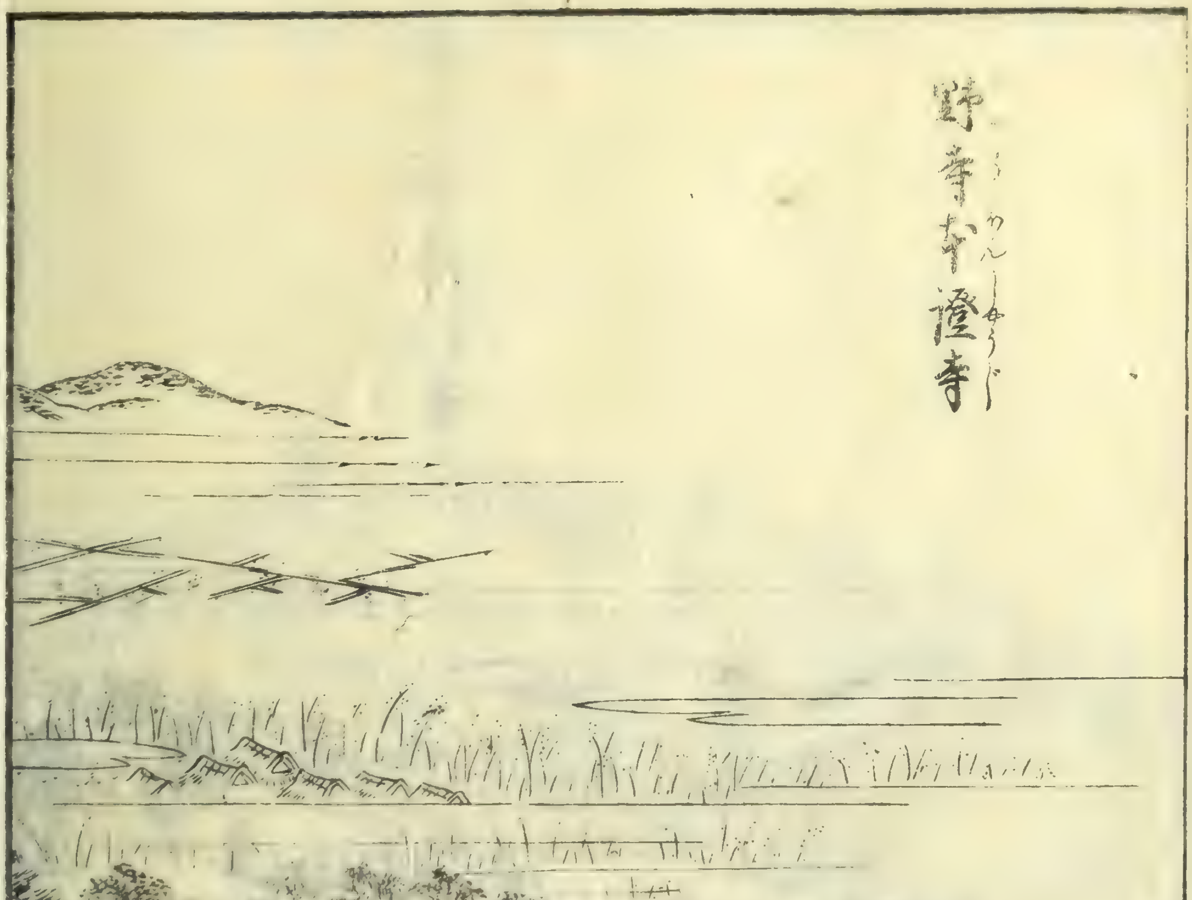
○本堂十一間に九間高祖聖人御真筆の寿像を安ず

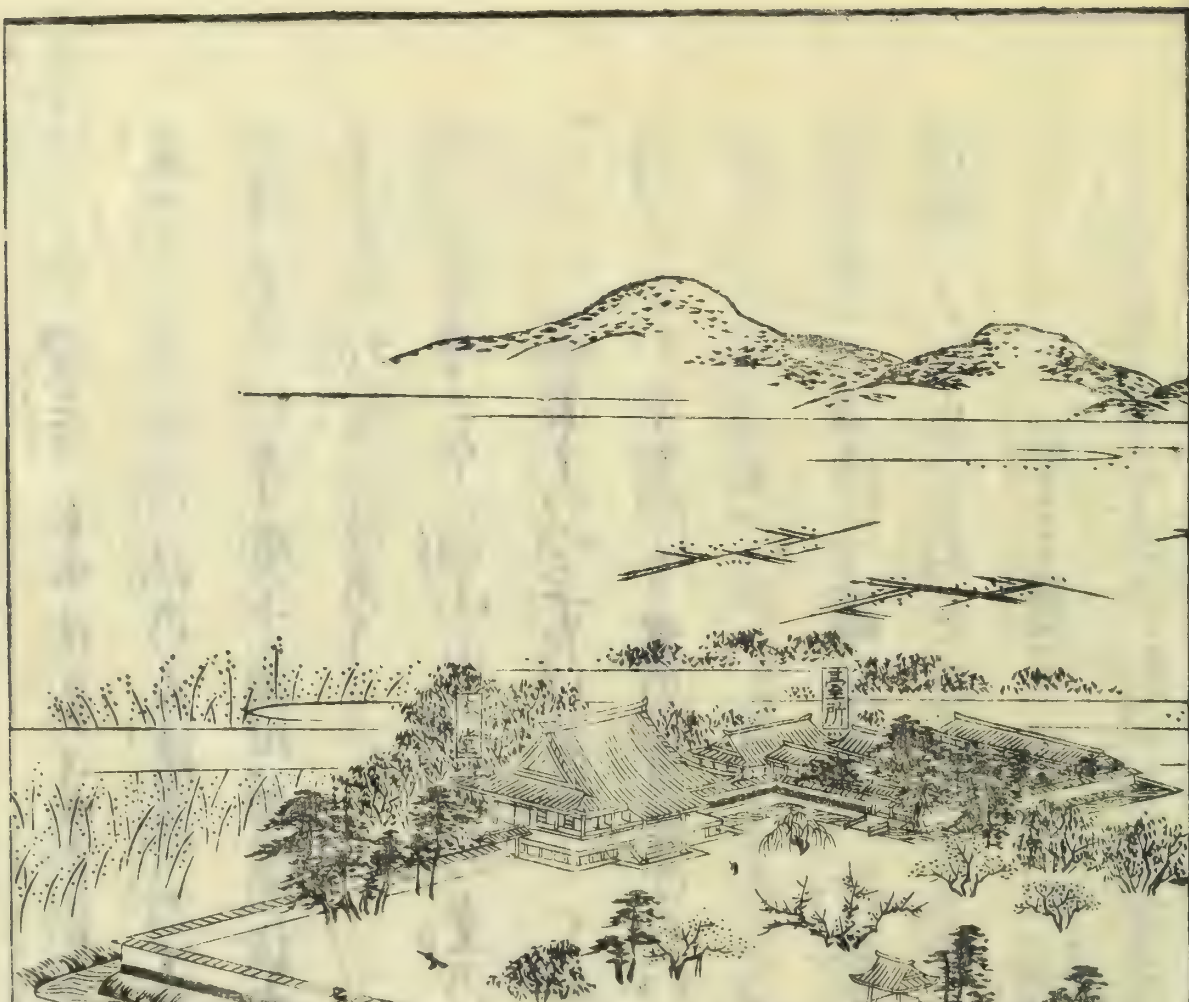
○針崎より中の郷の間に和田良円房といふあり是良円の遺跡なり又中の郷
より半里ばかり東乙川村慈光寺といふあり是れ三河国七箇寺の一院也
といふ又七寺とは浄妙寺正法寺浄脱寺無量寿寺等と此慈光寺なり
さるを聖人面授の御弟子之無量寿寺は今尾州成岩にあり


本堂
茶所



中之郷浄妙寺


野寺歓證寺
寺中


高臺所

雲龍山本證寺 東派 院家 同国碧海郡志貴の荘野寺にあり

開基ハ真宗帰法の大徳慶円法師にして当国三ヶ寺の一院なり ○本堂十間四面高祖真蹟名号不離の本尊など寺中ハ坊舎三區あり

慶円法師ハ本ハ旧小山判官行重の息なり当国矢作の流小嶋の龍宮といへる所に居城して武備をさかんなりしが宿因の然る所にやありし世の囂塵をいとひ富貴の交りを絶し終に剃髪染衣の身となり屋形を則精舎となし専天台円宗を修しありしが高祖聖人柳堂御勧化の砌了海法師と因縁ふれて忽台教を捨棄して永く聖人の御弟子となり真宗に無二の碩徳とぞ称しける 委しくハ勝鬘寺の条下にこれを出せり今舩越同郡本の姓を称とするものハこの小山家の門下にありと云

○霊宝 聖人尼上の御影及び開基慶円法師自作の像等あり

其外これを畧す

太子山上宮寺 東派 院家 同國同郡佐く木村にあり

聖徳皇院と号す 真宗帰化の大徳蓮如法師の開基にして当國三箇寺の一院なり ○本堂十間 尼面 本尊阿弥陀如来 聖徳太子御真影 霊宝数品あり 畧之 僧坊三區あり

当院は往古聖徳太子の開闢ありし霊地にして天台円宗の仏場なり 後に諸坊さかへて あまたのよろこく没く 中比武人安養右衛門尉秭綱入道して蓮如と号し当寺に住持し専ら大乗実頓の法を修しけるが不思議に了源法師とともに聖人に柳堂にあひて謁しまゐり真性得悟の強縁をもて竟に本宗を改め他力念仏に帰法し御弟子無二の信者とはなりにけり 委しくは勝鬘寺の条下にのせたり

○此専修寺より二里を経て西ざく村に應仁寺といへるあり 應仁元年の比


佐ゝ木
上宮寺
本堂
門






桑子妙源寺
本堂
墓所

蓮如上人此所にて久しく御滞留ましく御教導ありし旧跡なり当寺に龍燈松といへる名木あり後に山号を松光山と称し西派にて清泉寺と云へる俗家より是を守るとかや又世傳に佐々木村のかたはらに池あり蓮上人の御門徒佐々木如光といへる俱信の武士これまた化人にて此池より出現

桑子山妙源寺 高田流 院家 同國同郡桑子村にあり

華薹院と号す 寺号或は明眼寺とも書なり 念信房の開基にして嘗て高祖聖人御説法ありし霊場なり○本堂十間に面本尊阿弥陀如来 安阿弥の作当院に久しく安置せし八九郎本尊とて世に名高き尊像なりし なり此人あつく是を公にさゝしよる府御代官として今のなるを寄附せられしといふ 僧舎二区あり

当山開基念信法師と申は当所平田の荘の領主安藤薩摩守是人 初名正次 吉郎といふ 俗名小聖人当国矢作の宿柳堂に御滞留の折から高徳を慕ひまつり即屋敷に屈請し給ふさまに本願名号の要法を受得ましましかは忽一念帰命の領心を発し深く聖人の御利益を信じ竟に御弟子となり法名を授りて念信とぞ号したる犹望し附此所の道俗聖人の来儀を

貴きも賤くも寺に群集し御教化を請ひ奉りければ即数日御滞留まします日々に御化益ありしまゝ寺に擬ひて念信一宇を造立し永く御旧跡を傳へしかば今に六百年にあまるといへども曾て退轉なくいとも尊き霊場なり○当寺第一の霊宝法然上人真影 此御影ハ選擇付属の御影にして法然上人より親鸞聖人へ授け給ふ所謂御本書御傳抄に志るし給ふ所の御影なり此外御付属の選擇集正本も当寺の傳來なり今勢州一身田の宝庫に納まりしとぞ 禮盤 これハ聖人当院におひて御說法の折から居坐したまひしところなり

其外什宝夥しくあれどこれを略す

○奈良村より乾に向て十六七丁ばかりに安静といふ所あり是念信房の舎兄安藤権守が城趾なり権守も念信房ともに聖人に帰依し御弟子となり圓善と号しけるが曾て建長年中上洛して聖人に謁し御真影を乞ましまし則朝圓法眼に命じてこれをうつさせ給ひ自ら御裏書に御銘御賛を添給ひこれを授与し給ひければ圓善ありがたく頂戴し是を安静に安置しけるとかや然るに此御影を世に安静の御影といふ其後長瀬願照寺に傳来せしが実如上人の御代願照寺より御本山へ差上ぐ今は東御本廟の宝庫に納りしとぞ安静は其古跡のみ残れり

柳堂勝蓮寺

東派 同国碧海郡国府橋西矢作宿にあり


柳堂
勝蓮寺
説法石



高祖聖人三七日の間御勧化ましましたる芳趾なり○説法石 聖人御勧化のみぎり此石によ座し給ひしとぞ

往昔聖徳太子当国御経歴の折から此地に柳の大樹を挿しかバ 世人年歴をしらざるの古柳なり これがもとにてぞ給ひ今よりして五百年の後此所必群生利益の霊場となるべしとのたまひて我此地を去て柳堂と名付んといひおきし勅みより其名をさへ人々呼ならはせたるが川の流やみたん絶に小堂を建てこれを柳堂薬師寺と号したる処に嘉禎元年二月上旬聖人御年六十三歳にして上洛ありせ給ふ砌遠州桑畑より当国矢作にいたりて此柳堂にとゞまり給ひ三七日の間御勧化ましましくたるに当国ハ言ふに及ばず尾州濃州の道俗群参来集して聖人の法義を聴聞し帰依渇仰の族たる人ハ草木風になびくがごとく此御化益によりて若干になりしとかや是此所に宿因合薬の地にして衆生解脱の機をのぶるのみか此所

即当国御化導旁初發端の霊場なり

○国府十王町に御堂山西照寺といへるハ此御堂の別院なり又同所の内に満勝寺といへるある同流の霊場にして謂ある寺なりとそや

楽命山如意寺　東流　同国賀茂郡高橋庄志多利郷力石にあり

高祖聖人の嫡弟関東六老僧第三荒木源海大徳草創の古跡なり

源海上人俗姓等委しく佛光寺の条下に出せり当寺上人晩年に佛光寺の寺務を了海法師にゆづり文永の比本国武州荒木に帰らく一宇を造立し満福寺と号す其後ミづから東国巡化ありて当国高木原に別院を構へ化益ありしが御年七十八歳にして示寂す今の此寺の遺跡給へり然るに御年七十八歳なりし頃より彼満福寺ハ海信海円に遷譲し次第に相続し然るに教密の付当国中泉判官が不縁によつて彼高木原の別院に引籠り宗風盛んに弘まり附す第八三代の如蔵光如上人御巡国のみぎり如意寺と改号ありし也後に絶て当寺に勝院

西ハ去施法眼光業御諱ハ光如上人なり

当山第一の霊宝三幅の繪傳　世に本山御免許の御繪傳とハ十箇の異なる

其外什物これを略ス

照高山顯照寺　西派　同国碧海郡長瀬にあり

高祖聖人の真弟関東六老僧第五番桑畑専海法師の開基なり

専海房ハ貞安二年五月野州高田ニおひて聖人ニ帰順し其り竟なり
御弟子となり専信房専海と号ス聖人ハ常陸給仕の法侶なり

安静の御親ハ当寺ニ差上られたり
又世俗ニ云此安静の御親とハ御和讃

○聖徳太子の御木像 聖人御作 其外宝物数品あり

御着衣ミイク歓喜阿しせ給ひし御姿を
西ハ朝国法眼ニ命せられ写さしめ給ふとなん

高田専修坊 東派 同国同郡高田ニあり

専修坊ハ当国柳堂ニおひて聖人の御勧化ニあづかり帰法得道し
御門徒となり即真宗弘興の仏場を現立し今ニ不退転の旧坊なり
○什宝ニは高祖聖人真翰泥筆六字名号 蓮如上人消息名号を安ス

○当国名産 ・雲母 当国吉良山より出る ・名倉砥 ・矢の根 桜田辺ニて作る ・碁石 伊良湖と云海辺より出る ・石貝 ・
稚海藻 ・足代紙 ・岩茸 山ひしき二ツあり ・蕨巻白魚 ・モロヲコシ ・蜊 ・寄居虫 ・
海鼠腸 ・芋川温飩 名乎井一の名物也

尾張国

風土記ニは当国熱田明神の御神体ハ日本武尊の納め給へる大蛇の尾より張出せる剣なれハ尾張と云 又
なやみていぶき山接るハ当国南をかしらとして北面ニひろごりたる国なれハ尾まで張ひろごりたる名なりと云
尾張とハ張ハ墾の意ニて田ニよまる名にや覚束なし

羽塚山無量寿寺　東派　智多郡成岩村にあり

当寺の開山吉良了善房ハ旧蒙原国経と云へる殿上人なりしが常に世を厭ふの心深く終に嘉禎の比雲井を辞してたゞちに三河国に漂泊して右の柳堂に赴ひて聖人の御弟子となり同国平坂に一宇を営ミ無量寿寺と号し他力の念仏をさかりに専ら宗風を唱へられけるが中古故ありて当所に移住し 三州五箇の一寺也 ○宝物数品甲冑あり

小林光明寺　東派　院家　同国同郡大野村にあり

照宝山照光院と号し旧天台の道場なりしが当時佛性法師 俗姓在五中将王の裔なりとかや 真宗に帰法し中興開山となれり

備も高祖聖人当州奈良村に赴ひて御勧化ありし此時御附当寺の住佛性法師彼所に至りて聞法せしに聖人その附寺に一実の大道念佛往生の玉極を御教示ありし後人ハ佛性頓

に開悟發明し随喜感嘆のあまり聖道難解の法を捨念佛易行の眞門に入即御弟子となりて聖人を小林の道場に請し薙染御剃髪を蒙りたまふとなん當院ハもと小林村にありしを中古當所へ移轉して安住したまふ

西流御坊　御堂十二間に面

東流御坊　御堂十間に十一間

當御坊の結構ハ境域廣くして堂宇巍然たり御門の大なるハ京師の本山に法して桐讓りて馬場花のごとく、ち御苑あり老松みどりをまじえて森々として列をなし遠く桐屋に甚壮觀也

七宝山聖德寺　東流院家　門前名護屋七間町にあり

當寺ハ高祖親鸞聖人遺像宝鏡の霊跡にして上足開基の法

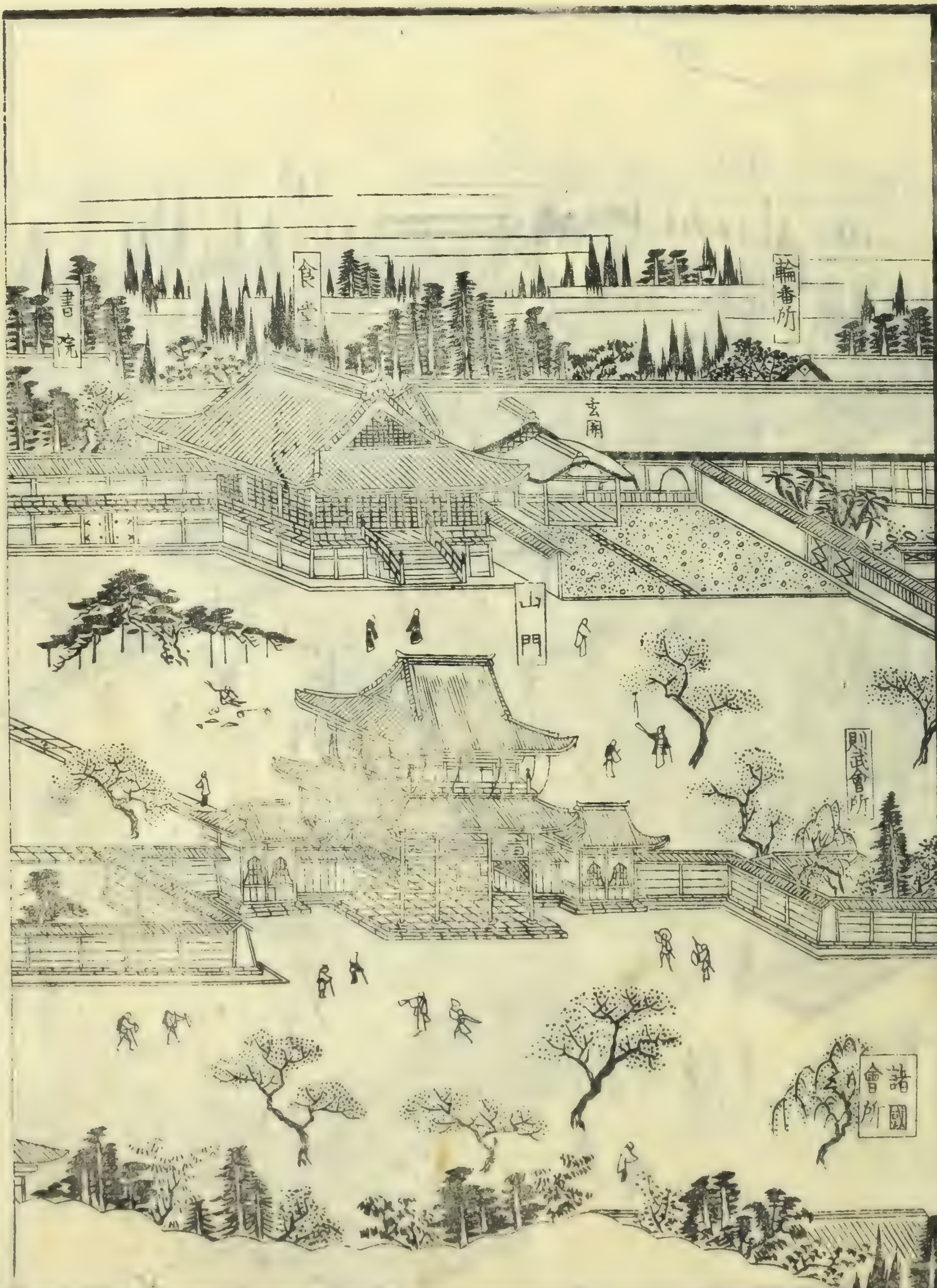
尾張國東本願寺圖

文化六年己巳春

北亭墨僊應需寫

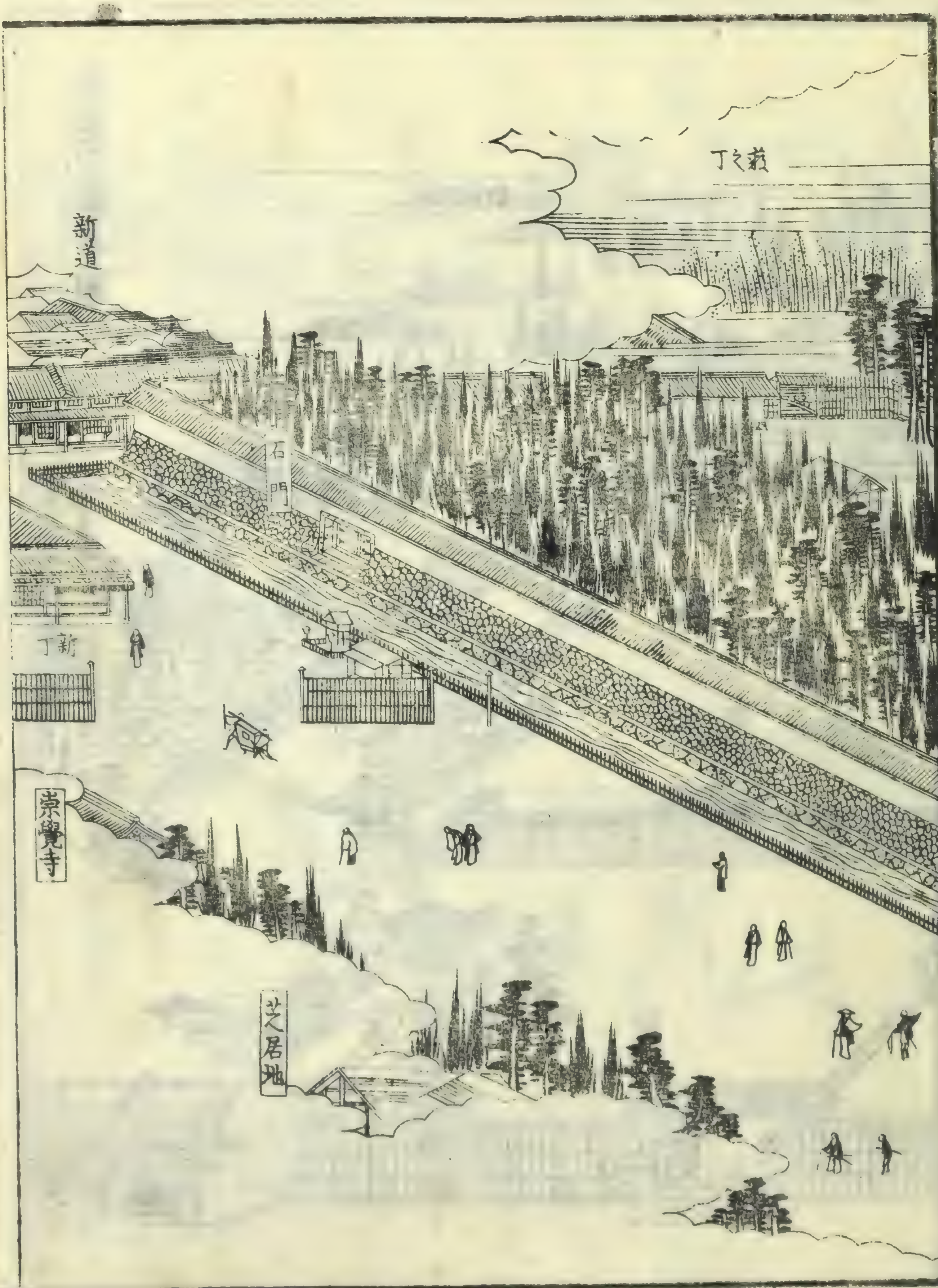



臺所
經堂

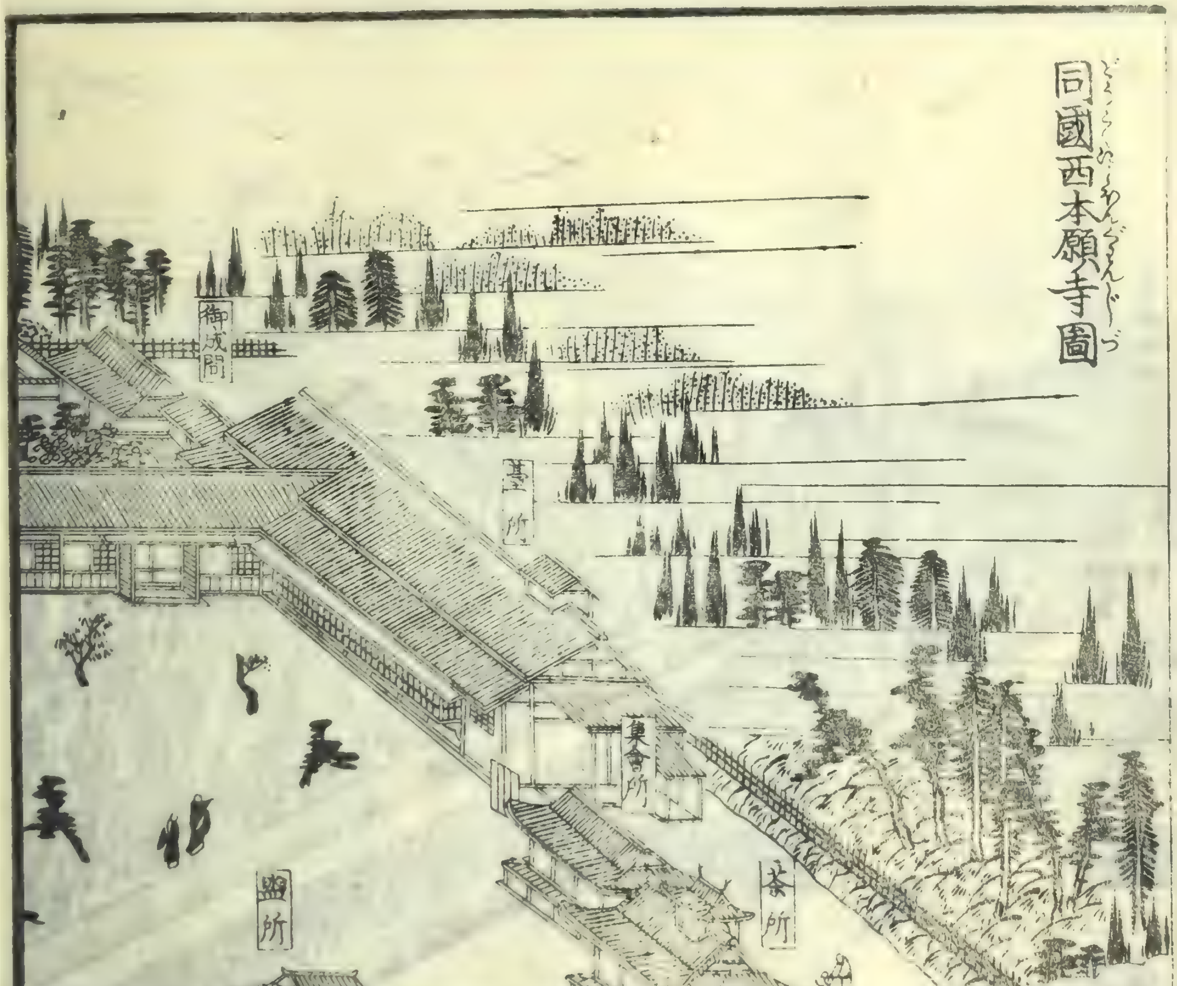


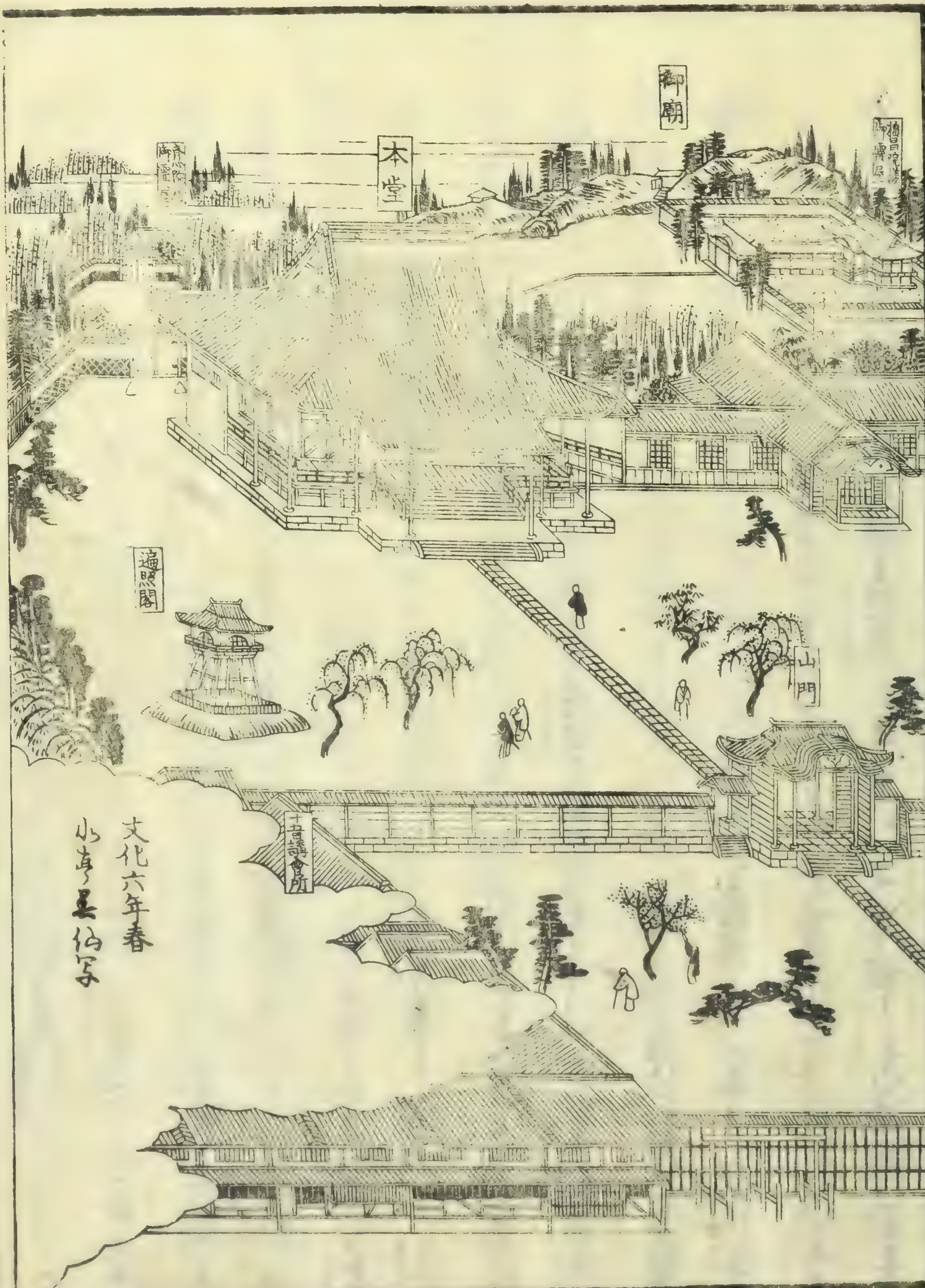
輪番所
食堂
書院
玄関
山門
則武會所
諸國會所


本堂
毛綱會所
雛形會所



萩之丁
新道
石門
新丁
崇覺寺
芝居地


同國西本願寺圖
御成間
墓所
集會所
茶所
惣門
門前町



御廟
本堂
遍照閣
山門
文化六年春

師の開基なり○本堂十間余本尊阿弥陀如来 開基の自作之
円善法師は是源氏の枝族にして小笠原左衛門尉長顕とて甲斐
国の紳なり其性智勇を兼文武の道にも長ぜり然るに長顕は
うざるに無常遷変のありさまを観じ世上栄利の交を厭ひ頻に
浮沈を遁まんとおもひしかどもいまだ有縁の知識をもとむるによしなく空
しく年月を送りけり爰に高祖聖人相州国府津にまして専
化益に務し給ひけるに長顕かくと聞より直に故郷を去りとて急ぎ聖人
の禅室に到り謁を請で日頃素願の真実を聖人に告まいらせしに聖人その志
の深きを感じ他力真宗の安心をいとこまやかに御教導ありしに長顕
頓に一念帰命の願心を発し速に信心堅固の念仏者となり即剃髪
して法号を授り円善房とぞ申ける是よりして聖人に常随給仕なる
事多く既に御帰洛の御時も供奉れたてまつり東海諸国を

経て竟に嘉禎元年尾張国羽栗郡大浦（昔ハ尾張に属せしが今ハ美濃国に属れ）といへる所に来りし
が当所に真言宗の古院ありし程に聖人即これに入せ給ひ此所に於ひて暫く
勧化利益をし給ひけるに遠近の道俗市のごとく群集し隣里の男女
山のおく／＼の余論し各聞法随喜せざるはなかりし既にして聖人
当所を御出立あらせ給ふに彼御化益を蒙りし面々我も／＼と馳集
御名残を惜しみ参りせ何とぞ聖人都へ登り給はんとなりしが非足の御弟
し御一人当所にとゞめ給はれかしと一同に歎き願ひしかば聖人も衆心を破ん
ことを憚り給ひ止ことを得ずして円善に斯くと命じ給ふ家に於ひて円善房
も御別をぞ惜みけるといへども師命のがれがたく則当所に止りて永く弘法
の基址を開きこれを聖徳寺と号け専修の念仏を専弘通し夫に他
力の伝燈をかゝやかして竟に弘安八年辛巳三月八日寂をしめし給ふといふ
中古尾州中島郡富田に寺を移し後に当所に転じて万代不易の霊場


聖人精神を
鏡面に寓して
以て頂相を
現し徒弟に
与へて記念
とし給ふ



となへまゐりけり○当山の霊物七宝とは　鏡の御影（此御影は聖人既に尾州大浦を御出立の折から円若房御名残を）
強を押しとゞまり別離の涸に沈ミしかば聖人即一面の鏡紙を出し給ひ自ら鏡影を照らして曰く汝
深く歎しむる事別離は我を見んとおもはゞ此鏡に対ひ給へしとて与へ給へば円若房うけて
そひなげり拝謝してこれを受て鏡を見るにあきれが奇なる哉妙なるかな己が面はうつらずして
聖人の御尊容いとありありとうつりて拝まれさせ給へば円若悲嘆のおもひをひるがへし忽ち歓喜踊躍して
今に御影の霊鏡と此御鏡をうやまひしづきまつり出だされ拝し敬れをぞ尽さしとかや
今に至りて六百年の星霜を経るといへども御慈影はありありと鏡面にうつらひて拝まれ給ふであり
かくれなく拝して鏡の御影とは称し
まゐる鏡は古銅にして経り尺寸余あり
龍樹菩薩の眼睛　天親菩薩の舎利
曇鸞大師の御骨　鵜の丸網　松風の茶臼　十字名号（聖人の御真筆）

右を七宝と云ふ当寺の山号は蓋是に基て名くとかや

○至徳記に曰嘉禄二年九月稲田の郷に信心の老尼ありこれよりさきに
御教化を蒙りまつり二心さらになかりけるが此ころ聖人ある日に
われが慈顔を拝するの跡なることを歎て或日に詣で其事を歎
きけるが聖人彼が深志を感じ給ひ一面の鏡を与へて且称念ならし給ふに忽ち
我顔うつらせ給ひ再び消滅とうつりけるに即是をとらん彼老尼に給はりけると云

円通寺　東派院家　乃木桜町にあり

當寺往昔天台宗にて有しが高祖御帰洛の砌當寺の寺務佛性といふ人萱津に於て聖人に拝謁し御弟子となりまゐりしとぞ今は佛恍惘兼せり

○名古屋より千じ又丁ばかり北に甚徳寺村に松壽山圓福寺といへる田流の寺ありむかしは天台宗なりしを時の住持教興なる者の聖人に帰依し奉り御弟子となりしかば聖人即教寺に二ヶ月御滞留ましましし御化益ありし芳跡とかや

小田井西方寺　東流　同國春日井郡小田井村にあり

當寺もと天台圓宗の佛場なりしが聖人御帰洛のをり加禎元年當寺の住侶玄理法師聖人の高徳を慕ひ大衆悉く法をとて我眞宗易行他力の門に入御弟子となりまゐり是即淋郡七門徒の随一之淋郡とは淋踏郡と書すべし之（淋郡七門徒の事は異說あれども従來の說を用ひし）當附屬祖聖人本淋乃道場より自比叡に往里定近の渡りを誠論に附船を右まへる小川の流多く水高く

灑りてまつり雑りしと七人の道行身命を捨て漸ふたし聖人を誑世来せられし聖人其志の深きを感じおひ大浦の御滝前の岩般七人の行ひを名号を書写ありしぶ其子孫等何まりこれを崇敬し堂宇をたてゝ御真筆の名号を納めて本尊とこれをまた先祖の七門徒は瀬部の部也とて瀬部七箇寺とは称来れりとや 又河北九門徒と号して九箇寺ありこれハ羽栗郡の内本庄本派とへ被地又聖人を屈請ありし御教化ぶ皇子其以前なりしと云又根本願の道場として聖人の御旧跡とハへるハ今美濃の国竹が鼻の御坊とハ是也

小枚一乗深寺 東流 同国同郡小枚村にあり

いにしへハ同国岩倉にありて真言宗の寺院なりしが聖人の徳化に随ひ真宗の門に入り中古当所へ移転すと云是又瀬部七箇寺の一寺なり

河畑勝宝寺 東流 同本河畑にあり

当寺も同く瀬部七箇の其一なり

日比野圓善寺　東派　同國同郡日比野村にあり

これ又濃部七寺の一にして往古ハ天台宗の梵區なり嘗て高祖聖人本巣より當寺へいらせ給ひしが時の住侶聞法随喜して御弟子となり聖人發足の御濃踏を乞して御寺閑をぞ始めしとなん

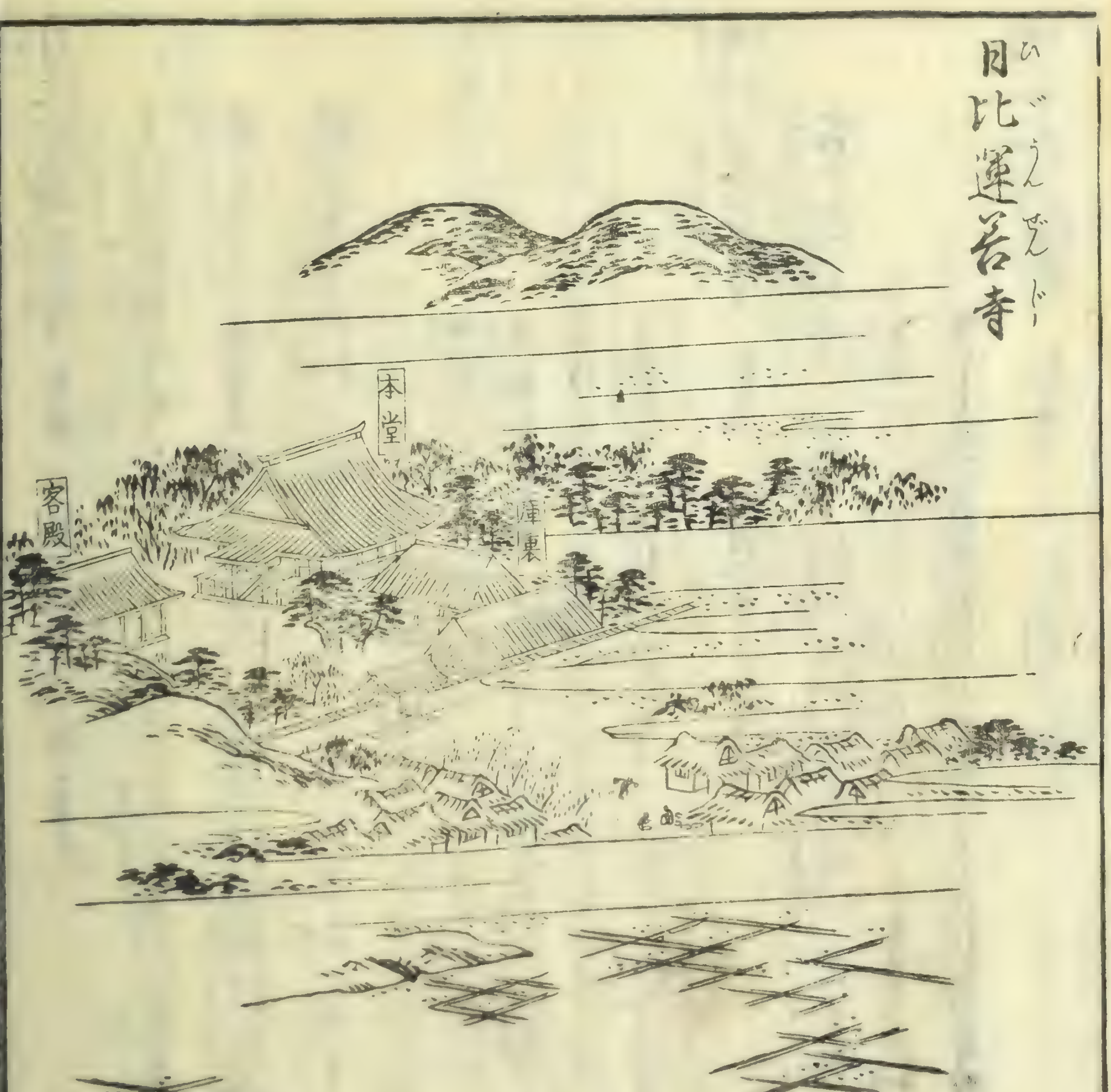
○當寺に古き木像を安置せり傳へ云聖人の御真筆二十四輩第十八常陸國曽根常福寺の開基入信房聖人御帰洛の御跡をしたひ當寺までまゐりしが年病發して終に遷化しを時の住侶其肖像を刻みとどめしと云或説に尾張にて一人の老女あり真宗に無二の信者なりしが聖人の御跡をしたひ當寺に来りて病死せりこれ其木像なりと何れか是なるやをしらず

河野覺泉寺　東派　同國同郡大毛にあり

古は教海房といへり河野九門徒の随一なり

○實悟記に云尾州九門徒へ蓮如上人よりある祖の御影御傳絵などを授けしと云聖人御真筆記念の名号を中は九門徒の寺院をのぞくこれを安置し

河野善龍寺　東派　同國東黒田にあり


日比蓮蓉寺
本堂
客殿
庫裏

古へハ専修房と号せりこれ又河野九門徒の一寺なり

奥村了専寺　東流　同國中濃郡奥村にあり

当寺ハ瀬部七箇寺の内の一院なり

西宝寺　東流　同所にあり

当寺右にいふ七箇寺の其一なり

河野妙性坊　東流　同國羽栗郡小薮にあり

河野九門徒の其一なり当寺の開基正円房といへるハ俗姓永田主計頭秀則の息式部卿秀実が入道せし法号なりとぞ

○当國の名産・締・麁玉・蒲黄・大根　海内の名産なり・干大こん・名古屋藤実・宮扗嬬・南方鑄・諸瓶治并物・清洲政常小刀・同鳴海氏雲・蘇民将来ノ守札　当國津島明神より出

美濃國

四季記に曰美濃國ハ三野とも當國各務野青野関が原なんどいふ廣野三ツあり故に云いふ或説に當國ハ永田畑多くして五穀万倍を產して大上國なりて美地なりと云り

河野西徳寺　東流　葉栗郡円城寺村にあり

古へハ西方坊と号せり是又河野九門徒の内にて尾州六坊の其一とと云

河野稱名寺　東流　同國同郡中野村にあり

當寺又九門徒の其一なり

○當寺より小三丁ばかりに本流御坊の古跡あり

河野西入坊　東流　同國同郡中屋村にあり

同九門徒の内なり當坊十七世了念なる僧河野九門徒再興の人也

後其隠居地を了念寺と号すと云

河野安樂寺　西流　同所佐野にあり

同じく九門徒の内なり

河野専光寺　西流　同国同郡下印食にあり

又光専坊とも称す九門徒の一寺なり

渋谷西方寺　東流　同　同郡足近にあり

高祖聖人直弟西園坊の芳跡にして尾州六坊の随一なり○本尊阿弥陀如来　聖徳太子乃御作

西園坊は渋谷七郎が末孫渋谷庄司とて尾州中野村の住人なりしが聖人参州矢作に於いて教導し給ふおりから聞法の利益深かりし縁に御弟子となり法名を授りて西園と号し爰に於いて一宇を創立しこれを西方寺と称せりかくて数代相続ありしが天正の比平相織田信長大坂石山の御本坊に敵し既に合戦に及びたる時当時の住僧祐慶房かくと聞より遠近の門徒をかり立て此時節に死せずんばいつか恩徳に報ひまつらんと夜に日に継ぎ駈つけ御味方に加り専ら謝恩の死力を尽しければ


足近西方寺
竹鼻西岸寺


本堂
臺所



西方寺緒菱門徒を引率して平捐信長が兵と石山に防ぐ



信長是を大に憤り悪き門徒等がふるまひなると即中野の地ハ加賀林
弥八に命じて西方寺を廃しむこれによつて弥八士卒を引率して中野村
に馳向ひ佛殿僧坊残りなく霊宝什物にいたるまで悉く破却しさしも
数代連綿として相續しける布令の地一時に廢しけるぞうたてけれ
されば祐慶佛恩を思ふにいでざき心ハやたけにおもへども時勢をいかんとも
しがたく暴虐を避て当所にうつり再び精舎を建立し寳[illegible]
教如上人其志を慰労せんためにぞかゝる御書をたまはれ祐慶坊に賜り
なるとかや則これを洞の御書と称じ今に当寺に傳来せり又その
ころしも祐慶を始め門徒の面々必死のたすきをかけしゆへなる祖
聖人危亡の御難を免せられしとかや

○当寺より南なる所を大浦といふ家あり是も此聖人御教化ありし也御旧
跡なりとぞ或云大浦ハ尾州に属すと

寺田西岸寺 東流 同 同郡竹が鼻にあり

足近西方寺と同系にして御坊所之とぞ

河野専福寺　東流　同所にあり

河野九門徒の一院なり是又御坊所にして平僧本庄郷来瀬の

御坊と称するはもちろんこれなり

円足山万福寺　東流　同国安八郡墨俣にあり

熊谷院と号す聖人の徒弟祐澄法師の開基なり○本堂十四間

四面本尊如来木像　春日の作　塔頭二房あり

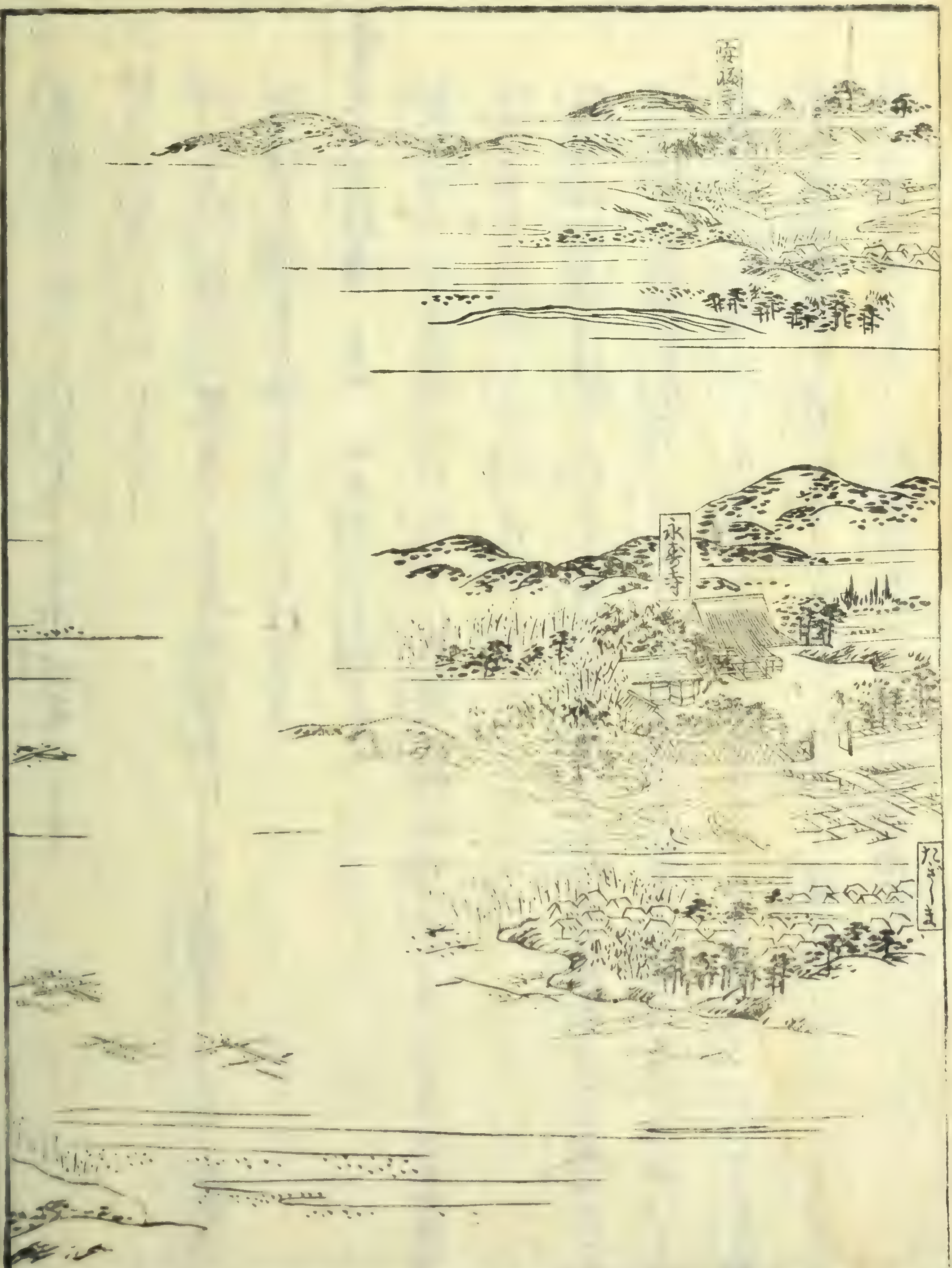
祐澄法師の俗姓を尋ぬるに熊谷入道蓮生房の族類にて熊谷宗三

と称し当国足近の住人なり嘗て高祖聖人尾州大浦においてく

御教化の砌聞法の益に預り終に徒弟となれり其後一宇を建立

これを満福寺と称し専ら当国に弘法し頗る化益の功を施せり

中古当所に移住し嗣子相続して今に退転なしと云


永安寺

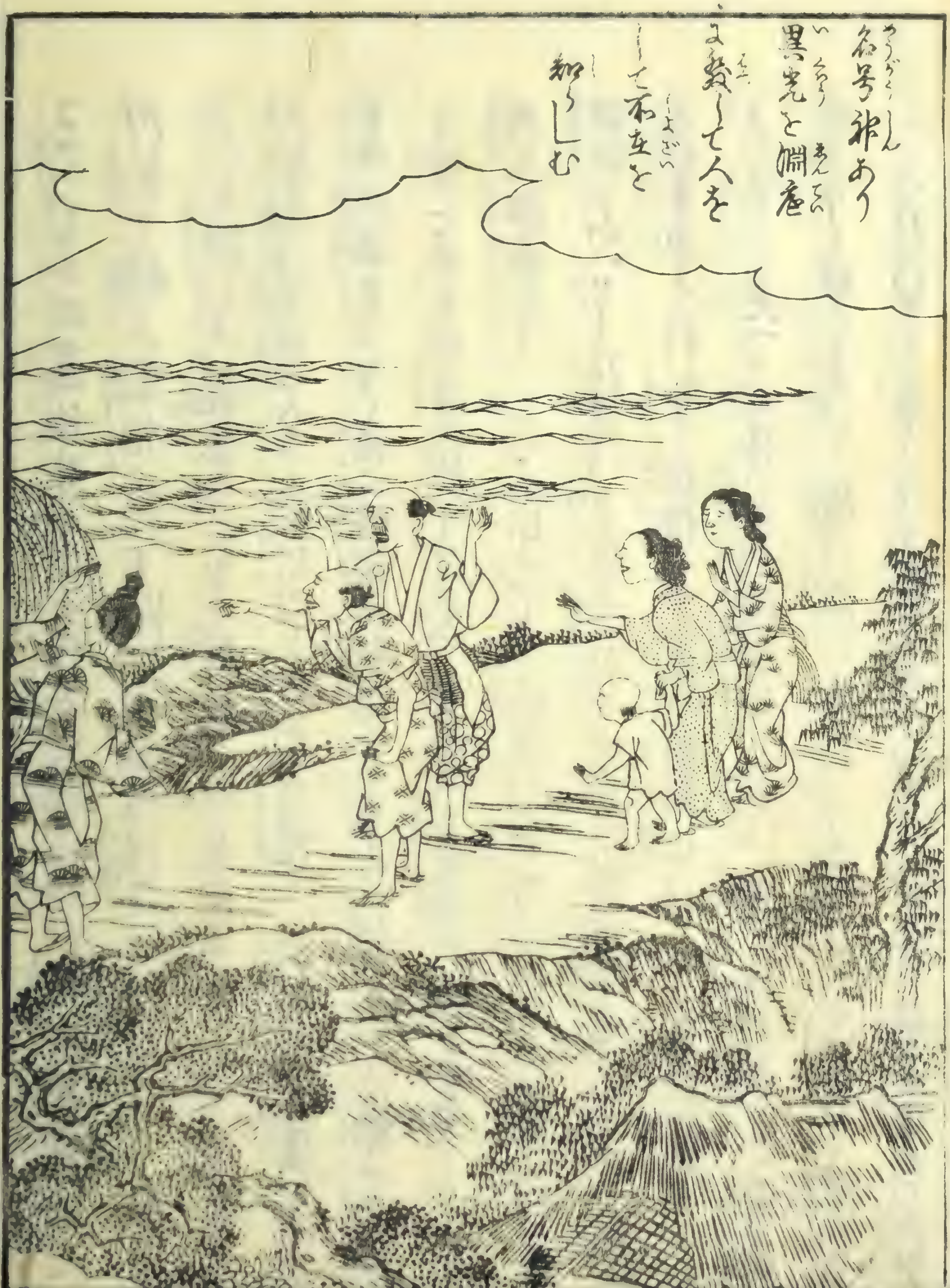

金足山萬福寺
福島永壽寺
光雲山安福寺
客殿
本堂

福島永寿寺　末流　同国豊田郡豊田谷にあり

当寺はもと天台円宗の仏閣なりしを高祖聖人常陸の御弟子教信法師中興開基として真宗となせり○本尊ハ阿弥陀如来　恵心僧都御作

教信房ハもと俗の時当国福島の人にて俗姓を行桐左衛門教栄と号せり壮年の比京師に出て官路に拙び武藝を以て名を馳せしが漸齢かたふくにつけ菩提の心頻りにして終に桑門の身となりて洛陽にさまよひける一日聖人岡崎の草庵より吉水の禅房に行通ひ給ふを拝み不思議に値遇なしまつりこれより常随給仕して専修念仏の法と要得し則法名をも授り当流無二の信者とぞなりけるに聖人計らずも遠く越の国へさすらへ給ふについで来りしが教信既に七旬のよはひを経て逆も遠国の供奉かなひがたくいたく聖人の御別を悲しみて紅涙数行

に及びたる時高祖其老実の志を感じ給ひ自ら筆を染て
御影を模し教信にたまひしが教信感涙にむせびながら大きに
これを歓び御記念ぞとて戴きやがて本国濃州にかへり当所
天台宗の焼匿のあたるを改めて真宗の道場とし彼御影を安置し奉り
日夜敬恭怠りなく偏に報謝の称名をぞよろこびけるかくて嗣子相兼
し第七世空信房の時に至りて一とせ洪水出し墨俣川溢れたるがうちに
民屋仏閣のこりなくひさしく水底に没せしが父子の間にも命を
相顧るにいとまなければいまんや其他をや我さきにと逃まどひて危を避し
が御事なれば什物を點検するにいとまなくて彼御影像を同じく流失し給ひける
まや曽て見へさせ給はず住僧覚信をはじめ門徒の面々これを愁闘
のかなしさに昼夜をさまたぐ探り求むといへども更に其甲斐なく空しく
三とせ四月日を送りけるに宿にふしきなる事あり彼墨俣川の深淵


名号神あり
異光を燗座
に發して人を
して不在を
知らしむ



より光物出て月夜に止ず里人等大きに之を奇み篤と聞して水練の
者を入て彼淵底を探らしむるに瀬ありて一ツの朽破れたる笥を揚き
あげたりこれを見るに箱の表に押てあるくしとして永安寺の文字僅り
残りしかば急ぎ当寺に持来りてこれを見に宣信大きに歓び是こそ
年来尋ね求る御影の笥之なりとて直に内を開きみんとてあれが二とせが間
水底にありしかれば悉く朽ぬれしに不思議や御影のみ
聊も損ずる儀なく儼然として換じ給はざりしかば人々
奇異の思ひをなし各感涙をぞ催しける実に宝の如く敬ひて宣信山科
の本山に登り御影を御覧に備へしかば実如上人甚驚嘆ましまして其為
重大なるよしにて則新なる絹に御影を押表装させられ宣信に命じ給ひ
更に御讃御裏書等を給はりけるとなん此をもって切ぬけの御影と称
し奉り永く当寺の霊宝とはなりけり

光雲山安福寺　東派　同國不破郡垂井にあり

高祖聖人上足慶西房中興開山なり一に安嘉部寺と称せり○
本堂阿弥陀如来を安ず　行基菩薩の御作
此は當寺の来歴を尋るに往昔行基菩薩の開闢にして河内の國
安宿郡玉手山に犯立し畿内に十九院の随一なりしが建長年中廢
退に及び霊區立不あり亡んとし然るに其比六孫王經基の二男從
五位滿季の二男安福滿則より十一世の孫多田左衛門尉光
雲といへる者河州に知られしがかく彼聖跡の荒蕪に埋れんを
を歎き知識を求めて與復せんと常に是を願ひけるが偶に
聖人の高徳を聞及びしかば直に京師に来りて拝謁し素懐
のむねをのべけるに聖人其志の厚きを感じさせ給ひ即御弟子
真阿の慶西房　俗姓ハ野州善岡の城主大内國弥の舎弟大内に郎國弥が息男なり　に命じてこれを屬せしめ

海内に拡く慶西彼地にありしころやゝ小堂宇を営築し他
力念仏を弘通し専ら化益を遂るに未いくだくもあらずして
終に一大仏場を再興せりかくてのち高田氏は益く真宗の功
徳広大なることを感信し終に世務を子息に譲り自慶西
房の徒弟となり光雲房信西と号し即当寺を相続して第二
代の伝燈をかゝやかせり其後文明八年当寺第六世浄西の時
に至つて蓮如上人の命によつて当寺に基趾を移しとゞむ 河州の地に 寛文年中に至ら
又一宇を造立し玉手山安養寺とがうし浄土真宗の道場となす ○当寺の什物に源頼光大江山悪鬼退治の
附属なる鎧甲一具を伝来せし是即光雲房の曩祖安積満則より
伝来せしところなり満則はこれ満仲の嫡子にて頼光に従弟なりとかや
さもあるべし
○当寺より今津へ出る道間が原より小へ二里西方にて柳田村妙覚寺といへる
より当寺に聖人御真筆の教行信証六巻を伝来せしといふ

八幡山聖蓮寺　西流　不破郡居益郷平井村にあり

當寺は往昔真言宗の梵宇なりしが天福年中此の寺務道法法師當山の鎮守八幡大菩薩の霊告によりて高祖聖人を屈請し奉り聞法の利益を蒙り即御弟子となり是によりて真宗弘法のたる聖人尊影を當寺に拙いて教導なし給ひし霊一匣あり

○関が原より三里余西北にあたりて近江国長濱大通寺といふあり東派御坊不又百ヶ寺の末寺あり寺務職は世々御門主御連枝達より住し給ふとぞ近江国の大坊なり

○関が原より今須にいたる不破の関の古跡あり此所の淀ふやゑ免やごとなき御方御立ありて[し]給ふ原をかしう歎き詩よ名だたる所愛し給ひ[し]安へれむかし此国のうき兼くその名付る[し]ての関屋の荒れたる跡まてしく造り改めさせじとて結ひなかやがて此所を通らせ給へども関やの絵の名をさへ吊のせ給ひなばそれは我たつ事かまへ[し]なるがるせずりやと心つきしかばとりあへず

人すまで月こそもり(漏り)ぬ板ひさし住ありせぬは不破の関もり

しかん縁しけれバさてこそ御けしきうるはしうならせ給ひたりしかんむしよう
あまたそふるさまなりて其ながれを汲なるふいうまち詠へてかくハ返
なみふや歌のさまにてハ無下の人しもしらへされバこれとそうやまとの心の
あはれさまよまるゝなるらんかし

○今須の宿ハ不破関美濃尾張の國境にて寝ものがたりと称するところなり
これまで東の方は野上の里いはゞ山青野が原養老の瀧笠縫のさと
なんど皆名所を見れまてあるき醒井の清水番場の宿をへて摺針の
風景ハ又世にたぐひなき壮観なるべし

○當國の名産・真糸(?)・真綿・撰糸絹・薄紙・中杉紙・(?)・
天養奉書・麻地紙・板紙・書翰紙・硯石・蘊玉(?)・山梔子・
根緑(?)宮代より出る(?)
瀬戸焼陶器・関小刀・剃刀・庖丁・双六(?)・雉子布(?)
岐阜鮎・同鮨(?)・墨俣鯉(?)・小山鵜(?)等なり

近江國

當國および此下に出る山城國の部にも寺院の縁起霊物等國ぶりの例をもて本編(?)に
其縁起のまたハ拝礼の順路に従ひ此下にあるを

宝満寺 東流 院家　今須より八里愛智川にあり

西方寺 佛光寺御門跡御坊也 宇和川より二里半八幡にあり

天神護法院錦織寺 八幡より二里木部にあり

近松御坊 西御門跡御堂 大津八丁にあり

山城国 第六同上

山科御舊地 山科にあり

蓮師御廟 同

西流御坊 同

東流御坊 同

日輝山永福寺 東流 溝西より三里余市田にあり

摂津国 摂津の名其説まち〳〵之大方は此国津多き故に津国といふのよしそ摂の字其義に合ず今按ずるに按まへのをとるの謂なり此国や難波津住吉津敷津の三津ありて是を兼る職を置給へり国号を摂津の二字に定めしなるべし

溝咋佛照寺 西流 山州市田より五里溝咋にあり

高祖聖人神足の弟子二十四輩第三番治順信大徳（順信房俗名常州無量寿寺の系下に属し）師命を受て化導行れし芳跡なり 蓋其ハ弘法の附に当門で旧識の道俗貴賤となく宗に帰依し利益を蒙る族日々に市をなし恰も水の卑きに流るゝがごとく其法を信し 其徳に浴し先に帰するもの挙て算ふべからず是により當地及び西海に至るまで当寺の末院と称するもの百を以て数ふるに至るとかや 実に我門の一巨擘と称すべし

○是當國ハそのかミ帝王の都し給ひし所にして名区勝景多く就中黄金搬と鏤へしハ石山御本坊の旧跡にて都下の繁花なる京師にも勝り素封の家ハ軒をつらね諸侯の邸ハ甍をまじへて建ならべり今も海内の産物皆爰に運びて日夜に市をなし天下の巧藝爰にあつまり来りて技を競ひを営る家々桂をならべ其業さかんにして袖をまくひ繍をなし従来の絡繹たるや一つとして肩を摩し踵を接ざるハ无し 実に天衢と謂べし

河内国

河内とハ山外に対する名なり 神武天皇日向の国より東征したまふとき難波の津より枚方よりのぼらせ給ひ生駒山を越て終に大和に入らせ給ふされバ生駒の外なる国を山外といひ又これに対して山背川の内なる国を以て河内といひ又生駒の山のうしろなるを山背と

天皇はじめて年號を制てかしこき都に移り玉ひて記されしよりそおほやまとはかりて日本の惣名となしまた神武て都し給ふ國なるが其又後よし此字をもて稱せし也崎ろにの周の世に秦に降まゐりし其國の名をおぼえるためしなりとぞ

戸森山専應寺　西派　讃良郡中嶋にあり

聖人御門弟二十四輩第二十二戸守唯信法師（唯信房の事跡常州戸守唯信寺の条下に委し）師命によりて當寺を開闢し當國を化益ありし遺跡なり嗣々相承して今に六百年の星霜を經たり

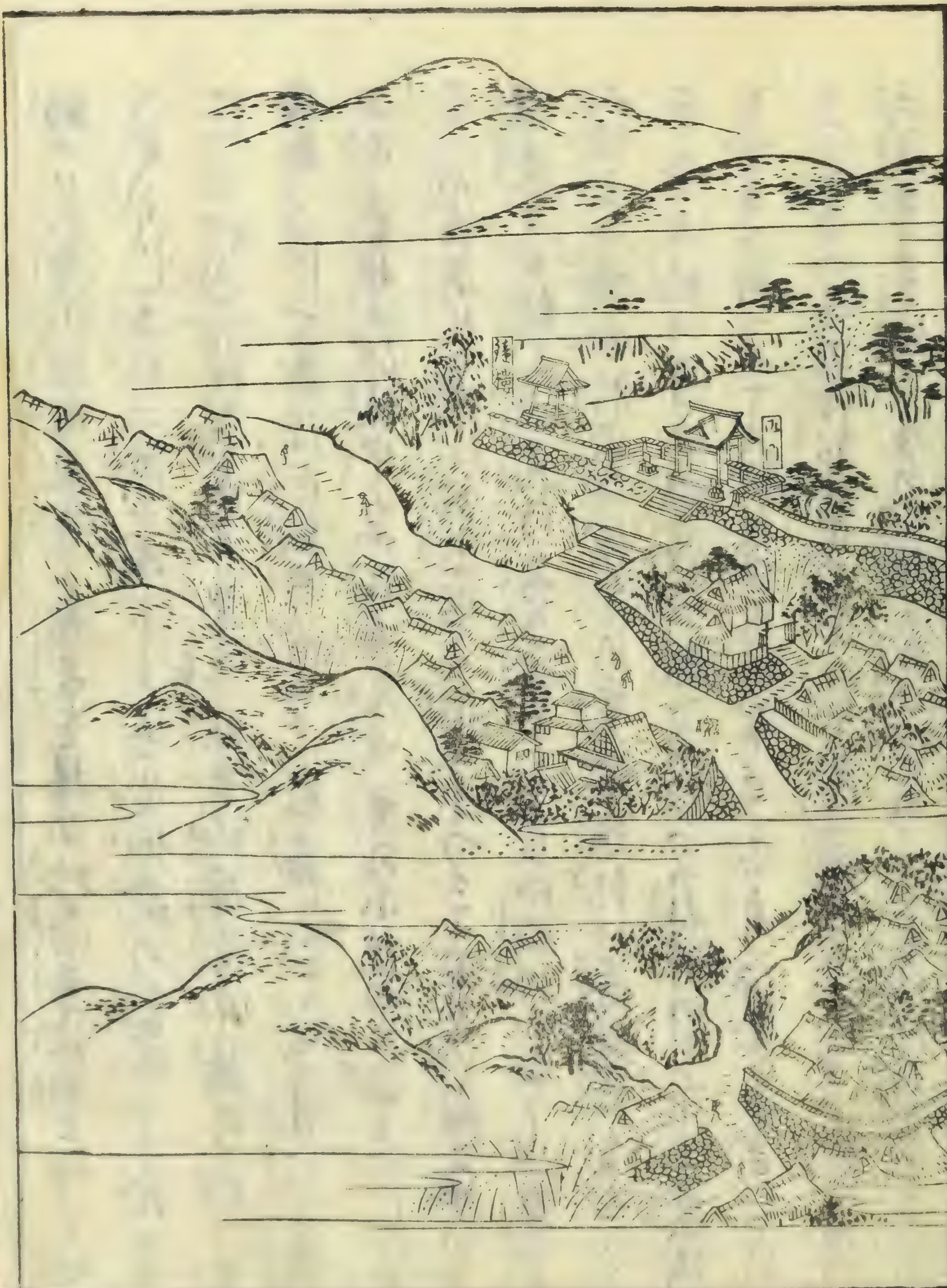
福善山慈願寺　東派院家　同國若江郡八尾の町にあり

高祖聖人の嫡弟二十四輩第十三粟野信願法師の（信願法師の俗緒野州慈願寺の条下に委し）開基にして弘法ありし芳跡なり霊宝数品略之

松谷光徳寺　東派院家　同國大縣郡雁多尾畑松谷にあり

一名照臘山雁林堂と号す當院は故人皇六十四代圓融法皇の御勅願にして同じき六十六代一條院永延二戊子年の御建立なり

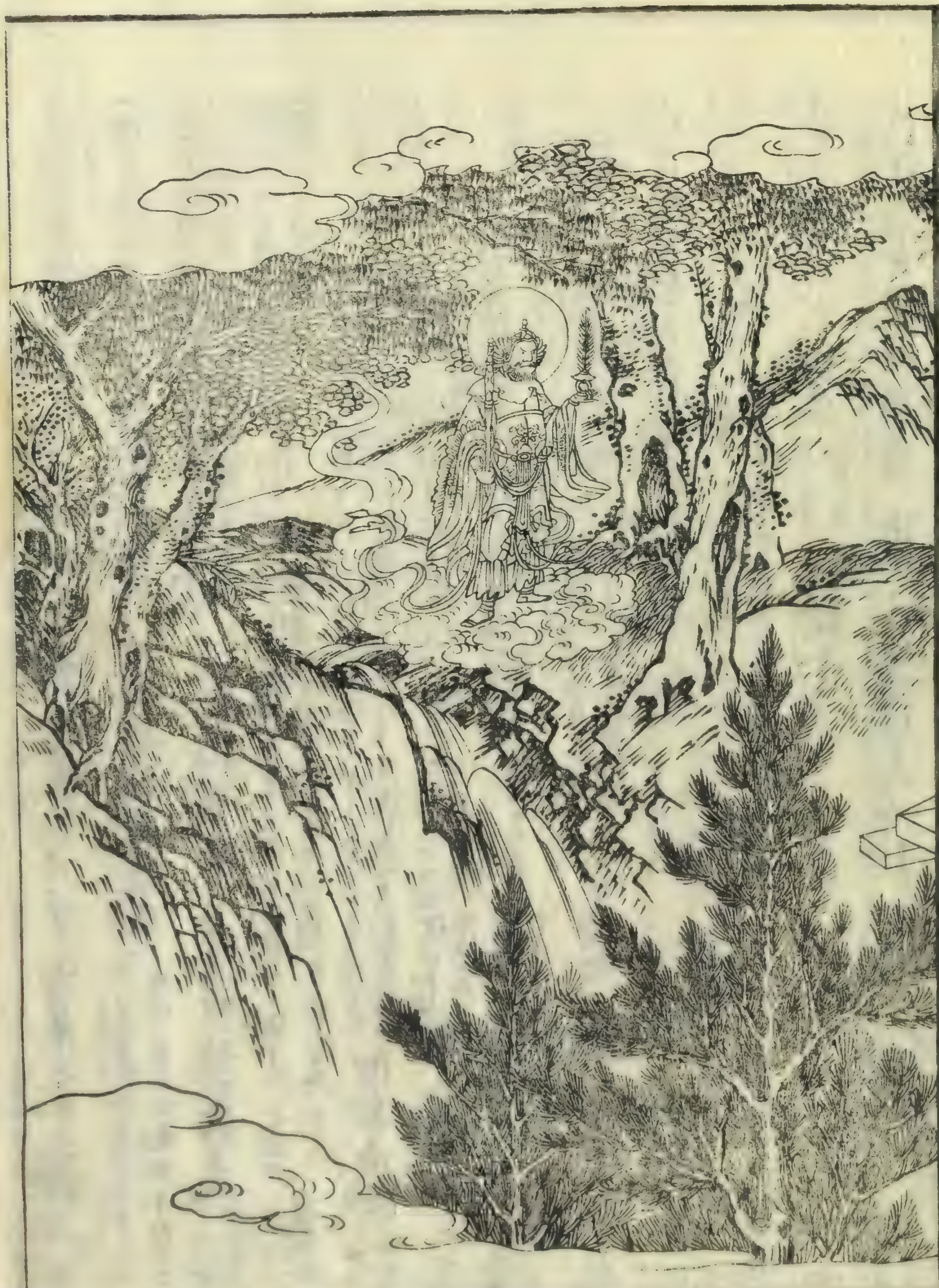

松谷
光徳寺
墓所
玄関



初めは東廣山照曜峯寺と勅号を賜ひ延暦寺法圓大師を延
て別当とし台密二教を奉じらく七堂伽藍の霊區なりしが亂るに
七十四代鳥羽院天永年中興福寺延暦寺争論の砌り
南都よりして当院を放火しけるが伽藍ことごとく焼亡し僅
に本堂許りぞ境中真福寺光明寺の小院のミ残りしかば
はじめ取退たてまつりし諸尊を既に納めまつるに西なく廿に拘ひて
講堂なる釈尊地蔵の両尊像を本尊の脇士となし奉り
大塔なる仏舎利及び法皇の聖像縁起の巻軸等をことごとく
本堂に納めまつり唯其芳跡を十が一に存せしのミなりしに其後
百余年を経て八十六代後堀川院の御宇安貞二戊子年春二月八
日三井寺の後園僧都信貴山に詣で天王殿に通夜しけるに毘沙門
天夢中に示現し給ひ僧都に告命して曰く照曜法地高く妙なる仏智

光徳明々朗 光聞道教利群生 獲念常佛念信者 これ山の南に当て松谷といへる霊地ありて汝に有縁の佛像ましませバ早く彼地に至りこれを拝しまゐれと僧都是によりて奇異のおもひをなし彼地にいたりみれバ果して荒廃せる古院ありて其来由宛然たる霊場なりしが僧都数行の感涙をながし遂に多門天の告命ハ再興の本意なりけんと円融帝勅額の旨を記し堂宇再興の儀を奏聞しけるに時の帝後堀川院叡聞ありて宜しく勅許の宣旨を下し給ひ日ならずして造営成就し則僧都を別当職に任じ給ひもとの瑞光再び耀き給ふ因縁によりて山号寺号を改め照曜山松谷光徳寺と勅号し給ふ加之北條時氏に命せられ山田三百町を寄せ給へり 右御寄附状今に伝来せり 其後俊円僧都再び毘沙門天の御告によりて天台宗を改め念仏門に帰し聖覚法印の門に入給ひしが聖覚法印入寂の後祖師聖人の御弟子となり信の一字を聖人よりさづ


俊園僧都夢中に毘沙門天の霊告を感じて光徳寺を再興す



ゟり佛念房信寂と改名ㇾ依て宝治二年春三月聖人御年七十六歳當院

一御下向ありて十余ヶ月が程御教化ありせ給ふ所の御舊跡之　中興開基佛念房信楽上人
俗姓ハ藤原氏勧修寺内大臣
高倉天皇五代の後胤參議教明卿の次男少納
言慈鎮和尚の孫弟範綱卿の子なり
ㇾ一日三礼の佛弟として世のぞくしよく
圓融法皇御持念佛之

○當山霊宝　本尊阿弥陀如来　雲慶作　淨蔵貴
圓融

青白色の佛舎利　欽明天皇十三年百済國より渡り奉し七粒の
随一なり法皇御たる崇ㇾの佛舎利なり

法然上人の御真像　御自作なり以上三種の霊宝と称して當寺第一の宝物也
諸勅願所として此聖像を安し紀ろくより信楽門下高祖ㇾ乞請ㇾ　御寄附状　當山
加藤

祖師聖人の御真影　八十四歳御自作信楽法師へ授与し給ふ　大品金色六字
開山の二尊の御ことぎり勅命によりて平の
時代三百餘の山田等御の状なり

名号　高祖聖人御筆左右は法然上人祖師
聖人の御影を画ㇾ給ひ信楽へ授与　墨筆六字名号
同聖人の御筆左右は祖師聖人信
楽法印の影あり師影の御賛あり

御名号　真宗御掟七ヶ條　聖人當山へ御下向ありて御染筆
と称ㇾ　　ありせたまひ信楽法印へ授与　高祖聖人御遺骨　覚信

尼公御筆教行信證御延書　以上二品ハ文永十一年聖人十三回忌御修
行の砌尼公より信楽法印へ授与し給ふ　大品紺紙金泥

光明十字名号　光如上人御筆勅号を當寺ㇾ於て名号のよりて松谷光徳寺と操文ㇾ
書せなされ左右ㇾ三朝の高祖十高の影を画し信楽も十高の内ㇾ入ㇾ給ふ　當山開

基信楽上人之影像　高祖聖人御筆　紺紙金泥十字名号　蓮如上人御筆左右は高祖
聖人と蓮如上人と御連坐　蓮如

上人及び證如上人の御遺骨　御代々懸幅連坐御影　實如上人
御裏書　○此御影ハ紀州和歌山鷺森
御坊當山九代東本願法

師の恩識を御感ありて当山諸の宝物を拘ひて御坊たまはるべき謹撰よろしく顕如上人より綸ひある
御教書ありて御添状あり○大坂松谷光徳寺ハ八代目乗順法橋永正二丑年建立則河州松谷光徳
寺観音不残らし
画幅の陳書あり

○八尾より二里ばかり東南にあたりて玉手山安福寺あり昔行基菩薩
の開闢にして中興開基ハ聖人の御門弟慶西法師専修念仏を弘通
し廃退の地を再び興復ありし芳蹤なり其後濃州へ転移ありしが
寛文の比加賀よりぬく彼寺号を一宇建立し今ハ浄土宗となれり委
くハ濃州室原安福寺の條下を見るべし

○当国名産・楊梅・柿・平野飴・毛利口漬香の物・引飯 道明寺の名産也
烏芋・干瓢・小角豆・蓮根・青皮・鶉卵・地康子・河
内毛綿 久宝寺不ノ外其名あり・瓜・鷹羽・白炭 横山より出づ・金剛砂・木槵子 数珠に用ゆ道明寺に出ん

大和ノ国 国名河内国の部にて終

宝円山立興寺 西派 吉野郡下市にあり

当寺ハ宗旨高祖聖人上足の徒弟唯円大徳開発化益の霊区なり
唯円房ハ則小野宮善念法師の俗弟にして仁治元年聖人の御弟子と

なり真宗の奥妙を極め智徳兼備の人なり嘗て常州河和田に
あり化導専らなりしが法縁の引所にや終に当国に来り秋篠川の
邊りに一宇を営み遠近を化益し正應二年二月廿六日法臘六十八歳
にして当院に於ひて大往生を遂られたり 世に唯円房は常州平太郎の舎弟にして平治郎といふ人なりしとぞ何れか是なるや
尚委しくは河和田報佛寺の条下に出

○当国は神武天皇始めて都し給ひし地にして王代盛衰の国なりしより累葉
代々の帝の住ませ給ふの都此名も高けし先神祇には春日の宮を始め
とし龍田の社三輪の神久しき世より跡を垂給ひ今に絶ゑせぬ宮
柱貴紳の別業いや高しに佛閣には東大寺興福寺元興寺薬
師西大寺秋篠寺や法隆寺当麻寺に長谷寺壺坂や多武の峯々
谷々も霊蹟をなしぬべし霊場はいふまでもなく數多なり其外名所
旧跡は春は花をばよしのや秋はもみぢ龍田川あるは在原の奥ゝ
て歳ある身のつまゝしに実懐しき旅なるべし

○当国の名産・奈良晒・同打物・同油煙墨・諸白酒・霰酒・吉野漆
同よし漉紙・杉原紙・三輪素麺・吉野葛・同榧・洗太布 外に多く内に出す

御所柿 内裏の御所にて加茂より出すをはじめとす それより所々に出る名付けしとぞ ・真福寺の眼薬 ・吉田山椒 ・奈良漬
梅 越中より ・吉野の精粉 ・鍛包丁 ・国栖紙 紙よりまた ・国栖魚 ・鍋瓶 曲物これ
八尾そうめん 名産とせり ・大峯蒜 ・奈良風呂 ・塗桶 ・草鞋 ・付流貫 ・滑皮 ・馬皮
膠 ・鞠 ・菖鞭 ・瓦煉 ・郡山擦鉢 ・奈良団扇 ・西大寺豊心丹 ・法量
寺洗沈香 ・茶碗 ・楊枝 ・松脂 ・木丸吉 ・山柑 ・塗鉢 ・龍田合巾
高山茶筌 等其外数をしらず

備後国

備前備中備後これを合せて吉備国といふ 往昔孝霊天皇第三の皇子稚武吉備津彦の命ありてこの三国に封せられ玉ひしよりやがて国の名とせらる

山南光照寺 西流院家 沼隈郡山南にあり

高祖聖人の直弟明光上人師命を奉じて海西を勧化ありし砌当寺を開発して専ら弘法利益ありし霊迹なり委くは相州鎌倉最宝寺の記にこれを出せり宝物数品略く

常石宝田院 東流院家 同国同郡常石にあり

当院ハ光源寺門葉にして明光上人嘗て当寺を開基し十ケ年が間舞楼を化益ありし霊場なり凡海西獄真宗ハ門に入帰化せる事実に上人の徳によるところなり ○霊宝数品累多く

○当国の名産・畳表・柳箕・箆竹（矢の箆より出）・雁切編笠（新発より出）・田浦細・瓶の菓酒・素麺・挽く麦等なり

伊勢国

むかし伊勢彦の神此国を領し給ふゆゑに国の名とし又神風伊勢常世波寄国ともいへり

専修寺御門跡

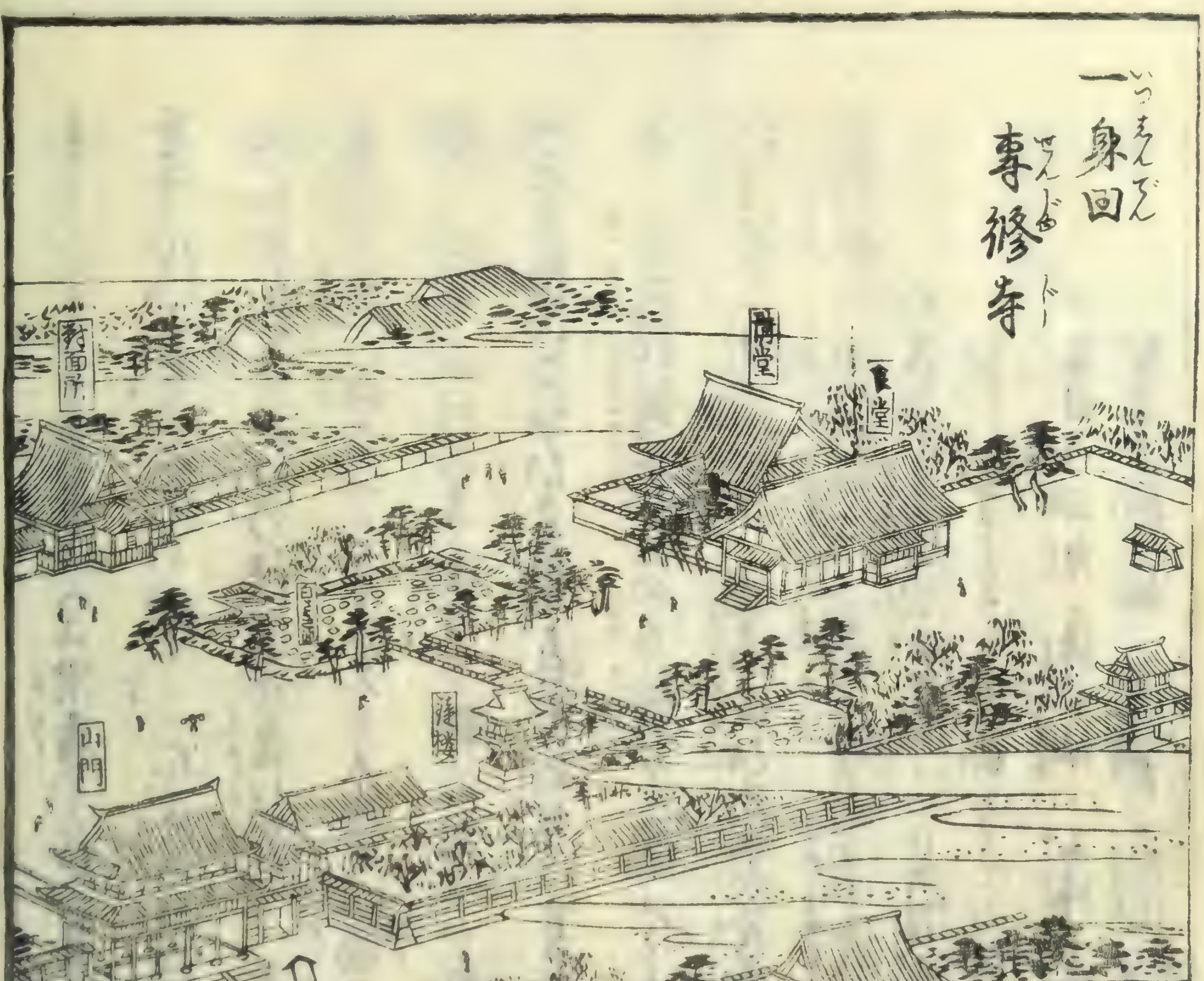
奄芸郡一身田にあり

高田山と号し真宗一本山 御寺務親王家より御入院 御里坊御殿京都河原町二条上ル所に建り ○如来堂本尊阿弥陀如来 法然上人の本尊にて 一対の慈覚大師作の御像なり当山中興真恵上人弘法の為に比叡山より迎へ奉る 当院の前に附して世に流布の如来と称し奉りて 防げ

○影堂 開山聖人の御真影を安ず ○院家に

抑当山の根本ハ高祖聖人五十二歳の御時下野国芳賀郡高田に

まゝく髪を真佛上人に附属し給ふ真佛又これを顕智に傳へ給ふかくて
第十代真恵上人の時にいたり更に法燈をかゝやかさんと寛正の長禄三
年加賀越前近江の諸國を自ら巡化し竟て勢州に来るに至る（此時行年二十七歳）化
益諸に善し此に於て寛正五年法臈三十一歳にして當初一身田の地に
暫く居を占め同六年終に下野の國より靈廟を此地に移し再建し給ふ
此所に當山を號して専修寺と稱せり其後文明十年勅使御下向ありて
當し永久勅願所たるの旨綸旨を賜へり○當院靈宝其數枚擧すべからず
就中聖人御真作の諸尊及び御真筆の聖教諸抄等數巻法然上人
御傳授の選擇集等の類多くありこれが圖を畧す
○當國は日御神のいましあれて附瑞縁絶ることなく荒蕪の地なく諸方の
宿こゝに至るをよく人の知るところなりこれが今これをしるしぬ
○當國の名産・綿・紬・木綿・海老・馬刀・杓子貝・鰻・蟹・鮑
鰒干・鰈・麵・青海苔・防風（二見浦の名物也）・海松・海蘿・眞珠・鹽浜和布



一身田(いつしんでん)
専修寺(せんじゆじ)
対面所
鐘楼
山門


阿弥陀堂

甘海苔・麻尾藤・串柿・椎茸・煎茶・楮・黒挽板・醤・水浪母

山より出る所なり・櫛 山田にて作る・煙粉・鯨尺・御団扇・紙燭・

奥の山葵嚴・紺屋形 諸国へ出る・白粉・度子 安城にて作る・作火縄 国の産・猿楽

名産の名物 かう焼茎 名あり

親鸞聖人御旧跡二十四輩巡拝図会後編巻之五終

僧了貞著　竹原春泉齋画

二十四輩巡拜圖繪前篇

全部五冊

先達而出來

此篇に載る所は京都両本願寺よりはじめ山城近江越前加賀越中越後信濃上野等の御舊跡を此後篇に同じく真景の繪図を加へ置数名所等を集め記し前後の篇を合せ視るときは安坐して御舊跡を順拜せしむるの書なり

彫刀氏

京　井上治兵衛

〃　樋口源兵衛

大阪　藤木金兵衛

〃　市田次郎兵衛

〃　池田庄九郎

文化六年己巳暮秋刻成

京都書林　菱屋孫兵衛
江戸書林　松本平助
名兒屋書林　永樂屋東四郎
　　　　　奈良屋長兵衛
大阪書林　小刀屋六兵衛
　　　　　勝尾屋六兵衛
　　　　　河内屋太助